京都府遺跡調査概報

第112冊

1．里遺跡第３・５・６次
2．池上遺跡第13・18次
3．長岡京跡右京第781次・神足遺跡

2004

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要がありますが、当センターでは、それに対応するために３種の刊行物を刊行してまいりました。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しています。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成13～15年度に実施した発掘調査のうち、京都府農林水産部、独立行政法人緑資源機構、京都府土木建築部の依頼を受けて行った里遺跡第３・５・６次、池上遺跡第13・18次、長岡京跡右京第781次・神足遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、亀岡市教育委員会、八木町教育委員会、長岡京市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成16年３月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
理　事　長　　上　田　正　昭

凡　　例

1．　本書に収めた概要は、下記のとおりである。

　1．里遺跡第３・５・６次

　2．池上遺跡第13・18次

　3．長岡京跡右京第781次・神足遺跡

2．　遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1．	里遺跡第３・５・６次	亀岡市旭町里	平13.11.22～12.20 平14.11.８～平15.３.10 平15.５.１～８.６	京都府農林水産部	小池　寛 松尾史子
2．	池上遺跡第13・18次	船井郡八木町池上	平14.７.12～11.28 平15.９.17～10.30	独立行政法人緑資源機構	中川和哉
3．	長岡京跡右京第781次・神足遺跡	長岡京市開田二丁目・神足二丁目	平15.７.9～平16.１.29	京都府土木建築部	松井忠春 高野陽子

3．　本書で使用している座標は、国土座標第６座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4．　本書の編集は、調査第１課資料係が当った。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本　文　目　次

１．里遺跡第３・５・６次発掘調査概要----------1
２．池上遺跡第13・18次発掘調査概要----------53
３．長岡京跡右京第781次・神足遺跡発掘調査概要----------125

付　表　目　次

２．池上遺跡第13・18次

付表１　調査次数一覧----------57
付表２　臼玉ほか観察表----------110

挿　図　目　次

１．里遺跡第３・５・６次

第１図　調査地位置図----------1
第２図　トレンチ配置図および竪穴式住居跡分布図----------2
第３図　第３次調査第１～４トレンチ遺構配置図----------3
第４図　第３次調査第１トレンチ竪穴式住居跡８実測図----------4
第５図　第３次調査第２トレンチ竪穴式住居跡７実測図----------4
第６図　第３次調査第３トレンチ竪穴式住居跡６実測図----------5
第７図　第３次調査第４トレンチ遺構配置図----------5
第８図　第３次調査第４トレンチ竪穴式住居跡１実測図----------6
第９図　第３次調査第４トレンチ竪穴式住居跡２、土坑ＳＫ３・４実測図----------7
第10図　第３次調査竪穴式住居跡１出土遺物実測図----------8
第11図　第３次調査土坑ＳＫ３、竪穴式住居跡（ＳＨ）２・６・７出土遺物実測図----------8
第12図　第３次調査竪穴式住居跡（ＳＨ）２・７出土遺物実測図----------9

第13図　第５次調査第１トレンチ遺構平面図----------9
第14図　第５次調査第１トレンチ竪穴式住居跡７実測図----------10
第15図　第５次調査第１トレンチ竪穴式住居跡７竈実測図----------10
第16図　第５次調査第１トレンチ竪穴式住居跡７出土遺物実測図----------11
第17図　第５次調査第１トレンチ竪穴式住居跡21および出土遺物実測図----------12
第18図　第５次調査第１トレンチ竪穴式住居跡21竈実測図----------12
第19図　第５次調査第１トレンチ竪穴式住居跡22および出土遺物実測図----------13
第20図　第５次調査第１トレンチ竪穴式住居跡（ＳＨ）１・４・18・28出土遺物実測図------14
第21図　第５次調査第１トレンチ検出ピット平面図----------15
第22図　第５次調査第１トレンチ溝ＳＤ19、土坑ＳＫ34、ＳＸ108、北西部精査出土遺物実測図----------16
第23図　第５次調査第２トレンチ遺構平面図----------16
第24図　第５次調査第２トレンチ竪穴式住居跡９および出土遺物実測図----------17
第25図　第５次調査第２トレンチ竪穴式住居跡９竈実測図----------17
第26図　第５次調査第２トレンチ竪穴式住居跡23および出土遺物実測図----------18
第27図　第５次調査竪穴式住居跡（ＳＨ）ほか出土遺物実測図----------19
第28図　第５次調査次第２トレンチ検出ピット平面図----------20
第29図　第５次調査第３トレンチ遺構平面図----------20
第30図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡56および出土遺物実測図----------21
第31図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡69および出土遺物実測図----------22
第32図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡93および出土遺物実測図----------23
第33図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡97および出土遺物実測図----------24
第34図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡98および出土遺物実測図----------24
第35図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡99および出土遺物実測図----------25
第36図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡101および出土遺物実測図----------26
第37図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡（ＳＨ）57・63・66・68および出土遺物実測図--27
第38図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡（ＳＨ）85・91・94・100・106および出土遺物実測図----------28
第39図　第５次調査第３トレンチ検出ピット平面図----------29
第40図　第５次調査第３トレンチ出土遺物実測図----------30
第41図　第５次調査第４トレンチ遺構平面図----------31
第42図　第５次調査第４トレンチ出土遺物実測図----------31
第42図　第５次調査第４トレンチ出土遺物実測図----------31
第43図　第６次調査第５トレンチ遺構平面図----------31
第44図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡136・158実測図----------32

第45図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡136竈実測図----------33
第46図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡136出土遺物実測図(1)----------34
第47図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡136出土遺物実測図(2)----------35
第48図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡137実測図----------36
第49図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡138実測図----------36
第50図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡149実測図----------37
第51図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡153実測図----------37
第52図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡193および出土遺物実測図----------38
第53図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡198実測図----------39
第54図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡194実測図----------39
第55図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡196および出土遺物実測図----------40
第56図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡197実測図----------41
第57図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡197竈実測図----------42
第58図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡197出土遺物実測図----------43
第59図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡198および出土遺物実測図----------44
第60図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡193竈実測図----------45
第61図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡221実測図----------45
第62図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡221竈実測図----------45
第63図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡230および出土遺物実測図----------46
第64図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡230竈実測図----------46
第65図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡240実測図----------47
第66図　第６次調査第５トレンチ検出ピット平面図----------48
第67図　第６次調査第５トレンチ出土遺物実測図----------49
第68図　第６次調査第６～９トレンチ実測図----------50
第69図　第６次調査第８トレンチ出土遺物実測図----------50
第70図　古墳時代の竪穴式住居跡の分布と周辺地形図----------51

２．池上遺跡第13・18次

第71図　調査地および周辺遺跡分布図----------54
第72図　調査トレンチ配置図----------56
第73図　池上遺跡第12・13・18次調査検出遺構平面図----------59
第74図　池上遺跡第13次調査遺構平面図(1)----------60
第75図　池上遺跡第13次調査遺構平面図(2)----------61
第76図　池上遺跡第13次調査遺構平面図(3)----------62
第77図　池上遺跡第13次調査遺構平面図(4)----------63
第78図　池上遺跡第13次調査検出周溝墓溝断面図(1)----------66

第79図　池上遺跡第13次調査検出周溝墓溝断面図(2)----67
第80図　池上遺跡第13次調査遺構実測図----69
第81図　掘立柱建物跡ＳＢ12－509実測図----71
第82図　掘立柱建物跡ＳＢ12－511実測図----72
第83図　掘立柱建物跡ＳＢ324実測図----73
第84図　掘立柱建物跡ＳＢ325実測図----74
第85図　掘立柱建物跡ＳＢ326・625実測図----75
第86図　掘立柱建物跡ＳＢ626実測図----76
第87図　掘立柱建物跡ＳＢ632・633実測図----77
第88図　竪穴式住居跡ＳＨ12－517・164・351実測図----78
第89図　竪穴式住居跡ＳＨ12－534・150実測図----79
第90図　竪穴式住居跡ＳＨ152・153・154・183実測図----80
第91図　竪穴式住居跡ＳＨ291実測図----81
第92図　竪穴式住居跡ＳＨ350・359実測図----82
第93図　竪穴式住居跡ＳＨ１・２実測図----84
第94図　掘立柱建物跡ＳＢ322実測図----85
第95図　掘立柱建物跡ＳＢ323実測図----86
第95図　掘立柱建物跡ＳＢ323実測図----88
第97図　池上遺跡第13次調査出土弥生土器(2)----89
第98図　池上遺跡第13次調査出土弥生土器(3)----90
第99図　池上遺跡第13次調査出土弥生土器(4)----91
第100図　池上遺跡第13次調査出土弥生土器(5)----92
第101図　池上遺跡第13次調査出土弥生土器(6)----93
第102図　池上遺跡第13次調査出土古墳時代土器(1)----98
第103図　池上遺跡第13次調査出土古墳時代土器(2)----99
第104図　池上遺跡第13次調査出土古墳時代土器(3)----100
第105図　池上遺跡第13次調査出土古墳時代土器(4)----101
第106図　池上遺跡第13次調査出土古墳時代土器(5)----102
第107図　池上遺跡第13次調査出土古墳時代土器(6)----103
第108図　池上遺跡第13次調査出土歴史時代土器----104
第109図　池上遺跡出土石器(1)----106
第110図　池上遺跡出土石器(2)----107
第111図　池上遺跡出土石器(3)----108
第112図　池上遺跡第13次調査出土玉類----110
第113図　池上遺跡第13次調査出土鉄器----111

第114図　池上遺跡第18次調査遺構実測図----------113
第115図　池上遺跡第18次調査出土土器----------114
第116図　池上遺跡(第３～５・８・12～16・18次調査)検出弥生時代遺構----------116
第117図　池上遺跡出土弥生土器----------117
第118図　池上遺跡(第３～５・８・12～16・18次調査)検出竪穴式住居跡----------118
第119図　韓式土器を含む土器群----------119
第120図　池上遺跡(第３～５・８・12～16・18次調査)検出掘立柱建物跡----------120
第121図　池上遺跡における奈良・平安時代の遺構----------121

３．長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足遺跡

第122図　調査地位置図----------125
第123図　調査地位置図----------126
第124図　北１・２トレンチ層序図----------127
第125図　北１トレンチ調査地実測図----------128
第126図　北２トレンチ調査地実測図----------129
第127図　北２トレンチ検出遺構実測図----------130
第128図　南１～３トレンチ層序図----------131
第129図　南１トレンチ調査地実測図----------132
第130図　南１トレンチ掘立柱建物跡ＳＢ075実測図----------133
第131図　南１トレンチ検出遺構実測図(1)----------134
第132図　南１トレンチ検出遺構実測図(2)----------135
第133図　南２・３トレンチ調査地実測図----------136
第134図　南４～９トレンチ層序図----------137
第135図　南４トレンチ調査地実測図----------138
第136図　南５トレンチ調査地実測図----------139
第137図　南６トレンチ調査地実測図----------140
第138図　南７・８トレンチ調査地実測図----------141
第139図　南９トレンチ調査地実測図----------142
第140図　南10トレンチ調査地実測図----------143
第141図　出土遺物実測図(1)----------145
第142図　出土遺物実測図(2)----------146
第143図　出土遺物実測図(3)----------147

図　版　目　次

1．里遺跡第３・５・６次

図版第１　(1)第３次調査地近景(南から)
(2)第３次第４トレンチ竪穴式住居跡１・２調査状況(北から)
(3)第３次第４トレンチ竪穴式住居跡１・２完掘状況(北から)
図版第２　(1)第３次第４トレンチ竪穴式住居跡１完掘状況(北から)
(2)第３次第４トレンチ竪穴式住居跡２完掘状況(北から)
図版第３　(1)第３次第１トレンチ竪穴式住居跡８完掘状況(北から)
(2)第３次第２トレンチ竪穴式住居跡７完掘状況(東から)
(3)第３次第３トレンチ竪穴式住居跡６完掘状況(東から)
図版第４　(1)第３次第４トレンチ竪穴式住居跡２炭化材出土状況(北東から)
(2)第３次第４トレンチ竪穴式住居跡１土層断面および遺物出土状況(西から)
(3)第３次第４トレンチ竪穴式住居跡２土層断面(東から)
(4)第３次第３トレンチ竪穴式住居跡６土層断面(西から)
図版第５　(1)第３次第４トレンチ竪穴式住居跡１中央炉(北から)
(2)第３次第４トレンチ竪穴式住居跡１遺物出土状況(北から)
(3)第３次第４トレンチ土坑４上層断面(西から)
(4)第３次第４トレンチ竪穴式住居跡２炉断面(南から)
(5)第３次第４トレンチ竪穴式住居跡２炭化材出土状況(西から)
(6)第３次第４トレンチ竪穴式住居跡２遺物出土状況(北から)
(7)第３次第３トレンチ土坑９検出状況(南から)
(8)第３次第１トレンチ竪穴式住居跡８炉断面(東から)
図版第６　(1)第５次第１・２トレンチ全景(下が北)
(2)第５次第１・２トレンチ遠景(西から)
図版第７　(1)第５次第１トレンチ竪穴式住居跡７・21全景(下が北)
(2)第５次第１トレンチ竪穴式住居跡１・11・18・22全景(上が北)
図版第８　(1)第５次第１トレンチ竪穴式住居跡１・４・11全景(上が北)
(2)第５次第１トレンチ竪穴式住居跡７土器出土状況(北から)
図版第９　(1)第５次第１トレンチ竪穴式住居跡21竈検出状況(北から)
(2)第５次第１トレンチ竪穴式住居跡21竈内土器出土状況(南西から)
図版第10　(1)第５次第１トレンチ竪穴式住居跡21竈内土器出土状況(北西から)
(2)第５次第１トレンチ竪穴式住居跡22竈検出状況(南東から)

図版第11　(1)第５次第２トレンチ西半部検出遺構全景(下が北)
(2)第５次第２トレンチ東半部検出遺構全景(下が北)
図版第12　(1)第５次第３トレンチ全景(上が北)
(2)第５次第３・４トレンチ遠景(北から)
図版第13　(1)第５次第３トレンチ近景(北東から)
(2)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡57検出状況(北東から)
図版第14　(1)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡63内土坑141検出状況(東から)
(2)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡67検出状況(北から)
図版第15　(1)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡69および風倒木痕検出状況(西から)
(2)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡69および風倒木痕検出状況(北から)
図版第16　(1)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡69南壁および風倒木痕断面(南から)
(2)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡69竈内土器出土状況(南から)
図版第17　(1)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡85、ピット86土器出土状況(東から)
(2)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡93遺物出土状況(西から)
図版第18　(1)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡100完掘状況(西から)
(2)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡101、ピット103土器出土状況(東から)
図版第19　(1)第５次第３トレンチ柱穴列１検出状況(南から)
(2)第５次第３トレンチ溝87検出状況(南から)
図版第20　(1)第５次第４トレンチ全景(上が北)
(2)第５次第４トレンチ遠景(下が北)
図版第21　(1)第５次第４トレンチ近景(1)(北西から)
(2)第５次第４トレンチ近景(2)(北西から)
図版第22　(1)第６次第５トレンチ遠景(南から)　(2)第６次第５トレンチ近景(西から)
図版第23　(1)第６次第５トレンチ全景(上が北)
(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡群全景(上が北)
図版第24　(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡158検出状況(西から)
(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡136土層堆積状況(西から)
図版第25　(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡136・158全景(左が北)
(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡136・158検出状況(左が北)
図版第26　(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡158検出状況(南から)
(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡136礫群検出状況(南から)
図版第27　(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡136検出礫近景(南から)
(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡136竈検出状況(西から)
図版第28　(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡136竈検出状況(南西から)
(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡137検出状況(南から)

図版第29　(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡198検出状況(南から)
(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡198竈検出状況(南から)
図版第30　(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡198竈検出状況(南西から)
(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡193竈検出状況(南西から)
図版第31　(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡193竈支柱石検出状況(南から)
(2)第６次第１トレンチ竪穴式住居跡193竈完掘状況(南から)
図版第32　(1)第６次第６～８トレンチ遠景(下が北)
(2)第６次第７トレンチ全景(上が北)
図版第33　(1)第６次第８トレンチ全景(下が北)
(2)第６次第８トレンチ掘立柱建物跡検出状況(南東から)
図版第34　出土遺物(1)
図版第35　出土遺物(2)
図版第36　出土遺物(3)
図版第37　出土遺物(4)
図版第38　出土遺物(5)

２．池上遺跡第13・18次

図版第39　(1)池上遺跡遠景(北東から)　(2)第13次調査西地区(上が北)
図版第40　(1)第13次調査(上が南)　(2)第13次調査(上が北)
図版第41　(1)第13次調査作業風景(東から)
(2)第13次掘立柱建物跡ＳＢ825、方形周溝墓ＳＴ612(上が北)
(3)第13次竪穴式住居跡ＳＨ226(上が南)
図版第42　(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ226(西から)
(2)第13次竪穴式住居跡ＳＨ226内中央土坑ＳＫ238(南から)
(3)第13次竪穴式住居跡ＳＨ226周壁溝(北から)
図版第43　(1)第13次方形周溝墓ＳＴ601(東から)
(2)第13次方形周溝墓ＳＴ602(南東から)
図版第44　(1)第13次土壙ＳＫ571(南から)　(2)第13次埋葬主体部ＳＫ426(南東から)
(3)第13次土壙ＳＫ170(北から)
図版第45　(1)第13次埋葬主体部ＳＫ252(南から)
(2)第13次埋葬主体部ＳＫ252遺物出土状況(南から)
(3)第13次埋葬主体部ＳＫ252土層断面(西から)
図版第46　(1)第13次周溝ＳＤ466土層断面(西から)
(2)第13次周溝ＳＤ466遺物出土状況(西から)
(3)第13次周溝ＳＤ434土層断面(東から)
図版第47　(1)第13次周溝ＳＤ434遺物出土状況(西から)

(2)第13次周溝ＳＤ467、風倒木痕ＳＸ470(南西から)
(3)第13次周溝ＳＤ12－640(北から)
図版第48　(1)第13次周溝ＳＤ249(北から)　(2)第13次周溝ＳＤ249(東から)
(3)第13次周溝ＳＤ249土層断面(北から)
図版第49　(1)第13次溝ＳＤ12－01(北東から)
(2)第13次溝ＳＤ12－01土層断面(南西から)
(3)第13次溝ＳＤ12－01土層断面(南西から)
図版第50　(1)第13次周溝ＳＤ391土層断面(西から)
(2)第13次周溝ＳＤ392土層断面(北から)
(3)第13次周溝ＳＤ395土層断面(西から)
図版第51　(1)第13次周溝ＳＤ396土層断面(北から)
(2)第13次周溝ＳＤ397土層断面(南から)
(3)第13次周溝ＳＤ448土層断面(南から)
図版第52　(1)第13次周溝ＳＤ456土層断面(北から)
(2)第13次周溝ＳＤ456土層断面(北西から)
(3)第13次周溝ＳＤ447土層断面(南から)
図版第53　(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ291、掘立柱建物跡ＳＢ630(上が北)
(2)第13次掘立柱建物跡ＳＢ625(北から)
(3)第13次掘立柱建物跡ＳＢ325(南東から)
図版第54　(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ12－540(西から)
(2)第13次竪穴式住居跡ＳＨ150(北から)
(3)第13次竪穴式住居跡ＳＨ153(北から)
図版第55　(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ153竈(南から)
(2)第13次竪穴式住居跡ＳＨ154、掘立柱建物跡ＳＢ12－509(北から)
(3)第13次竪穴式住居跡ＳＨ164(北西から)
図版第56　(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ164(南東から)
(2)第13次竪穴式住居跡ＳＨ183、土壙ＳＫ170(北から)
(3)第13次土坑ＳＫ433(北から)
図版第57　(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ291(南東から)
(2)第13次竪穴式住居跡ＳＨ359(南から)
(3)第13次竪穴式住居跡ＳＨ350(南から)
図版第58　(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ351(東から)
(2)第13次土坑ＳＫ491(東から)　(3)第13次土坑ＳＫ364(北から)
図版第59　(1)第13次土坑ＳＫ413(東から)　(2)第13次土坑ＳＫ450土層断面(東から)
(3)第13次土坑ＳＫ142(南から)

図版第60　(1)第13次掘立柱建物跡ＳＢ322(上が東)
(2)第13次掘立柱建物跡ＳＢ322(南から)
(3)第13次井戸ＳＥ133完掘状況(南から)
図版第61　(1)第13次土坑ＳＫ365(南から)　(2)第13次風倒木痕ＳＸ431(東から)
(3)第13次発掘調査風景(東から)
図版第62　(1)第18次調査(上が南)　(2)第18次方形周溝墓ＳＴ24(東から)
図版第63　(1)第18次竪穴式住居跡ＳＨ02・03(西から)
(2)第18次竪穴式住居跡ＳＨ02下層風倒木痕(北東から)
(3)第18次調査区西部(東から)
図版第64　(1)第18次土坑ＳＫ19、竪穴式住居跡ＳＨ01・31(北から)
(2)第18次土坑ＳＫ19(東から)　(3)第18次土坑ＳＫ20(東から)
図版第65　(1)第18次土坑ＳＫ20弥生土器出土状況(上が南)
(2)第18次土坑ＳＫ16(東から)　(3)第18次土坑ＳＫ30(南から)
図版第66　出土遺物(1)
図版第67　出土遺物(2)
図版第68　出土遺物(3)
図版第69　出土遺物(4)
図版第70　(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ351出土韓式土器
(2)第13次井戸ＳＥ133出土製塩土器
図版第71　(1)第13次出土石器(1)　(2)第13次出土石器(2)
図版第72　(1)出土石器　(2)第13次出土鉄製品

3．長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足遺跡

図版第73　(1)調査地周辺(北半部)の航空写真(西から)
(2)調査地周辺(南半部)の航空写真(西から)
図版第74　(1)北１トレンチ発掘前全景(南から)　(2)北１トレンチ北半部完掘状況(南から)
(3)北１トレンチ南半部完掘状況(北から)
図版第75　(1)北１トレンチ井戸ＳＥ02全景(北から)
(2)北１トレンチ溝ＳＤ01全景(西から)
(3)北２トレンチ発掘前全景(南から)
図版第76　(1)北２トレンチ北半部完掘状況(南から)
(2)北２トレンチ南半部完掘状況(北から)
(3)北２トレンチ南半部完掘状況(南から)
図版第77　(1)北２トレンチ掘立柱建物跡ＳＢ01全景(南から)
(2)北２トレンチ掘立柱建物跡ＳＢ02全景(東から)
(3)北２トレンチ井戸ＳＥ13全景(東から)

図版第78　(1)北２トレンチ溝ＳＤ15全景(東から)
(2)南１トレンチ発掘前全景(北から)
(3)南１トレンチ遺構検出状況全景(南から)
図版第79　(1)南１トレンチ北側柱穴群(北から)
(2)南１トレンチ土坑ＳＫ002遺物出土状況(東から)
(3)南１トレンチ土坑ＳＫ026遺物出土状況(南から)
図版第80　(1)南１トレンチ土坑ＳＫ025遺物出土状況(北から)
(2)南１トレンチピットＰ042遺物出土状況(北から)
(3)南１トレンチ柱穴Ｐ045根石検出状況(北から)
図版第81　(1)南２トレンチ発掘前全景(南から)
(2)南２トレンチ北半部完掘状況(西から)
(3)南３トレンチ遺構検出状況(北から)
図版第82　(1)南４・５トレンチ発掘前全景(南から)
(2)南４トレンチ完掘状況(北から)
(3)南４トレンチ溝ＳＤ01全景(北から)
図版第83　(1)南４トレンチ溝ＳＤ02全景(北から)
(2)南５トレンチ完掘状況(北から)
(3)南５トレンチ溝ＳＤ05全景(南から)
図版第84　(1)南５トレンチ溝ＳＤ05堆積状況(北から)
(2)南５トレンチ溝ＳＤ04全景(南から)
(3)南６トレンチ発掘前全景(南から)
図版第85　(1)南６トレンチ完掘状況(南から)
(2)南６トレンチ掘立柱建物跡ＳＢ02全景(北から)
(3)南６トレンチ溝ＳＤ01全景(北から)
図版第86　(1)南７～10トレンチ発掘前全景(北から)
(2)南７トレンチ溝ＳＤ02全景(東から)
(3)南７トレンチ溝ＳＤ02全景(北から)
図版第87　(1)南８トレンチ完掘状況(東から)
(2)南８トレンチ溝ＳＤ01全景(北から)
(3)南８トレンチ溝ＳＤ02全景(西から)
図版第88　(1)南９トレンチ完掘状況(南から)
(2)南９トレンチ溝ＳＤ12全景(東から)
(3)南９トレンチ溝ＳＤ10・15全景(西から)
図版第89　(1)南９トレンチ土坑ＳＫ11遺物出土状況(南から)
(2)南９トレンチ土器集積状況(南から)

(3)南10トレンチ南半部全景(東から)
図版第90　(1)南10トレンチ北半部および不明土坑ＳＸ03全景(北から)
(2)南10トレンチ溝ＳＤ02全景(西から)
(3)南10トレンチ溝ＳＤ02堆積状況(東から)
図版第91　出土遺物(1)
図版第92　出土遺物(2)

1．里遺跡第３・５・６次発掘調査概要

1．はじめに

里遺跡は、京都府亀岡市旭町里に所在する集落遺跡(第１図、巻頭図版第１・２－(1))であり、今回の発掘調査は、京都府農林水産部が施工する府営ほ場整備事業(三俣川地区)に伴い実施した事前調査である。

里遺跡では、範囲を確認するための第１・４次調査を亀岡市教育委員会が実施し、奈良時代の掘立柱建物跡を検出した第２次調査と本書で報告する第３・５・６次調査を当調査研究センターが実施した(第２図)。第３次調査は、平成13年11月22日～12月20日までの期間において、調査第２課調査第１係長水谷寿克、同調査員松尾史子が担当し、第５次調査は、平成14年11月８日～平成15年３月10日までの期間において、調査第２課調査第２係長伊野近富、同主任調査員引原茂治・小池寛、同主査調査員黒坪一樹が担当した。また、第６次調査は、平成15年５月１日～８月６日までの期間において、調査第２課課長補佐兼調査第１係長奥村清一郎、同主任調査員小池寛、同調査員石崎善久が担当した。

なお、本概要報告は、第３次調査を松尾が、そのほかを小池が作成し、全体の編集は小池が担当した。担当者により構成上の相違が生じていることを予め明記しておきたい。また、遺構の呼称についても一部において略号を使用した。

(小池　寛)

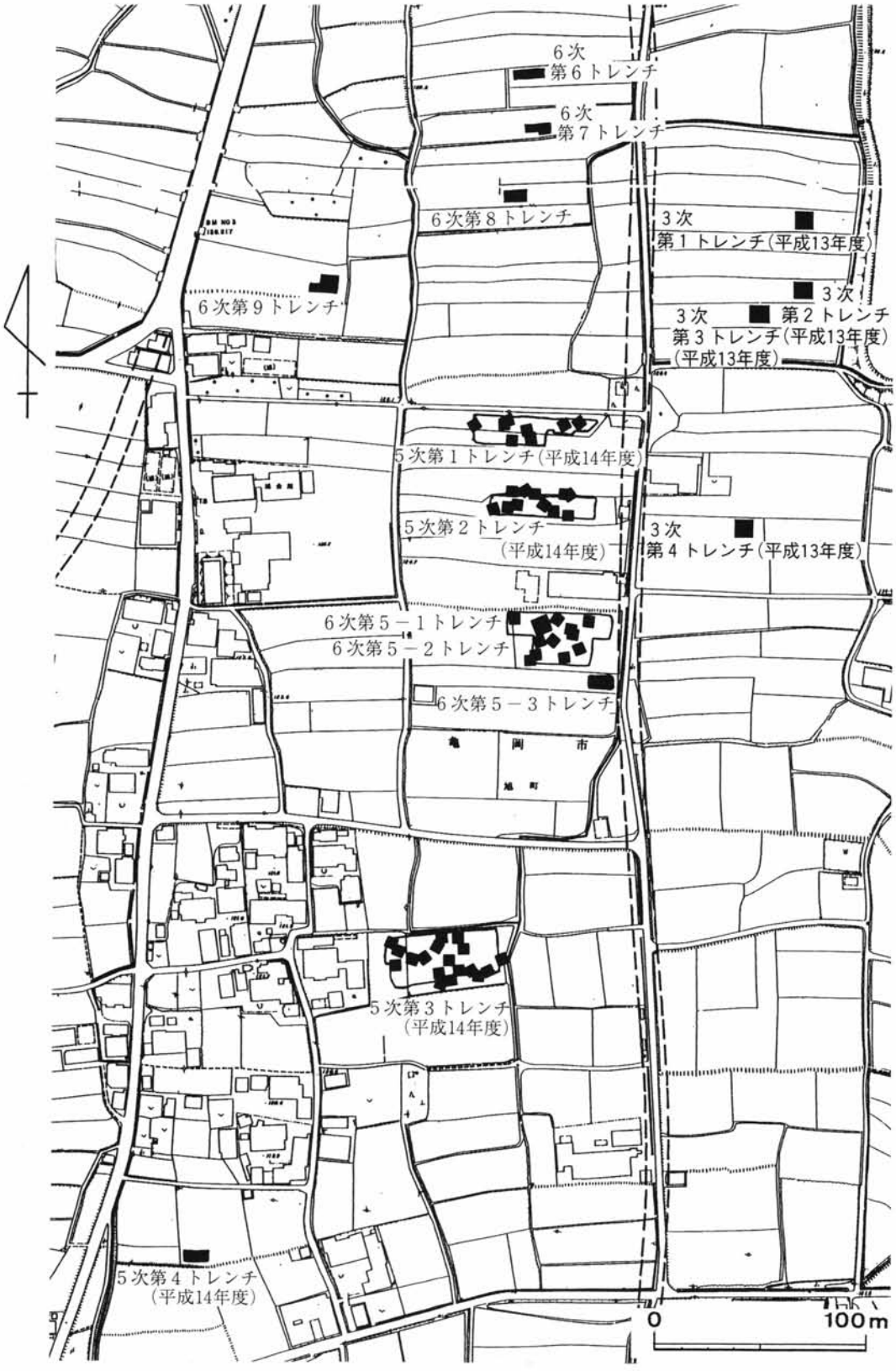
第１図　調査地位置図
(1/25,000『新修亀岡市史資料編』付図から転載)

2．調査概要

(1)第３次調査の遺構と遺物

第３次調査は、亀岡市教育委員会の試掘調査により竪穴式住居跡が確認された４か所について試掘部分を拡張して実施した(第３図、図版第１)。その結果、新たに竪穴式住居跡を１基検出し、合計５基の竪穴式住居跡を調査することとなった。調査区の名称は、北から順に第１～４トレンチとした。基本層序は、第１トレンチでは耕作土、床

土、黄褐色細礫混土、黄褐色粘質土、そのほかのトレンチでは耕作土、床土、黄褐色粘質土の層序である。遺構は黄褐色粘質土上面で検出した。第１トレンチの遺構検出面の標高は約127m、第４トレンチの遺構検出面の標高は約124.6mであり、両トレンチの比高差は約2.4mである。第



第２図　トレンチ配置図および竪穴式住居跡分布図

１トレンチでは円形の竪穴式住居跡８を１基、第２トレンチでは隅丸方形の竪穴式住居跡７を１基、第３トレンチでは方形の竪穴式住居跡６を１基、第４トレンチでは円形の竪穴式住居跡１と方形の竪穴式住居跡２を２基確認した。以下、遺構ごとに概要を報告する。

第３図　第３次調査
第１～４トレンチ遺構配置図

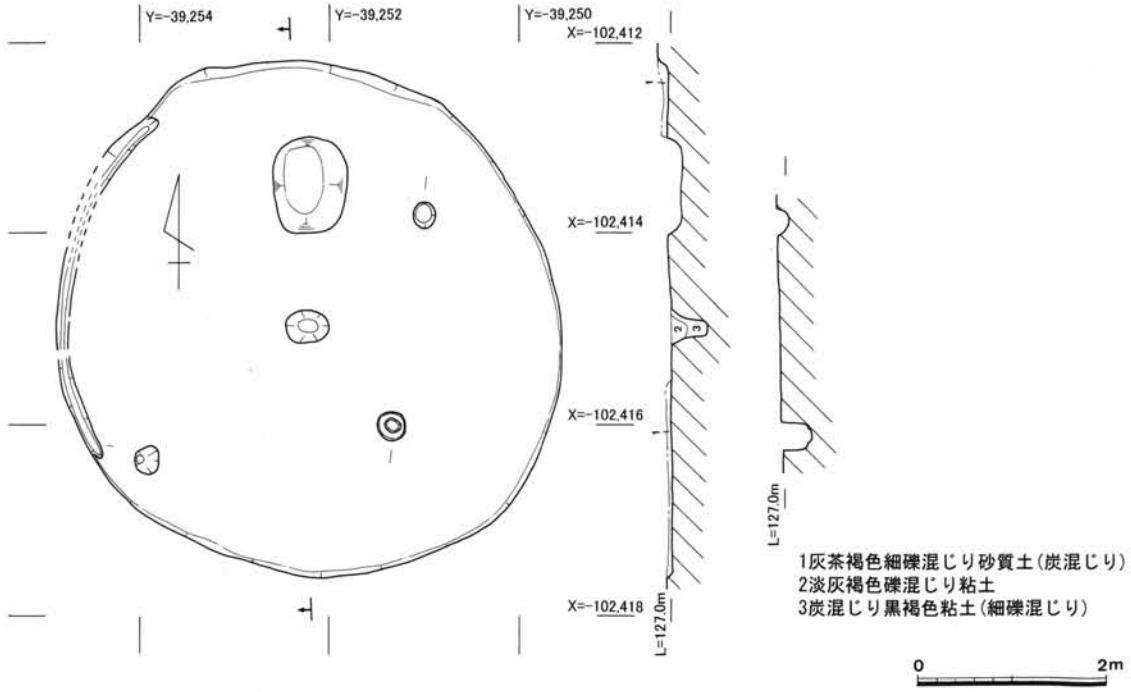
①**遺構**（図版第２～５）

竪穴式住居跡８（第４図）　第１トレンチで検出した直径約５ｍの平面形が円形の住居跡である。検出面からの深さは約５㎝であり、残存状況は著しく不良である。支柱穴は少なくとも４か所に配置されていたと考えられるが、確認できたのは２か所である。柱穴の規模は、直径0.2～0.3m、深さは0.1～0.4mである。出土遺物はほとんどなかった。

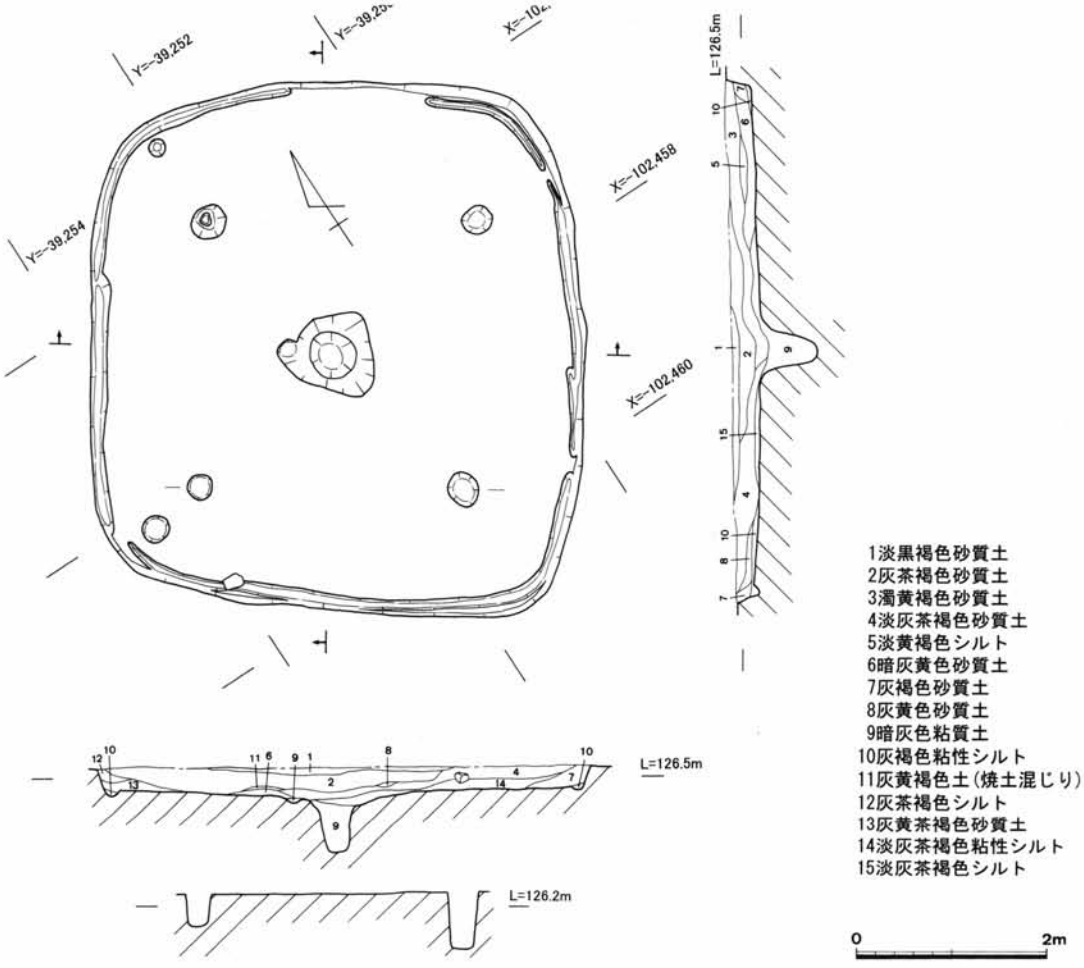
竪穴式住居跡７（第５図）　第２トレンチで検出した一辺約５ｍの平面形が隅丸方形の住居跡で、検出面からの深さは約0.3mである。支柱穴は４本で、柱穴の規模は直径0.3～0.4m、深さは0.3～0.6mである。住居跡の中央には直径約１ｍ、深さ約0.5mの不正円形の土坑がある。埋土には炭が混じっており、竪穴式住居跡１と同じく灰穴炉の可能性がある。出土遺物として弥生時代中期の土器がわずかに出土した。

竪穴式住居跡６（第６図）　第３トレンチで検出した４×５ｍの平面形が長方形の住居跡である。検出面からの深さは約0.4mである。支柱穴は確認されなかった。床面に掘りこむタイプの炉跡は検出されなかったが、床面に被熱して赤変したところが２か所あり、一部炭化材が残っていた。土坑および床面から庄内併行の土器が出土した。住居の北西隅および北東隅に土坑ＳＫ９・10を確認した。ＳＫ９は直径0.5m、深さ0.4mの円形土坑、ＳＫ10は直径0.5m、深さ0.04mの土坑である。

竪穴式住居跡１（第７・８図）　第４トレンチで新たに検出した住居跡である。南端で竪穴式住居跡２と重複している。直径約７ｍの平面形が円形の住居跡で、検出面からの深さは約0.2mである。住居の北端はさらに調査地外にのびる。支柱穴は６～８か所配されていたと考えられるが、確認できたのは５か所である。柱穴の規模は径0.1～0.5m、深さ0.5m前後のものが多い。住居の中央には長軸1.2m、短軸約0.7m、深さ約0.6mの楕円形土坑があり、その周囲には直径２ｍ、高さ約５㎝の帯状の高まりがめぐる。この高まりは、ベースとなる黄褐色土を削りだして形成されており、高まりの両側のレベルがほぼ同じであることから、住居掘削当時に区画することを意識して造られたと考えられる。また、この土坑の埋土の最上層には焼土や炭が混じっており灰穴炉である可能性が考えられる。中央土坑の北側には床面の焼けた部分がある。住居の埋土からは、弥生時代中期および古墳時代前期の土器が出土している。中央土坑南側の床面で、口縁外面に凹



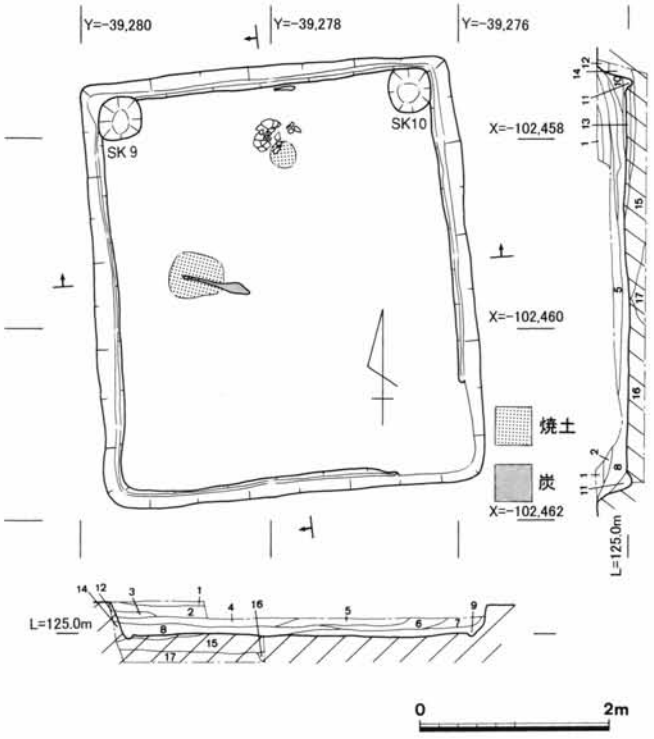
第４図　第３次調査第１トレンチ竪穴式住居跡８実測図



第５図　第３次調査第２トレンチ竪穴式住居跡７実測図

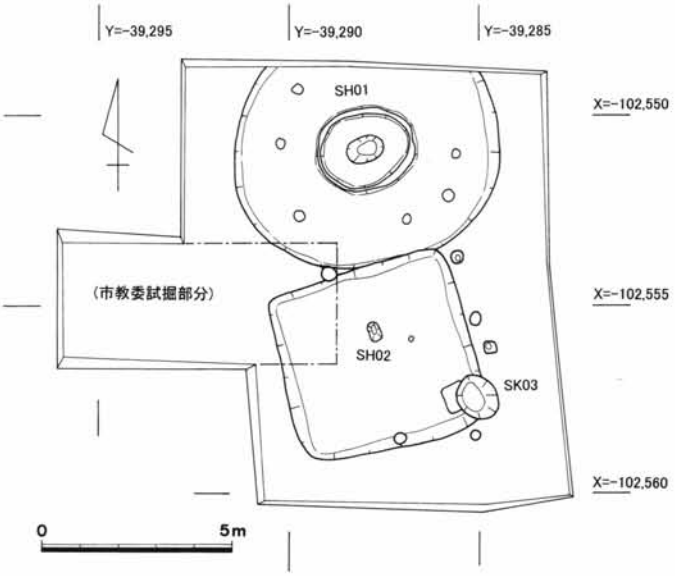
線を施す水差しなど、弥生中期の土器がまとまって出土したことから、住居の機能していた時期は弥生時代中期と考える。

竪穴式住居跡２（第９図）　第４トレンチで検出した住居跡である。竪穴式住居跡１と重複しており、こちらの方が新しい。一辺約５ｍの平面形が方形の住居跡で、検出面からの深さは約0.5mである。中央には長軸0.5m、短軸0.3m、深さ0.15mの楕円形の炉があり、焼土が炉壁まで分布していた。炉の北西側には作業台と思われる石が平坦面を上にして出土した。また、住居跡の壁面や床面からは炭化した木材が多く出土しており、住居の北東部では中央に向かって放射状に残っていた。炭化材に混じって径0.1～0.2mの石や黄褐色土ブロックが出土した。これらのことからこの住居は焼失住居であると考えられる。北壁に残っていた板材の木目の方向から、壁板には竪板を使用していたと考えられる。支柱穴は確認されなかった。また、住居の南東隅で土坑ＳＫ４を検出した。ＳＫ４は0.6m四方に浅く掘削した後、南東隅を直径0.4m、深さ１m以上のピット状に掘り下げた土坑である。ピットの底には炭化材がつまっており、住居が焼失した段階まで空いていた状態であったことが分かる。これらのことからこの土坑は、貯蔵穴と想定される。出土遺物には土師器や砥石があり、土師器の型式から古墳時代前期のものと考えられる。

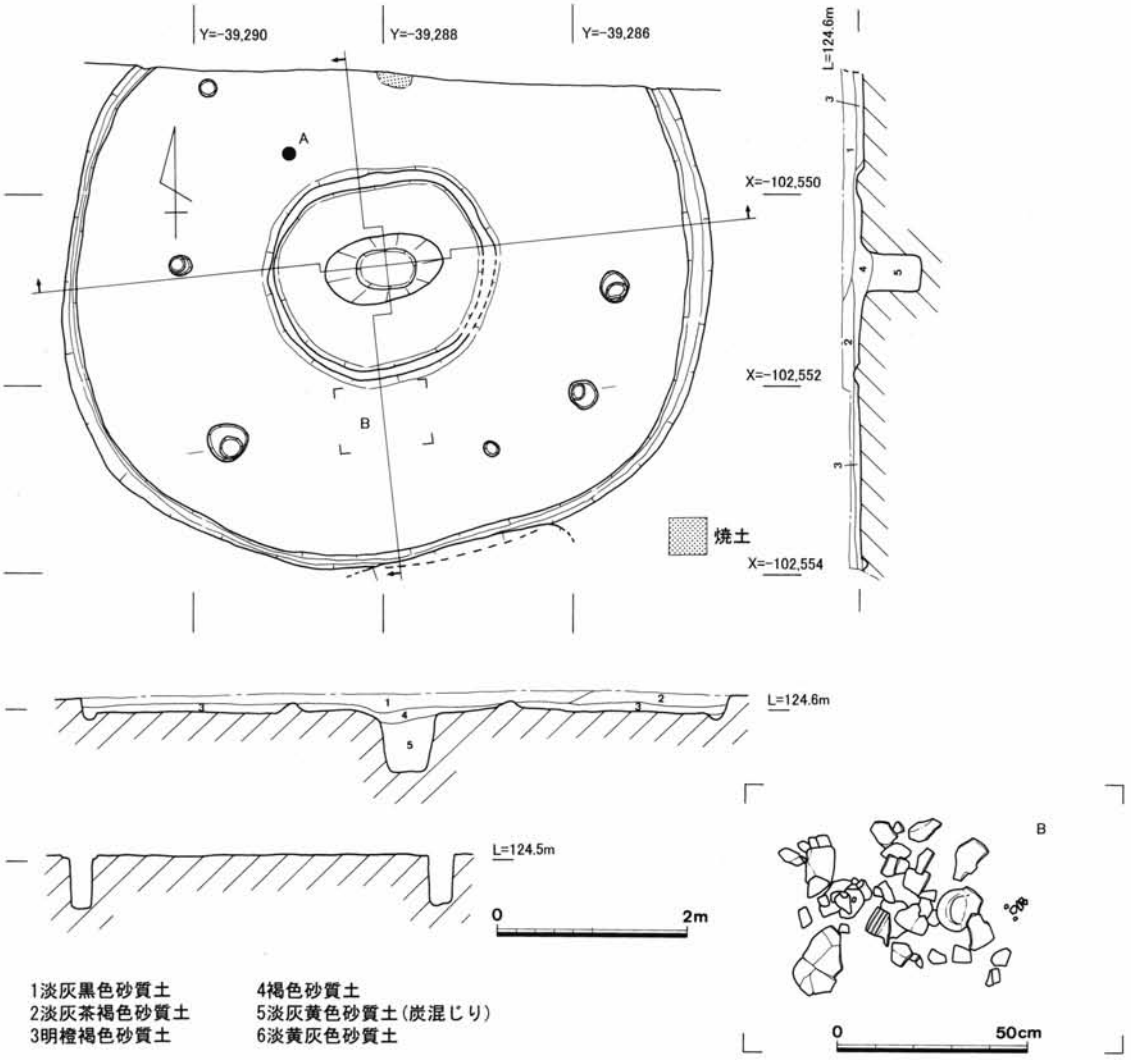


1灰黄褐色砂質土
2灰茶褐色礫混じり土(2cm以下の礫)
3灰茶褐色砂質土
4灰茶褐色細砂質土
5灰褐色礫混じり土(1cm以下の礫)
6淡灰黒色砂質土
7黄灰褐色砂質土
8黄色粘土ブロック混じり灰褐色砂質土
9暗黄色粘土
10茶褐色砂質土～シルト
11黒灰色砂質土
12黄灰色砂礫混じり粘土
13灰色砂礫混じり土(3mmの礫)
14濁黄褐色砂礫混じり粘土
15黄褐色シルト質粘土
16灰褐色砂礫混じり土(5mmの礫)
17淡灰色礫混じり砂質土

第６図　第３次調査第３トレンチ竪穴式住居跡６実測図



第７図　第３次調査第４トレンチ遺構配置図



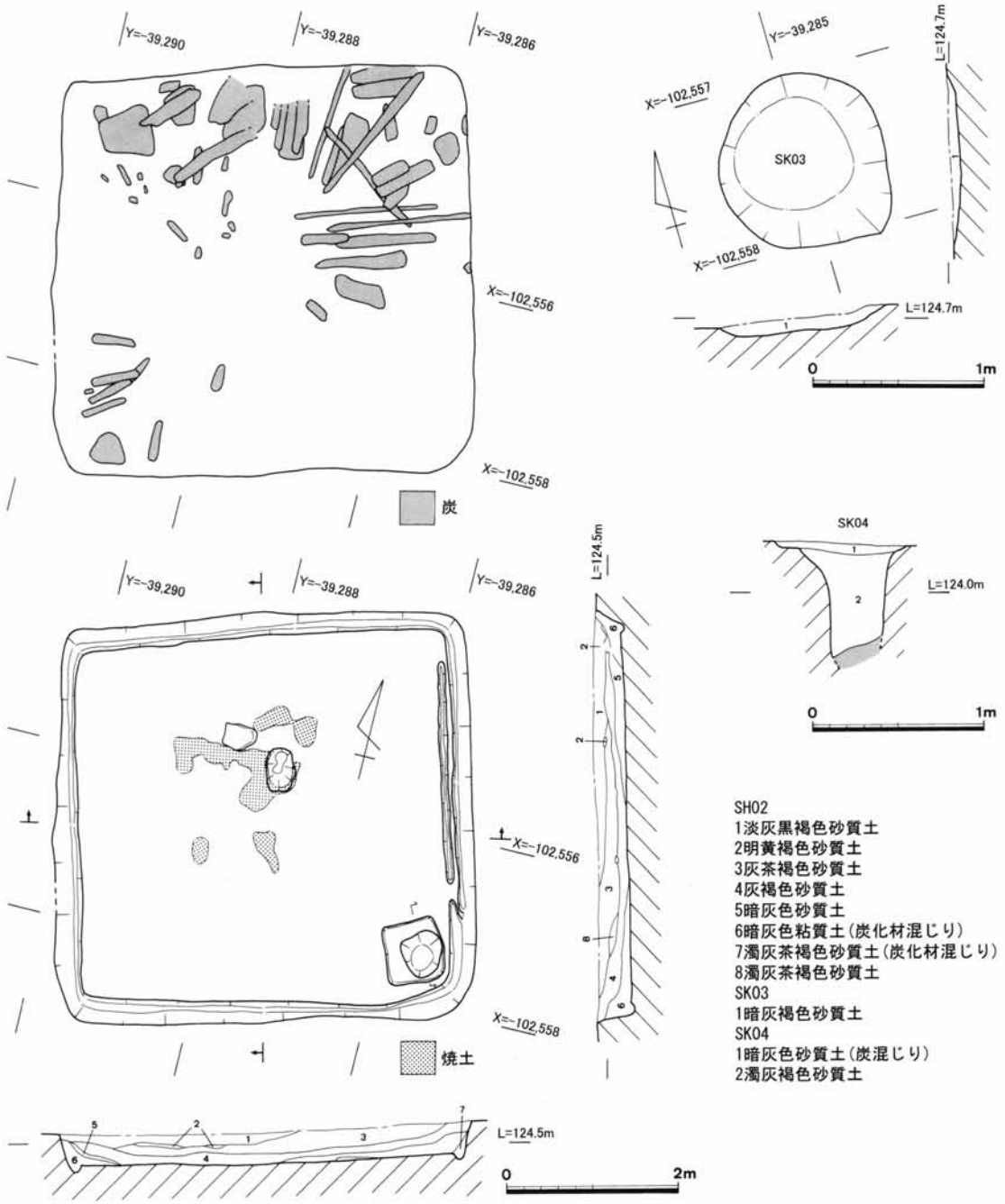
第８図　第３次調査第４トレンチ竪穴式住居跡１実測図

土坑ＳＫ３　竪穴式住居跡２埋没後に掘削された円形土坑で、直径１ｍ、深さ0.1ｍである。須恵器蓋のつまみ部分が出土した。

②遺物(図版第34)

出土遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石製品などで、遺物整理箱で４箱分出土した。以下、先に述べた遺構順ではなく、良好な資料が出土している遺構出土の遺物を中心に概要を述べる。

竪穴式住居跡１出土遺物(第10図１～10)　弥生土器と古式土師器が出土した。図化できたのは以下の10点である。１～４は埋土の下層から、６・７は住居の床面から出土した。１・２は「く」の字口縁甕の口縁部である。１は内面をヨコハケで調整する。２は内外面とも磨滅のため調整は不明である。３・４は甕または壺の底部である。５は高杯か器台の脚部である。内面に絞りの痕跡が残る。６は台付鉢の脚部である。外面調整は磨滅しており不明だが、脚内面には粗い削りの痕跡を残す。円板充填の後、脚柱部内面を削り、その後脚裾部内面を削る。脚柱部外面には６条の凹線文が施文される。裾部の穿孔は外面から内面へと穿たれるが、高さも穿孔角度も一定では



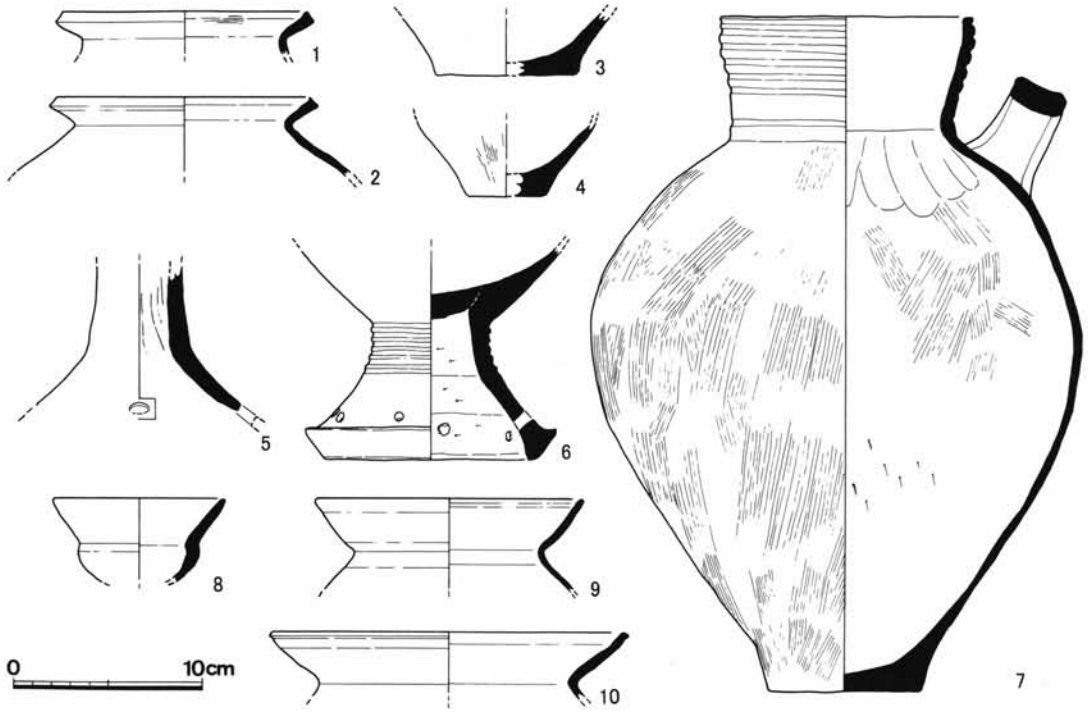
第９図　第３次調査第４トレンチ竪穴式住居跡２、土坑ＳＫ３・４実測図

ない。７孔が残存するが、本来は９孔であろう。

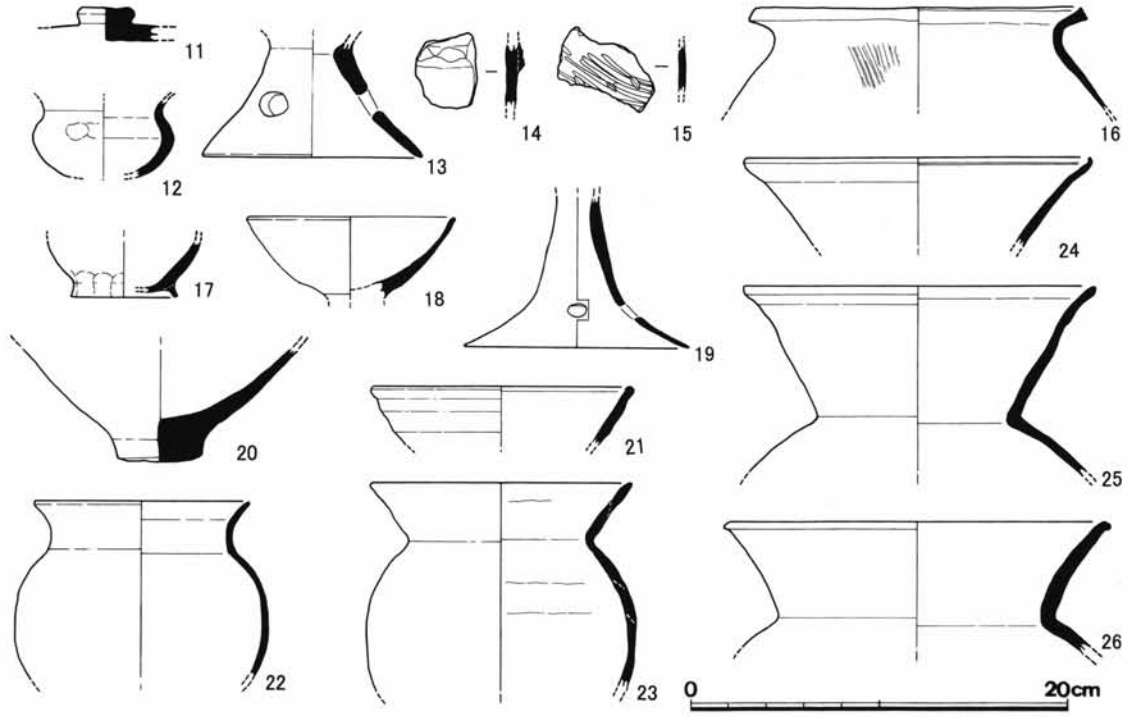
７は水差である。把手部分と底部については接点がないため図上で復原した。外面はタテハケで調整した後、口縁に６条の凹線文を施し、把手を貼り付けている。内面調整はタテ、ナナメハケで成形した後、胴部最大径付近までを削りで調整する。底部外面をハケで調整し、ナデは行っていないのが特徴的である。

古式土師器(８～10)は、埋土の上層から出土した。８は小型丸底壺、９・10は布留式甕の口縁部である。

竪穴式住居跡２出土遺物(第11図12・13、第12図27・28)　出土遺物はわずかであった。12は小



第10図　第３次調査竪穴式住居跡１出土遺物実測図

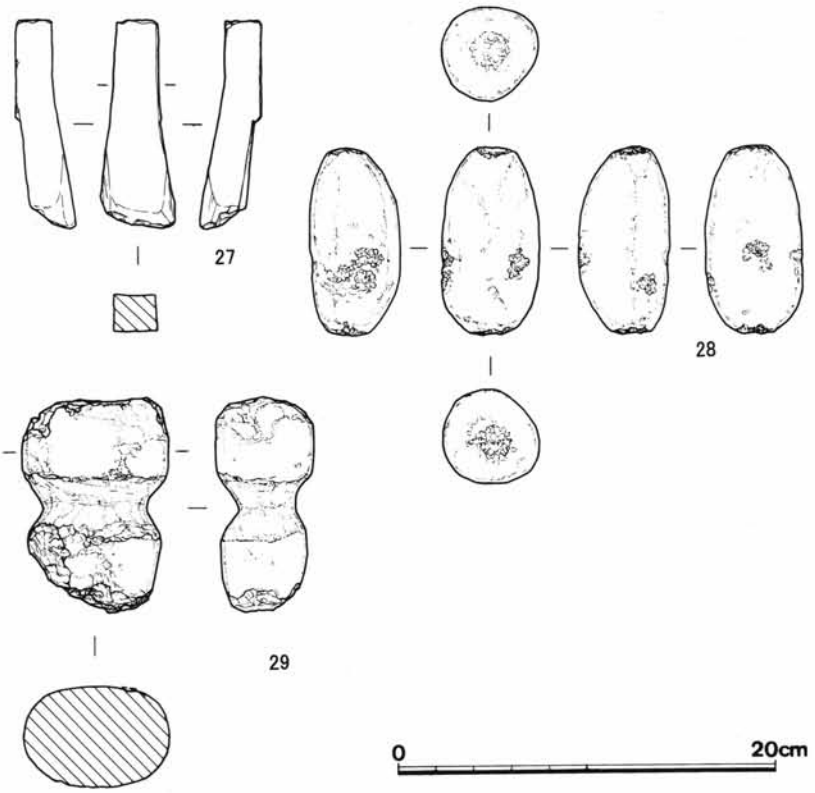


第11図　第３次調査土坑ＳＫ３、竪穴式住居跡（ＳＨ）２・６・７出土遺物実測図
ＳＫ３：11　　ＳＨ２：12・13　　ＳＨ６：17～26　　ＳＨ７：14～16

型丸底壺である。調整は内外面とも磨滅しており不明である。13は器台か高杯の脚部である。調整は内外面とも磨滅しており不明である。裾部の穿孔は３孔である。27は砥石である。

竪穴式住居跡６出土遺物（第11図17～26）　最も遺物が多く出土した遺構であるが、復原できる

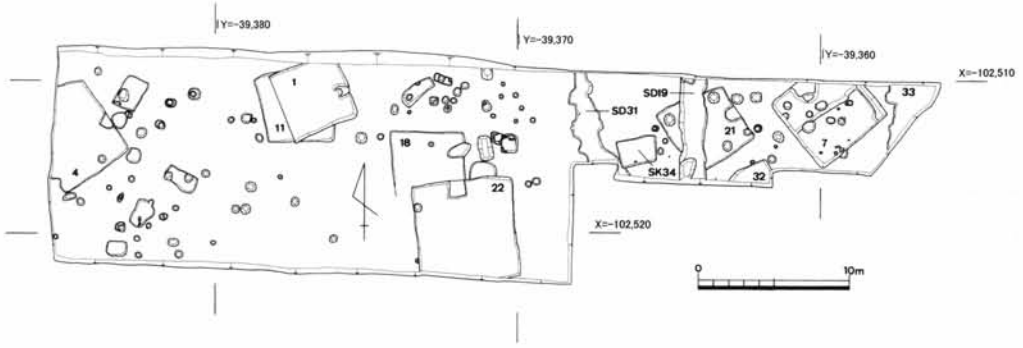
ものは少なく図化できたのは以下の10点で全体の約半分である。17は鉢の底部である。高台は貼り付けである。18は高杯の杯部である。調整は不明。20は甕の底部である。内外面の調整は磨滅しており不明である。21～23は甕の口縁部である。21は口縁端部が内側に肥厚しており布留甕の特徴をもつ。23は内面に粘土紐接合痕が明瞭に残る。このほかにも甕が少なくとも約６個体あり、そのうち１点は底部がわずかに突出するもので、３点は丸底の甕である。これらの土器の時期は、庄内式併行期から布留式併行期である。



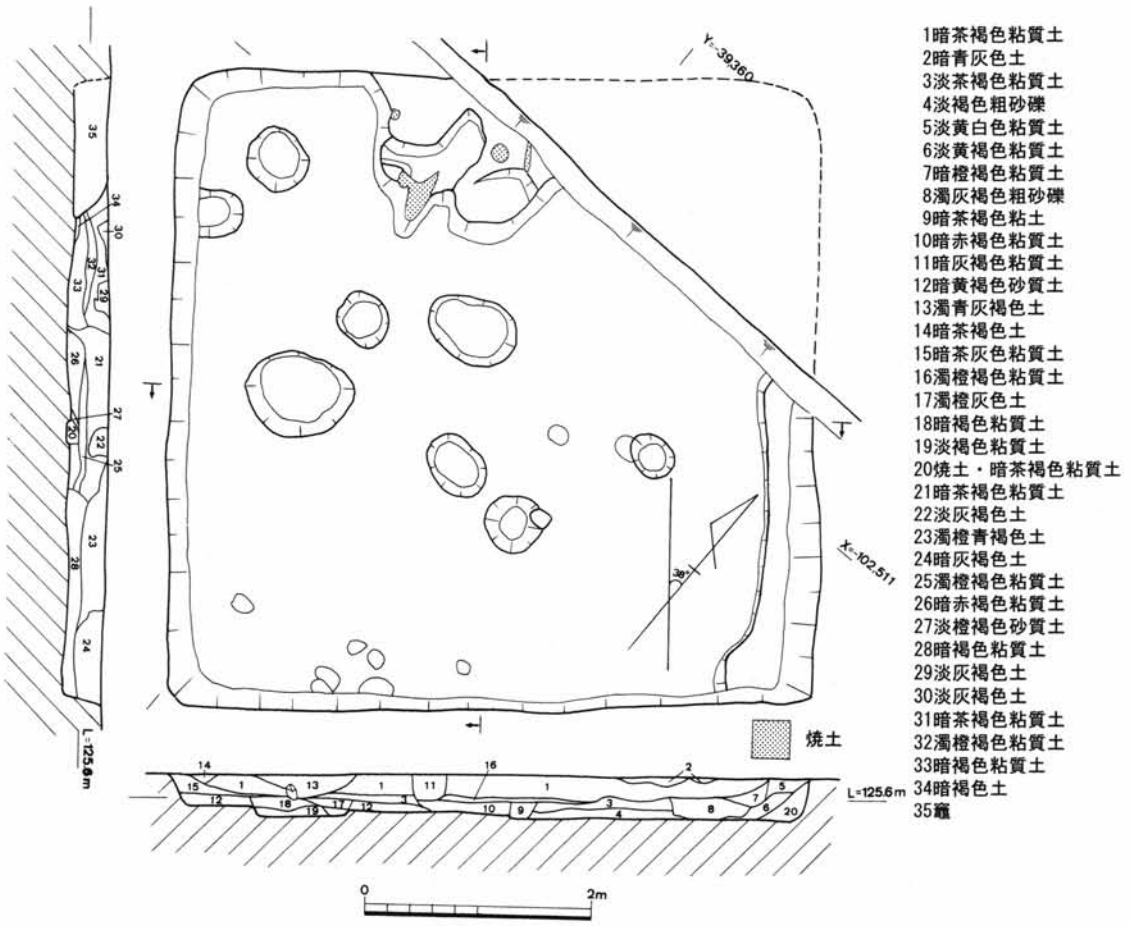
第12図　第３次調査竪穴式住居跡（ＳＨ）２・７出土遺物実測図
ＳＨ２：27・28　　ＳＨ７：29

竪穴式住居跡７出土遺物（第11図14～16、第12図29）　15は甕か壺の破片である。外面は、タテハケで成形した後、ミガキで調整している。また、列点文が施されている。29は石錘である。形状から石斧を転用したものと考えられる。16は口縁端部を跳ね上げ状に整形する「く」の字口縁甕である。外面はタテハケ、内面はヨコハケ後にナデで調整するが、いずれも磨滅しており、明瞭ではない。そのほか、竪穴式住居跡７の埋土から縄文土器片（14）が1点出土した。深鉢の刻み目突帯部である。

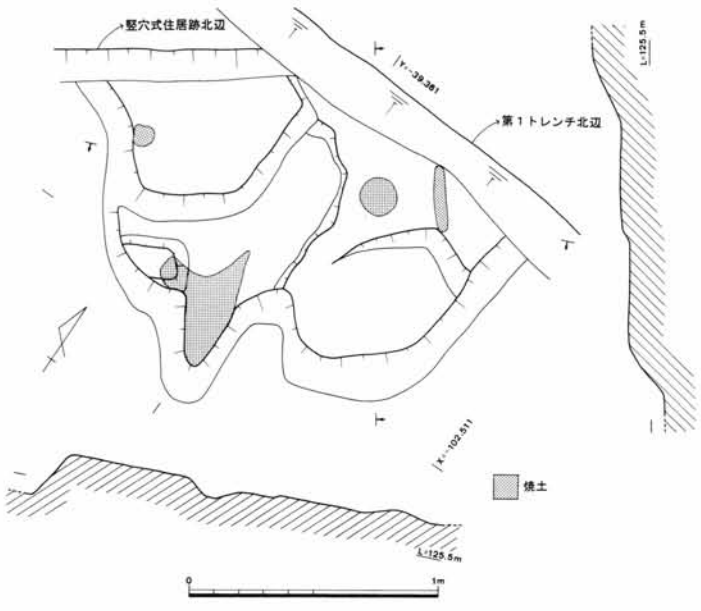
土坑ＳＫ３（第11図11）　須恵器杯蓋（11）が1点出土した。



第13図　第５次調査第１トレンチ遺構平面図



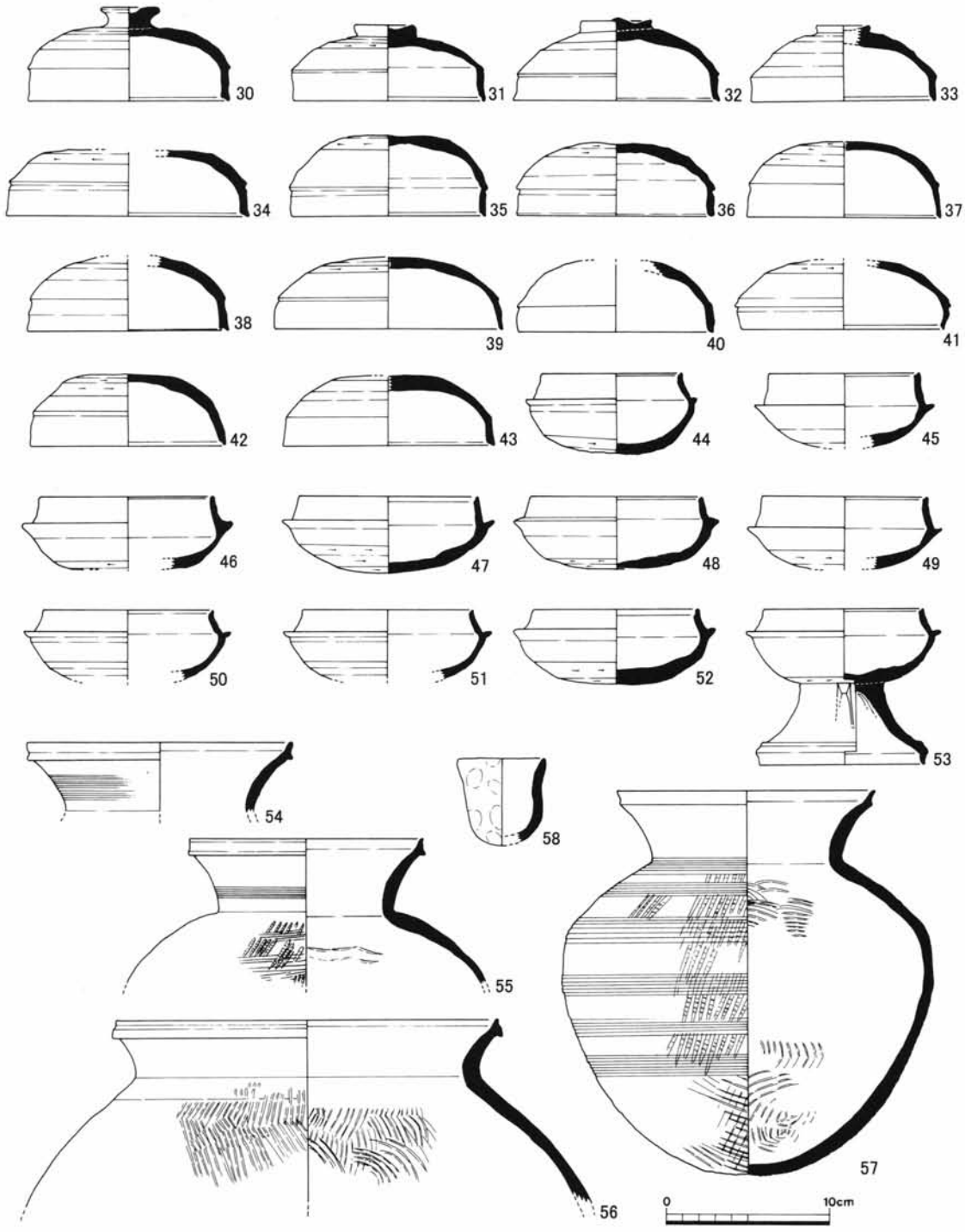
第14図　第５次調査第１トレンチ竪穴式住居跡７実測図



第15図　第５次調査第１トレンチ竪穴式住居跡７竈実測図

以上が、第３次調査の概要である。以下に記述する第５・６次調査の成果とは大きくことなるため、簡潔に問題点の指摘をしておきたい。

今回の第３次調査では、弥生時代中期～古墳時代前期にかけての竪穴式住居跡をあわせて５基確認した。１基を除いて残存状況は良好である。各住居の時期については出土遺物により先に述べたが、竪穴式住居跡８については遺物がないため不明である。竪穴式住居跡１のように中央土坑の周囲に帯状の高まりを持つ住居は、京都府内では舞鶴市桑飼上遺跡、綾部市小西町田遺跡や久御山町佐山遺跡などで見られるが、類例は少ない。兵庫県側の丹波

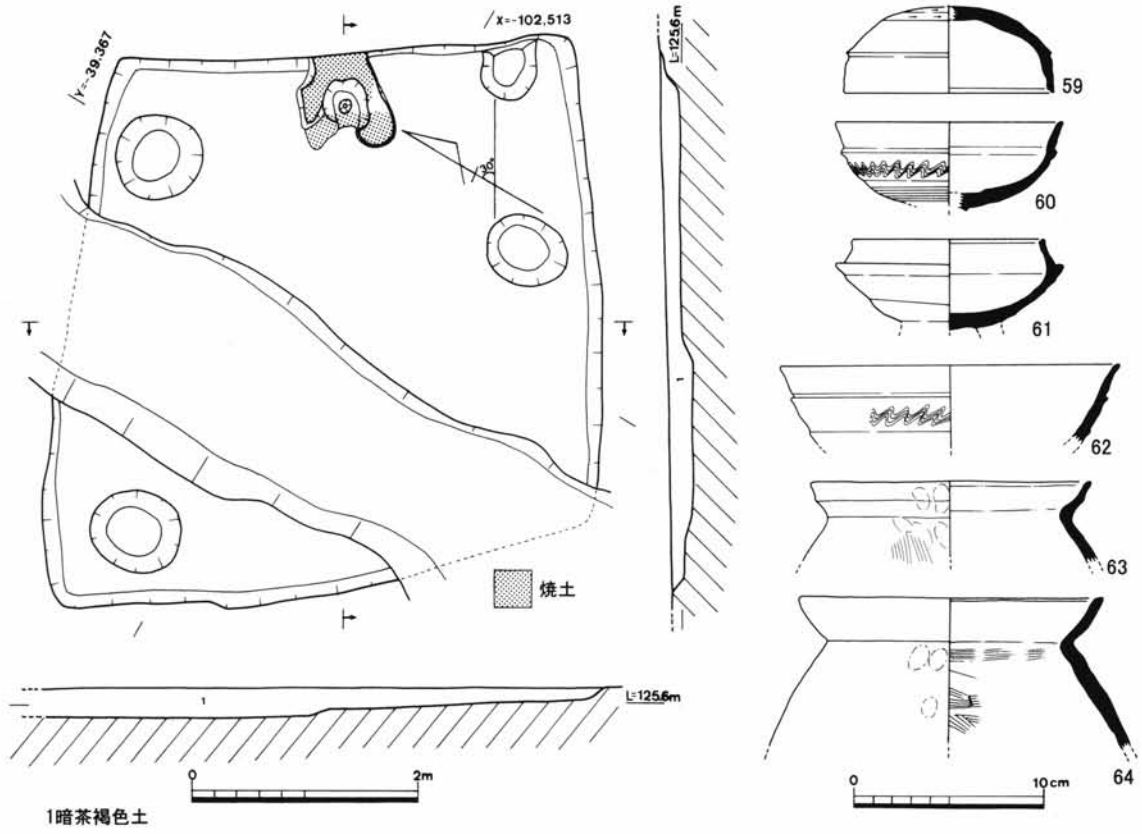


第16図　第５次調査第１トレンチ竪穴式住居跡７出土遺物実測図

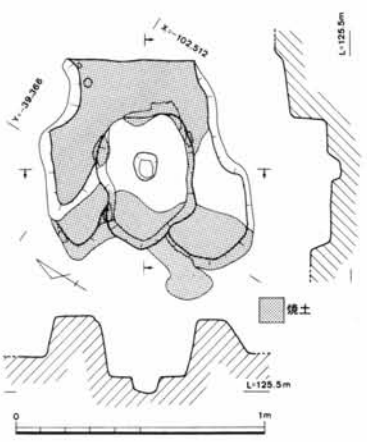
地域では、氷上郡や多可郡で同様の住居が検出されており、いずれも弥生中期および後期のものである。

里遺跡では、これまでの調査において古墳時代後期や奈良時代の遺構が確認されていたが、今回の調査により新たに弥生時代中期～古墳時代前期までの様相が明らかになった。調査地は、里遺跡の北東隅に位置しており、古い時期の集落は山手の方に存在していたと考えられる。

（松尾史子）



第17図　第５次調査第１トレンチ竪穴式住居跡21および出土遺物実測図



第18図　第５次調査第１トレンチ竪穴式住居跡21竈実測図

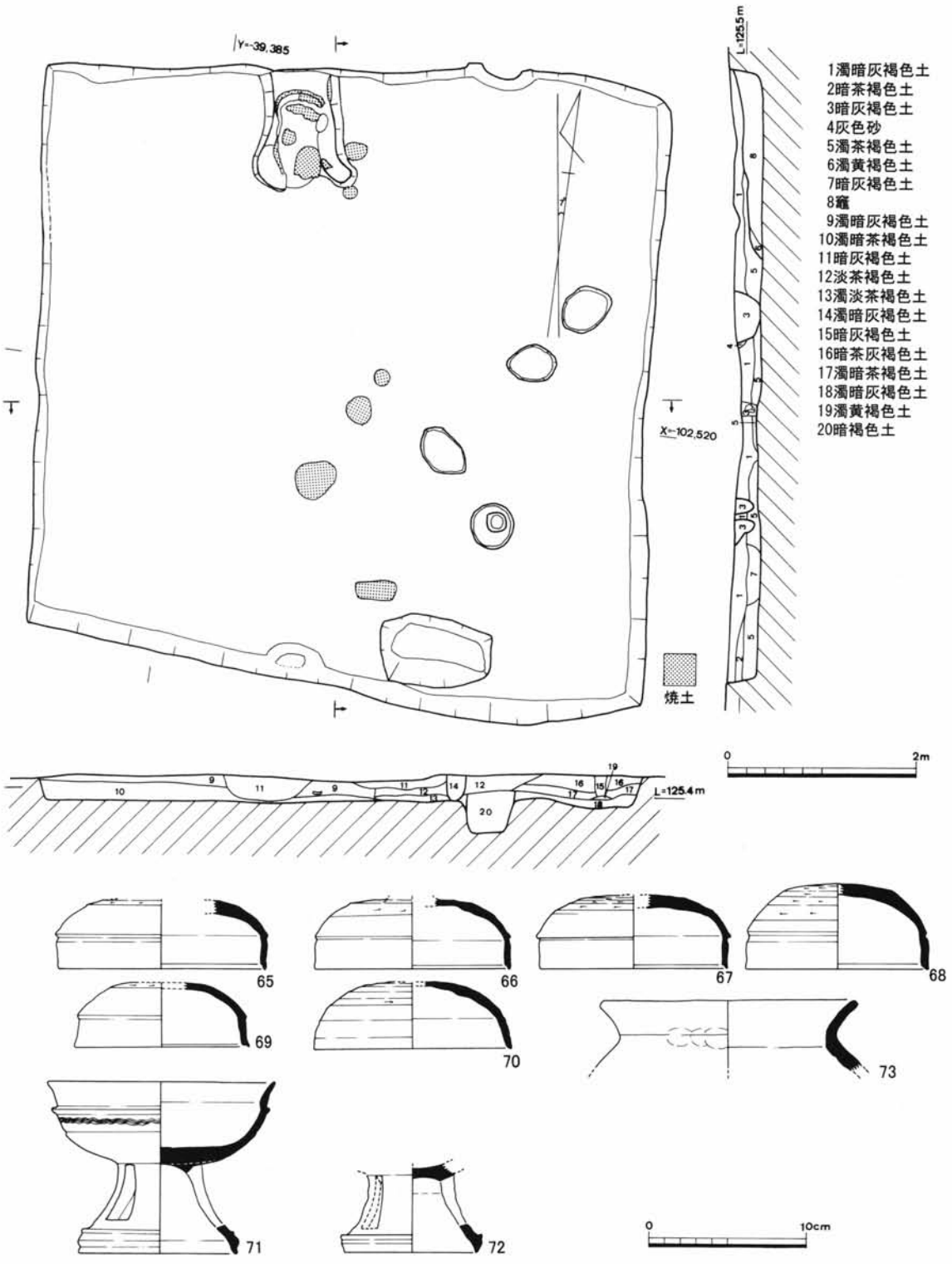
(2)第５次調査の遺構と遺物

①第１トレンチ(第13図)

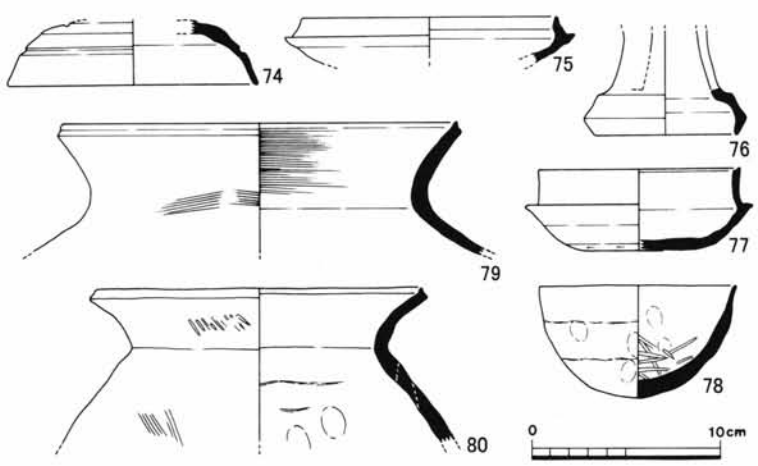
第１トレンチの遺構検出面は、標高が概ね125mを測り、平坦な地形を呈している。検出した遺構には、古墳時代中期から後期の竪穴式住居跡９基、柱穴、土坑などがある(図版第６・７・８－(1))。

竪穴式住居跡１(第13図)　竪穴式住居跡の主軸は、座標北から西方に20°の角度を有しており、南北4.5m、東西4.6mの方形プランである。北東辺中央部に竈を設けている。なお、住居跡内からは第20図74～76の土器が出土している。74・75は陶邑編年ＴＫ209型式に比定でき、76は、陶邑編年ＭＴ15型式に比定できる。両群に認定し難い程の型式差があるが、他の竪穴式住居跡の時期から勘案して、陶邑編年ＭＴ15型式併行期に住居跡の時期を設定すべきである。74・75は、住居跡上に穿たれた柱穴からの出土遺物である可能性が残る。

竪穴式住居跡４(第13図)　竪穴式住居跡の主軸は、座標北から西方に34°の角度を有しており、南北6.3m、東西5.3mの方形プランである。北東辺中央部に竈を設けている。なお、住居跡内からは土器資料は良好な状態では出土していない。



第19図　第５次調査第１トレンチ竪穴式住居跡22および出土遺物実測図



第20図　第５次調査第１トレンチ
竪穴式住居跡（ＳＨ）１・４・18・28出土遺物実測図
（ＳＨ１：74～76　ＳＨ４：79　ＳＨ18：77　ＳＨ28：78・80）

竪穴式住居跡７（第14図、図版第８－(2)）　竪穴式住居跡の主軸は、座標北から西方に38°の角度を有しており、南北５m、東西5.2mの方形プランである。竪穴式住居跡の北隅が調査区外に拡がっており、全容は不明であるが、北東辺中央部に竈（第15図）を有している。土層の堆積状況は複雑であり、複数回に及ぶ床面の補修と人為的な埋め戻しを想定することができる。上部構造体を支える支柱穴は、定位置では検出しえず、部分的に礎板などを利用した可能性が指摘できる。

出土遺物（第16図）には、須恵器と土師器が南辺中央から集中的に出土しており、竪穴式住居跡の時期を決める良好な資料である。30～33は、有蓋高杯の蓋である。天井部に平坦なつまみが付き、肩部の稜は鈍く、僅かに内傾する口縁端部である。また、34～43は、形態的に有蓋高杯の蓋と近似しており、39・42のようにほかの杯蓋と比べて新しい様相を有する個体も散見できる。一方、杯は、立ち上がりが垂直を保つ一群と短く内湾する一群に分類することができる。以上の須恵器から、陶邑編年ＴＫ47型式に比定し得る個体もあるが、ほとんどの資料は、陶邑編年ＭＴ15型式に比定することができ、竪穴式住居跡７の年代を古墳時代中期末～後期初頭に比定できる。

竪穴式住居跡11（第13図）　竪穴式住居跡１により大半が消失している。竪穴式住居跡の主軸は、座標北から西方に５°の角度を有しており、南北4.5m、東西4.6mの方形プランである。住居跡内からは良好な土器資料は出土していない。

竪穴式住居跡18（第13図）　竪穴式住居跡の主軸は、座標北から西方に５°の角度を有しており、南北５m、東西５m以上の方形プランである。住居跡内からは陶邑編年ＴＫ47型式に比定できる須恵器の杯が出土している。

竪穴式住居跡21（第17図、図版第９・10－(1)）　竪穴式住居跡の主軸は、座標北から東方に30°の角度を有しており、南北5.3m、東西5.1mのやや不整な方形プランである。北東辺中央部に竈を設けている。竈（第18図）の中央部には、支柱石の抜き取り痕がある。なお、住居跡内からは陶邑編年ＭＴ15型式に比定することができる土器資料（第17図）が出土している。

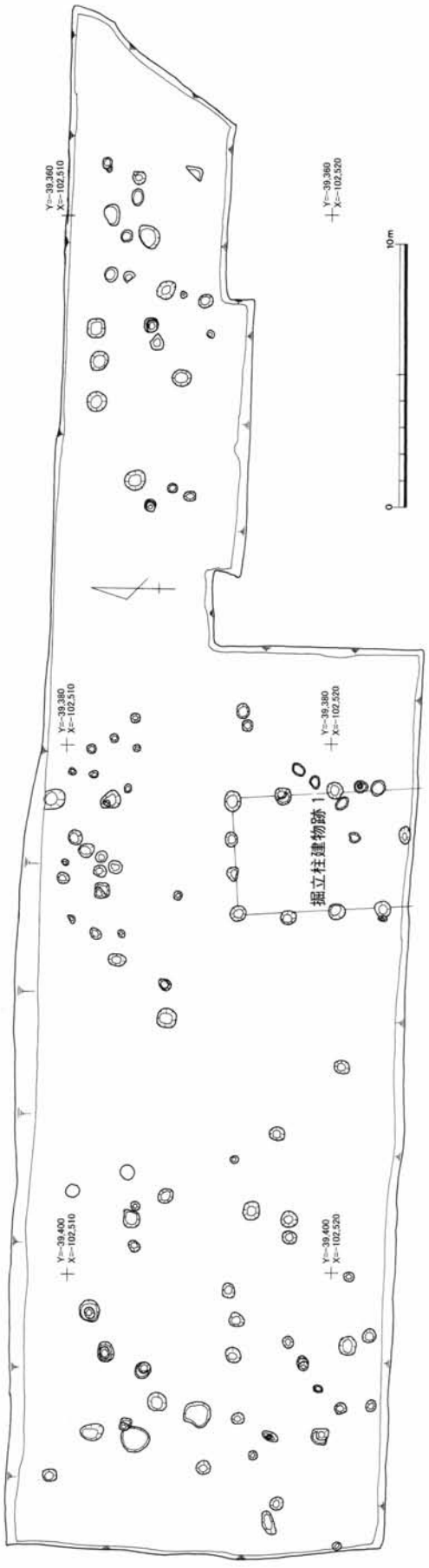
竪穴式住居跡22（第19図、図版第10－(2)）　竪穴式住居跡の主軸は、僅かに座標北から西方に７°の角度を有しており、南北辺6.5m、東辺6.5m、西辺４mのやや不整な方形プランである。北辺中央部に竈を設けている。竈の北方床面には４か所において被熱により焼土化した箇所があり、その一部は炉跡と考えられる。また、南辺中央部の周壁部に直径0.5mの掘込みがあり、さ

らに東方には1.1×0.7ｍの掘込みがある。竈と対向する位置であることなどを勘案すると入り口に付随する跡の可能性がある。なお、住居跡内からは陶邑編年ＴＫ47型式からＭＴ15型式の須恵器が出土している。

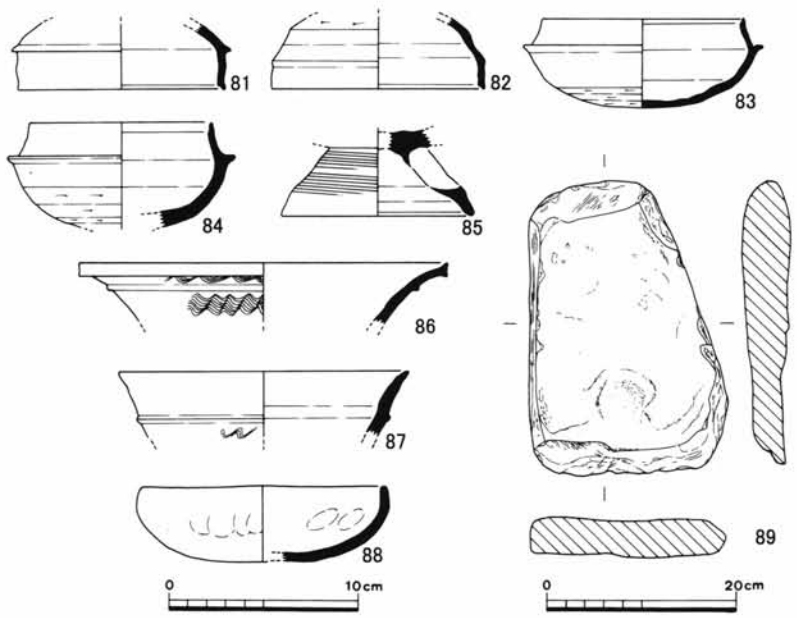
竪穴式住居跡32・33(第13図)　いずれも大半が調査区外に拡がるため、詳細については不明であるが、断面観察から、竪穴式住居跡として認識できる。

以上、第１トレンチで確認しえた竪穴式住居跡の概要である。竪穴式住居跡以外に散在する状況ではあるが、柱穴を検出している。掘立柱建物跡として復原できたのは僅かに１棟だけである。トレンチの東西端でも柱穴が比較的密に穿たれていることから、少なくとも３棟以上の掘立柱建物跡が存在した可能性を指摘できる。

掘立柱建物跡１（第21図）　東西は３間であり、4.5ｍを測る。一方、南北は４間以上であり、6.9ｍ以上を想定できる。梁行の柱間から桁行は４間である可能性が高く、復原した桁行の全長は、7.8ｍである。柱穴からの遺物は、須恵器・土師器の細片であり、時期設定が困難な状況ではあるが、トレンチ内では古墳時代中期末～後期にかけての土器が大半であり、また、ほかのトレンチで確認した掘立柱建物跡が、古墳時代後期であることから、第１トレンチで検出した掘立柱建物跡１についても、古墳時代後期後半に比定して大過ないと考えられる。なお、柱穴内から縄文時代の石鏃(図版第38右最下段)が一点出土している。当該時期の遺構および遺物は検出していないことから、出土した背景については、判然としない。最後に第22図は、溝や土坑から出土した遺物群である。全体的には陶邑編年ＭＴ15型式に比定できる土器群であり、竪穴式住居跡に付随する施設として捉える



第21図　第５次調査第１トレンチ検出ピット平面図



第22図　第５次調査第１トレンチ
溝ＳＤ19、土坑ＳＫ34、ＳＸ108、北西部精査出土遺物実測図
ＳＤ19：85・89　　ＳＤ31：81
ＳＫ34：82・83・87　　北西部精査：84・86・88

ことができる。

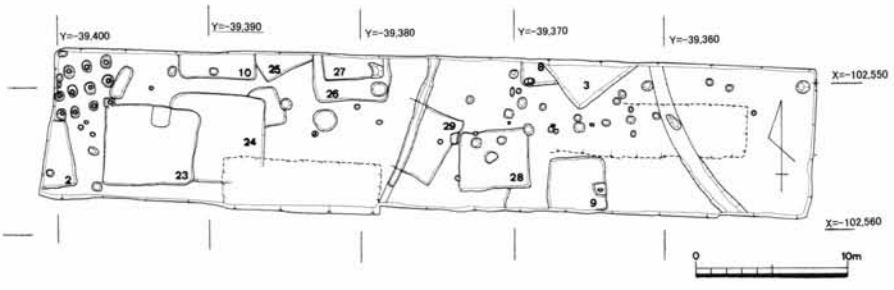
②第２トレンチ（第23図、図版第11）

第２トレンチの遺構検出面は、第１トレンチと同じく標高が概ね125ｍを測り、平坦な地形を呈している。検出した遺構には、古墳時代後期中期後半～後期の竪穴式住居跡12基・柱穴・土坑・溝などがある。

竪穴式住居跡２（第23図）　竪穴式住居跡の主軸は、座標北から西方に18°の角度を有しており、東辺長は4.5ｍである。住居跡の大半は、トレンチ西方に拡がっており、詳細は不明であるが、少なくとも東辺には竈は設置されていない。土師器や陶邑編年ＭＴ15型式併行期に比定できる須恵器群が出土している（第27図112～114）。

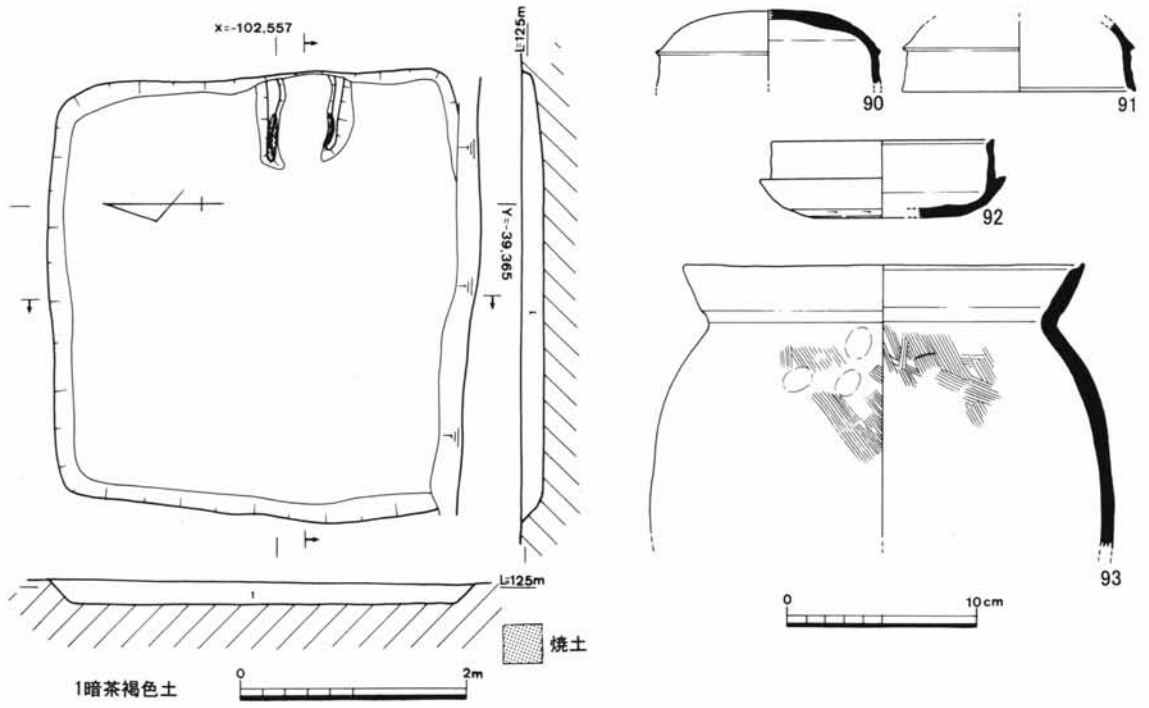
竪穴式住居跡３（第23図）　竪穴式住居跡の主軸は、座標北から西方に36°の角度を有しており、検出長は、南西辺が４ｍ、南東辺が５ｍである。住居跡の大半はトレンチ外に拡がっており、詳細は不明である。なお、検出面から床面までの深さは、約0.3ｍを測り、周囲の竪穴式住居跡より残存状況は良好である。出土した須恵器杯115は、陶邑編年ＴＫ209型式に比定でき、また、同蓋は、陶邑編年ＴＫ47型式より先行する可能性が指摘できる。一方、同高杯脚部は、同ＭＴ15型式に比定できる。115が型式的に極端にずれるため、竪穴式住居跡上に穿たれた古墳時代後期の柱穴内資料を竪穴式住居跡資料として取り上げている可能性がある。従って当該竪穴式住居跡を陶邑編年ＴＫ47～ＭＴ15型式に時期比定して大過ないと考える（第27図）。

竪穴式住居跡８（第23図）　竪穴式住居跡の主軸は、座標北とほぼ一致している。竪穴式住居跡３によって大半が消失し、また、残存する床面の大半がトレンチ外に拡がっており、詳細は不明である。須恵器や土師器の細片の出土は確認できるものの、型式認定には到っていない。



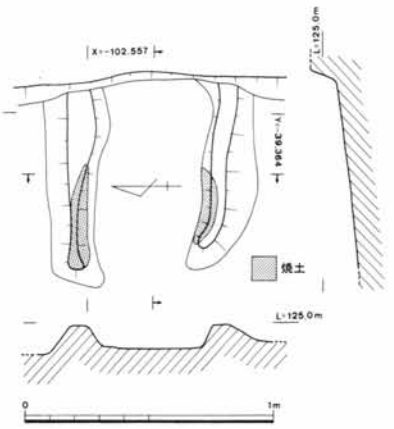
第23図　第５次調査第２トレンチ遺構平面図

竪穴式住居跡９（第24図）　竪穴式



第24図　第５次調査第２トレンチ竪穴式住居跡９および出土遺物実測図

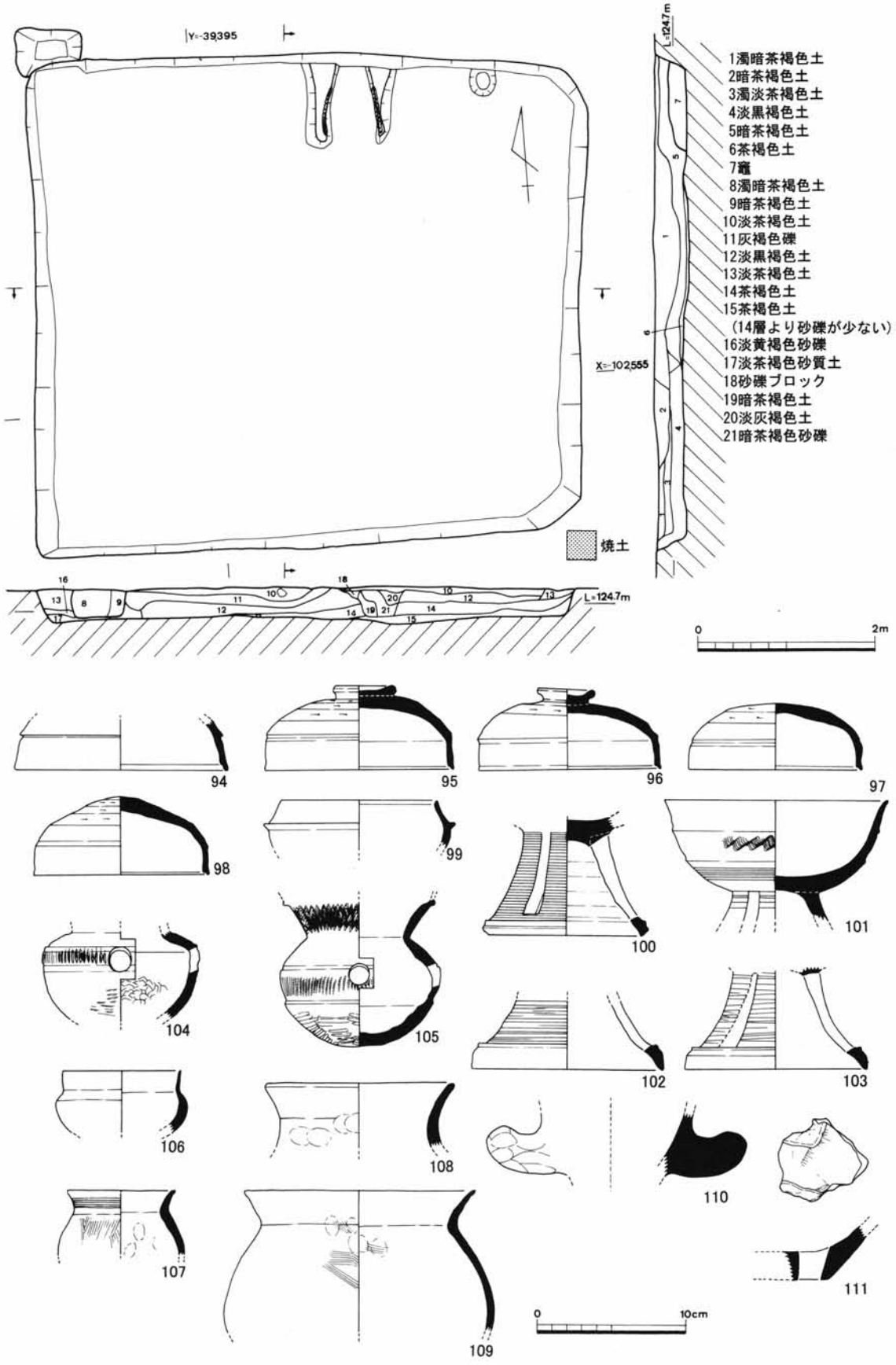
住居跡の主軸は、座標北とほぼ一致しており、南北辺3.7m、東西辺3.6mを測る方形プランである。東辺中央部に竈を設ける(第25図)。竈は被熱により焼土化した箇所があり、側壁部の残存状況が著しく不良であることから、竪穴式住居跡を解体するする際に、竈もていねいに取り壊されていると考えられる。床面には支柱穴を確認しえず、礎板などを想定することができる。なお、住居跡内からは(90・91)に見られるような須恵器の蓋が出土している。いずれも口縁部が高い。また、杯(92)は立ち上がりが垂直に立ち上がっていることから陶邑編年ＴＫ47型式を中心に時期比定できる資料群である。



第25図　第５次調査第２トレンチ
竪穴式住居跡９竈実測図

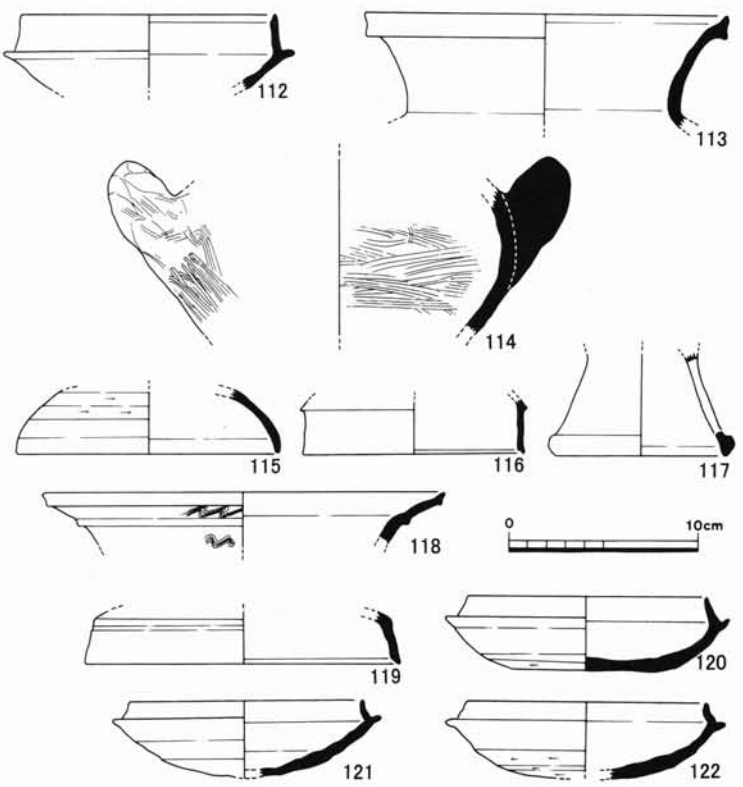
竪穴式住居跡10(第23図)　竪穴式住居跡の主軸は、座標北とほぼ一致している。南辺は約５ｍを測るものの、残存する床面の大半がトレンチ外に拡がっており、詳細は不明である。なお、須恵器や土師器の細片の出土は確認できるものの、型式認定には到っていない。

竪穴式住居跡23(第26図)　竪穴式住居跡の主軸は、座標北とほぼ一致しており、北辺6.1m、南辺6.3m、東辺5.2m、西辺5.1mを測るやや不整な方形プランである。北辺中央部に竈を設けている。竈には被熱により焼土化した箇所があり、側壁部の残存状況が著しく不良であることから、竪穴式住居跡を解体するする際に、竈もていねいに取り壊されていると考えられる。床面には支柱穴を確認しえず、礎板などで上部構造体を支えたことを想定し得る。なお、住居跡内からは須恵器蓋杯・有蓋高杯・無蓋高杯・鼈や、土師器壺・甕・甑などが出土しており、須恵器と土



第26図　第５次調査第２トレンチ竪穴式住居跡23および出土遺物実測図

師器の供伴関係を知るうえで良好な資料である。須恵器蓋には、陶邑編年ＴＫ47型式を中心とする一群と陶邑編年ＭＴ15型式を中心とする一群が供伴しており、この傾向は、瓶についても同様である。しかし、高杯では、陶邑編年ＭＴ15型式に比定できる個体が多いことが指摘できる。当該竪穴式住居跡は、これらの複合的要素から、陶邑編年ＴＫ47型式から同ＭＴ15型式の幅のなかで捉えておきたい。なお、110は、正確に胴部直径を計測できないものの、牛角状の把手を有する甑あるいは鍋の破片である。また、111は、底部の厚みが２cmを測り、底部に方形の穿孔部を有する甑の底部である。焼成は堅緻であり、他地域からの搬入土器である。竪穴式住居跡での煮炊に供した土器として認識するとともに、搬入元の特定が型式的に可能であれば、地域間交流の実態を把握する上で重要な土器資料となる。



第27図　第５次調査竪穴式住居跡（ＳＨ）ほか出土遺物実測図
ＳＨ２：112～114　ＳＨ３：115～117　ＳＨ24：118
西側試掘：119～121　精査：122

竪穴式住居跡24（第23図）　竪穴式住居跡の主軸は、座標北とほぼ一致している。竪穴式住居跡23によって一部が切り込まれている。須恵器甕（118）の口縁部が出土している。口縁端部を上方へつまみ上げ、波状文を施文している点から陶邑編年ＴＫ47型式から同ＭＴ15型式の幅のなかで捉えておきたい。

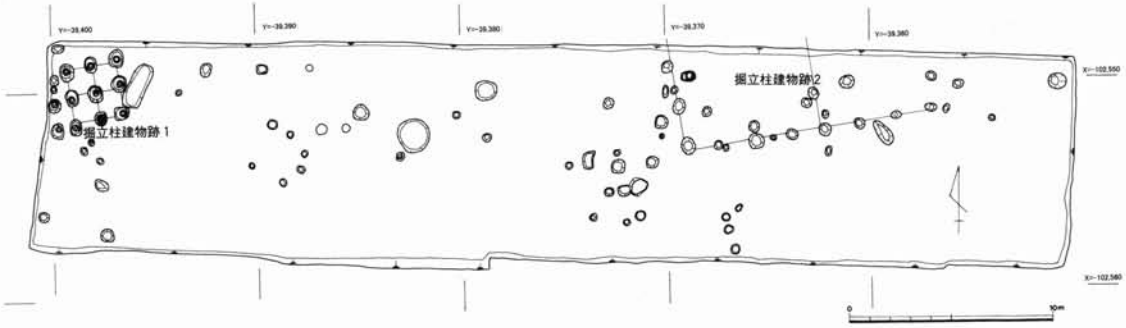
竪穴式住居跡25（第23図）　竪穴式住居跡の主軸は、座標北から西方へ32°振る。両端をほかの竪穴式住居跡に切られ、床面の大半は、トレンチ外に拡がっており、詳細は不明である。

竪穴式住居跡26（第23図）　竪穴式住居跡の主軸は、座標北とほぼ一致している。床面の中央には竪穴式住居跡27が位置しており、詳細は不明である。なお、南辺長は５mである。

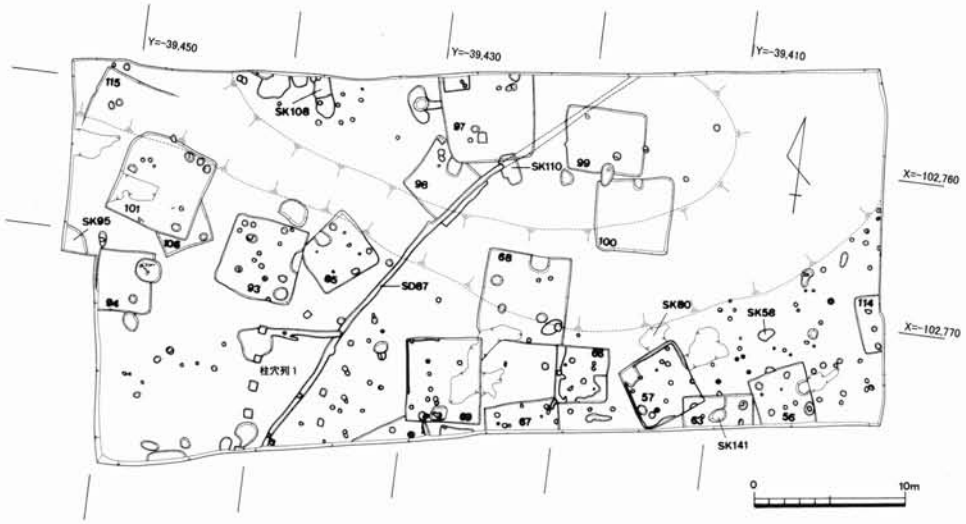
竪穴式住居跡27（第23図）　竪穴式住居跡の主軸は、座標北とほぼ一致している。南辺長は４mである。

竪穴式住居跡28（第23図）　竪穴式住居跡の主軸は、座標北とほぼ一致している。南北長4.5m、東西長４mのやや長方形プランを呈している。明確な竈は検出していないが、床面中央部に直径0.6mを測る炉跡を確認した。

竪穴式住居跡29（第23図）　竪穴式住居跡の主軸は、座標北から東方へ28°振っている。南東辺



第28図　第５次調査次第２トレンチ検出ピット平面図



第29図　第５次調査第３トレンチ遺構平面図

長は、約5mを測る。西半部の残存状況が不良であり、輪郭の確認すらし得なかった。遺物は出土しておらず、時期などの詳細は不明である。

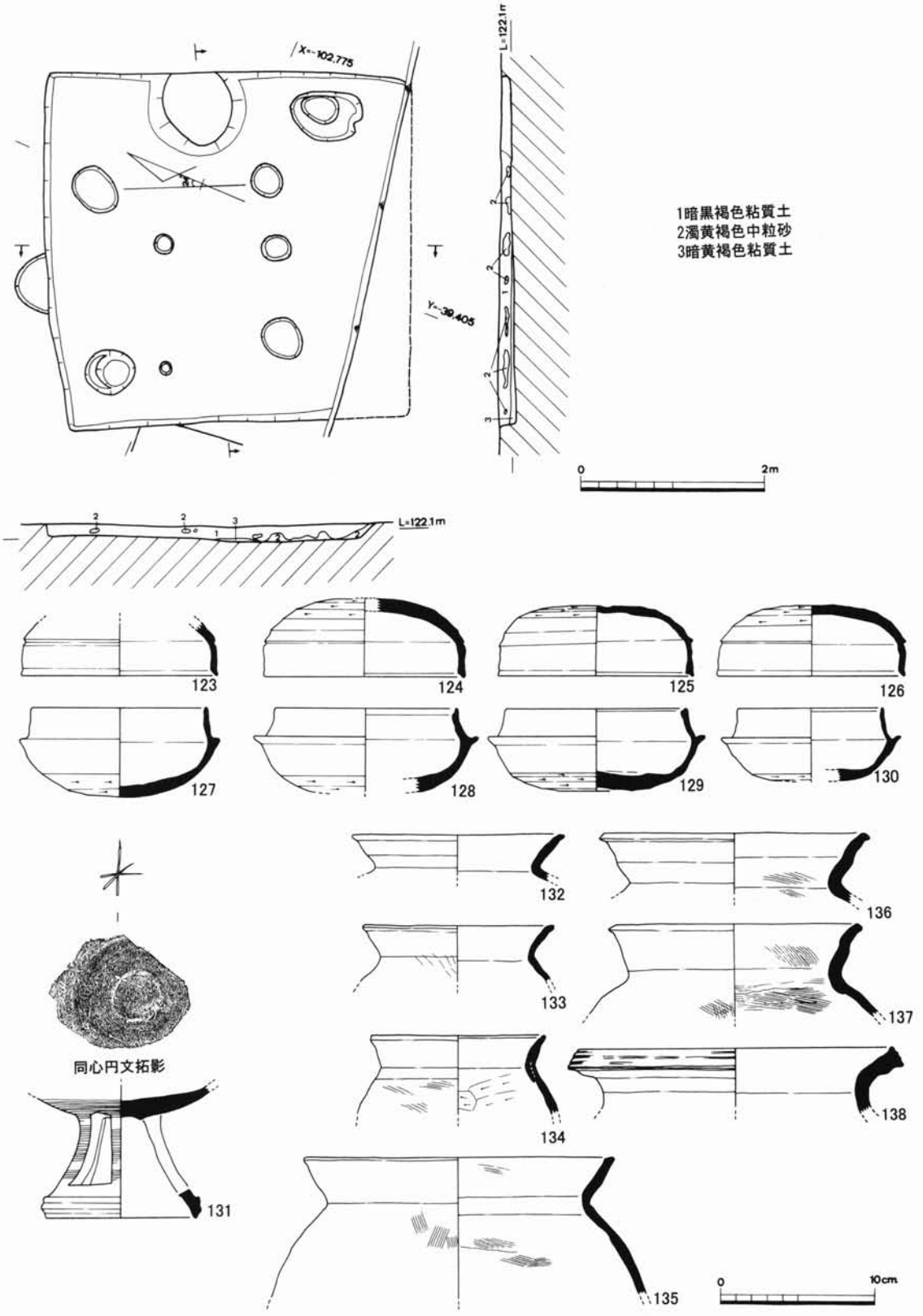
以上が検出した竪穴式住居跡の概観である。次に、掘立柱建物跡についてみておきたい。

掘立柱建物跡１（第28図）　２間(2.6m)×２間(2.7m)の総柱式の掘立柱建物跡である。建物の主軸は、座標北から西方へ約10°振っており、西隣接地にやや柱間距離が異なる柱列を一列検出している。時期の異なる掘立柱建物跡の東辺として捉え得る。柱穴内から、陶邑編年ＴＫ43～ＴＫ209型式の須恵器が出土している。

掘立柱建物跡２（第28図）　掘立柱建物跡１とほぼ同じ振り角である。建物の北半はトレンチ外に拡がっており、建物の規模自体も正確に把握できないが、梁間２間(3.9m)、桁行き５間(8.2m)の建物として復原しておきたい。なお、柱穴内から時期を決める土器の出土はみられないが、主軸が概ね一致することからほかの建物跡と同時期であろう。

③第３トレンチ（第29図、図版第12、13－(1)）

第３トレンチの遺構検出面は、標高が概ね122mを測り、平坦な地形を呈している。先に述べた第１トレンチ周辺とは、約３mの比高差がある。検出した遺構には、古墳時代後期中期から後期の竪穴式住居跡・柱穴・土坑・溝などがある。なお、トレンチの北東から北西の方向に拳大の

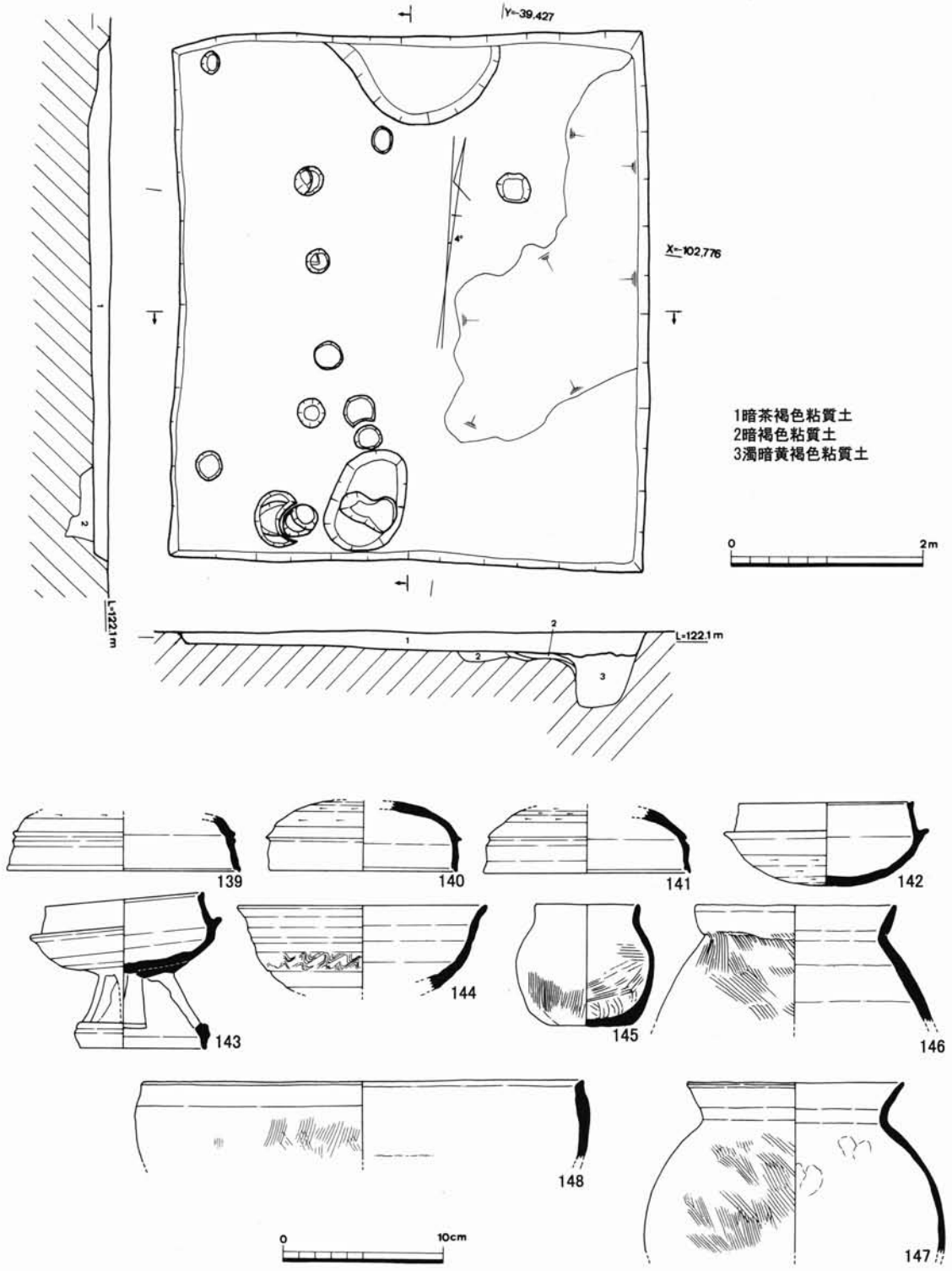


第30図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡56および出土遺物実測図

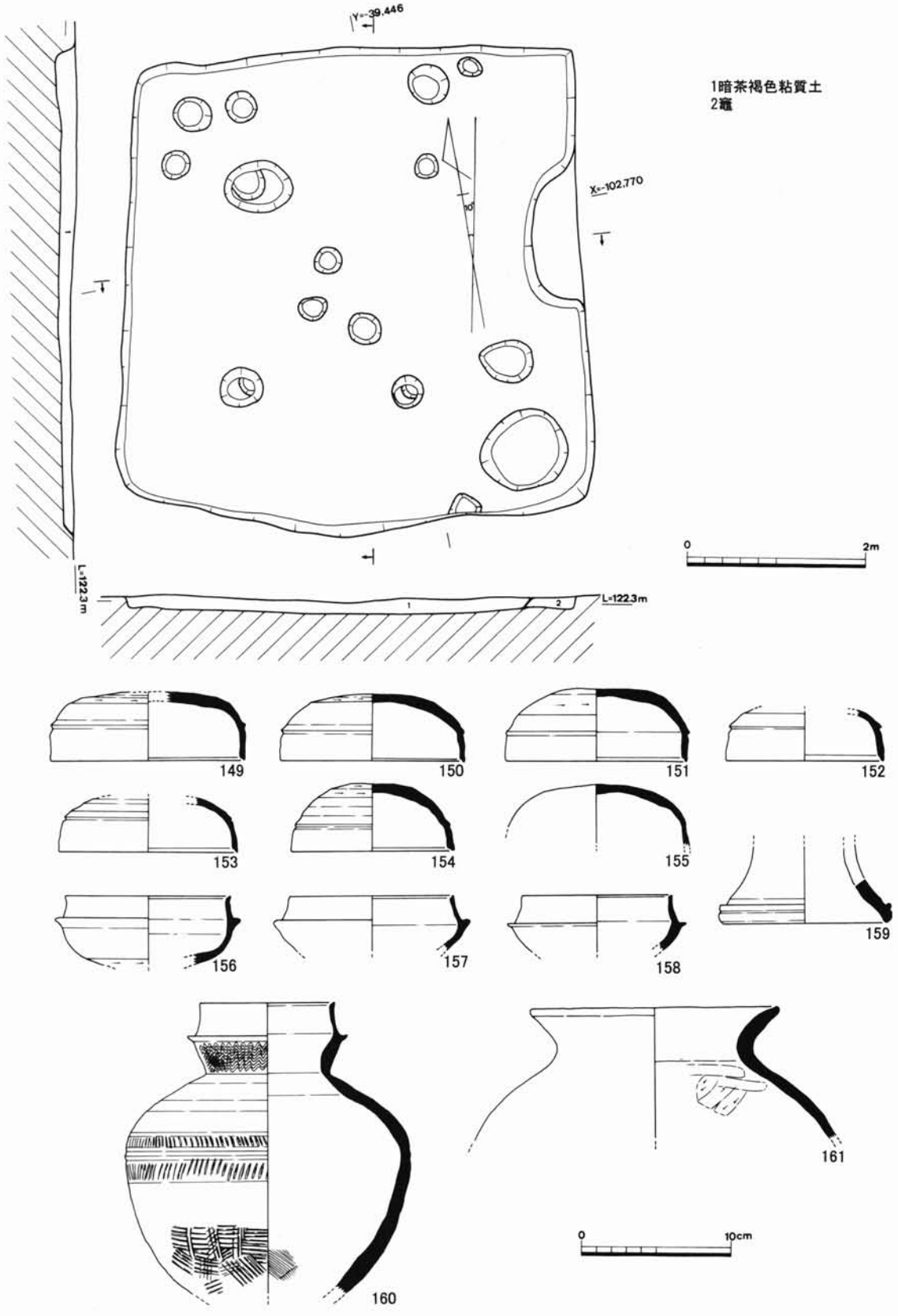
礫が堆積した旧流路が走っており、礫上には、古墳時代中後期の竪穴式住居跡が存在しない傾向がある。また、竪穴式住居跡56・57・69・101・115では、床面を不整に抉り込む落ち込みがみられた。当初、竪穴式住居跡に係わる諸施設である可能性を視野にいれ、調査を進捗させたが、詳

細な断面観察から竪穴式住居跡が造られる以前の風倒木痕であることが判明した。時期的には、縄文時代から弥生時代前期の間の植性を復原するうえで有用な痕跡であるため、風倒木痕内の暗灰褐色土を数点花粉分析に供した。その結果、マツ属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの花粉が検出され、陽当たりの良い比較的乾燥した環境であったことが推定されるに到っている。

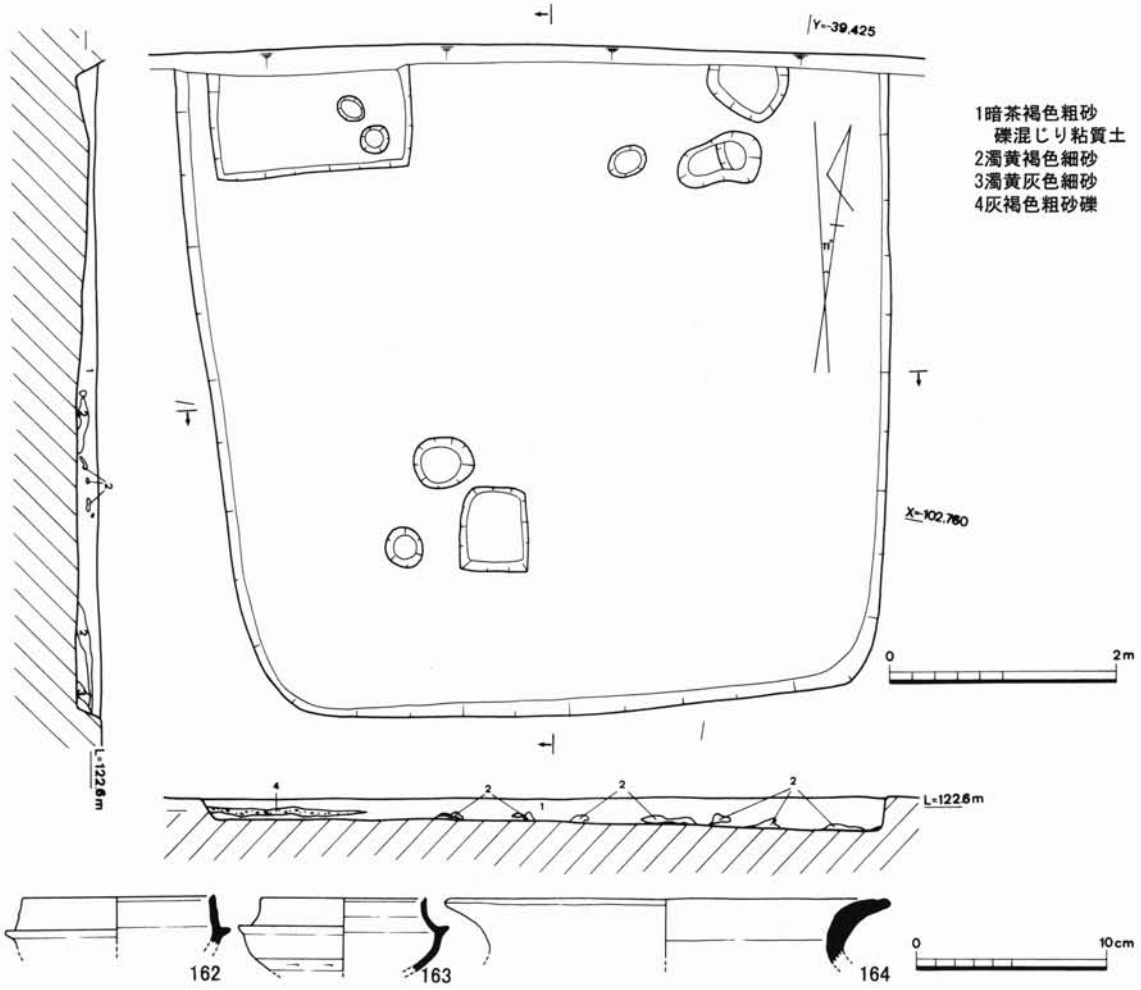
次に、第３トレンチで確認した主要な遺構について図示し、その概要を述べておく。



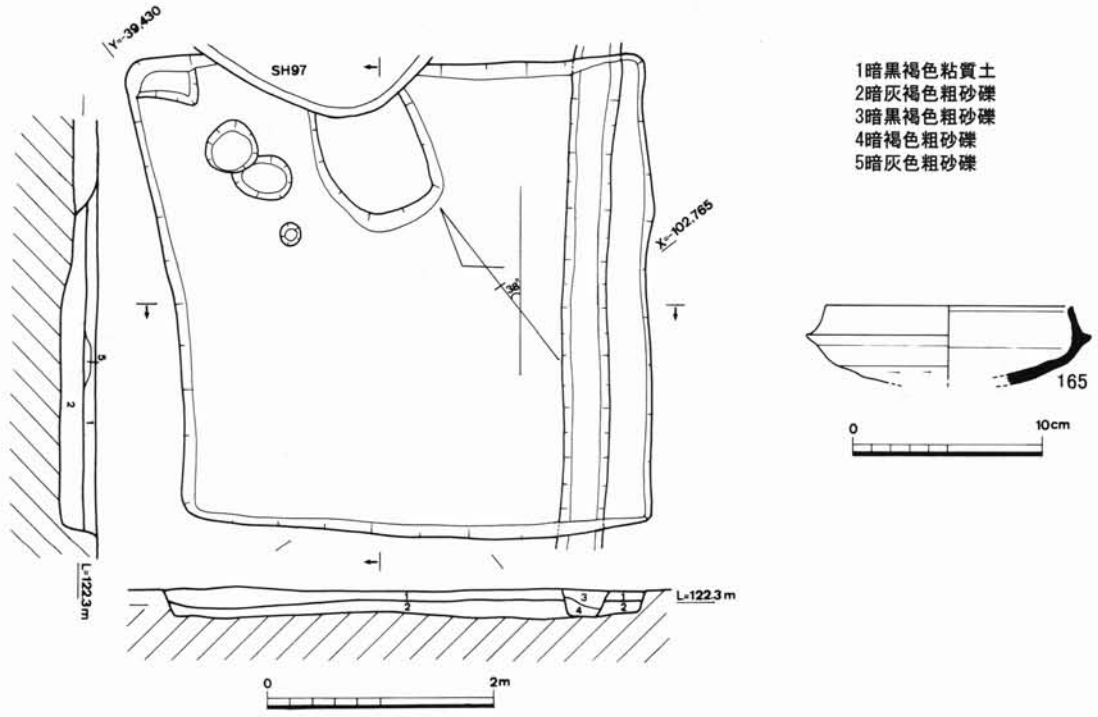
第31図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡69および出土遺物実測図



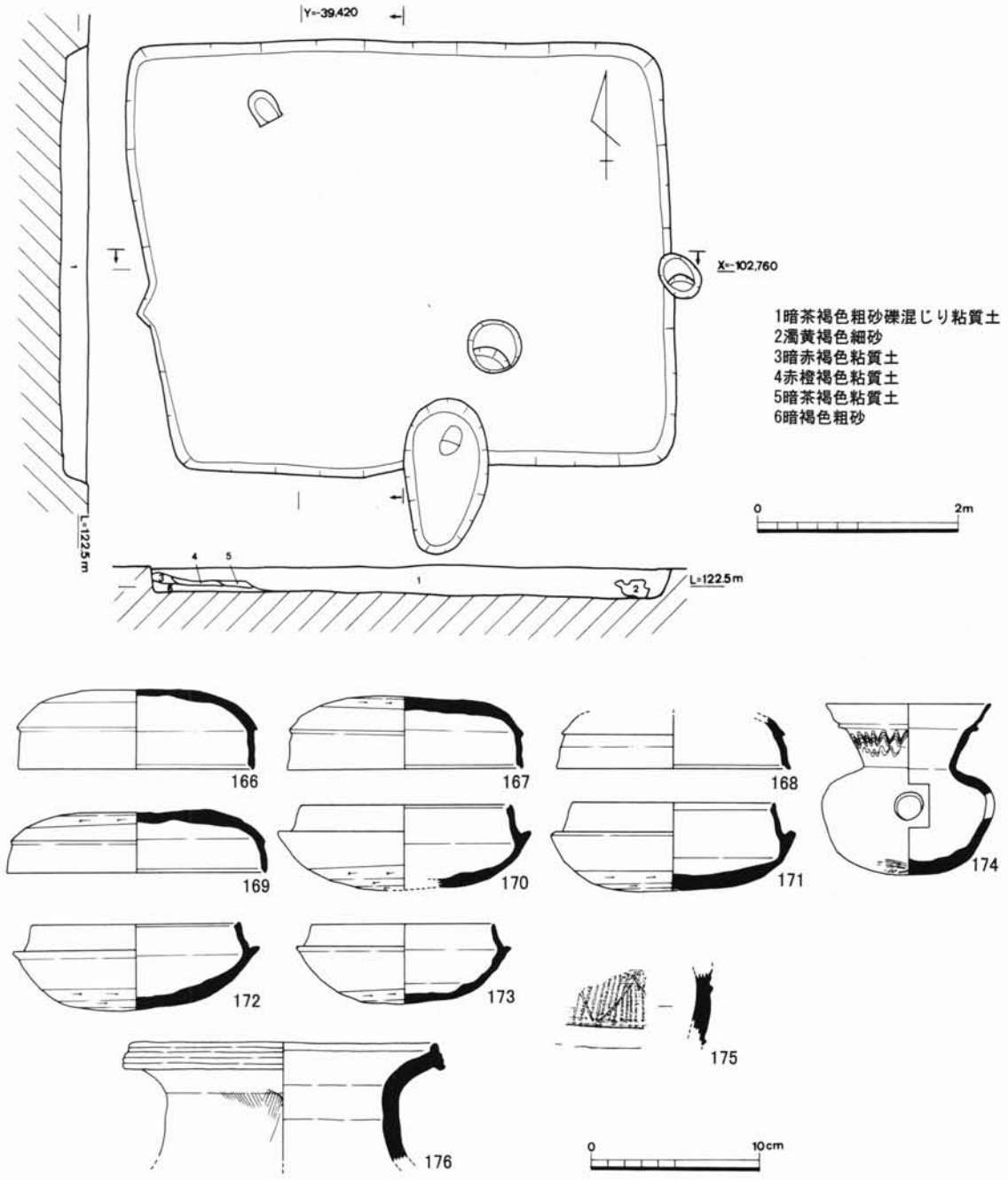
第32図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡93および出土遺物実測図



第33図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡97および出土遺物実測図



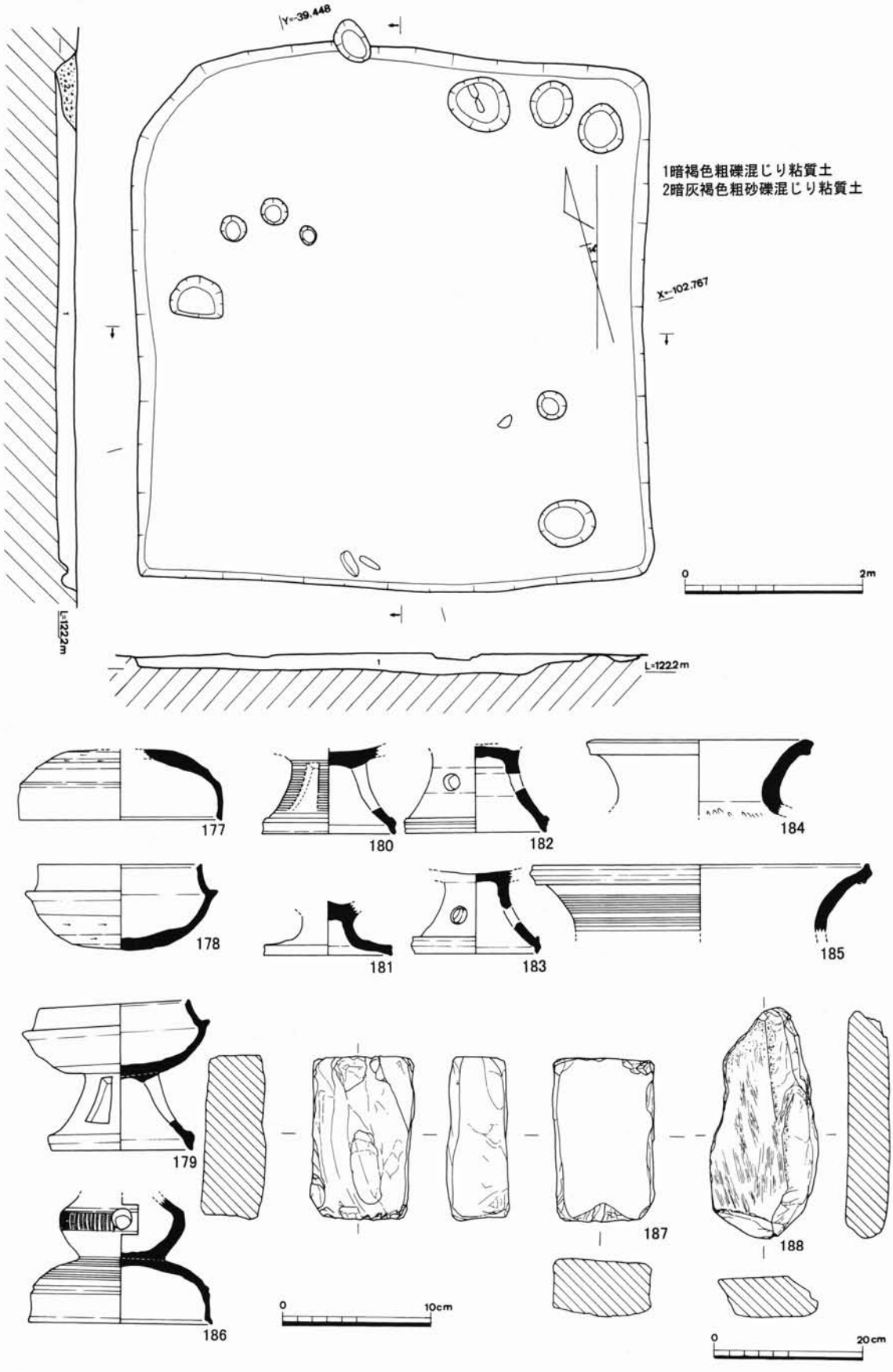
第34図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡98および出土遺物実測図



第35図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡99および出土遺物実測図

竪穴式住居跡56(第30図)　竪穴式住居跡の主軸は、座標北から西に24°振っており、一部トレンチ外に拡がるものの、南北3.6m、東西４m、深さ0.1mである。ほとんど残存していないが、竈を東辺中央部において検出した。出土した須恵器は、陶邑編年ＭＴ15型式に比定できる。なお、須恵器高杯(131)の内面には、青海波文を観察し得る。

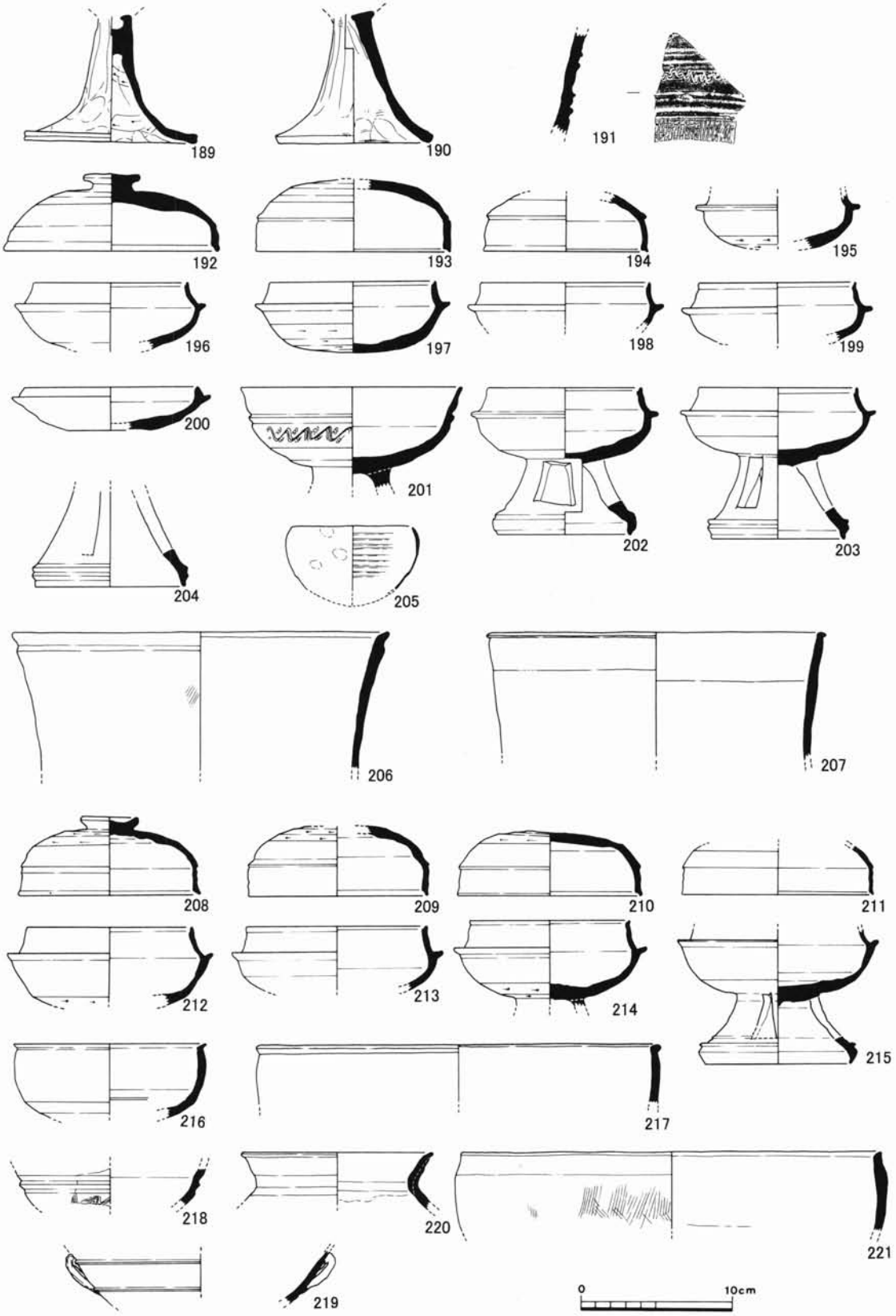
竪穴式住居跡57(第29図、図版第13－(2))　竪穴式住居跡の主軸は、座標北から西に36°振っており、北隅を中心に周壁溝が残存している。一辺4.5mの正方形の平面プランである。出土土器には、土師器高杯(189・190)や須恵器器台(191)などがある。特に、191は、突出度の高い稜間に波状文と篦状工具による線刻文を施しており、大阪府陶邑古窯址群からの搬入品である可能性が



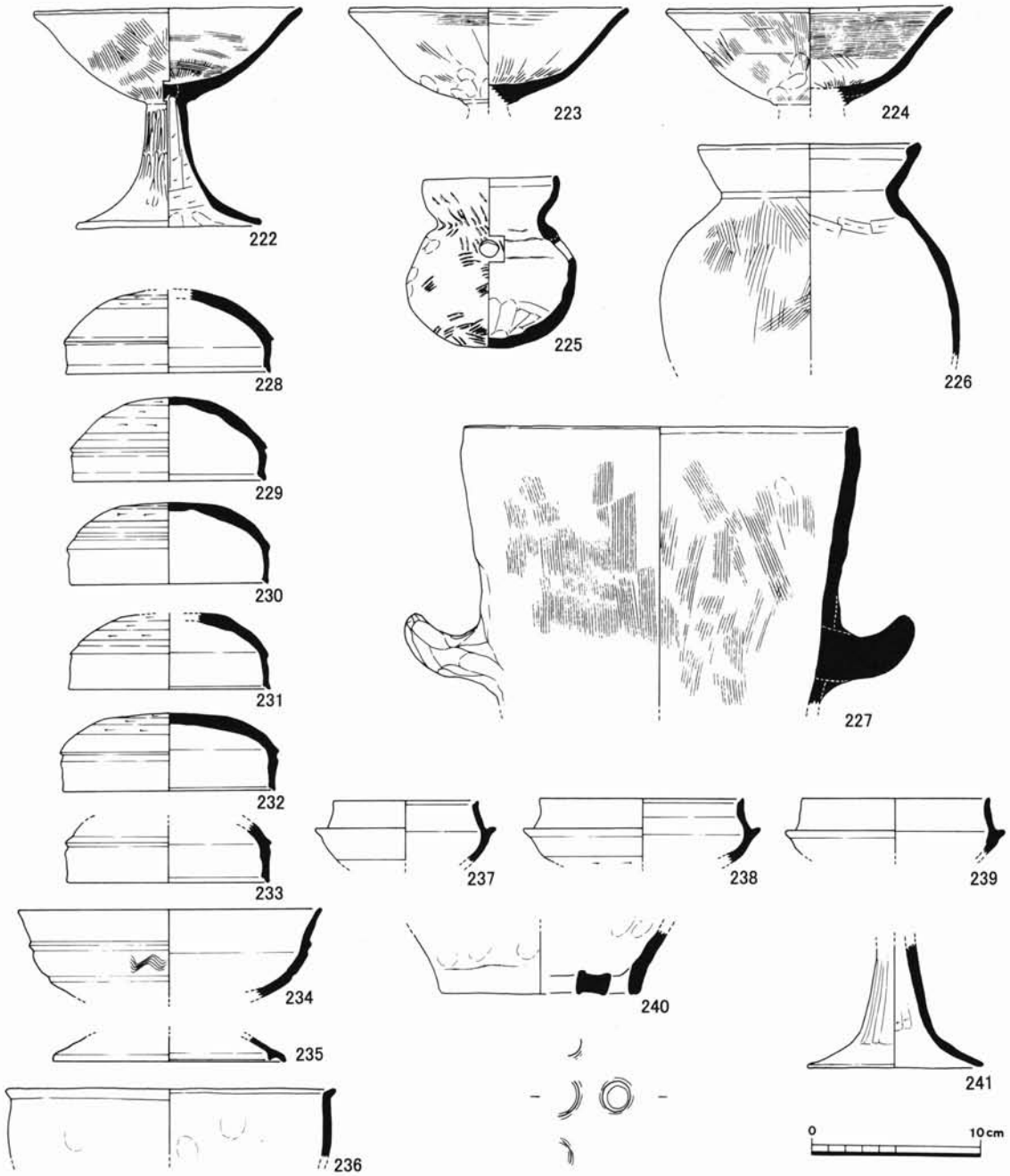
第36図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡101および出土遺物実測図

指摘できる。

竪穴式住居跡63(第29図)　竪穴式住居跡の主軸は、座標北から西に10°振っており、北辺長4.6



第37図　第５次調査第３トレンチ竪穴式住居跡(ＳＨ)57・63・66・68および出土遺物実測図
ＳＨ57：189～191　ＳＨ63：192～207　ＳＨ66：208～217　ＳＨ68：218～221

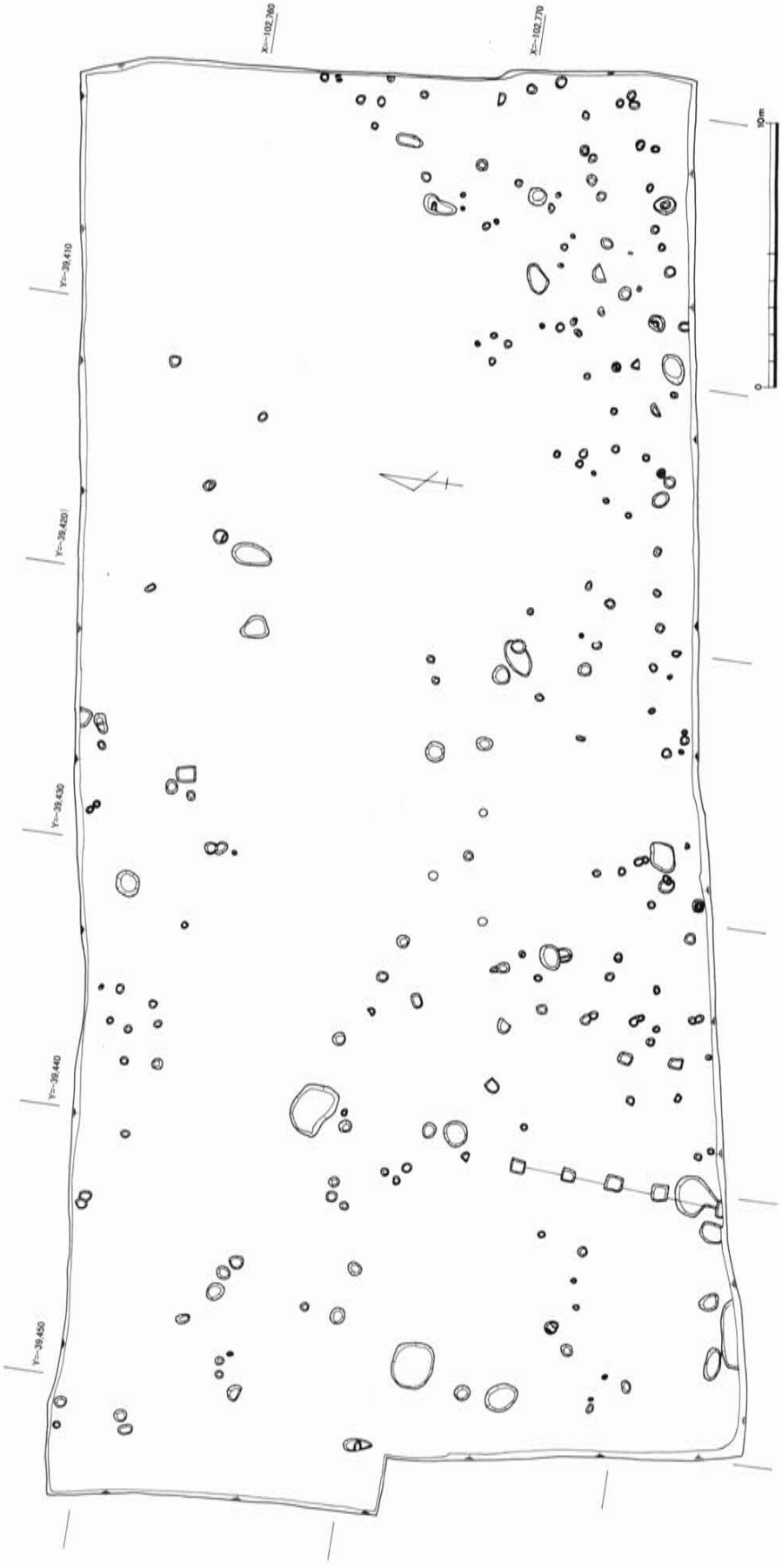


第38図　第５次調査第３トレンチ
竪穴式住居跡（ＳＨ）85・91・94・100・106および出土遺物実測図
ＳＨ85：222～226　ＳＨ91：227　ＳＨ94：228～236　ＳＨ100：237～240　ＳＨ106：241

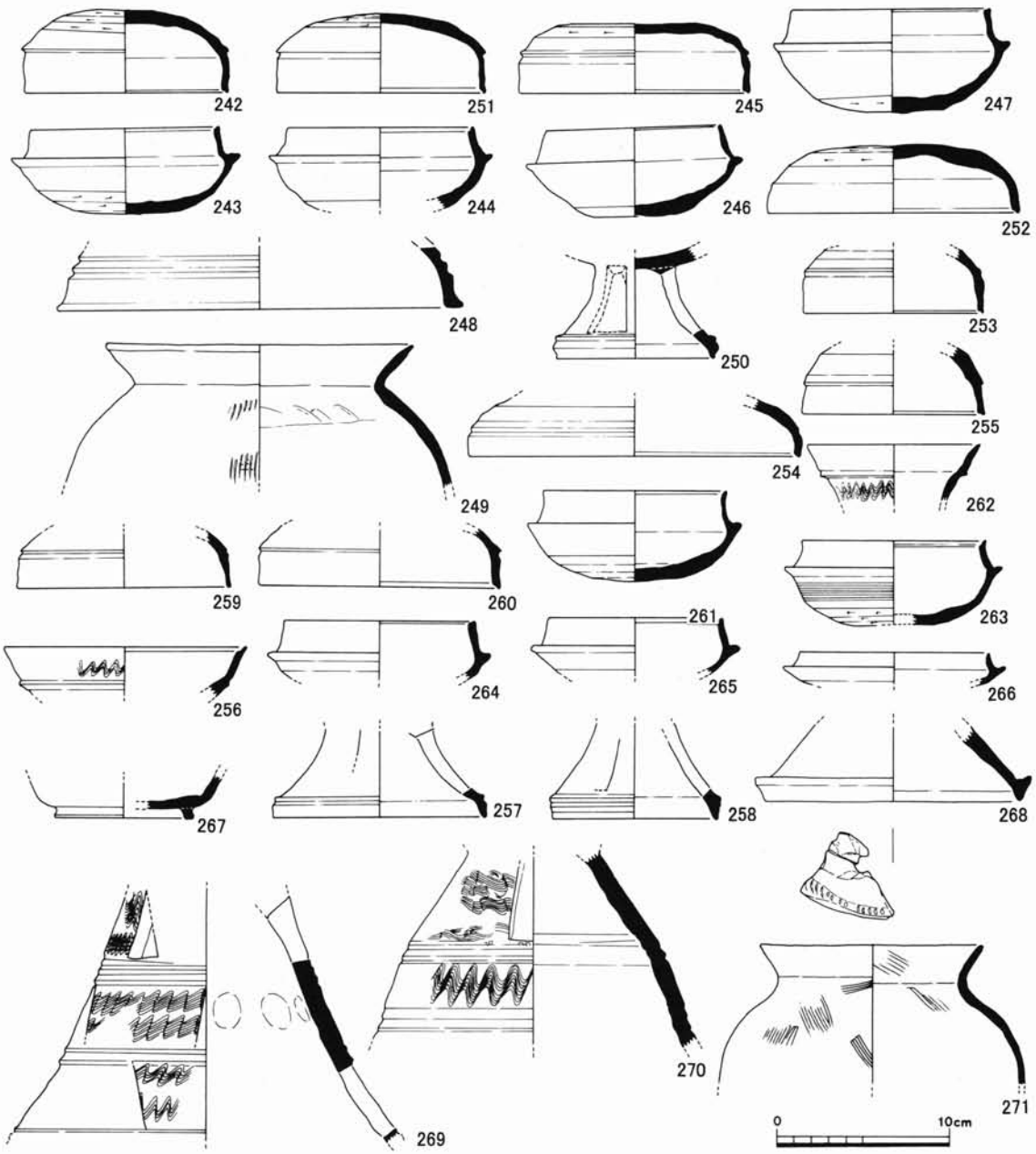
mである。出土土器（192～207）は、200を除き陶邑編年ＭＴ15型式に比定できる。なお、床面において焼土と炭を堆積土とする土坑141を検出しており、紀淡海峡付近からの搬入された製塩土器（205）が出土している（図版第14－（1））。

竪穴式住居跡66（第29図）　竪穴式住居跡の主軸は、座標北とほぼ一致しており、北辺長3.5m、西辺長3.5mである。出土土器（208～217）は、陶邑編年ＭＴ15型式に比定できるが、一部、それより先行する型式の土器もみられる。

竪穴式住居跡67（第29図、図版第14－（2））　竪穴式住居跡の主軸は、座標北から西に21°振って



第39図　第５次調査第３トレンチ検出ピット平面図



第40図　第５次調査第３トレンチ出土遺物実測図

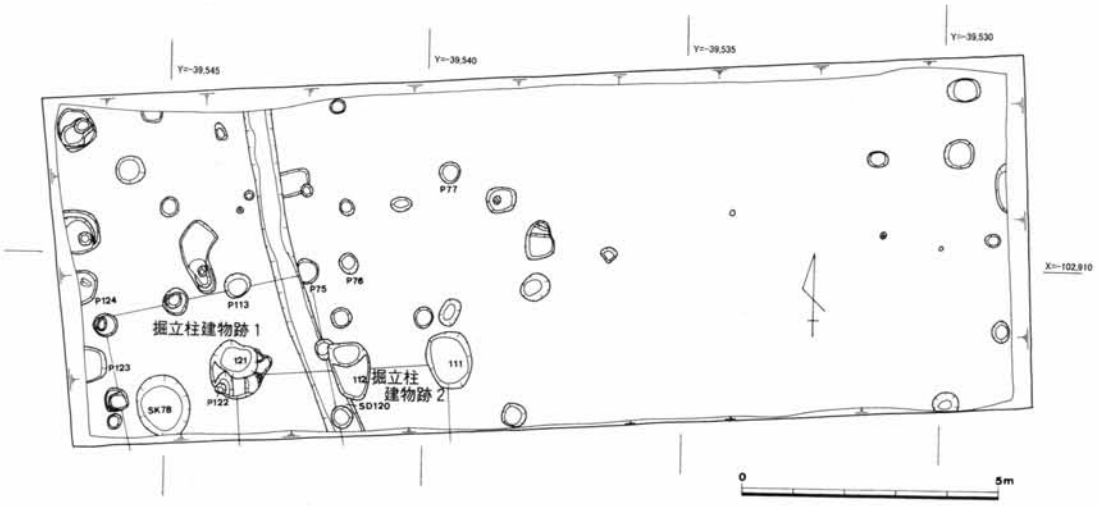
ＳＤ87：242～250　　ＳＫ58：252　　ＳＫ80：254　　ＳＫ95：262・263
ＳＫ108：261　　ＳＫ110：255～258　　包含層：251・253・259・260・264～271

おり、北辺長5.0ｍである。

竪穴式住居跡68（第29図）　住居跡の主軸は、座標北とほぼ一致しており、一辺5.5ｍの正方形プランである。北辺中央に残存状況が著しく不良な竈を検出した。出土した須恵器の高杯(218・219)から、陶邑編年ＴＫ23型式よりは遡る可能性がある。

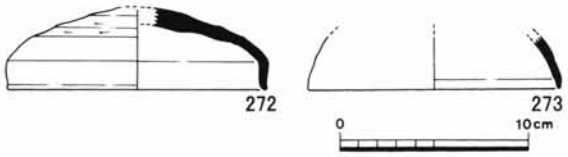
竪穴式住居跡69（第31図、図版第15・16）　住居跡の主軸は、座標北から西へ４°振っており、南北辺５ｍ、東西辺5.5ｍである。北辺中央に残存状況が不良な竈を検出した。出土した須恵器から、陶邑編年ＴＫ47型式に比定できる。

竪穴式住居跡85（第29図）　住居跡の主軸は、座標北から西へ37°振っており、南北辺4.1ｍ、東



第41図　第５次調査第４トレンチ遺構平面図

西辺は3.5～4.4mと歪である。北西辺中央に残存状況が著しく不良な竈を検出した。土師器壺(225)は、体部に円孔を穿っており、瑕を意図して作製されている。陶邑編年ＴＫ47型式以前の須恵器を模した可能性がある。床面において土器埋納ピットを検出した(図版第17－(1))。

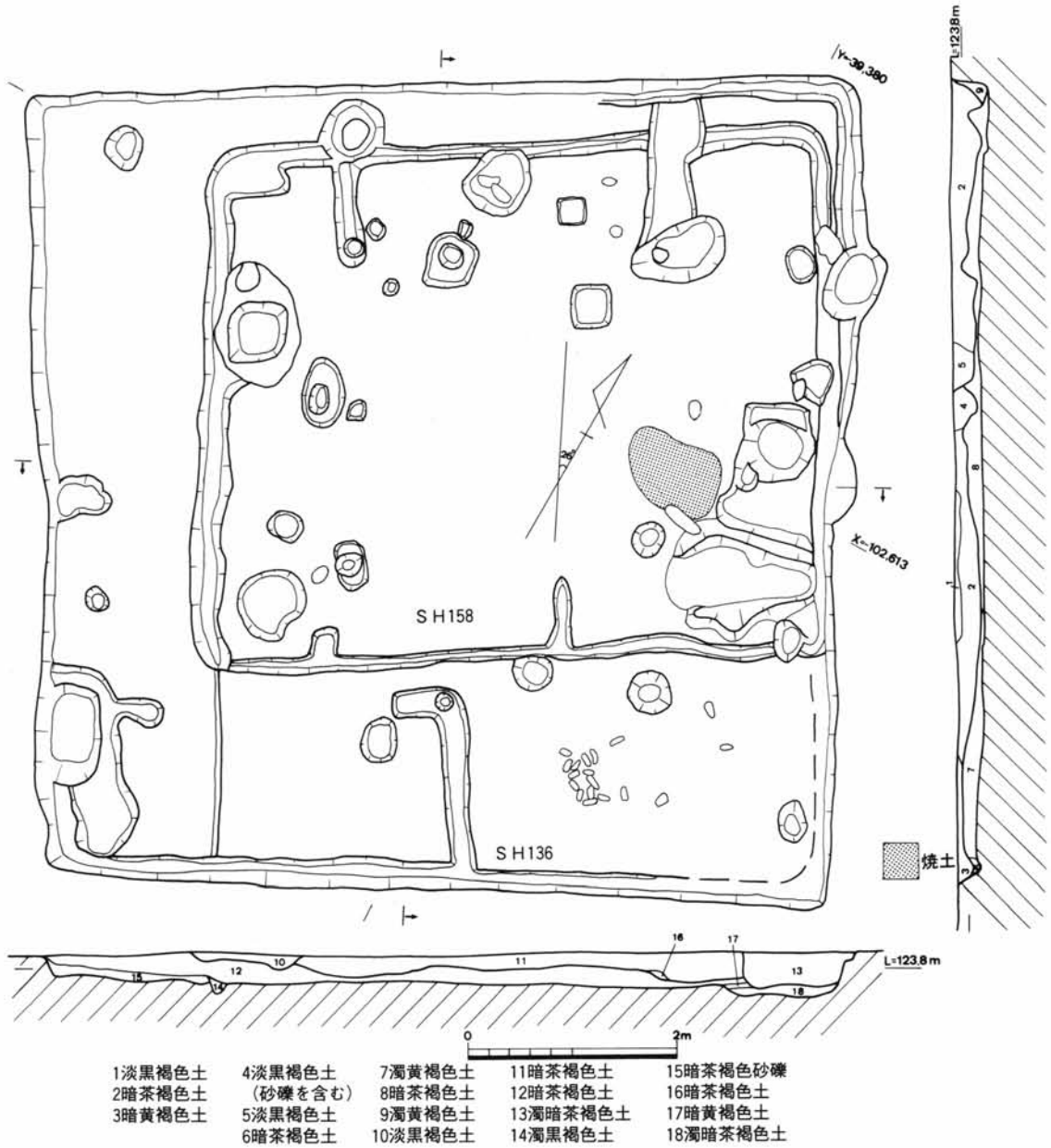


第42図　第５次調査第４トレンチ出土遺物実測図
ＳＫ121：273　　ＳＰ113：272

竪穴式住居跡93(第32図、図版第17－(2))　住居跡の主軸は、座標北から東へ10°振っており、南北辺は5.0～5.3m、東西5.3mである。東辺中央に残存状況が著しく不良な竈を検出した。出土須恵器には、一部に陶邑編年ＴＫ47型式に比定できる個体もあるが、大半は陶邑編年ＭＴ15型式に比定できる。なお、須恵器壺(160)は、蓋および脚が付く壺であり、集落出土事例としては、希有な事例であろう。

竪穴式住居跡94(第29図)　住居跡の主軸は、座標北とほぼ一致しており、一辺4.8mの正方形

第43図　第６次調査第５トレンチ遺構平面図



第44図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡136・158実測図

住居である。一部に飛鳥時代の須恵器(235)を含むが、それ以外は、陶邑編年ＴＫ47～ＭＴ15型式に比定できる。

竪穴式住居跡97(第33図)　住居跡の主軸は、座標北から西へ11°振っており、南辺は６ｍ、東西は６ｍ以上である。北西部に0.1ｍの方形の掘り込みがある。出土須恵器は、陶邑編年ＭＴ15型式に比定できる。

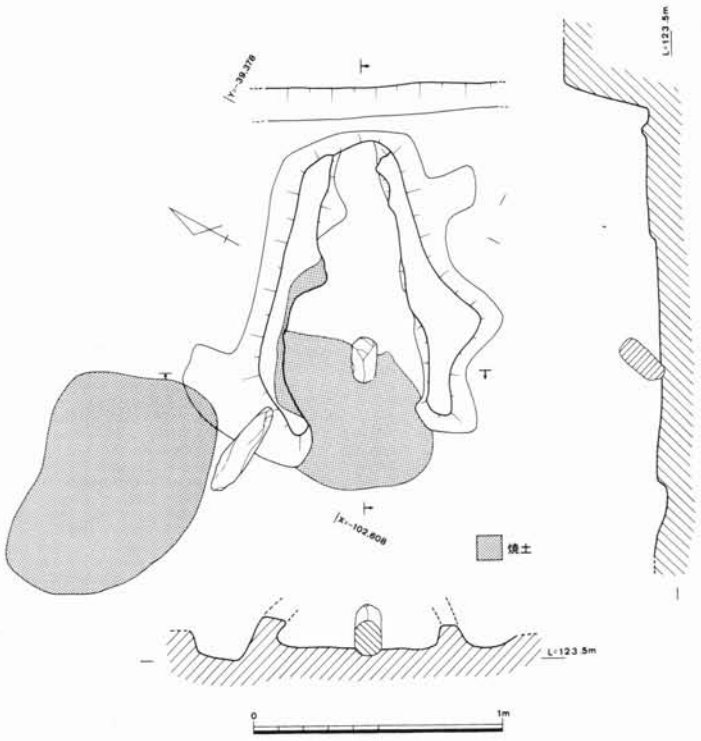
竪穴式住居跡98(第34図)　住居跡の主軸は、座標北から東へ38°振っており、北辺は4.5m、南辺は3.8m、東西辺は４ｍと不整形である。北辺中央部では破壊されているが竈を確認した。出土須恵器は、陶邑編年ＴＫ10型式に比定できる。

竪穴式住居跡99(第35図)　住居跡の主軸は、座標北と一致しており、南北辺は5.3m、東西辺は４ｍである。出土須恵器には、陶邑編年ＭＴ15～ＴＫ10型式に比定できるが、瑞(174)は、同

型式よりやや先行している。

竪穴式住居跡100(第29図、図版第18－(1))　住居跡の主軸は、座標北と一致しており、南北辺は５m、東西辺は5.1mである。北辺中央部で破壊された状態の竈を検出している。土師器の甑底部(240)は、円孔を多数穿つ型式であり、他地域からの搬入土器である。床面のピット103からは須恵器高杯が出土した。

竪穴式住居跡101(第36図、図版第18－(2))　住居跡の主軸は、座標北から東へ14°振っており、南北辺は5.5m、東西辺は６mである。出土須恵器は、陶邑編年ＭＴ15型式に比定できる。なお、須恵器壺の蓋(186)は、埋葬施設からの出土が大半であり、集落出土事例としては稀有な例である。天井部に瘤を冠している。



第45図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡136竈実測図

竪穴式住居跡106(第29図)　主軸は、座標北から西へ28°振っており、南東辺は3.5mである。

竪穴式住居跡114(第29図)　主軸は、座標北から西へ18°振っており、西辺は3.8mである。

竪穴式住居跡115(第29図)　主軸は、座標北から東へ20°振っており、全容は不明である。

溝87(第29図、図版第19－(2))　北東から南西へかけて南流しており、断面が長方形を呈している。陶邑編年ＴＫ47～ＭＴ15型式の須恵器(242～250)が出土している。集落内の排水を意図した溝であろう。

④第４トレンチ(第41図、図版第20・21)

第４トレンチでは、柱穴・溝・土坑を検出した。

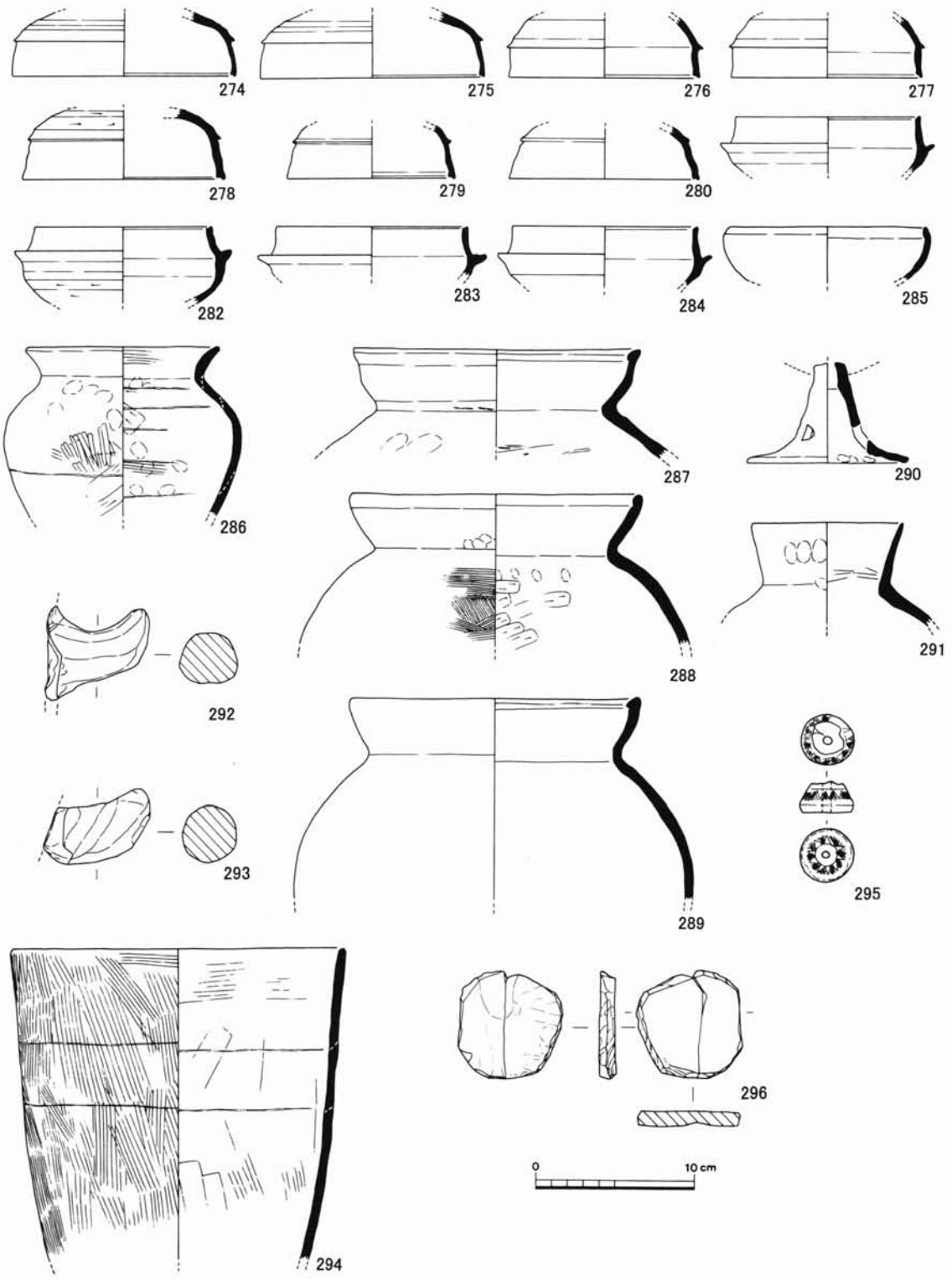
掘立柱建物跡１(第41図)　座標北から西へ23°に主軸をもち、梁間３間(８m)×桁行３間以上(6.3m以上)である。陶邑編年ＴＫ209型式の須恵器(第42図)が出土している。

掘立柱建物跡２(第41図)　座標北から西へ19°に主軸をもち、梁間２間(8.6m)×桁行１間以上(2.7m以上)である。柱穴の最大長は、２mを測る。柱穴内から奈良時代の土器が出土している。

(3)第６次調査の遺構と遺物

①第５トレンチ(第43図、図版第22・23)

第５トレンチの基本的な遺構検出面の標高は、124m前後であり、平坦な面を形成している。検出した遺構には、竪穴式住居跡・土坑・柱穴などである。なお、トレンチ東端では、北東～南西へ南流する旧流路を検出した。拳大の礫が多く堆積しており、流路上では、古墳時代の竪穴式

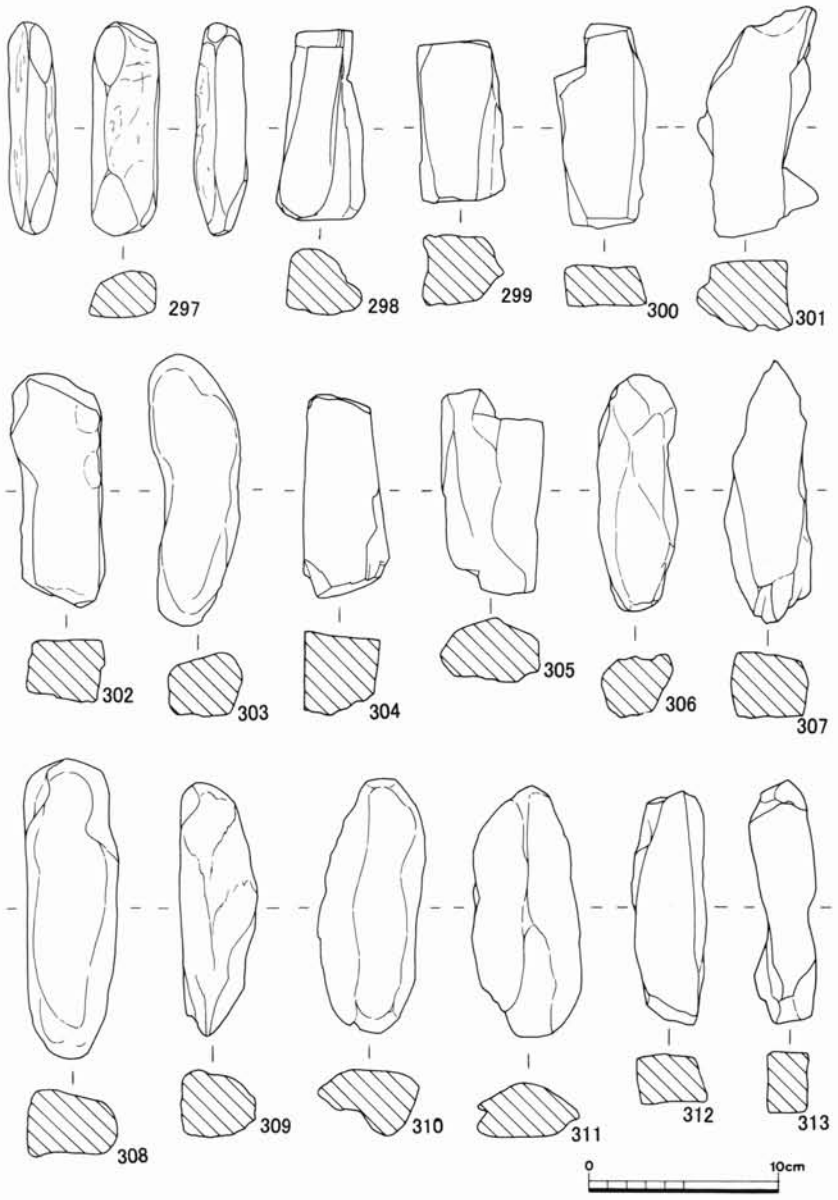


第46図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡136出土遺物実測図(1)

住居跡は検出し得なかった。また、竪穴式住居跡を切り込むように多くの柱穴を検出した。

竪穴式住居跡158(第44図、図版第24－(1)・25・26－(1))　住居跡の主軸は、座標北から西へ26°振れており、南北辺６ｍ、東西辺4.6ｍの長方形プランである。今回の発掘調査で検出した竪穴式住居跡のなかにあって、南北辺と東西辺が５対４の比率を有する竪穴式住居跡はほかにはな

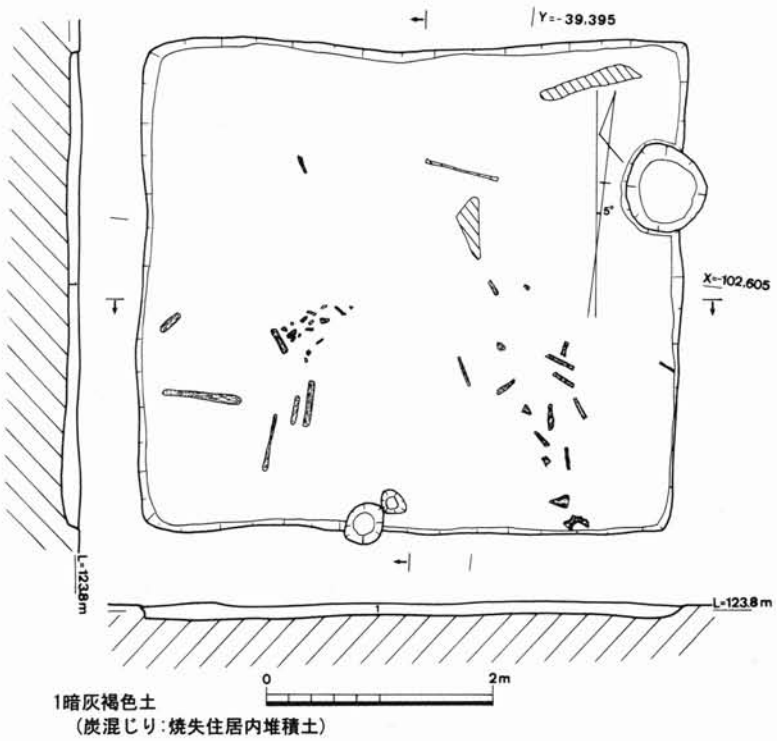
く、明確な意図をもって長方形プランの竪穴式住居跡が造られたと考えられる。床面には、東辺南寄りに竈が設置されているが、他の竪穴式住居跡では、一辺の中央部に設置されることが多いことから、この竈は、竪穴式住居跡158の竈ではなく、建て替えられた竪穴式住居跡136の竈である可能性が高い。竪穴式住居跡136内では、ほかに竈を確認していないことから、竈は設置されなかったと考えられる。



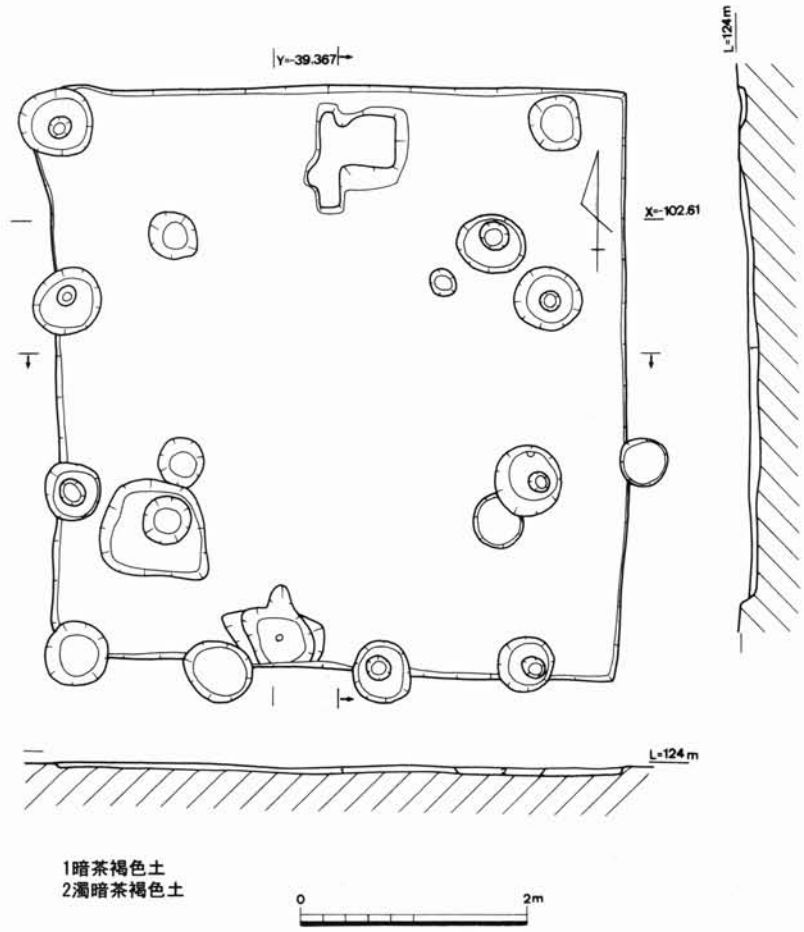
第47図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡136出土遺物実測図(2)

周壁溝は、ていねいに掘り込まれており、北辺の西側と南辺のほぼ中央部には、周壁溝からの長さが0.6ｍの溝が掘り込まれている。間仕切りに関係する溝などが想定されるが、使途については、事例の集成により明らかにしなければならない。また、西辺のほぼ中央部には、0.5ｍほどに全体を掘り下げ、その中央部を0.4ｍ程掘り下げた貯蔵穴が設置されている。

一方、竪穴式住居跡158の周囲には、東辺を共有する状況で竪穴式住居跡136(第44図、図版第26－(2)・27・28－(1))を検出した。住居跡の主軸は、竪穴式住居跡158と同じく座標北から西へ24°振れており、一辺８ｍを測る正方形の平面プランを呈している。床面積が64㎡を測る当該住居跡は、今回の発掘調査で検出した中でも最大規模であり、古墳時代中期末～後期前半における検出例のなかでも最大規模である。また、床面の東辺には、竈が設置されているが、他の竪穴式住居跡のように中央部には設置されておらず、やや南に偏っている。この竈(第45図)は、燃焼部中央に支柱石を設置しており、竈の両壁の基部が残存している。



第48図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡137実測図

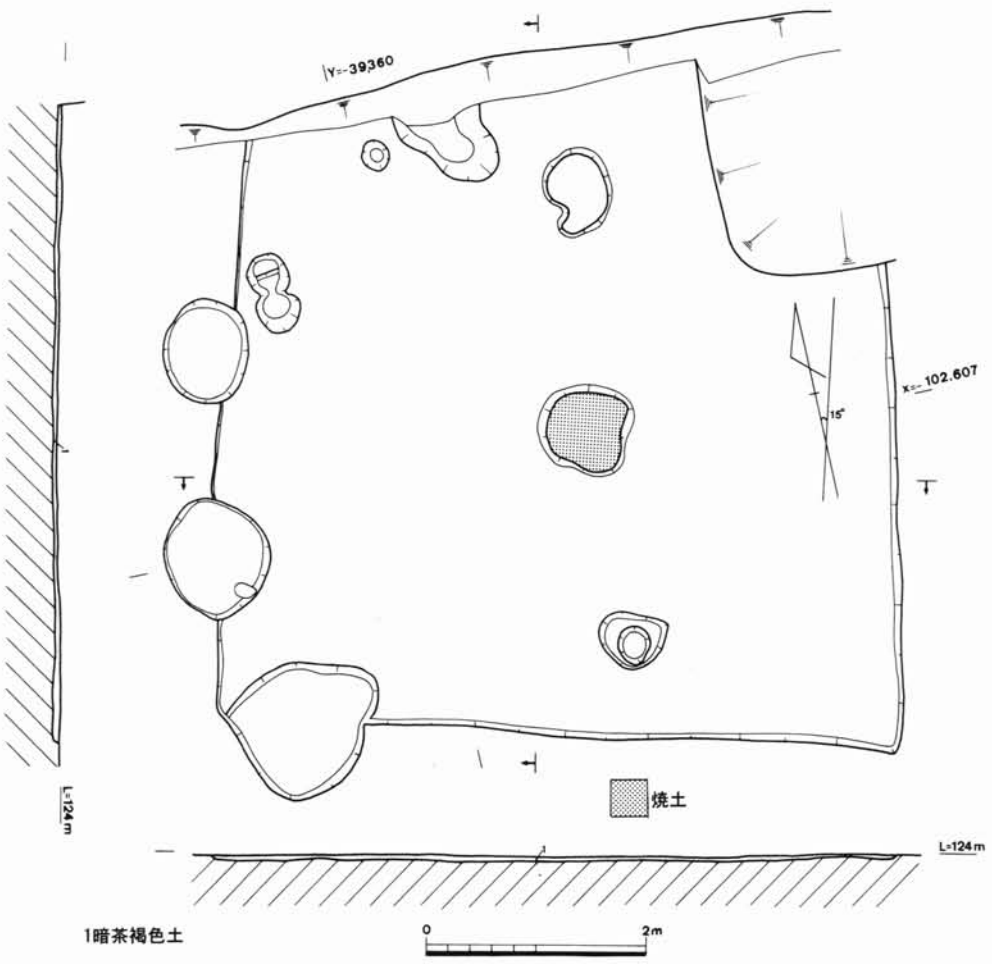


第49図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡138実測図

周壁溝は、部分的に確認し得なかったが、南辺中央には、長さ1.8mの溝が周壁溝からのびている。竪穴式住居跡136でも確認した間仕切りに関連する遺構であろう。また、西辺の南端では、0.5mほど全体を掘り下げ、その中央部を0.6m程掘り下げた貯蔵穴が設置されている。建て替えにあたり、竪穴式住居跡136に存在した施設は、基本的には竪穴式住居跡158にも踏襲されたと考えられる。

竪穴式住居跡136の床面は、基本的には平坦であるが、南半一帯が僅かに高くなっており、その高さは、竪穴式住居跡158の南西隅部からほぼ直線的に南北にのびる段差まで続いている。当該部分では、11cm前後の棒状の礫（第47図）が19点上面を揃えるように並べられている。礫に加工痕はない。礫の配置および礫の使途については不明であるが、事例の集成が急がれる。

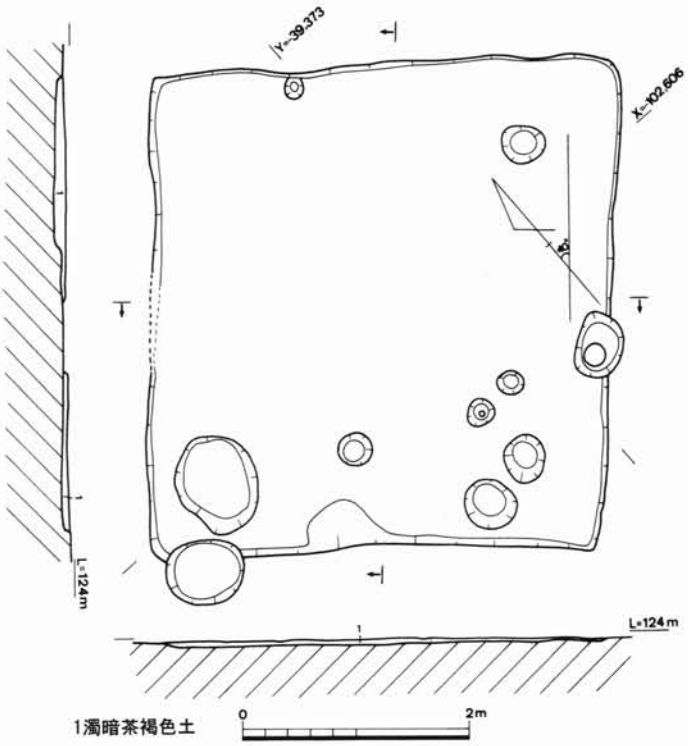
出土遺物には、陶邑編年ＴＫ47型式の須恵器の



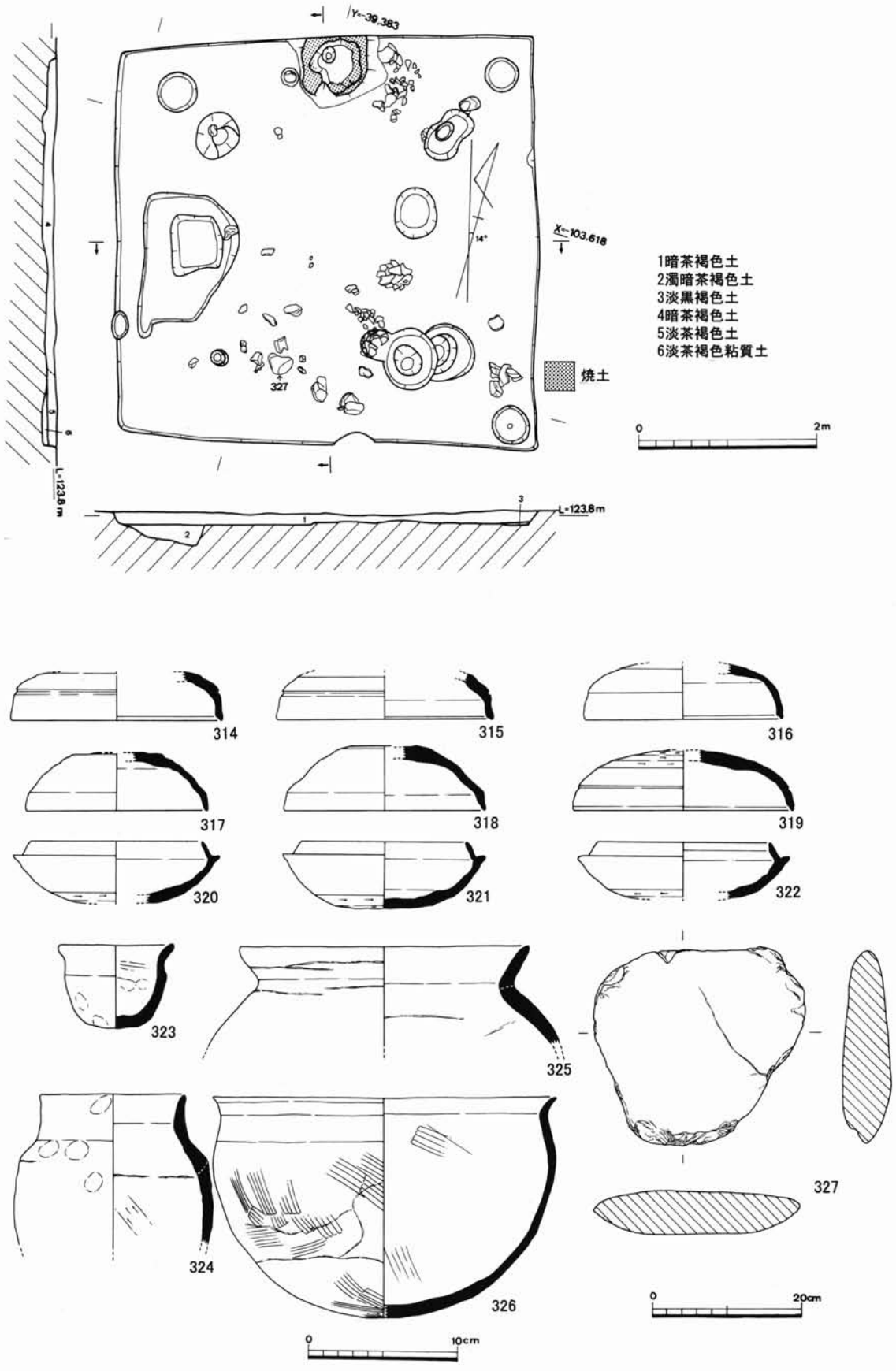
第50図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡149実測図

蓋杯と同ＭＴ15型式の蓋杯が出土している。特に、陶邑編年ＴＫ47型式の須恵器が、竪穴式住居跡158から出土する傾向が強いが、同ＭＴ15型式の土器も出土しており、明確に型式毎に分離して出土する状況ではない。このことは、竪穴式住居跡158の床面が、多少の補修はあっても、建て直し以後も継続して使用されたことを示している。

出土遺物の詳細については、第46図に委ねるが、294は、甑の体部であり、内外面ともに縦方向のハケにより成形している。把手

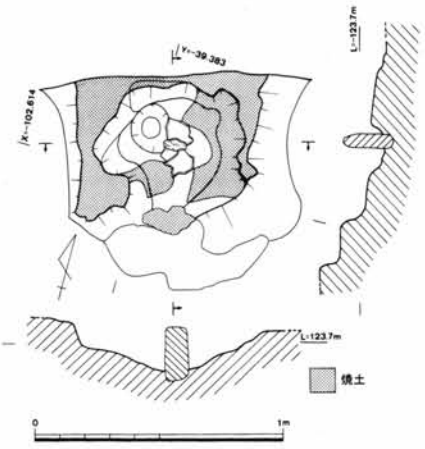


第51図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡153実測図



第52図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡193および出土遺物実測図

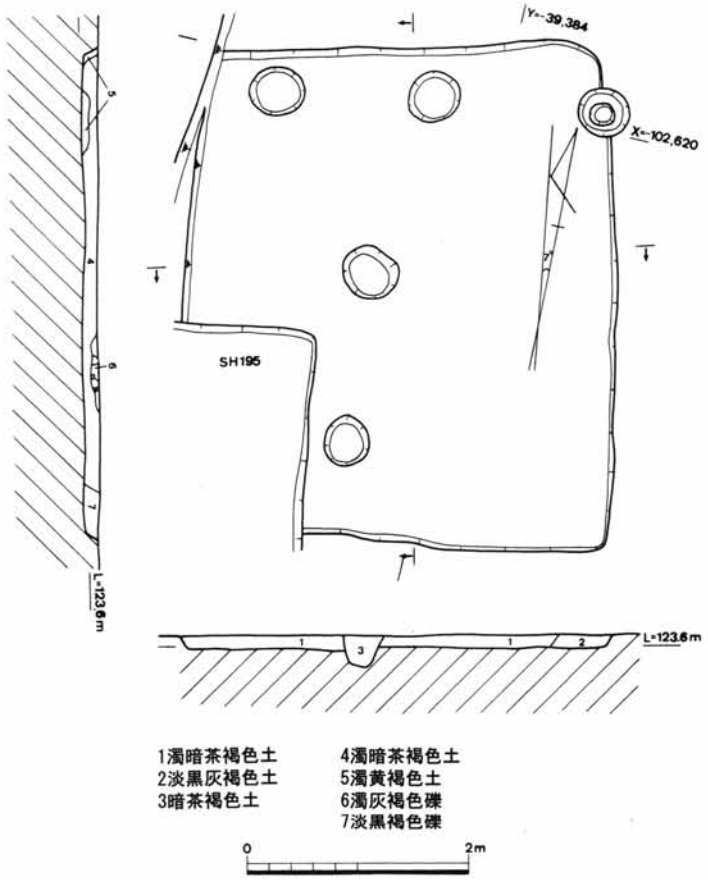
(292・293)と胎土などは共通している。295は、最大直径3.3cmを測る滑石製の紡錘車である。石材自体は良質といえないが、側面と底面に鋸歯文をていねいに線刻している。296は、粘板岩製の石製品である。穿孔部はないが、側面は、鉄器により削り出している。形態的には有孔円板の未製品として認識できるが、石材種が粘板岩であることと、直径が通有にみられる有孔円板よりも大きいことから、積極的に有孔円板として断定できない状況である。ここでは人為的に削り出していることから一応、有孔円板として図示した。第47図は、先に述べたように竪穴式住居跡南東から集中して出土した礫群である。砂岩やチャートなどであるが、加工痕はなく、用途は不明である。しかし、全長が概ね一致していることなどからなんらかの用途が存在したことは首肯できる。



第53図　第６次調査第５トレンチ
竪穴式住居跡198実測図

竪穴式住居跡137(第48図、図版第28－(2))　主軸は、座標北から５°西に振っており、南北辺4.8m、東西辺4.2mを測るやや長方形の平面プランを有している。床面では屋根などを支える支柱穴はなく、礎板などを想定せざるを得ない。また、竈も確認できない。床面には、一部において土師器片が散発的に出土した。また、炭化材や炭が多く出土しており火災による焼失を想定することができる。土器がほとんど出土しない点と、住居の位置がやや離れた地点であることから、失火以外の火災原因を想定する必要がある。

竪穴式住居跡138(第49図)　主軸は座標北とほとんど一致しており、南北辺5.2m、東西辺5.3mを測る正方形の平面プランを有している。床面には屋根などを支える支柱穴が2.7m間隔に穿たれており、また、ていねいに破壊された状況の竈を北辺中央部で検出した。床面では、一部において須恵器や土師器が散発的に出土しているが、型式認定をするには到っていない。したがって、時期を決める根拠を欠くが、座標北で



第54図　第６次調査第５トレンチ
竪穴式住居跡194実測図

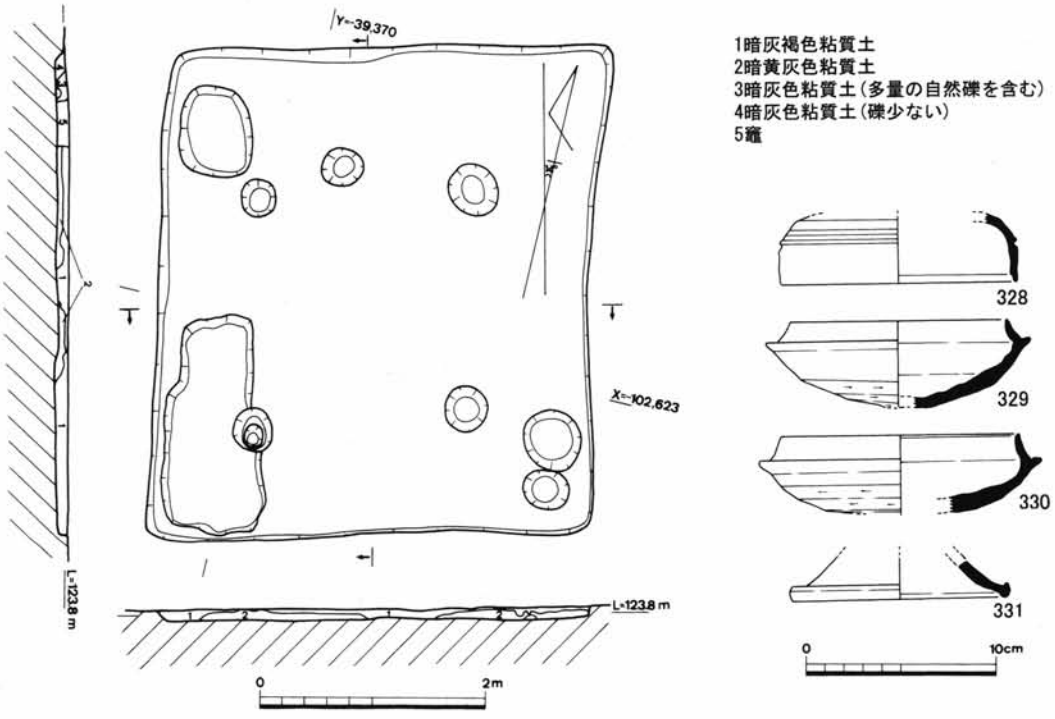
ある点と北辺中央部に竈を有する点を中心に一定の傾向を読み取ることができる。

竪穴式住居跡149(第50図)　主軸は、座標北から15°東に振っており、南北辺６ｍ、東西辺６ｍ以上を測るやや歪な方形の平面プランを有している。床面には屋根などを支える支柱穴はなく、礎板などを想定する必要がある。また、竈も確認できないが、住居跡のほぼ中央において不整形な炉跡を検出した。土器がほとんど出土しておらず、時期を決定する根拠に乏しい。

竪穴式住居跡153(第51図)　主軸は、座標北から40°東に振っており、南北辺4.1m、東西辺4.3ｍを測る方形プランである。床面には支柱穴はなく、礎板などを想定する必要がある。また、竈も確認できない。土器がほとんど出土しておらず、時期を決定する根拠に乏しい。

竪穴式住居跡154(第43図)　主軸は、座標北から４°東に振っており、南北辺6.5m、東西辺６ｍを測る。竪穴式住居跡138によって南東部の多くを削り取られているが、床面には屋根などを支える支柱穴はなく、礎板などを想定する必要がある。また、北辺ないし東辺では竈を確認していない。床面からの土器はほとんど出土しておらず、時期を決定できない。

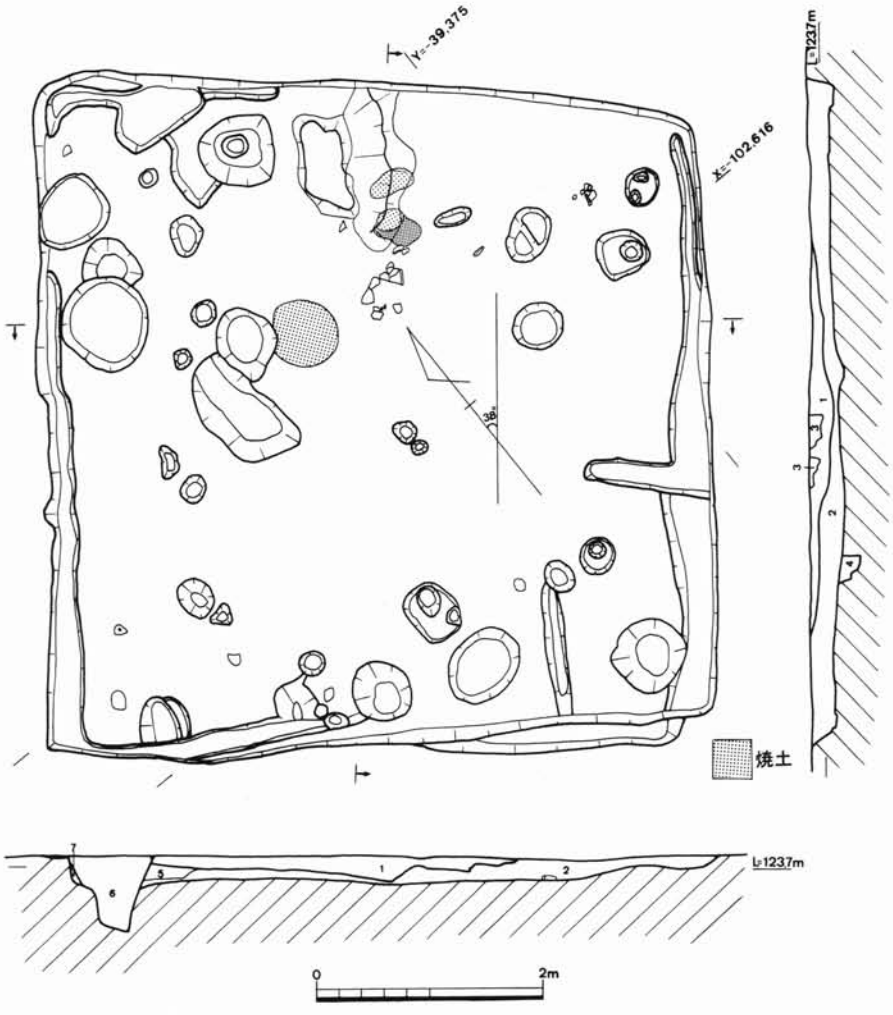
竪穴式住居跡193(第52図、図版第30－(2)・31)　主軸は、座標北から14°西に振っており、南北辺4,5m、東西辺4.3ｍを測るやや歪な正方形の平面プランである。床面には屋根などを支える支柱穴が2.5m毎に穿たれており、住居跡の西中央部には、0.5m四方の貯蔵穴とともに貯蔵穴に蓋ができるように貯蔵穴の周囲を一段低く掘り込んでいる。また、竈(第53図)は、北辺中央部に設置されており、数回の補修を行ったことを示すように、複雑な粘土の補修痕を観察することができる。また、竈の中央部には、支柱石が設置されており、被熱によって変色する。一方、床面には、竈を中心とする部分と南側を中心とする部分に土器の集積がみられた。また、南方には、作業台石(327)が据えられた状態で出土しており、住居跡内における作業空間を想定することが



第55図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡196および出土遺物実測図

できる。

出土遺物には、須恵器、土師器がある。須恵器の蓋は、内傾する口縁部をもつ(314～316)一群と丸く端部を仕上げる(317・318)一群に分けることができる。一方、杯は、口径と形態とも蓋と同じ傾向を有しており、陶邑編年ＴＫ10～ＴＫ43型式に比定できる。326は、竈から出土した鍋である。

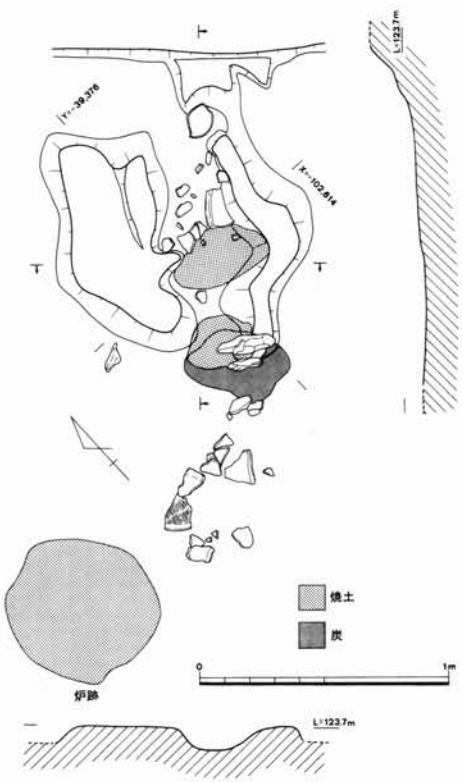


第56図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡197実測図

竪穴式住居跡194(第54図)　主軸は、座標北から7°西に振っており、南北辺3.8m、東西辺4.5ｍを測る。竪穴式住居跡195に南西部を削り取られているが、床面には屋根などを支える支柱穴はなく、礎板などを想定する必要がある。また、北辺ないし東辺では、竈を確認していない。床面からの土器はほとんど出土しておらず、時期を決定する根拠に乏しい。

竪穴式住居跡195(第43・54図)　主軸は、座標北から6°西に振っており、東西辺3.5ｍを測る。床面には屋根などを支える支柱穴はなく、礎板などを想定する必要がある。また、北辺ないし東辺では、竈を確認していない。床面からの土器はほとんど出土しておらず、時期を決定する根拠に乏しい。

竪穴式住居跡196(第55図)　主軸は、座標北から14°西に振っており、東西辺3.8m、南北辺4.2ｍを測る。床面には屋根などを支える支柱穴が1.8m間隔に穿たれている。北辺および東辺では竈を検出することはできなかった。住居跡の南西部には0.8×2.0m、深さ0.1ｍの土坑が掘り込まれている。なお、床面から陶邑編年ＭＴ15型式の須恵器蓋(328)や同ＴＫ43型式の須恵器蓋杯



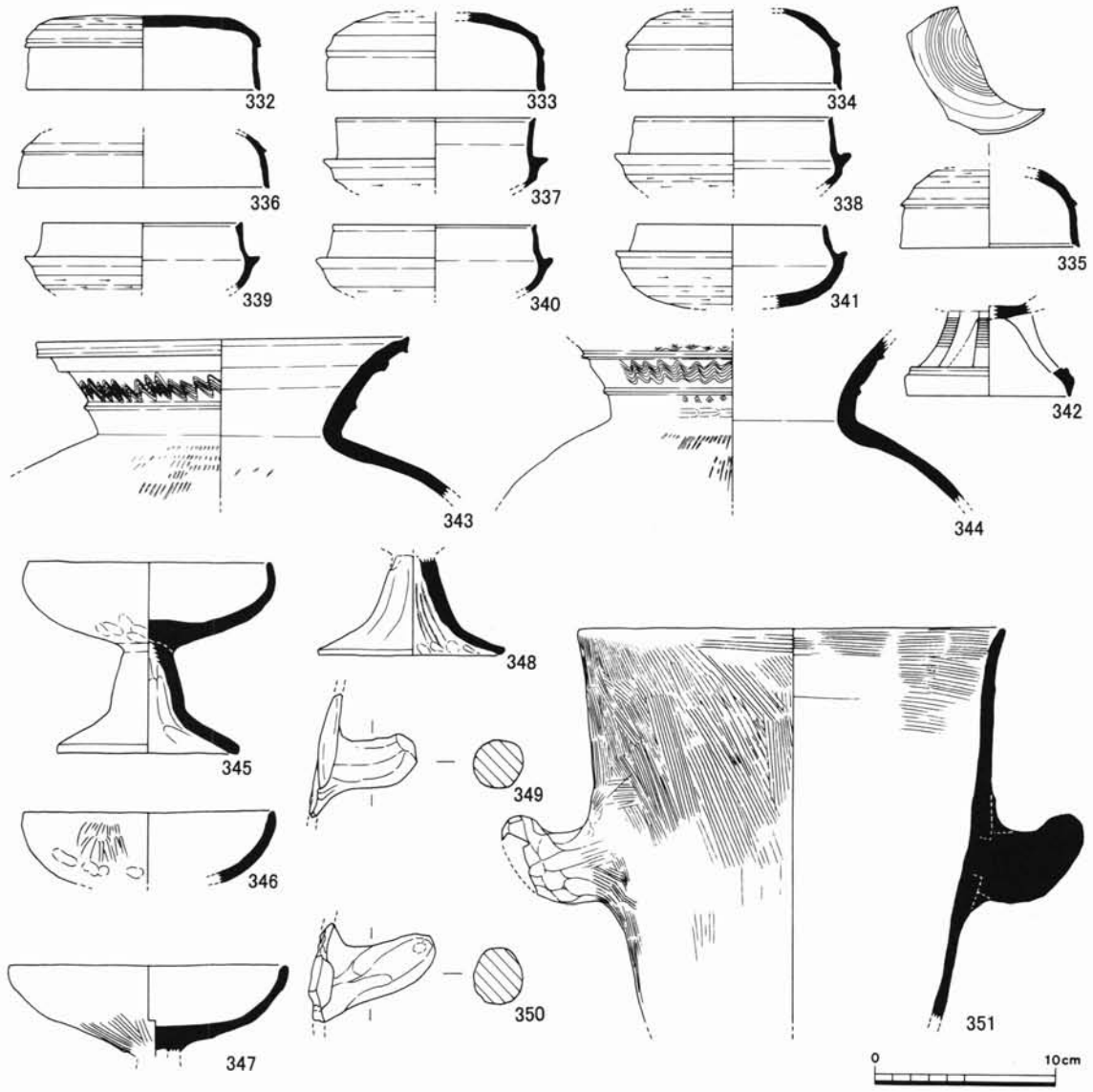
第57図　第６次調査第５トレンチ
竪穴式住居跡197竈実測図

(330)が出土した。

竪穴式住居跡197(第56図)　主軸は、座標北から38°東に振っており、北辺5.5m、南辺5.4m、東辺5.5m、西辺5.3mを測る。平面形態はやや歪な方形プランである。床面には屋根などを支える支柱穴が３m間隔に穿たれており、また、間仕切りを示す小ピットを列状に検出している。一方、竈(第57図)は、竪穴式住居跡を取り壊す際にていねいに削り取っており、ほとんど原形を留めてはいない。しかし、部分的に焼土と支柱石の据え付け穴を検出しており、また、その際、掻き出された土師器の甑(351)を竈の南隣接地点で検出した。なお、竈の１m南部分では、直径0.6mの範囲に焼土が存在しており、竈に隣接しているものの、炉として機能していた可能性が高い。

出土遺物(第58図)には、蓋杯・有蓋高杯・甕などの須恵器と高杯・甑・甕などの土師器が出土している。須恵器蓋杯(332)は、平らな天井部を有し、肩部の稜を境に鋭く屈曲し、直線的に垂下する口縁部をもつ。それらの諸特徴から陶邑編年ＴＫ208型式に比定できる土器であり、群中、最も古い型式である。また、同333は、332ほど肩部の稜を境に鋭く屈曲はしないが、直線的に垂下する口縁部と内傾せず、方形状に処理する口縁端部であることから332よりは後出する同ＴＫ23型式に比定できる土器である。また、334は、丸い天井部と内傾する口縁部から333よりはさらに、型式的に新しい要素を有している。一方、杯は、出土状況がセット関係を維持して出土してはいないが、蓋(332)と同一型式である杯は337であり、蓋(333)と同一型式である杯は338である。一方、須恵器甕は、蓋杯が示す型式的特徴を基準に観察すれば、稜が鈍く、口縁端部のつまみ上げも鈍いことから、蓋杯の新しい型式に帰属する可能性が指摘できる。一方、土師器高杯は、口縁部が湾曲する杯部にソケット状に脚部を装填する高杯(347)と脚上端部を絞り込みながら接合させる高杯(345)が共存している。一方、土師器甑は、外面を縦方向のハケメ、内面を横方向のハケメにより調整している。なお、竪穴式住居跡197から出土している須恵器には、型式幅を認定する必要があるが、確認した竪穴式住居跡の中では最も古い型式に比定でき、里集落の成立時期を勘案するうえで重要な検出例である。

竪穴式住居跡198(第59図、図版第29・30－(1))　主軸は、座標北から西へ21°の角度をもっており、南北辺4.6m、東西辺4mを測る正方形の平面プランである。床面には屋根材などの上部構造体を支えるための支柱穴が２m間隔に穿たれている。住居跡内の堆積土は、基本的には暗褐色粘質土であるが、住居跡の北側に突き出した煙道部分の堆積状況は複雑である。竈(第60図)は、北辺中央部に設置されており、竈中央部には、支柱石を確認することができた。竈の燃焼部の残

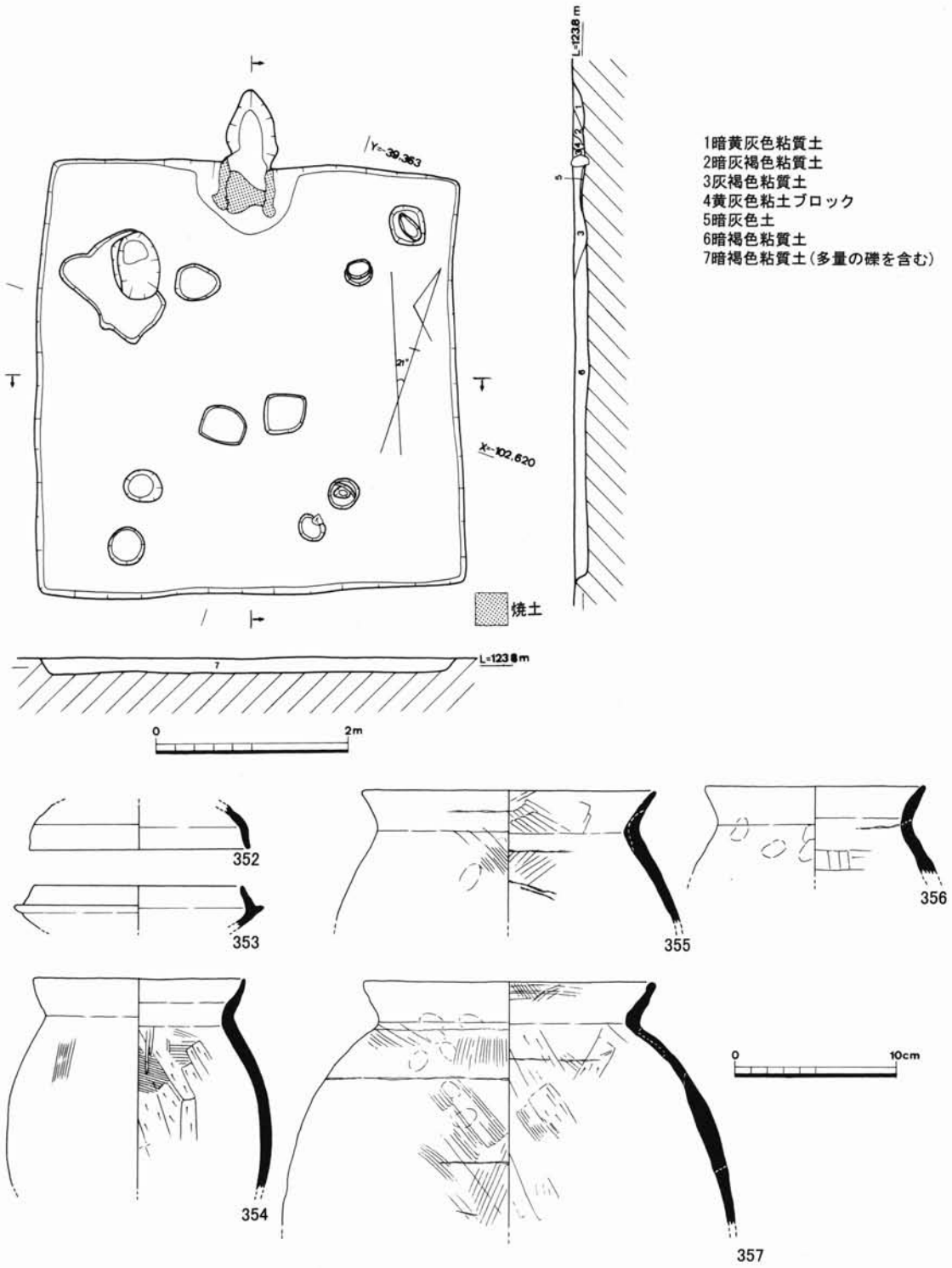


第58図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡197出土遺物実測図

存状況は、不良であり、意図的に解体されたと考えられるが、住居跡の北壁から0.7m北方へ突き出して掘り込まれた煙道は、良好な残存状況を呈している。出土遺物として、陶邑編年ＴＫ43型式から同209型式の須恵器蓋杯(352・353)や土師器の甕が出土している。土師器の甕の多くは、竈付近からの出土である。

竪穴式住居跡221(第61図)　主軸は、座標北とほぼ一致しており、北辺４ｍ、南辺3.5m、東辺3.6m、西辺６ｍを各々測るやや歪な方形プランである。上部構造体を支える支柱穴は、床面の精査によっても確認できなかったため、礎板による柱の固定を想定せざるを得ない状況である。竈(第62図)は、北辺中央部に設置されており、意図的に解体されたと考えられるが、住居跡の北壁から0.2m北方へ突き出して掘り込まれた煙道は、良好な残存状況を呈している。なお、竈中央部には支柱石が残存している。

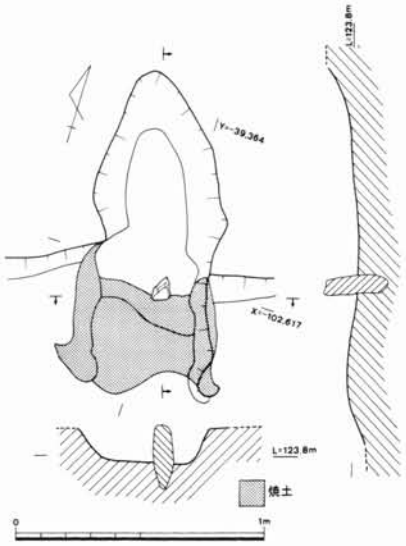
竪穴式住居跡230(第63図)　主軸は、座標北から西へ12°の角度をもっており、北辺3.5m、南辺3.3m、東辺４ｍ、西辺4.2mを各々測るやや歪な長方形プランである。上部構造体を支える支



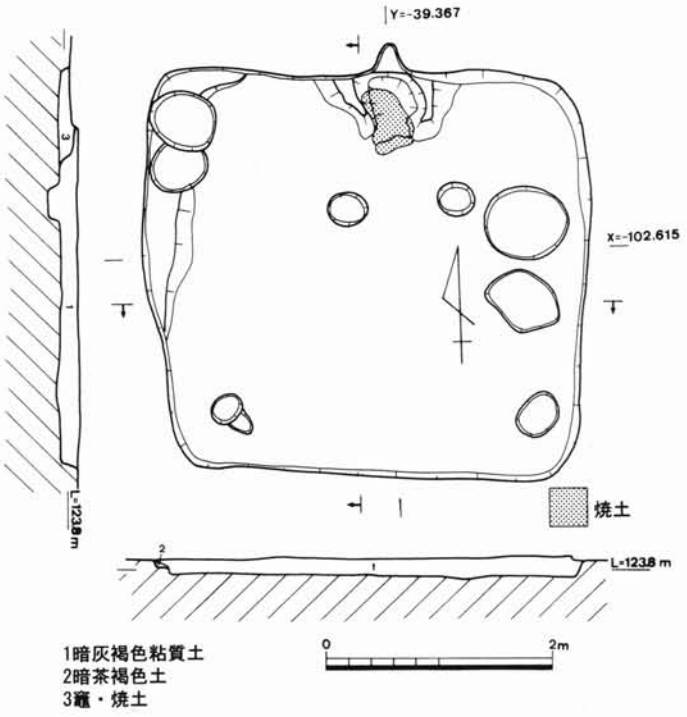
第59図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡198および出土遺物実測図

柱穴は、床面の精査によっても確認できなかったため、礎板による柱の固定を想定できる。竈(第64図)は、北辺中央部に設置されており、意図的に解体されたと考えられるが、竈中央部では支柱石を据え付けたピットを確認した。出土遺物には、葉脈圧痕が底部に残存する弥生中期の土器を１点確認できるが、他は、陶邑編年ＴＫ209型式の須恵器蓋杯(359)などが確認できた。

竪穴式住居跡240(第65図)　主軸は、座標北から西へ12°の角度をもっており、北辺3.5m、南



第60図　第６次調査第５トレンチ
竪穴式住居跡193竈実測図



第61図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡221実測図

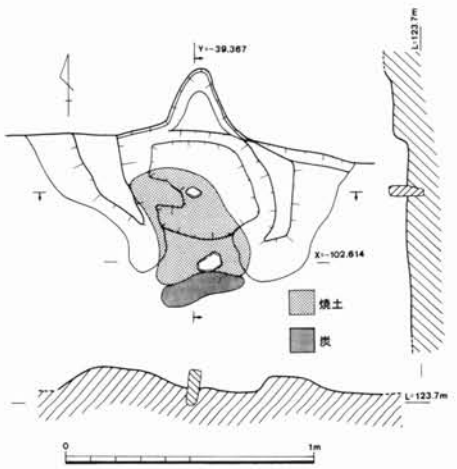
辺3.7m、東辺3.6m、西辺3.4mを各々測るやや歪な長方形プランである。上部構造体を支える支柱穴は、確認できなかったため、礎板による柱の固定を想定できる。竈(第64図)は、北辺のやや西寄りの地点に設置されており、意図的に解体されたと考えられる。出土遺物には、須恵器や土師器の小破片が確認されるが、型式を認定し得ない。竈の位置と主軸の振り角によって時期設定を行えば、先に述べた竪穴式住居跡230と同時期である可能性を指摘しておきたい。

以上が、第５トレンチで検出した竪穴式住居跡の概要である。次に、同トレンチで検出した掘立柱建物跡(第66図)について復原した建物を中心にみておきたい。

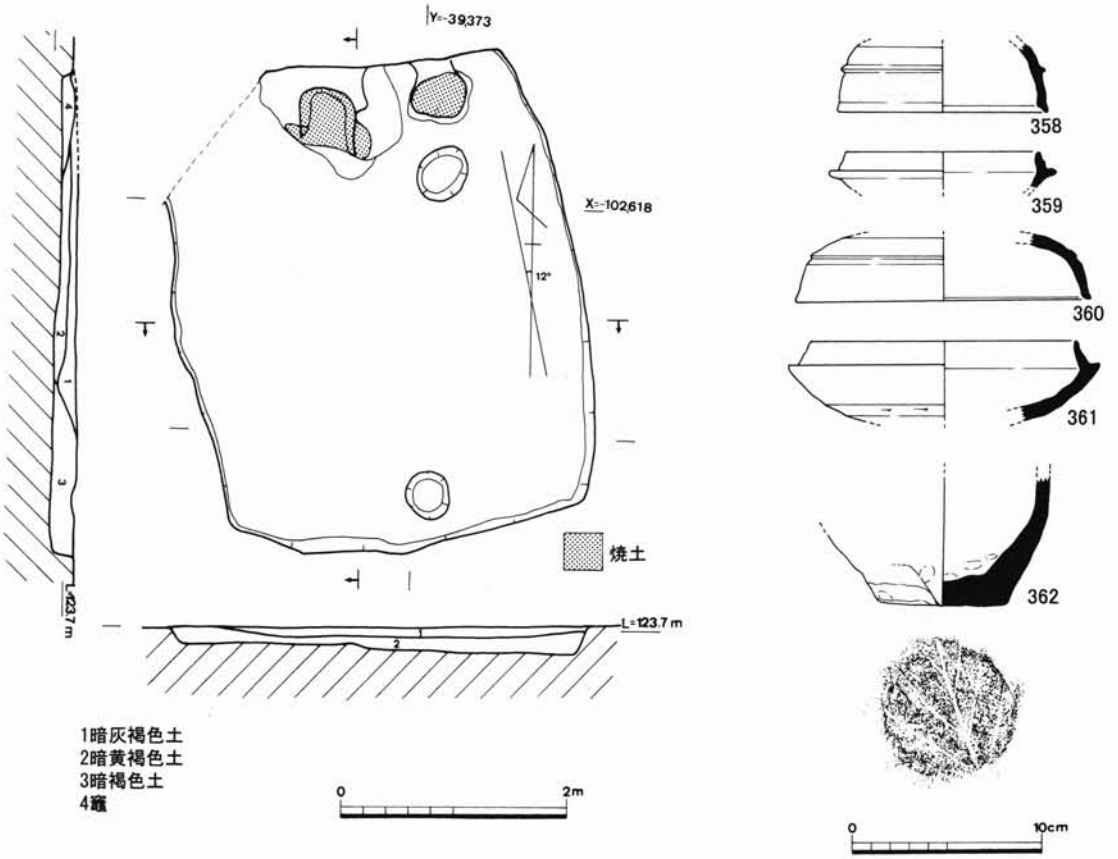
掘立柱建物跡１(第66図)　梁間３間(4.2m)×桁行４間(6.5m)であり、建物の主軸は、座標北とほぼ一致している。建物を構成する柱穴は、直径0.6mの円形を呈しており、柱穴内から須恵器蓋杯などが出土している。

掘立柱建物跡２(第66図)　梁間２間(3.8m)×桁行３間(５m)であり、建物の主軸は、掘立柱建物跡１と同じく座標北とほぼ一致している。建物を構成する柱穴は、直径0.4mの円形を呈しており、柱穴内から須恵器蓋杯などが出土している。

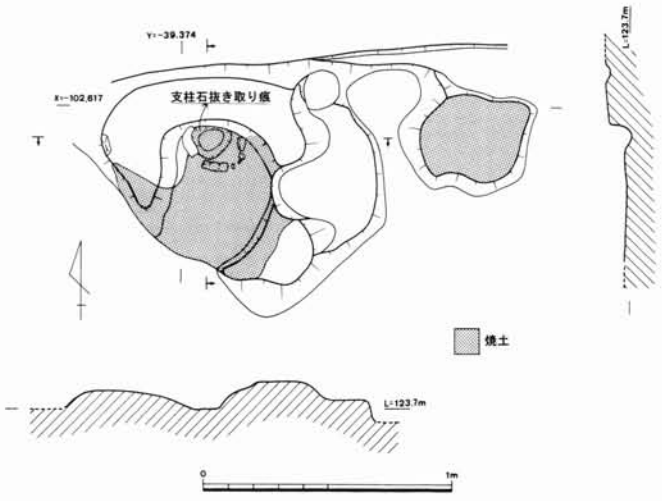
掘立柱建物跡３(第66図)　梁間３間(3.8m)×桁行４間(6m)であり、建物の主軸は、座標北から西へ約14°振っている。建物を構成する柱穴は、直径0.6mの円形を呈



第62図　第６次調査第５トレンチ
竪穴式住居跡221竈実測図



第63図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡230および出土遺物実測図



第64図　第６次調査第５トレンチ竪穴式住居跡230竈実測図

しているが、東辺と南辺の柱穴は、明確にはしえなかった。ここでは掘立柱建物跡として復原したが、検討の余地を残している。

第５トレンチでは、竪穴式住居跡以外からも多くの遺物が出土している。ここでは、遺構から出土した遺物(第67図)を中心に主要遺物についてみておきたい。

土坑139(第43図)　篦状工具により切り込みの入った土師器甑の把手(368)が出土している。胎土は砂粒を含むものの細かく、焼成は堅緻である。また、色調は暗褐色を呈しており、ほかの土師器とは少なからず異なる要素を有している。朝鮮半島の土器の影響を受けて作製された土器として一般的には認識されているが、当該資料自体は、河内平野などの他地域から搬入された土器である。したがって、当該土器をもって朝鮮半島の技術者系渡来人の集落内参入を首肯することはできないが、ほかの竪穴式住居跡から出土している甑などから、他

地域との地域間交流が盛んに行われたことは否定できない。

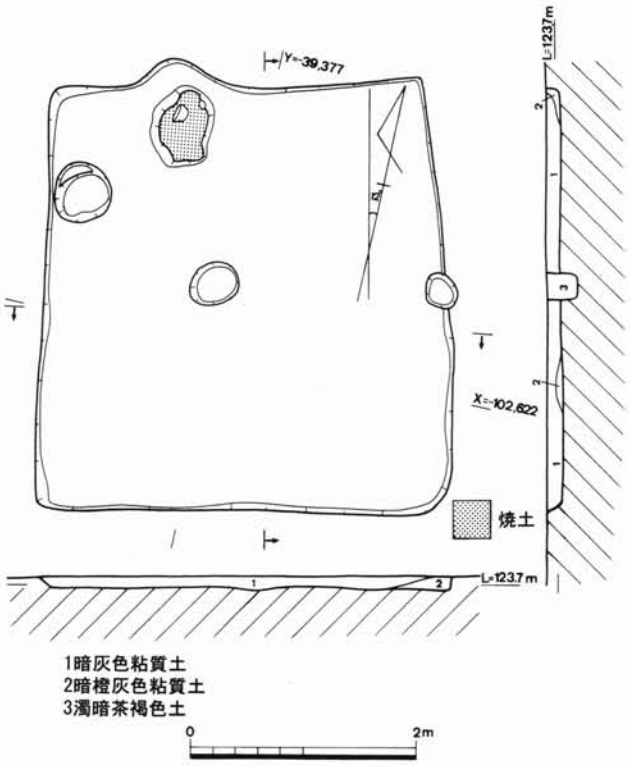
柱穴102　須恵器蓋杯(370)が出土した。陶邑編年ＭＴ15型式に比定できる。

柱穴162　須恵器蓋杯(374)が出土した。陶邑編年ＴＫ209型式に比定できる。

なお、石斧(380)は、土坑223から出土しており、当該地点に弥生時代の遺構が少なからず存在したことを示す。

⑥第６トレンチ(第68図、図版第32－(1))

トレンチ内では、灰褐色土が堆積する溝を一条検出した。溝は、やや湾曲しており、深さは0.1m程度と浅い。近代の耕作に伴う溝であろう。



第65図　第６次調査第５トレンチ
竪穴式住居跡240実測図

⑦第７トレンチ(第68図、図版第32－(2))

狭小なトレンチであり、各遺構の全容は不明であるが、土師器や須恵器の細片を含む竪穴式住居跡と考えられる落ち込みを３か所で確認した。特に、最も西方に位置する竪穴式住居跡は、床面に焼土と炭が堆積している。

⑧第８トレンチ(第68図、図版第33)

トレンチの南東部で梁間３間(7.5m)×桁行４間(10.5m)の掘立柱建物跡を一棟検出した。西側梁間の中央の２柱穴の配置は、東側の梁間の中央の柱穴と正位置において対応する関係にあるが、ほかの柱穴は、直線的に配置されていないばかりか、柱間距離も異なっている。柱穴からは、陶邑編年ＭＴ15型式に比定できる須恵器の杯(第69図)が１点出土している。

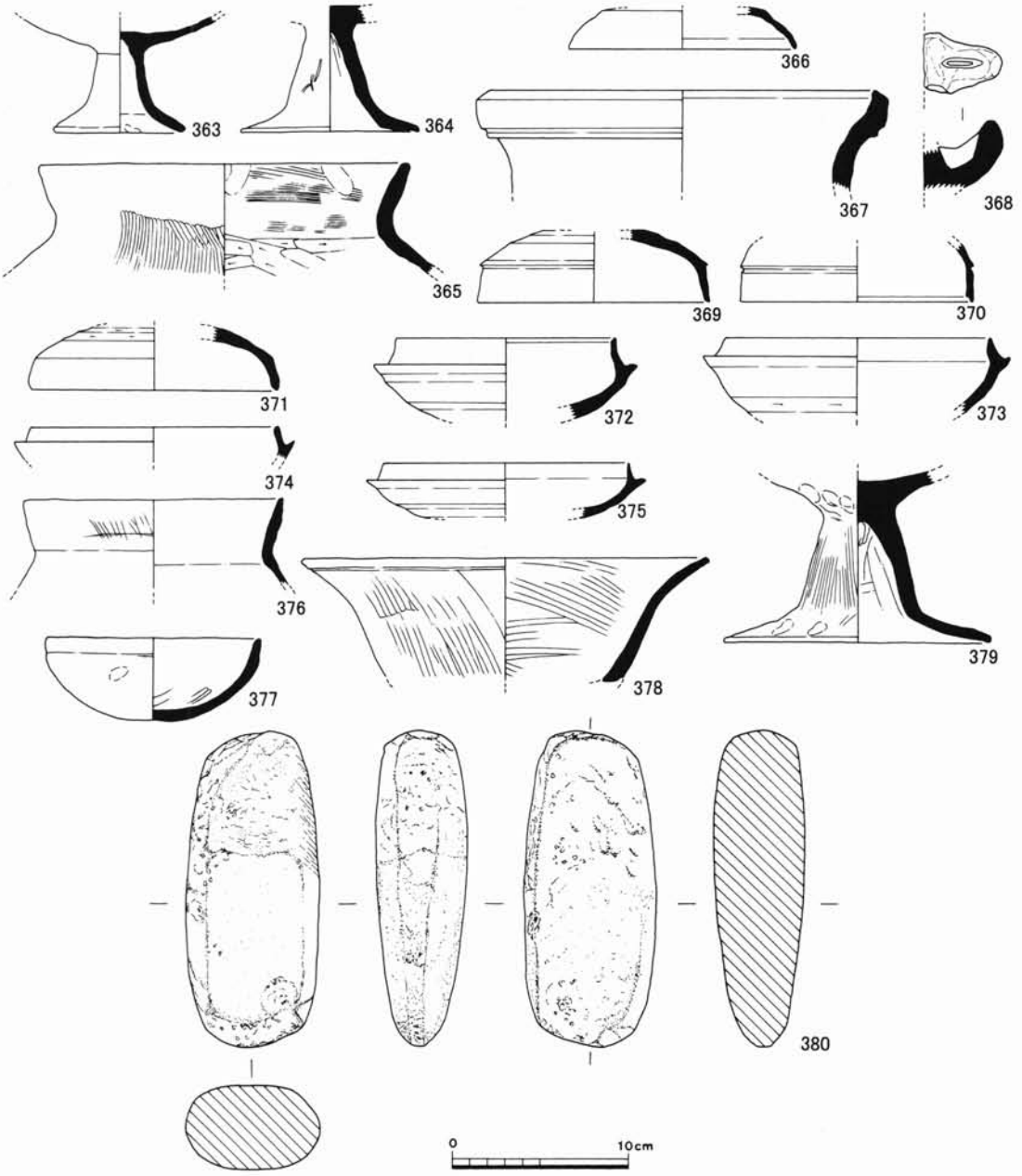
掘立柱建物跡以外には遺構を検出しておらず、居住域の北限の状況を考える場合、建物の構造や時期を把握できたことの意義は決して少なくない。

⑨第９トレンチ(第68図)

近代の土坑を２基確認したが、ほかには遺構や遺物は確認し得なかった。安定した遺構面はなく、西方に位置する旧流路による氾濫作用により、居住空間としては不適切な空間であった可能性が指摘できる。

以上が、第１トレンチ以北に設定したトレンチの概要であるが、第７・８トレンチにおいて、古墳時代の居住施設を確認したことから、密度は低いものの居住空間が拡がっていることを確認できた。集落の北限を設定するうえでの有力な根拠として重要である。

第66図　第６次調査第５トレンチ検出ピット平面図

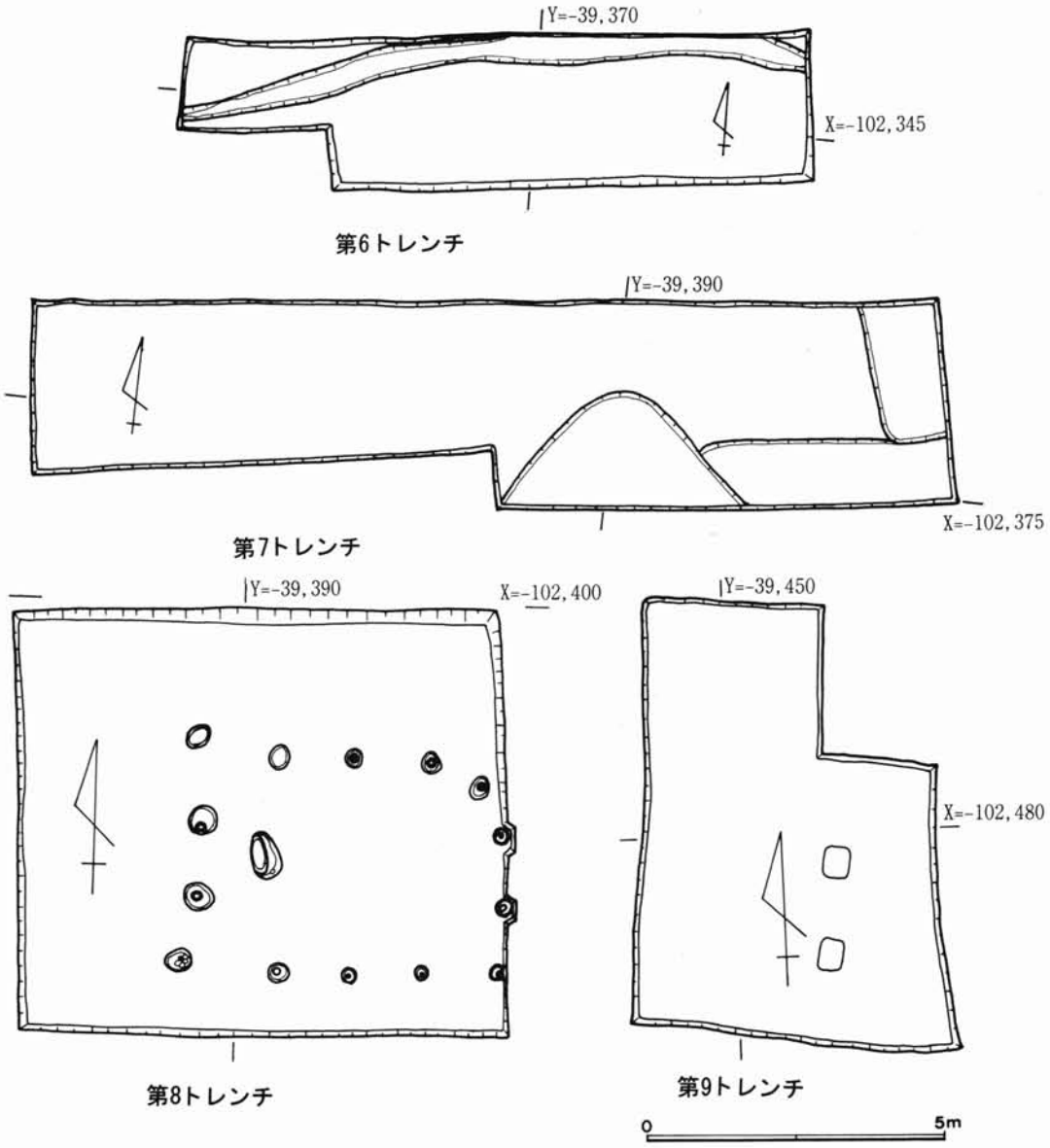


第67図　第６次調査第５トレンチ出土遺物実測図

３．ま と め

以上が里遺跡第３・５・６次の発掘調査の概要である。本来、竪穴式住居跡の時期別の推移や竈の位置が時期によってどのように変化するかなどの動態を簡潔にまとめる必要がある。今後、里集落が南丹波地域において有する歴史性などをまとめる作業を残している。

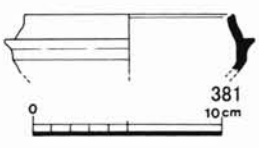
今回の発掘調査で検出した遺構のほとんどが集落に関係する遺構であり、方形周溝墓や低墳丘方形墓などの墳墓関係の遺構は、検出し得なかった。一方、府道以東の第３次調査では弥生時代中期から古墳時代前期の竪穴式住居跡を検出したものの、府道以西では古墳時代中期末から同後期にかけての竪穴式住居跡を検出しており、古墳時代中期末から同後期にかけての時期が、里遺跡の中核的な時期として認識できる。なお、小規模な居住空間が、弥生時代中期から古墳時代前



第68図　第６次調査第６～９トレンチ実測図

期にかけて存在したことが把握できたが、面的に拡がる可能性は亀岡市教育委員会の試掘調査成果をみても少なく、住居跡が点在する程度の集落であったと考えられる。出土土器は、里遺跡が所在する一帯での初出資料を多く含んでおり、同時期の集落の存在を点的に把握できた意義は大きい。

一方、古墳時代中期末から同後期の集落関連遺構には、竪穴式住居跡と掘立柱建物跡があるが、現時点で里集落の成立は、陶邑編年ＴＫ208型式併行期に比定でき、竪穴式住居跡の基数が最大になる時期は、陶邑編年ＴＫ208型式からＴＫ43型式併行期であることが把握できた。



第69図　第６次調査第８トレンチ出土遺物実測図

検出した竪穴式住居跡は、第５次第１トレンチでは９基、同第２トレンチでは12基、同第３トレンチでは18基、第６次第５トレンチでは15基を検出し、総数64基を数える。竪穴式住居跡は、一辺が４～７ｍ

第70図　古墳時代の竪穴式住居跡の分布と周辺地形図

の方形プランが多く、炊飯用竈が、竪穴式住居跡の北辺中央部に付く一群と東辺中央部に付く一群、そして、竈が附設されない一群にわけることができる。その位置関係が、時期によって推移するか否かを見極める必要がある。

第６次第５トレンチで確認した竪穴式住居跡136は、一辺が８ｍを測り、里遺跡で確認した竪

穴式住居跡では最大規模である。住居跡の深さは約0.4ｍを測り、土層堆積状況から人為的に埋め戻されたと考えられる。床面から一定量の須恵器や土師器が出土しており、堆積土上層から滑石製紡錘車が出土している。竪穴式住居跡136の床面では、南北4.8m、東西６ｍを測る長方形の竪穴式住居跡158を東辺を共有する状態で検出しており、住居跡158から住居跡136への建て替えを想定できる。明らかな比率で設計された長方形プランの竪穴式住居跡158は、その外観をみてもほかの竪穴式住居跡とは違いが際だっていたと考えられ、長方形の平面プランに集落内での居住者の特殊性を見出すことができる。また、竪穴式住居跡136は、一辺が８ｍを測り、里遺跡で確認した竪穴式住居跡では最大規模である。特殊性の高い長方形プランから集落内における最大規模を有する竪穴式住居跡への建て替えは、当該住居の居住者たる首長が有する集落内における政治性に何らかの変化があったとみることもでき、両竪穴式住居跡の存在は、特に重要である。

一方、多数の土器とともに朝鮮半島の土器製作技法の影響を受けた韓式系土師器の甑や大阪府陶邑古窯址群産の須恵器、そして、大阪湾南部から搬入された製塩土器が出土した。これらの遺物群の絶対量は僅かではあるが、当時の交易の一端を表しており、里遺跡のみならず、八木町池上遺跡なども含めた南丹波地域における集落の地域間交流を考えるうえでの基礎資料となる。

里遺跡での府営ほ場整備事業に係わる発掘調査は、当該調査をもって終了するが、第１～３トレンチ間の竪穴式住居跡の密集度は高く、平坦な地形が続いていることから、第70図に図示した範囲に、少なくとも陶邑編年ＴＫ208型式から同ＭＴ43型式併行期間に1,000基以上の竪穴式住居跡が存在する可能性が指摘できる。また、竪穴式住居跡から掘立柱建物跡へと居住施設が変化する点についても周辺の遺跡の動態も含め、検討していかなければならない。

（小池　寛）

発掘調査および整理作業参加者（順不同・敬称略）　石田栄・蔭山喜市・川勝清美・国府シゲノ・中本隆夫・山下秋雄・山下春子・青木政幸・山本茜・金原寿江・天池佐栄子・宅間のり子・森口亮・安田裕貴子・古賀友佳子・奥浩和・村上計太・井上亮・田村和成・麻田智也・石川宗男・寺尾貴美子・荻野冨紗子・藤井矢壽子・柿谷悦子・松元順代・清水友佳子・大内ミユキ・人見千恵子・人見つたの・原加代子・人見秋野・人見末・宮西佐代子・田中千枝子・小森己次・田中壮・小野武成・大内静子・佐々木正信・人見美佐子・加茂美子・加茂美千代・吉川栄子・米田吉宗・辻井千恵子・村上欣也・村上裕介・中川英樹・西富治夫・村上健二・桝田聖美・三崎露子・平井耕平・森川敦子・高田眞由美・田中美恵子・中川香世子・小寺明美・木村まさ江・平井チエ子・平井房枝・平井良子・人見ふさ江・加茂寛司・岡崎ヨシコ・宮西東洋雄・大内玉代・村上千鶴・国府明美・佐々木露路　**協力者**　山内彩子・大月直子

2．池上（いけがみ）遺跡第13・18次発掘調査概要

はじめに

平成14年度の池上遺跡第13次発掘調査は、緑資源公団西部支社の依頼によって、南丹地域農用地総合整備事業に先立って実施された。

平成15年度の池上遺跡第18次調査は、独立行政法人緑資源機構による農用地総合整備事業に先立って実施した。遺跡の所在地は、京都府船井郡八木町池上である。

池上遺跡は平成８年度の八木町教育委員会による分布調査によって新たに発見された遺跡である。池上遺跡ではこれまで計18回(付表１)の発掘調査が行われた。その結果、旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが明らかになった。

現地の発掘調査は、当調査研究センターが実施し、第13次調査は平成14年７月12日～11月28日、第18次調査は平成15年９月17日～10月30日まで実施した。調査面積は第13次調査約1,300㎡、第18次調査が約200㎡である。

現地の発掘調査は、第13次調査は当センター調査２課調査第２係係長伊野近富、同主任調査員小池寛、同調査員中川和哉が、第18次調査は当センター調査第２課調査第２係係長伊野、同主任調査員中川が担当した。

なお、調査に係わる経費は、全額、緑資源公団・独立行政法人緑資源機構が負担した。

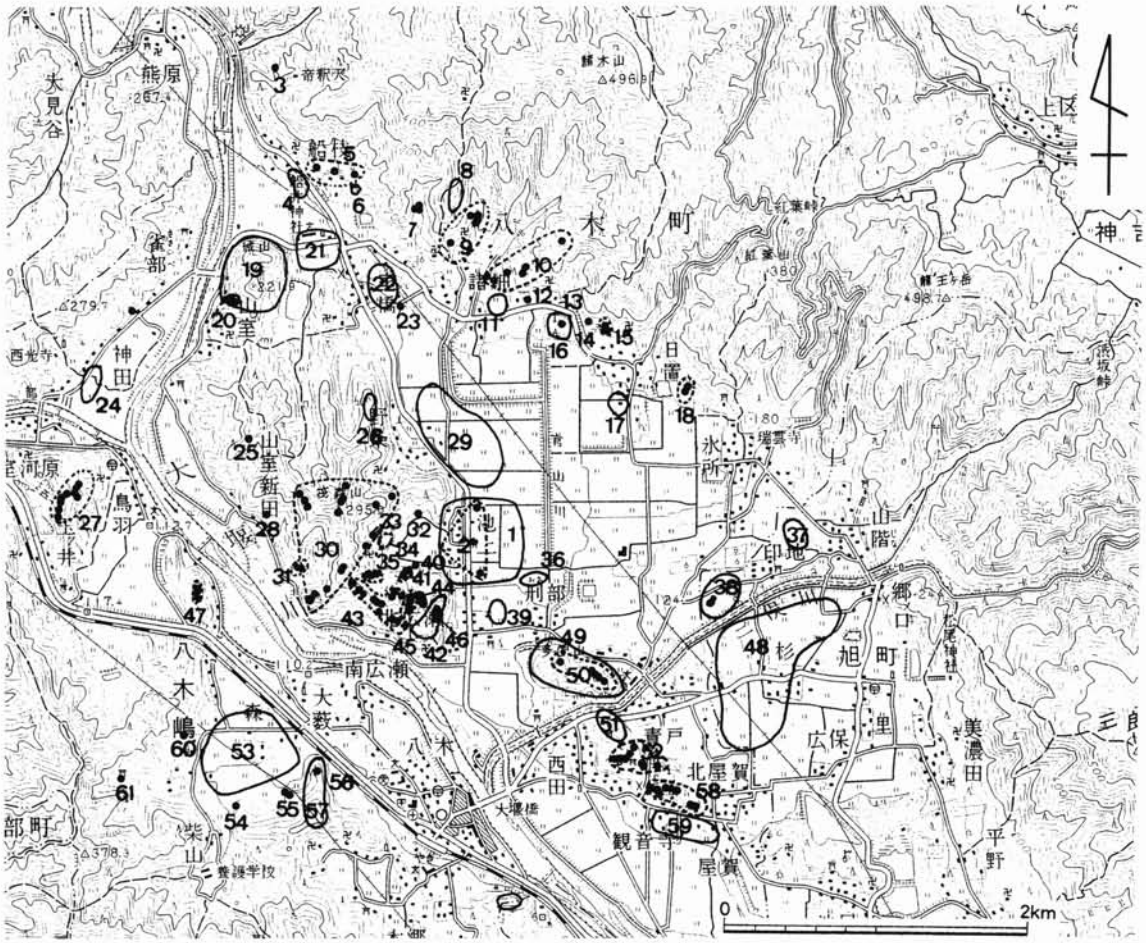
整理作業は平成14・15年度に行った。執筆については、宮城一木が磨製石器を、そのほかの部分は中川が担当し、室内での遺物撮影は調査第１課資料係主任調査員田中彰が行った。

調査期間中は、八木町教育委員会・京都府教育委員会・京都府立丹後郷土資料館・地元各自治会・池上地区の方々に多くの御配慮をいただいた。記してお礼申し上げたい。また、調査や遺物については、谷口悌・宅間博・都出比呂志・松藤和人・山中一郎・上島亨・清水真一・深澤芳樹・伊藤淳史・菅榮太郎・岸岡貴英・若林邦彦・奈良康正諸氏の御助言をいただいた。

１．位置と環境

池上遺跡の所在する八木町は、旧国で言う丹波国の地域にある。この丹波地域は山が多く分水嶺にあたる。丹波山地では鮮新・更新世の後半から褶曲や段層運動が起こり、盆地地形が随所に認められる。遺跡はその盆地の１つである亀岡盆地の北端に位置する。亀岡盆地は、京都市の所在する京都盆地に隣接する盆地で、その中央部分を北西から南東に桂川が貫いて流れる。盆地周辺の山地からは桂川に向かって小河川が流れ込み、それらの河川によって浸食され段丘地形が形成されている。桂川は宇治川・木津川と合流して大阪湾に注ぐ。

池上遺跡の所在する地域は、亀岡盆地においても小山に囲まれさらに小盆地状を呈する。この



第71図　調査地および周辺遺跡分布図(国土地理院1/50,000京都西北部)

1.池上遺跡	2.狐塚古墳群	3.杓ヶ谷古墳	4.船枝遺跡	5.清谷古墳群
6.船枝館跡	7.美津谷古墳群	8.畑中城跡	9.大谷口古墳群	10.松本古墳群
11.諸畑遺跡	12.福本古墳群	13.鎧塚古墳	14.西山古墳	15.西上里古墳群
16.八木田遺跡	17.日置遺跡	18.東山古墳群	19.新庄城遺跡	20.山室古墳群
21.室橋遺跡	22.新庄遺跡	23.天王古墳	24.美里遺跡	25.草福古墳
26.野条城跡	27.鳥羽古墳群	28.新田古墳	29.野条遺跡	30.筏森山古墳群
31.城谷口古墳群	32.八幡宮古墳	33.丈六谷古墳	34.池上院北古墳群	
35.寺内西古墳群	36.池上古里遺跡	37.山階遺跡	38.梶塚古墳	39.西里遺跡
40.寺内経塚	41.寺内古墳群	42.北広瀬城跡	43.南尾西古墳群	44.南尾東古墳群
45.南尾古墳群	46.北広瀬城古墳群	47.八幡山古墳群	48.杉北遺跡	49.刑部城跡
50.多国山古墳群	51.西田城跡	52.住吉神社裏山古墳群		53.八木嶋遺跡
54.柴山古墳	55.森古墳群	56.鶴首山古墳	57.鶴首山城跡	58.池内古墳群
59.観音寺遺跡	60.大岩古墳	61.神田古墳		

小盆地の南北方向に菅山川・東西に三俣川が流れる。遺跡は菅谷川あるいは先行河川によって形成された埋没した段丘上に立地していると考えられる。遺跡の西側には亀岡盆地の中にある山ではもっとも高い標高295mの筏森山がある。筏森山は大国主命が請田神社・鍬山神社・持籠神社の3人の神様が集まり、協力して水の溜まった亀岡盆地の水を抜き水田を開いたとの伝承のある山である。

池上の地名は筏森山の東麓にある天台宗の寺院、池上院に由来する。池上地区は、水田耕作の水を地域内で十分調達できないため、桂川上流域の園部からの用水によって水を得ている。その

ため用水ができるまでは、水田の面積は現在より少なかったと考えられる。

亀岡盆地はかつて淡水の湖であったものが離水して陸化したものと考えられている。亀岡盆地ではじめて人類の足跡が認められるのは、池上遺跡である。後期旧石器時代のナイフ形石器が出土している。縄文時代草創期の黒曜石製の槍先形尖頭器が亀岡市鹿谷遺跡、有舌尖頭器が亀岡市千代川遺跡で出土している。

縄文時代は千代川遺跡で押型文土器片が見られるのがもっとも古い事例で、中期は千代川遺跡、後期は三日市遺跡・千代川遺跡・太田遺跡・八木嶋遺跡、晩期は北金岐遺跡・千代川遺跡でそれぞれ発見されている。

弥生時代に入ると太田遺跡で前期の環濠集落が発見されている。千代川遺跡でもまた土器が出土している。桂川の対岸にある蔵垣内遺跡・河原尻遺跡・川尻遺跡・大渕遺跡でも前期の土器が発見されている。中期の集落には千代川遺跡・天川遺跡・余部遺跡などの桂川西岸の集落がよく知られている。近年、桂川西岸の亀岡市里遺跡、池上遺跡で中期集落が発見されておりこれまでの遺跡分布の再考が必要とされる。後期には北金岐遺跡・南金岐遺跡・東方遺跡・太田遺跡・池上遺跡で土器が出土している。八木町では野條遺跡で焼失家屋が検出されており、日本海側の地域の影響を受けた土器が出土している。

古墳時代には大型の古墳は桂川東岸地域に多く分布する。亀岡市に古墳時代の初頭と考えられている糠塚古墳がある。前期末葉には亀岡盆地の山城側からの入り口部にあたる亀岡市篠町の向山古墳が築かれる。この古墳からは銅鏡・石釧・車輪石などが出土している。中期には亀岡盆地では方墳が造られ、盆地内の平野部にあたる３つの地域に２基ずつ作られる傾向が見て取れる。八木町池上遺跡に近い桂川東岸(川東)に坊主塚・天神塚がある。後期に入ると川東地域に亀岡盆地最大の前方後円墳、千歳車塚(全長約80m)が造られる。この古墳は３段築成で、左くびれ部には造り出しがあるとされている。この古墳の東側には丹波一宮出雲神社が鎮座する。同じく川東地域において、平成14年度の発掘調査によって前方後円墳である保津車塚古墳(全長約52m)が調査された。桂川の西の地域では、八木町との境にある亀岡市の拝田16号墳(全長約44m)が前方後円墳として知られている。主体部は石棚付横穴式石室で、和歌山市岩橋千塚古墳群の石室との類似点から、紀氏との関連が指摘されている。また後期には丘陵部を中心に多くの群集墳が造られるようになる。池上遺跡の周辺にも筏森山古墳群・八幡宮古墳・丈六谷古墳・城谷口古墳群・池上院古墳群・寺内西古墳群・寺内古墳群・南尾西古墳群・南尾東古墳群・南尾古墳群・北広瀬城古墳群が点在し、平地である池上遺跡指定範囲内にも、狐塚古墳群があったとされている。傍証するように、第12次調査では須恵質の陶棺片が出土している。

古墳時代の集落の中でも注目されるのが、古墳時代末葉とされる桂川西岸の八木町八木嶋遺跡である。この遺跡からは7世紀初頭の庇付の大型掘立柱建物跡が多く発見されている。いわゆる豪族居館として位置付けられる。

白鳳期には桑寺廃寺・観音芝廃寺・與能廃寺・池尻廃寺が造られる。池尻廃寺は八木町に近接し、近くには天神塚・坊主塚古墳がある。この寺の近くには秦氏と関係がある式内社亀岡市松尾

第72図　調査トレンチ配置図

神社、八木町幡日佐神社があり、この地域では秦川勝を祖先とする伝承を持つ川勝姓が多い。

奈良時代には川東地区の亀岡市千歳町と隣接する河原林町に国分寺、国分尼寺がそれぞれ建立される。丹波国府の位置は、諸説がありまだ確定していない。千代川説が有力とされていた。し

付表1　調査次数一覧

次数	調査主体	調査年月日	対象面積(㎡)	調査担当者
1	八木町教育委員会	H 7.2.27～ 3.9	約24	谷口悌
2	八木町教育委員会	H 9.11.27.～H10.1.27	約200	谷口悌
3	八木町教育委員会	H10.1.19～ 3.18	約720	谷口悌
4	八木町教育委員会	H10.5.7～H11.2.6	約4,600	谷口悌
5	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	H10.10.22～H11.3.5	約2,000	中川和哉・高野陽子・筒井崇史
6	京都府教育委員会	H11.10.20～12.3	約400	奈良康正
7	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	H12.6.21～11.8	約2,000	村田和弘
8	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	H12.11. 1～H13.2.27	約720	田代弘・岡崎研一・野島永
9	八木町教育委員会	H13.10.15～11.19	約180	谷口悌
10	京都府教育委員会	H13.11.19～12.14	約400	岸岡貴英
11	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	H13.10.18～H14.2.8	約650	田代弘
12	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	H13.10.18～H14.2.8	約1,200	岡崎研一・中川和哉
13	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	H14.7.12～11.28	約1,300	中川和哉・中村周平
14	京都府教育委員会	H14.10.16～11.29	約370	岸岡貴英
15	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	H14.11.5～H15.2.26	約650	中川和哉
16	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	H15.5.26～ 7.30	約450	中川和哉
17	京都府教育委員会	H15.6.3～6.27	約400	奈良康正
18	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター	H15.9.17～11.30	約200	中川和哉

かし、近年上島亨氏によって千代川説の根拠は薄いと論評されている。承安四年(1174)の後白河院の法華堂領の吉富荘が成立したときに画かれた絵の写しとされる「吉富荘絵図」には八木町屋賀、亀岡市池尻にかけての地域に「国八庁」とある大型建物が描かれている。この当時川東地区に国府があったことを示している。国府と言う小字名や国府姓の人が多く住んでいる。千代川から屋賀に移ったという説もあるが、11世紀以降の国府の機能が形骸化した中、新たな国府造営の契機を見出すことは困難である。この地域の調査が進むことによって論争の決着がつくものと考えられる。

「吉富荘絵図」には、八木町池上地域には、池上寺、池上在家として数棟の家屋が描かれている。池上遺跡は池上在家の在った地域と考えられる。池上寺(現大日寺池上院)は天台密教の法流谷流の祖皇慶(977～1049)が住んだ池上坊に始まる。万寿年間(1024～1028)には池上坊に居住していたことが文献で明らかになっている。

2．これまでの調査(第72・73図)

池上遺跡は今回の調査地から北に向かうに従い徐々に遺構検出面が高くなっていく。また柱穴などの残りも悪くなっていることから、上面が削平されていることがわかる。遺構の密度は見か

け上、北に行くほどまばらになるが、削平により喪失したと考えられる。

弥生時代以前　第８次調査では、縦長剥片素材のチャート製ナイフ形石器が出土している。第５次調査では、縄文土器片が出土している。また、チャート製の凹基無茎の石鏃が出土している。包含層中からではあるが、弥生時代には用いられないチャート製の剥片が検出されている。本来の包含層を探るために数回の深掘りを行ったが、包含層は確認することができなかった。

弥生時代　第４・５・８・11～17次調査地において方形周溝墓・竪穴式住居跡・溝が多く検出されている。第４次調査地では磨製石剣が出土した墓壙が１か所認められた。多くの検出遺構は弥生時代中期に属するものである。第８次調査では碧玉製の管玉やその未製品などの玉造関連遺物が多数発見されている。

古墳時代　竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・土坑多数などが検出されている。竪穴式住居跡は四角い平面形をしたもので、古墳時代中～後期のものである。第４・５次調査では独立棟持柱建物がそれぞれ１棟ずつ検出されている。第４次調査のものは棟柱が外へ出っ張るタイプで、第５次調査のものは総柱の建物である。これまでのところ布留式土器の終末期から遺構が見られるがそれ以前の遺物遺構は検出されていない。

出土遺物には、朝鮮系の遺物とされる縄蓆文土器、平底の格子目タタキを持つ鉢、製塩土器、陶棺片、鉄器などが注目される。

奈良時代　第12次調査では、東西方向に長い２間×９間以上の方形掘形を持つ掘立柱建物跡が検出されている。出土遺物から奈良時代前半の遺構と考えられる。この調査では円面硯も出土している。第15次調査では井戸が検出されている。今回報告の13次調査でも掘立柱建物跡、井戸が検出されており、瓦や製塩土器も出土している。

平安時代　第４・12・13調査で11世紀の総柱の掘立柱建物跡、墓壙が検出されている。第５次調査では10世紀と考えられる井戸が検出され、内部からこの地域の基準資料となる土器群が出土している。

また、第12・13・15次調査では、条里を示すと考えられる素掘り溝が検出されており内部からは磨滅した奈良時代以前の土器とともに、近江産緑釉陶器椀、瓦器椀、白磁椀が出土している。

３．第13次調査の概要

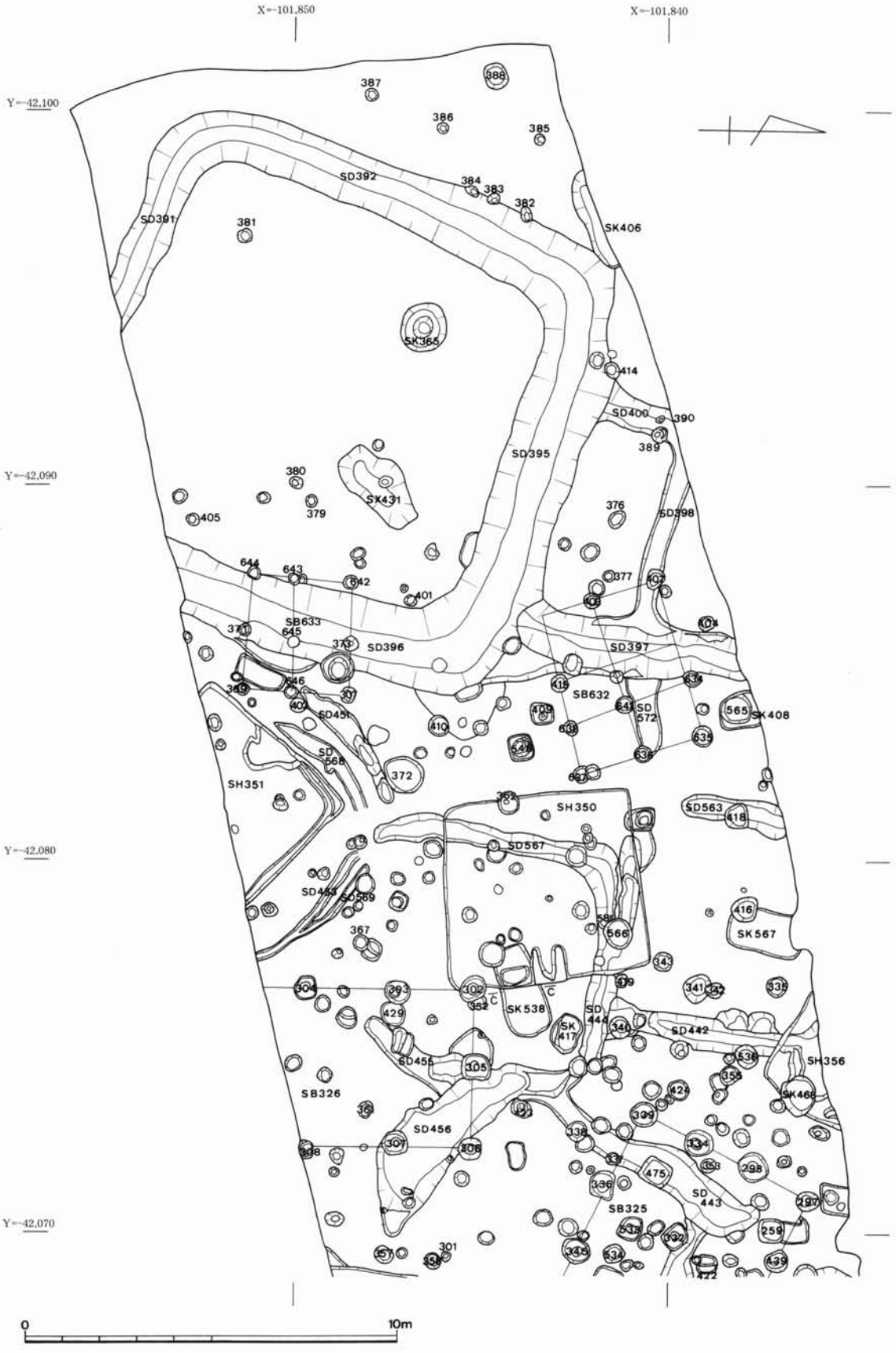
池上遺跡の基本層序は、上から耕作土・床土・締まりの悪い黒褐色粘砂質土・黄褐色粘砂質土、礫層である。遺構は黄褐色粘砂質土上面で検出したが、遺構は黒褐色粘砂質土中に切り込み面が存在する。奈良時代以降の遺構は検出可能であるが、それ以前の遺構は肉眼的に抽出することは困難である。弥生時代の遺構では黒褐色粘砂質土中に土器がまとまって出土することがあり、その下層の黄褐色粘砂質土で同じ位置から遺構を検出することができる。遺構検出面の標高は112.5m前後である。

遺跡は筏森山の裾から官山川に向かって西から東に地形が下がっていく。遺跡の基底部に在る礫層は、段丘礫と考えられる。締まりの悪い黒褐色粘砂質土は「クロボク」と呼ばれる層と類似

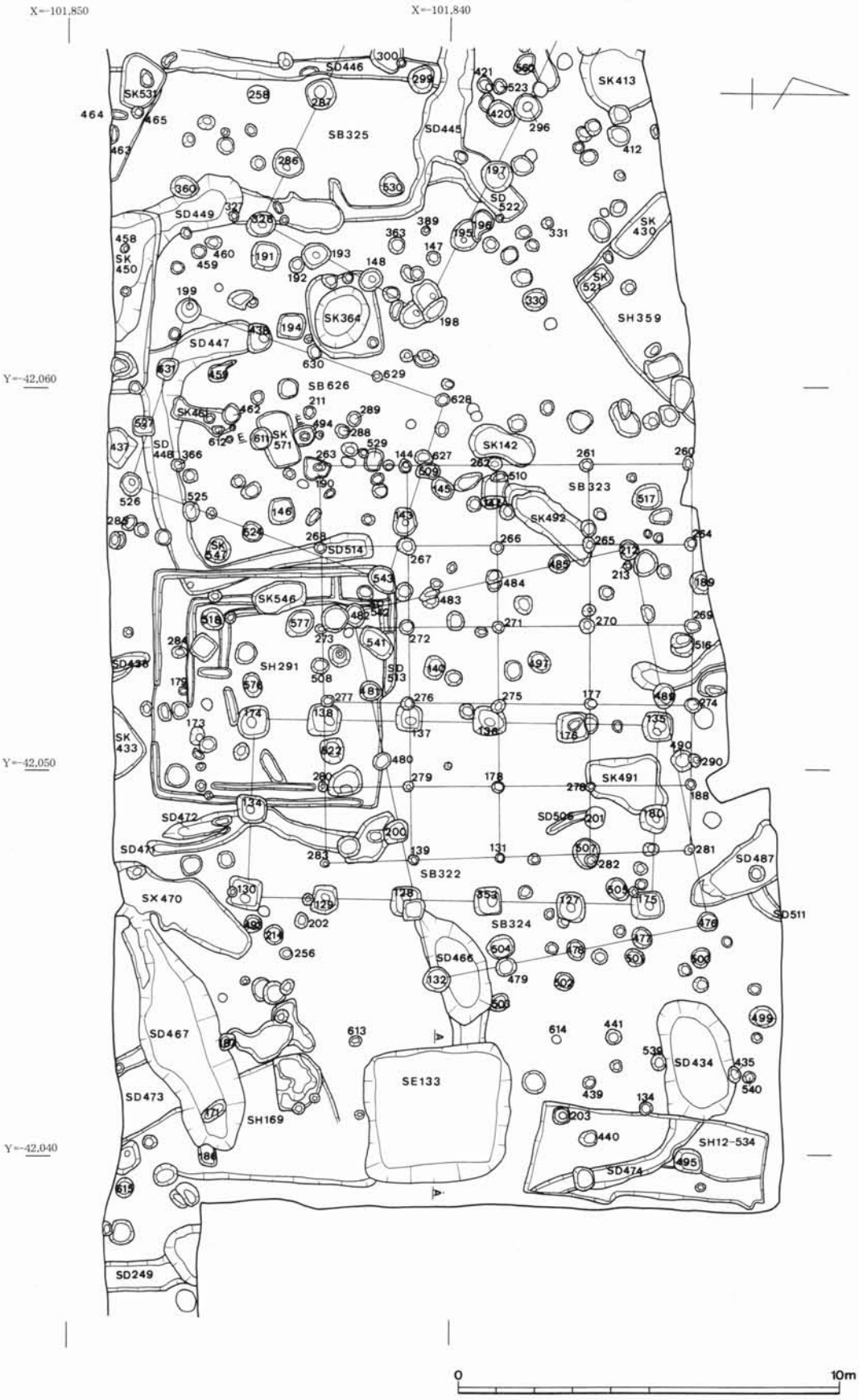
し、黒と黄色の層は丹波地域では一般的に見られる層相である。北桑田郡京北町の東山遺跡の土壌分析では、「クロボク」層からはその下半部からアカホヤ火山灰、黄褐色土上方から姶良火山灰が検出されている。

発掘調査地は、未買収地と用水路を挟み、２か所に分かれた。東側を東地区、西側を西地区と名付けた。西地区の遺構検出面は拳大の円礫を多く含む層であったのに対し、東地区は黄褐色粘砂質土が検出面となった。西地区の遺構は残りが悪く、大きく削平されており、旧地形が東地区に比べ高かったと考えられる。紙面の都合上、西地区と明記しない遺構は、東地区のものである。

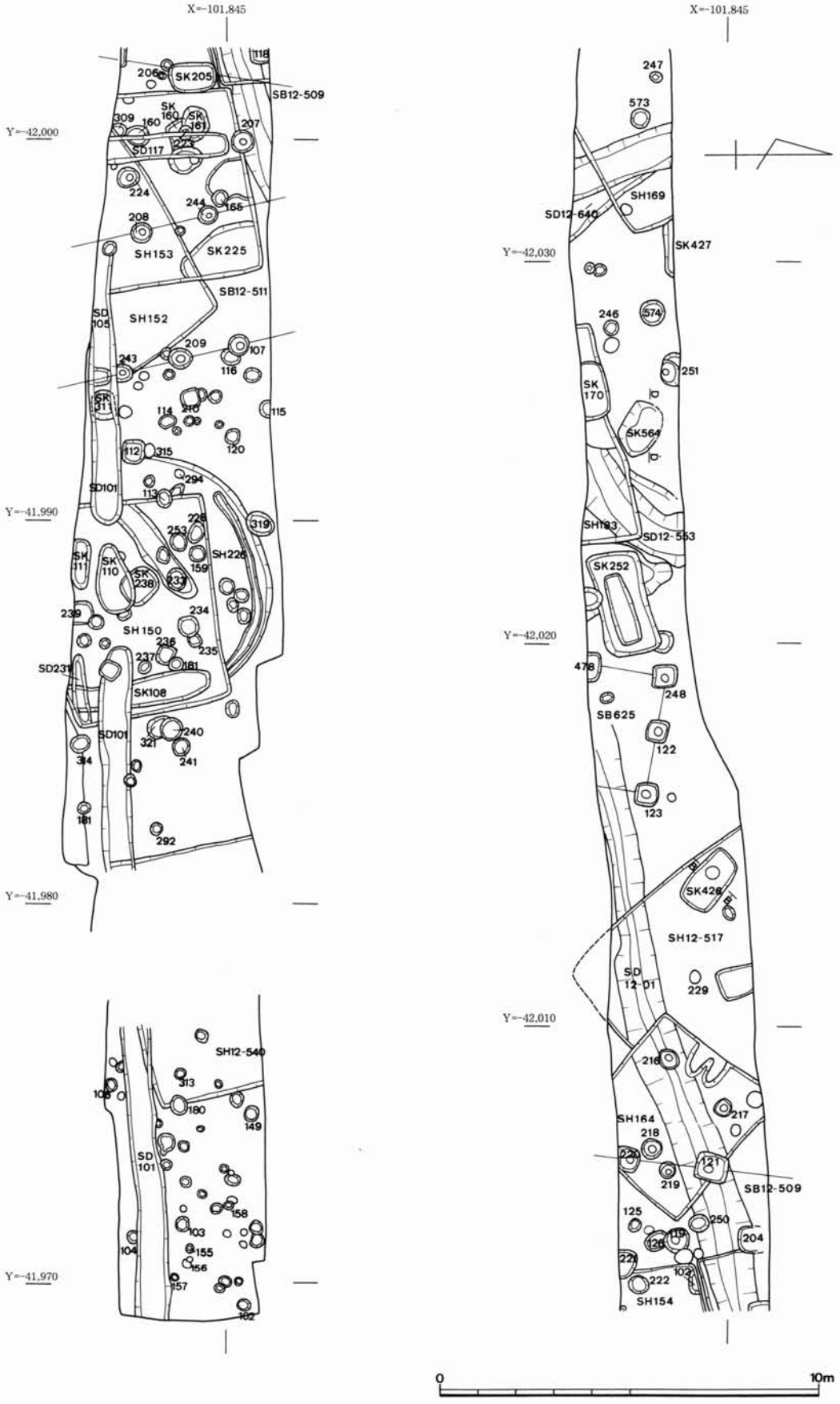
第73図　池上遺跡第12・13・18次調査検出遺構平面図



第74図　池上遺跡第13次調査遺構平面図(1)



第75図　池上遺跡第13次調査遺構平面図(2)



第76図　池上遺跡第13次調査遺構平面図(3)

第77図　池上遺跡第13次調査遺構平面図(4)

A．遺 構

①弥生時代

方形周溝墓ＳＴ601（第74・78・79図）　東地区の西部で検出した、第13次調査では最大の方形周溝墓である。方形周溝墓の溝は繋がるが、屈曲部分で分け遺構番号をつけた。南辺をＳＤ391，東辺をＳＤ396、北辺をＳＤ395、西辺をＳＤ392がめぐる。周溝の南東隅は調査区外となり検出できなかった。溝の深さなどから一周溝が廻っていたものと考えられる。西側は重機掘削時に、深く下げているため溝幅が狭いがほぼ同規模で廻っていたものと考えられる。断面は逆台形状を呈する。周溝墓の規模は溝の心々間で、11.5mと12mとなりやや長方形となる。溝の出土遺物から弥生時代の周溝墓としたが、遺物量は少ない。遺構精査中にガラス小玉が１点出土している。

墳丘にあたる部分では埋葬主体部は確認できなかった。本来の主体部は検出面より高い位置にあったものと想定できる。ＳＫ431は平面形が長方形であったため主体部と期待されたが、底面の凹凸が激しく、土層の観察から風倒木痕と考えられる。ＳＫ365は円形で底面の中央部が一段下がる土壙である。大型の柱が立てられていたものと考えられるが、出土遺物や対応する遺構がないため時期、性格ともに不明である。

方形周溝墓ＳＴ602（第74・78・79図）　平面形が長方形を呈する方形周溝墓でＳＴ601・603・605と周溝を共有する。ＳＴ601と共有する溝ＳＤ395はそれに取り付くＳＤ397・400と明らかに溝底部の高さが異なる。ＳＤ395が検出面からの深さが約0.6mであるのに比べ、ＳＤ397は約0.3m、ＳＤ400は約0.15mである。ＳＤ398は約0.15mである。方形周溝墓は溝の心々間で東西6.3m、南北3.5mである。

墳丘上では後世の柱穴以外に、遺構は検出できなかった。出土遺物は細片のみである。

方形周溝墓ＳＴ603（第74・78・79図）　調査区外に多くの部分が含まれる方形周溝墓である。ＳＤ397、ＳＤ398とＳＤ400の延長部分で区画されていたと考えられる。北側の溝は未検出で規模は確定できないが、東西方向は6.3m前後と考えられ、南北方向の検出長は３mである。調査区内では主体部は検出できなかった。

方形周溝墓ＳＴ604（第74・78・79図）　北半が調査区外になる方形周溝墓である。ＳＤ572、ＳＤ397、ＳＤ563に囲まれる。ＳＤ572とＳＤ563は接点がなく、検出面において南東隅溝は見られないが、大きく削平されていると考えられるため、掘り残されていたかは不明である。墳丘規模は東西方向が溝心間で約４m、南北方向は３m以上である。

墳丘部にはＳＫ408の長方形の平面形を持つ土壙が検出されている。主軸がやや周溝の軸に対して角度を持ち、西側周溝に近いため断定はできないが、埋葬主体部とした。棺痕跡は肉眼では認められなかった。北部は調査区外になり全長はわからないが、残存長1.1m、幅0.9m、検出面からの深さ0.05mを測る。

方形周溝墓ＳＴ605（第74・78・79図）　３方に区画溝を持つ方形周溝墓として位置づけた。南側の区画溝は検出できなかったため、規模の特定はできない。北側の溝ＳＤ572はＳＤ398の延長上に位置しているが、非常に浅く５cm程度しか残されていなかった。南側の溝も削平により検出

できなかったものと考えられる。東西は5.5mの規模を持つ。主体部は検出されていない。

方形周溝墓ＳＴ606(第74・78・79図)　北側が調査区外になる方形周溝墓である。ＳＤ444・563・442によって囲まれているが、ＳＤ444とＳＤ563には接点がなく、南西隅に溝は見られない。ＳＤ444はＳＴ607の北溝になっているため、１つの名称をつけたがＳＴ606と隣接するＳＴ609の南溝として機能している。墳丘規模は東西方向の溝心間で約5.2m、南北方向は4.8m以上である。

墳丘部中心部には長方形の平面形を持つ土壙ＳＫ567が検出されている。埋葬主体部とした。棺痕跡は肉眼では認められなかった。北部は調査区外になり全長はわからないが、残存長1.8m、幅1.1m、検出面からの深さ0.1mを測る。

方形周溝墓ＳＴ607(第74・78・79図)　３方向がＳＤ567・442・456・455の溝に囲まれた方形周溝墓である。南側には溝は検出できなかった。東側溝はやや屈曲してＳＴ609の南溝となるＳＤ456・456の屈曲部から南端部までのＳＤ455によって形成される。ＳＤ455はＳＤ456に比べ浅く、検出面から約0.15mである。墳丘規模は東西方向の溝心間で約6.4m、南北方向は６m以上である。

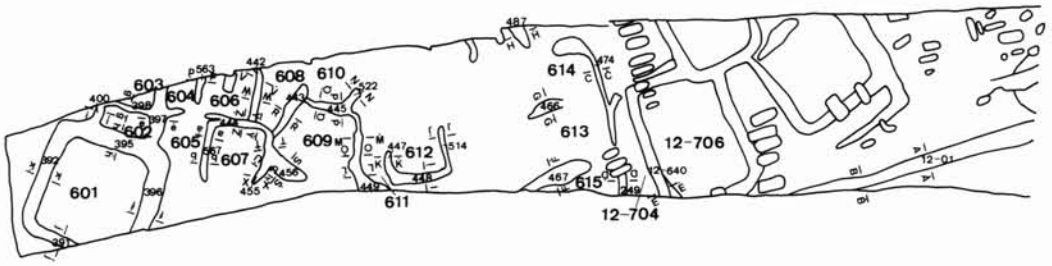
墳丘部に長方形の平面形を持つ土壙が２か所検出されている。ＳＫ538は主軸が周溝の軸に対して約45°の角度を持つことから断定はできないが、埋葬主体部とした。棺痕跡は肉眼では認められなかった。長さ2.4m、幅１m、検出面からの深さ0.05mを測る。ＳＫ417はＳＤ444に平行した土坑で、長さ１m、幅0.8m、検出面からの深さ0.2mを測る。土壙内からの出土遺物は細片の土器を除くと認められなかった。

方形周溝墓ＳＴ608(第74・78・79図)　３方向がＳＤ444・443・442の溝に囲まれた方形周溝墓である。平面形は北側に向かって幅が広くなる台形状を呈する。北側には溝は検出できなかった。しかし、東側の周溝ＳＤ443の北端がやや西に曲がることから、北溝があった可能性が指摘できる。周溝は隅部が浅くなる傾向が見られた。墳丘部には埋葬主体部は検出できなかった。墳丘規模は東西方向の溝心間で約４m、南北方向の推定長は5.3mである。

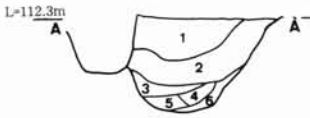
方形周溝墓ＳＴ609(第74・75・78・79図)　４方向がＳＤ445・443・449・456の溝に囲まれた方形周溝墓である。ＳＤ456とＳＤ449は接することなく、南東隅部には溝が回らない。ＳＴ608と同じく隅部は溝が浅く、幅も狭い。このため、本来は南東隅部も溝が存在した可能性も指摘できる。墳丘部には埋葬主体部は検出できなかった。墳丘規模は東西方向の溝心間で約８m、南北方向は9.5mである。

方形周溝墓ＳＴ610(第74・75・78・79図)　東溝ＳＤ522と南溝ＳＤ445、西溝にあたるＳＤ443北側によって形成される部分を方形周溝墓として認識した。北側の溝は検出できていないため南北方向の規模はわからないが、東西方向は約4.5mの規模を持つ。墳丘部にあたる部分では、主体部に相当する土壙は検出できなかった。

方形周溝墓ＳＴ611(第75・78図)　ＳＤ447・449と南側のＳＫ450底部で発見された落ち込みとによって「コ」の字状に回った溝の内側を周溝墓とした。北側の溝は検出できていないため南北方向の規模はわからないが、東西方向は約3.5mの規模を持つ。墳丘部にあたる部分では、主体

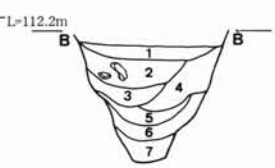


SD12-01



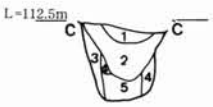
1 暗褐色粘砂質土
2 暗褐色粘砂質土（黄褐色粒含む）
3 暗褐色粘質土
4 黒褐色粘質土
5 暗黄褐色粘質土（暗褐色土混）
6 暗茶灰褐色粘質土

SD12-01



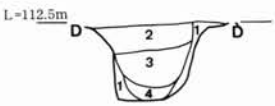
1 暗褐色粘砂質土(黄褐色土混)
2 暗褐色粘砂質土(黄褐色粒混)
3 黒褐色粘質土
4 黒褐色粘質土（黄褐色土混）
5 暗褐色粘質土
6 暗黄褐色粘質土（暗褐色土混）
7 暗灰褐色粘質土

SD474



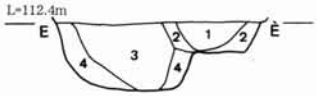
1 暗灰褐色粘砂質土
2 暗褐色粘砂質土
3 暗灰茶褐色砂質土
4 暗茶褐色砂質土
5 暗灰褐色粘質土

SD249



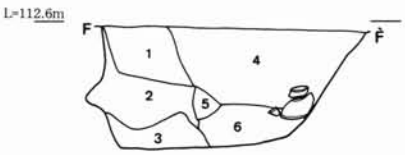
1 暗灰褐色砂質土(黄色土混)
2 暗茶褐色粘砂質土
3 暗褐色粘質土
4 暗茶褐色粘質土

SD12-640



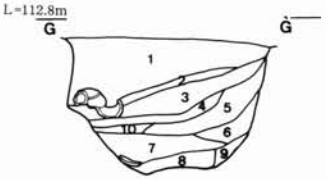
1 茶褐色粘砂質土
2 暗茶褐色粘砂質土
3 暗褐色粘質土
4 暗灰褐色粘質土

SD467



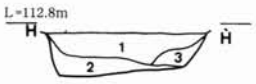
1 暗灰褐色粘砂質土
2 黒灰褐色粘砂質土（しまり悪い）
3 暗灰色砂質土（暗黄褐色土混）
4 灰褐色粘砂質土
5 黄灰褐色砂質土
6 灰褐色粘砂質土

SD466



1 暗灰褐色粘砂質土
2 暗灰褐色粘砂質土（黒灰色土混）
3 暗褐色粘砂質土
4 黄褐色粘砂質土（暗褐色土混）
5 暗黄灰褐色砂層（ラミナ状）（暗褐色土混）
6 暗灰色粘質土
7 暗黄灰褐色砂層（ラミナ状）
8 暗灰色粘質土（砂層混）
9 暗黄灰色砂層
10 暗灰色粘質土

SD487



1 暗褐色礫混粘砂質土
2 暗褐色礫混粘砂質土（黄褐色土混）
3 暗褐色粘土混礫層

SD448

1 暗黄褐色砂質土
2 暗黄褐色粘質土（暗褐色土混）
3 暗褐色粘砂質土（暗黄褐色土混）
4 暗茶褐色粘砂質土（暗黄褐色土混）
5 暗褐色粘質土
6 暗黄褐色粘砂質土（暗褐色土混）

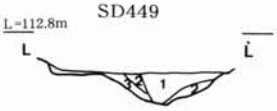
SD514

1 黒褐色粘砂質土
2 暗褐色粘砂質土

SD447

1 暗黄茶褐色砂質土
2 暗黄茶褐色砂質土

SD449



1 暗灰褐色粘砂質土
2 暗灰褐色粘砂質土(暗黄褐色土混)
3 暗黄褐色粘砂質土（暗褐色土混）

SD449

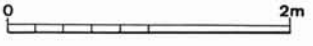
1 暗褐色粘砂質土

SD522

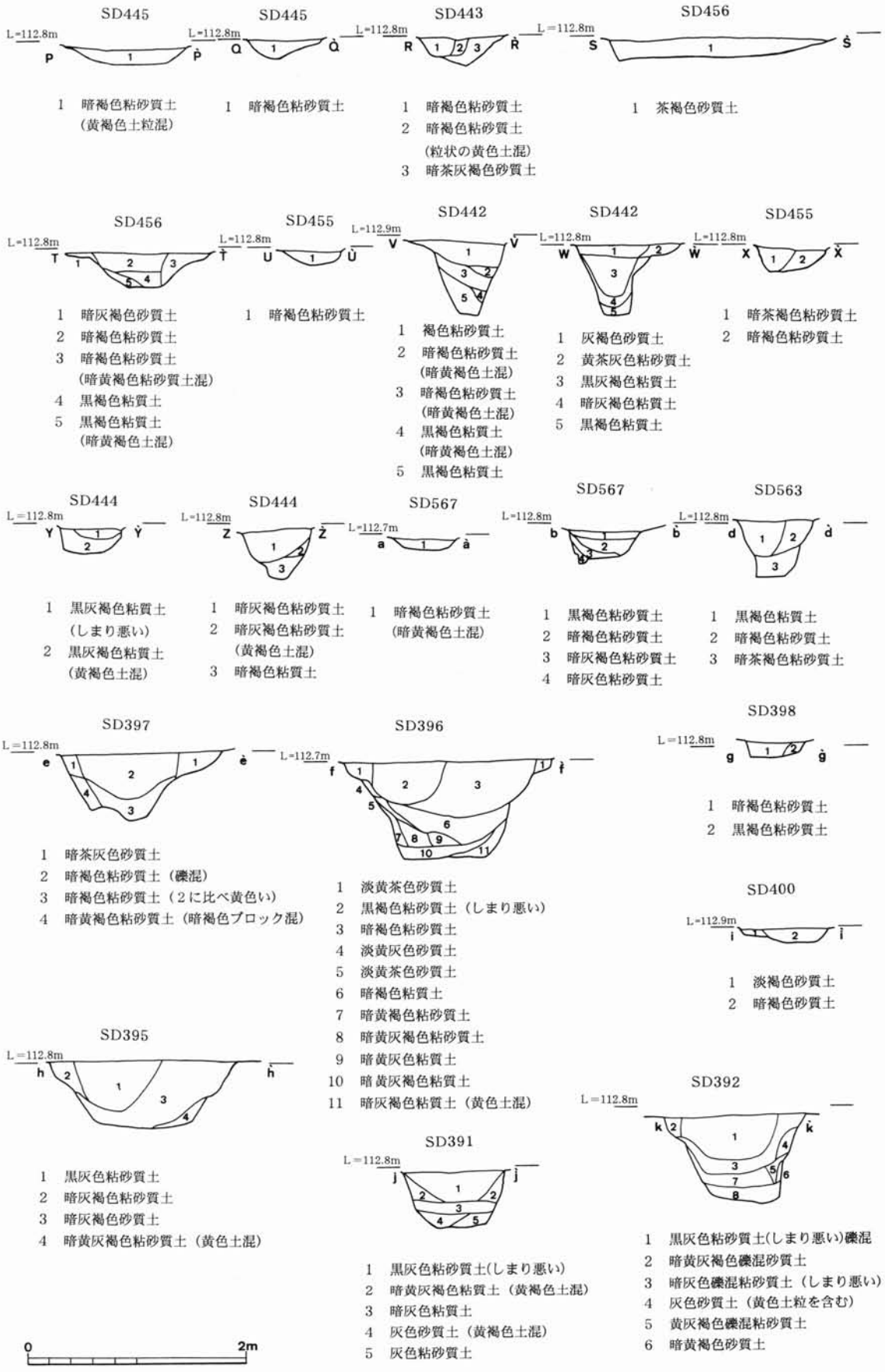
1 暗灰褐色粘砂質土

SD449

1 黒褐色粘砂質土
2 暗褐色粘砂質土



第78図　池上遺跡第13次調査検出周溝墓溝断面図(1)



第79図　池上遺跡第13次調査検出周溝墓溝断面図(2)

部に相当する土壙は検出できなかった。

方形周溝墓ＳＴ612(第75・78図)　３方向がＳＤ447・448・514の溝に囲まれた方形周溝墓である。北側の溝は検出できていないため南北方向の規模はわからないが、東西方向は約６ｍの規模を持つ。

墳丘部中央からは、東西方向に長軸を持つ方形の埋葬主体部ＳＫ571が検出されている。精査の結果、棺痕跡などは確認できなかった。また共伴遺物もなかった。土壙の長さは1.5m、幅0.9m、検出面からの深さは0.1mを測る。

ＳＴ612からＳＴ613の間には、周溝墓の存在を正確に認識できていないが、断片的に古い埋土の様相を示す長楕円の土壙が散在することから、本来は、周溝墓が存在していた可能性も指摘できる。

方形周溝墓ＳＴ613(第75・78図)　ＳＤ466・467と第12次調査のＳＤ12－647によって３方向を囲まれた周溝墓である。西側の溝は検出できていないため東西方向の規模はわからないが、南北方向は約7.8mの規模を持つ。埋葬主体部は検出できなかった。ＳＤ467・466は部分的に広く、極端に深く掘削されている。ＳＤ466は奈良時代の井戸ＳＥ133によって壊されているため全貌はわからないが、ＳＤ467やＳＤ434に見られるように、東に向かい小規模になるという傾向は認められる。

また、第13次調査の周溝には出土遺物が少ない傾向があるが、この深い部分では個体数は少ないが大型の破片が出土している。ＳＤ466では墳丘部から転落破損したと考えられるように、１個体の土器が斜面に高低差をもち破片で検出されている。

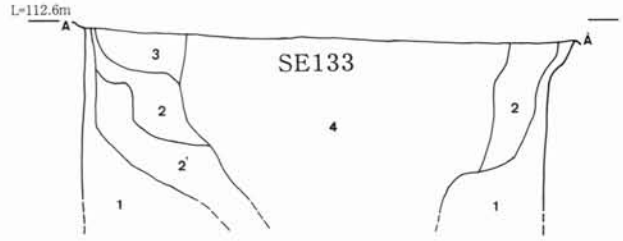
方形周溝墓ＳＴ614(第75・78図)　ＳＤ434・466・474によって３方向を囲まれた周溝墓である。ＳＤ474は、第12次調査のＳＤ12－647の延長部になると考えられる。墳丘部では、埋葬主体部は検出されていない。西側の溝は検出できていないため東西方向の規模はわからないが、南北方向は約６ｍの規模を持つ。

北側の溝ＳＤ434は極端に深く検出面からの深さは約1.3mを測る。埋土は砂質の土壌で、崩落土と考えられる土層断面を示していた。溝中埋葬などの施設や兆候はまったく認められなかった。ＳＴ613の溝と同じくこのような極端な溝の掘削は、盛り土用に土砂を採取した跡と考えることも可能であろう。

方形周溝墓ＳＴ615(第75・78図)　南半が調査区外へのびる方形周溝墓である。ＳＤ12－249・467・473によって３方向が囲まれていることがわかる。ＳＤ467とＳＤ473には前後関係があり、ＳＤ467が先行する。

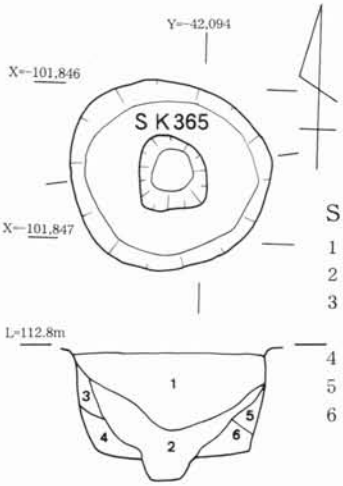
ＳＴ614の東周溝部にあたる第12次調査のＳＤ249は、周溝墓の主体部と考えられるＳＫ631・632・633の隣り合う３つの主体部に切られることから、方形周溝墓の作り変えについて考える１つの資料を提示している。急角度を持つ幅の狭い区画溝が先行し、幅の広い溝がそれを再掘削したり、埋めて拡張する事例は第12次調査の方形周溝墓中に認められる。

ＳＴ614の北側部分にもＳＤ434とＳＤ487とによる方形周溝墓の存在の可能性が指摘できるが、



SE133
1 暗茶褐色粘質土（炭混）
2 濁黄褐色砂質土（砂礫混）
3 濁暗茶褐色砂質土（礫混）
4 濁暗茶褐色砂質土（3よりやや暗く僅かに粘性を帯びる）

SK426
1 暗褐色粘質土（暗黄褐色・褐色粒）
2 黒褐色粘質土
3 暗褐色粘質土（暗黄褐色土を含む）

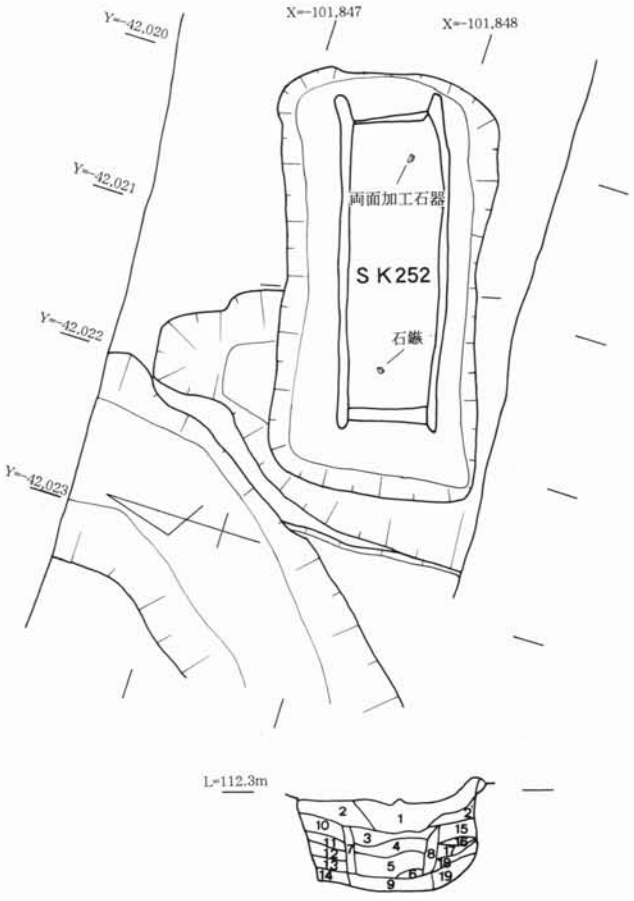


SK365
1 黒灰色粘砂質土（しまり悪い）
2 黒灰褐色粘砂質土（しまり悪い）
3 黒茶灰色粘砂質土
（しまり悪い・暗黄灰色混）
4 6と同じ（やや黄みがある）
5 暗黄褐色粘砂質土（黒灰褐色土混）
6 黒灰褐色粘砂質土（暗黄褐色土混）

SK538
1 黒褐色粘砂質土（暗黄褐色土混）

SK564
1 暗褐色粘砂質土
2 黒褐色粘砂質土

SK571
1 黒褐色粘砂質土



SK252
1 暗黄褐色粘砂質土（暗褐色土粒混）
2 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）
2' 2に比べ明るい
3 暗灰褐色粘砂質土（黄褐色粒混）
4 黒褐色粘質土
5 黒灰褐色粘質土
6 暗茶黄灰色粘砂質土
7 暗茶灰色粘質土
8 7と似るがやや明るい
9 暗茶黄灰色粘質土
10 3に似るが茶色味をおびる
11 暗灰褐色粘質土（黄褐色土混）
12 黄灰褐色粘質土（黄褐色土,暗褐色土混）
13 12に似るが黒味を帯びる
14 灰褐色粘質土
15 灰褐色粘質土（暗褐色、暗黄褐色土混）
16 15に比べ暗黄褐色土が多い
17 暗黄褐色粘質土（灰褐色土混）
18 灰褐色粘質土（暗黄褐色土混）
19 暗黄褐色粘質土（灰褐色粘質土混）

第80図　池上遺跡第13次調査遺構実測図

ＳＤ487の時期が特定できないため方形周溝墓認知を保留した。

方形周溝墓ＳＴ12－704(第76・78図)　ＳＤ249が周溝の一部をなすことが確定して方形周溝墓と認識した。ＳＤ12－640とＳＤ249、ＳＤ12－630によって囲まれる。墳丘規模は、南北方向は不明であるが、東西方向が約４ｍを測る。墳丘中央部には主体部は検出できなかったが、前述したようにＳＤ12－249上に３基の埋葬主体部が確認されている。

ＳＤ12－640は、1回以上の再掘削を受けており周溝墓の整備が行われていることがわかる。前述したＳＤ467とＳＤ476の関係やＳＤ249は、ＳＫ631、ＳＫ632、ＳＫ633の関係を見ると、大きな溝に囲まれた大型の方形周溝墓に作り変えられた可能性もある。

方形周溝墓ＳＴ12－706(第76・78図)　ＳＤ12－553、ＳＤ640と第12次調査で確認できたＳＤ12－582によって４方向に周溝が認められる。墳丘規模は、溝心々間で南北方向が14.5m、東西方向が約9.5mを測る。ＳＤ553にも再掘削が指摘でき、ＳＴ12－706の東溝延長部の溝に対してＳＤ12－553が切り勝ち、その溝延長部分は埋没後、重なり合う大型埋葬主体部ＳＫ252によって切られる。

今回検出した墳丘部分では、埋葬主体部は検出できなかったが、昨年度の調査では３基の埋葬主体部を検出している。南側溝部には溝中埋葬と考えられる土壙ＳＫ170(第90図)が認められる。ＳＫ170の平面形は隅丸長方形を呈し、長さ1.6m、幅0.7m、検出面からの深さ0.5mを測る。

溝の形状や埋葬主体部の存在からＳＴ12－706の南側、東側にも方形周溝墓があった、あるいはあるものと考えられるが、溝が検出されない場合や、調査区外になるため確認できない。

埋葬主体部ＳＫ252(第76・80図)　ＳＴ12－706の東溝延長部の溝が埋没した後、作られた埋葬主体部である。埋葬主体部の掘形は長方形を呈し、長さ2.8m、幅1.4m、検出面からの深さ0.65mを測る。掘形内には小口板を長側板で挟む、いわゆる「Ｈ」形木棺が用いられていた。棺内の法量は長さ1.9m、幅0.6mを測る。

棺内からは磨製石鏃が１点出土している。また棺外からは、玄武岩質の肌理の粗い岩石で作られた両面調整石器が発見されている。このような石材は丹後地方で見られるものに近いが、その帰属時期も弥生時代になるか特定できない。棺内で出土した石鏃も、遺構が先行する溝をつぶし作られていることから遺構に伴うものか断定できない。遺構に伴うものであるならば、いわゆる戦士墓として位置づけることができる。池上遺跡のこのような主体部の確実な例としては、第４次調査のＳＸＢ05が挙げられる。また、第12次調査の主体部ＳＫ547においても打製石鏃破片と考えられる砕片が発見されている。

埋葬主体部ＳＫ426(第76・80図)　埋葬主体部と考えられるが、古墳時代のＳＨ12－517によって大きく削平されており僅かに残っているだけであった。長さ1.7m、幅１ｍ、検出面からの深さ0.1mを測る。出土遺物は認められない。

竪穴式住居跡ＳＨ226(旧ＳＨ12－538)(第76図)　第12次調査では、北側一部のみを検出していた弥生時代の竪穴式住居跡である。竪穴式住居跡の壁の立ち上がり部分は削平のため検出されていないが、周壁溝のみが２条検出されている。

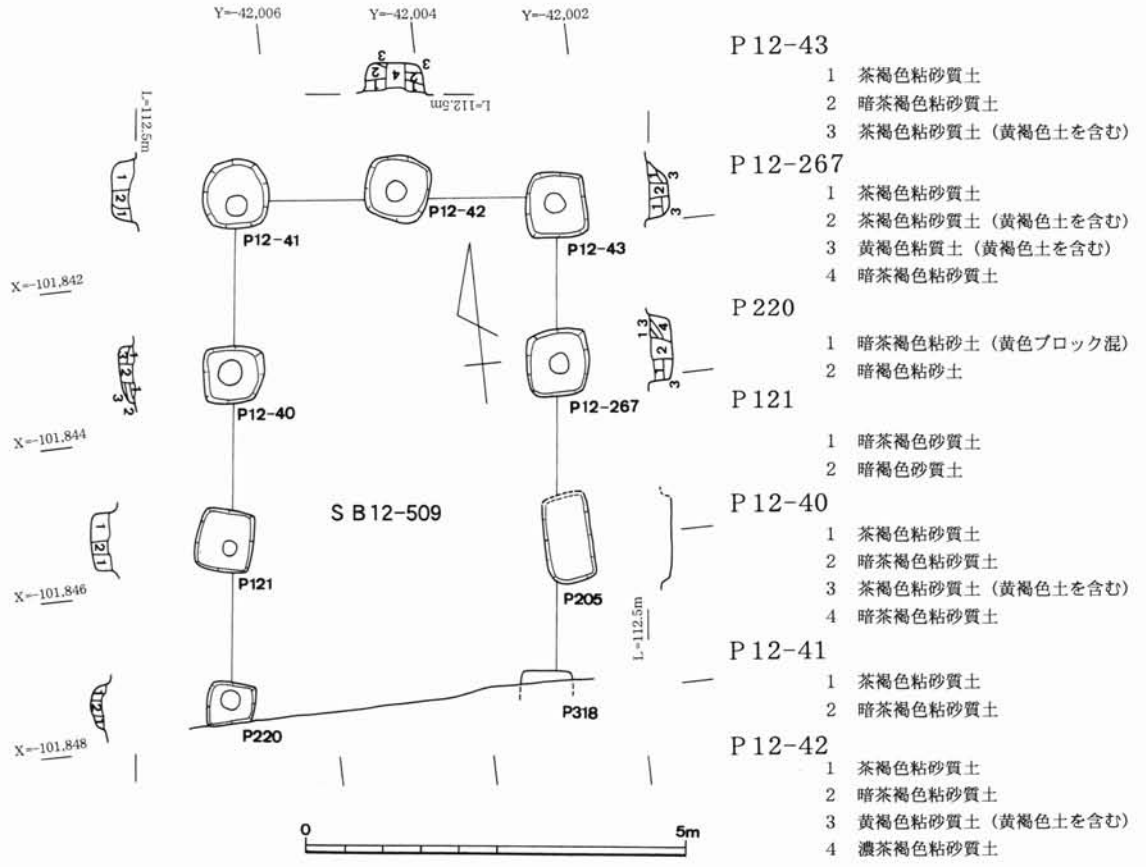
周壁溝は一部重なるものの、ほぼ同心円状に存在することから、同一地点での建て替えと考えられる。内側周壁構の直径は6.2m、外側は７mである。

住居中央部には中央土坑と考えられる、平面形が楕円を呈する、深い穴(土坑)ＳＫ238が認められる。土坑の長径は約1.1m、短径約0.9m、検出面からの深さ0.7mを測る。柱穴になる穴は複数確認できたが遺物の出土を見ないため特定できない。床面精査中に石庖丁が出土している。

溝ＳＤ12－01(第78図)　第５・8・12次調査で確認できた区画の溝である。断面形は急角度の逆台形で、溝底部の幅は25cm程度と狭い部分もある。検出面からの深さは約1.2mと深く、周囲の遺構の削平状態から考えるとさらに深いものと考えられる。これまでの調査の結果から、掘削順位を基にすると、重なり合う遺構中ではもっとも古い遺構となる。完全には分離できなかったが最上層のものに比べ、下層に古い特徴を持つ土器が見られた。土器から掘削時期は中期前葉末、中期中葉初頭に位置づけられる可能性がある。

②古墳時代

掘立柱建物跡ＳＢ12－509(第81図)　第12次調査で北側棲部と２間分の梁間が検出されていたが、今回の発掘調査で、２間分の柱が確認できたが南棲部は検出できなかったため規模は確認できなかった。古墳時代と考えられる掘立柱建物跡の中では、柱穴が最も大きい特徴を持つ。今回の調査区内で検出できた柱穴はＰ121・205・220・318の４か所である。柱穴掘形は方形で、南北方向の柱間は2.1m前後である。Ｐ205は南北方向に長い土坑状を呈するが、柱痕は確認できなか



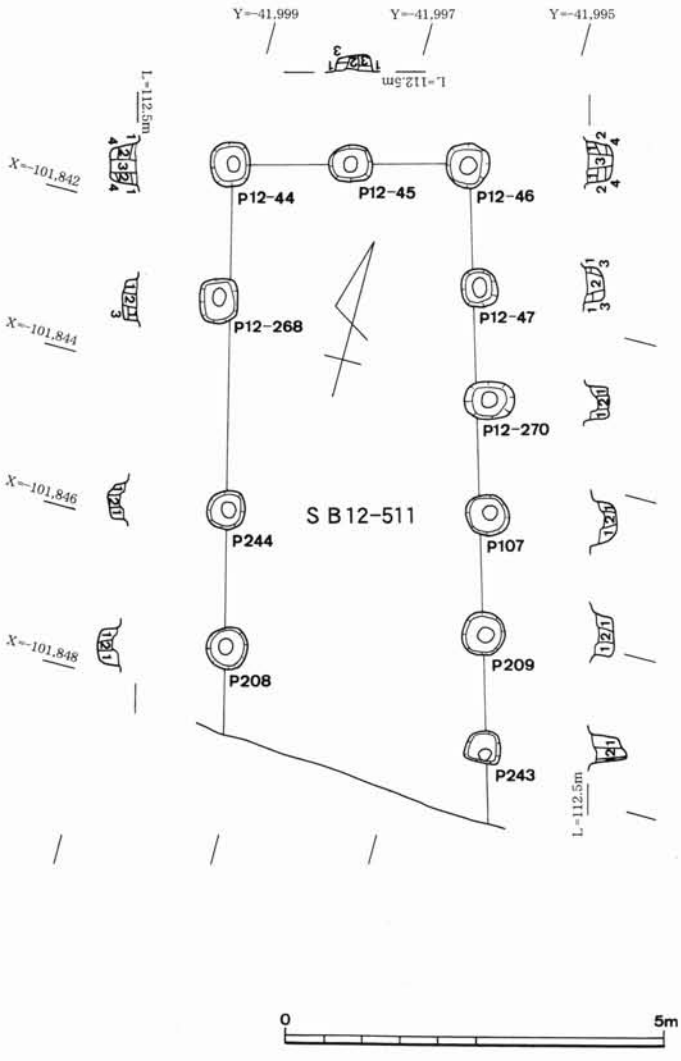
第81図　掘立柱建物跡ＳＢ12－509実測図

った。

掘立柱建物跡ＳＢ12－511（第82図）　第12次調査で北側褄部と3間分の梁間が検出されていたが、今回の発掘調査で、２間分の柱が確認できたが南褄部は検出できなかったため規模は確認できなかった。調査区内で検出できた柱穴はＰ157・208・209・243・244の５か所である。柱穴掘形は円形に近く、南北方向の柱間は約1.5ｍである。

掘立柱建物跡ＳＢ324（第83図）　一辺が約0.4ｍ程度の小型の方形の平面形を持つ。南北方向４間、東西方向５間である。調査区内で検出できた柱穴はＰ128・132・200・212・476～485・488～490の17か所である。柱掘形は１か所不明であるが、柱跡と考えられるものが存在する。柱間距離は東西方向で1.8～2.1ｍ、南北方向は1.8ｍ前後である。建物の軸は北で12°西に振る。

掘立柱建物跡ＳＢ325（第84図）　古墳時代の建物はこの地域では南北方向に長軸を持つものが多いが、ＳＢ325はやや角度は持つが、東西方向に長軸を持つ建物跡である。桁行は３間、梁間５間の規模を持つ。桁行は２ｍ前後、梁間は1.7ｍ前後である。建物の軸は北で24°東に振る。調査区内で検出できた柱穴はＰ328・193・148・198・195・197・286・196・276・349・297・298・



P12-46
1　茶褐色砂質土
2　濃茶褐色砂質土
3　暗茶褐色粘砂質土
4　茶褐色砂質土（黄褐色土混）

P12-47
1　茶褐色砂質土
2　暗茶褐色粘砂質土
3　濃茶褐色粘砂質土（黄褐色土混）

P12-270
1　茶褐色砂質土
2　暗茶褐色粘砂質土

P107
1　暗茶褐色粘砂質土（黄褐色土混）
2　暗褐色粘質土

P209
1　暗茶褐色粘砂質土（黄褐色土混）
2　暗褐色粘質土

P243
1　黒褐色粘砂質土
2　黒褐色粘砂質土（1に比べて明るい）

P208
1　暗茶褐色粘砂質土
2　暗茶褐色粘質土

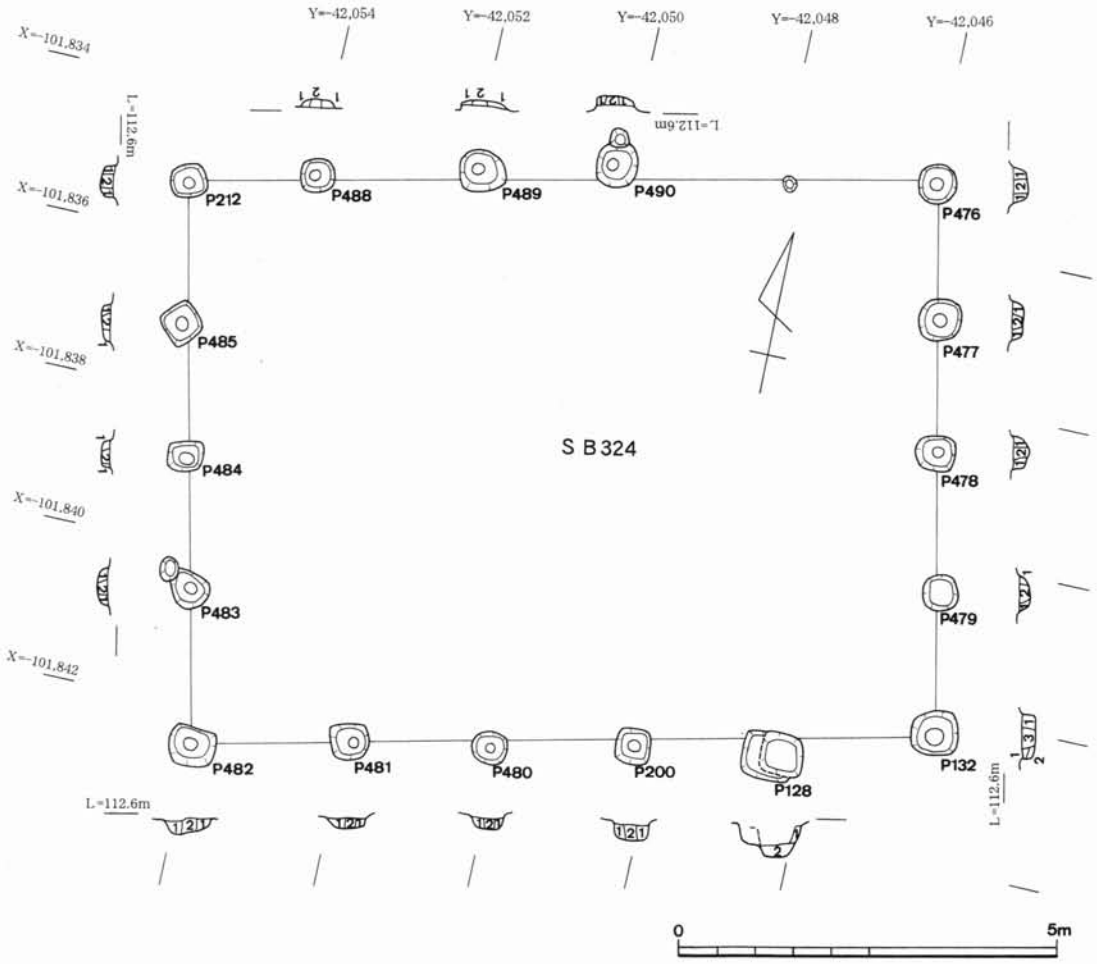
P244
1　暗茶褐色粘砂質土
2　暗褐色粘砂質土

P12-268
1　茶褐色砂質土
2　暗茶褐色粘砂質土
3　濃茶褐色粘砂質土（黄褐色土混）

P12-44
1　茶褐色砂質土
2　茶褐色砂質土（黄褐色土混）
3　暗茶褐色粘質土
4　濃茶褐色粘砂質土（黄褐色土混）

P12-45
1　茶褐色砂質土
2　暗茶褐色粘砂質土
3　茶褐色砂質土（黄褐色土混）

第82図　掘立柱建物跡ＳＢ12－511実測図



P 476
1 暗褐色粘砂質土（黄褐色を多く含む）
2 黒褐色粘砂質土

P 477
1 暗褐色粘砂質土（黄褐色を多く含む）
2 黒褐色粘砂質土

P 478
1 暗茶褐色粘質土
2 暗褐色粘砂質土

P 479
1 黒褐色粘砂質土（黄褐色土粒混）
2 黒褐色粘砂質土
3 暗黄褐色粘砂質土（ブロック混）

P 132
1 暗褐色砂質土
2 暗褐色砂質土（黄褐色土混）
3 黒褐色砂質土

P 128
1 黒褐色粘砂質土
2 暗茶褐色砂質土

P 200
1 暗褐色粘砂質土
2 黒褐色粘砂質土

P 480
1 黒褐色粘砂質土（黄褐色土混）
2 褐色粘砂質土

P 481
1 黒褐色粘砂質土
2 暗茶褐色粘砂質土

P 482
1 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）
2 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）

P 483
1 暗黄褐色粘砂質土（暗褐色土混）
2 暗褐色粘砂質土（暗黄褐色土混）

P 484
1 黒褐色粘砂質土（黄褐色土混）
2 黒褐色粘砂質土

P 485
1 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）
2 黒褐色粘砂質土（黄褐色土混）

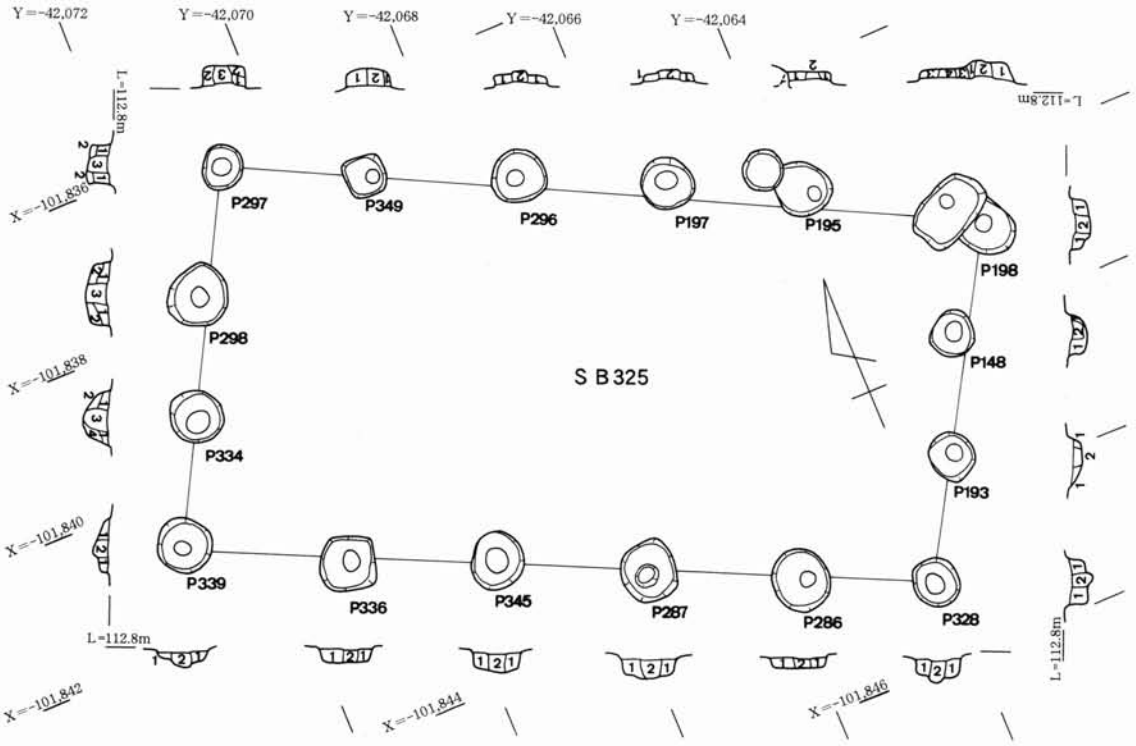
P 212
1 黒褐色粘質土
2 黒褐色粘質土（黄褐色粒を含む）
3 黒褐色粘砂質土（黄褐色土を含む）

P 488
1 茶褐色粘砂質土
2 暗茶褐色粘砂質土

P 489
1 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）
2 黒褐色粘砂質土

P 490
1 黒褐色粘質土（黄褐色土混）
2 黒褐色粘質土

第83図　掘立柱建物跡ＳＢ324実測図



P 297
1　暗褐色粘砂質土
2　暗黄褐色粘砂質土（暗褐色土混）
3　暗褐色粘質土

P 349
1　暗褐色粘砂質土
2　暗灰褐色粘砂質土

P 296
1　暗褐色粘砂質土
2　暗褐色粘質土

P 197
1　暗褐色粘質土（黄褐色土混）
2　暗茶褐色粘質土

P 195
1　暗褐色粘砂質土
2　暗茶褐色粘砂質土

P 198
1　暗茶褐色粘砂質土
2　暗褐色粘砂質土
3　黒灰褐色粘砂質土
4　暗褐色粘砂質土

P 148
1　暗茶褐色粘砂質土
2　暗褐色粘砂質土

P 193
1　暗褐色粘砂質土
2　黒褐色粘砂質土

P 328
1　暗褐色粘砂土（黄褐色土混）
2　暗褐色粘砂質土（1に比べて黒い）

P 286
1　黒褐色粘砂質土
2　暗褐色粘砂質土

P 287
1　暗褐色粘砂質土
2　暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）

P 345
1　暗褐色砂質土
2　暗褐色粘砂質土

P 336
1　暗褐色粘砂質土（黄色土粒混）
2　黒褐色粘砂質土

P 339
1　暗褐色砂質土
2　暗茶褐色粘砂質土

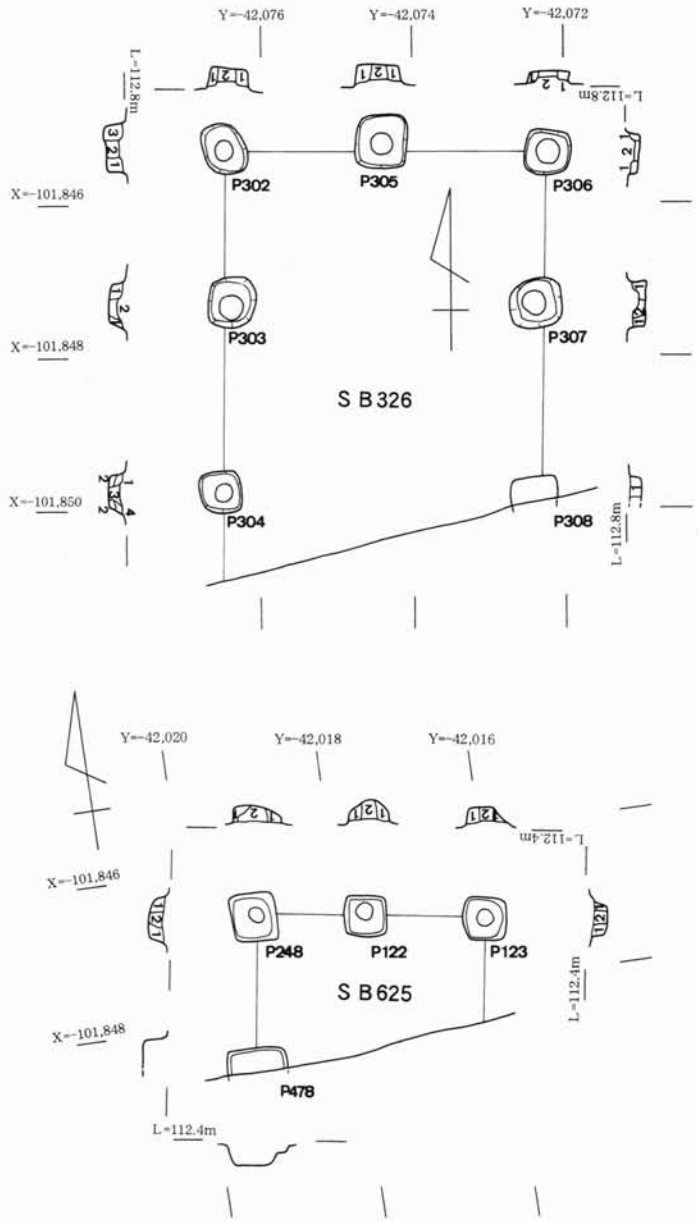
P 334
1　暗褐色砂質土
2　暗褐色粘砂質土（黄色混）
3　暗褐色粘砂質土
4　暗茶褐色粘砂質土

P 298
1　暗褐色粘砂質土
2　暗褐色粘質土（黄褐色土混）
3　暗褐色粘砂質土（黄褐色粒を含む）

第84図　掘立柱建物跡ＳＢ325実測図

334・339・336・345・287の16か所である。

掘立柱建物跡ＳＢ326（第85図）　南北棟の建物で、南部が調査区外にのびるため建物規模は不明である。東西方向は２間、南北３間以上の規模である。桁行は2.1m前後、梁間は2.1～2.4m前後である。建物の軸は北で１°東に振る。調査区内で検出できた柱穴はＰ302～308の７か所である。



P306
1 黒褐色砂質土（黄褐色土混）
2 黒褐色粘砂質土（黄褐色土混）

P307
1 黒褐色粘砂質土

P308
2 黒褐色粘砂質土（黄褐色土混）
1 黒褐色粘質土

P304
1 暗褐色砂質土
2 暗灰褐色粘砂質土
3 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）
4 暗褐色砂質土（黄褐色土混）

P303
1 暗茶褐色粘砂質土（黄褐色ブロック混）
2 暗褐色粘砂質土（黄褐色ブロック混）

P302
1 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）
2 黒褐色粘質土（黄褐色土混）
3 黒褐色粘砂質土

P305
1 黒褐色礫混粘砂質土
2 黒褐色礫粘質土

P123
1 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）
2 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）

P122
1 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）
2 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）

P248
1 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）
2 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）

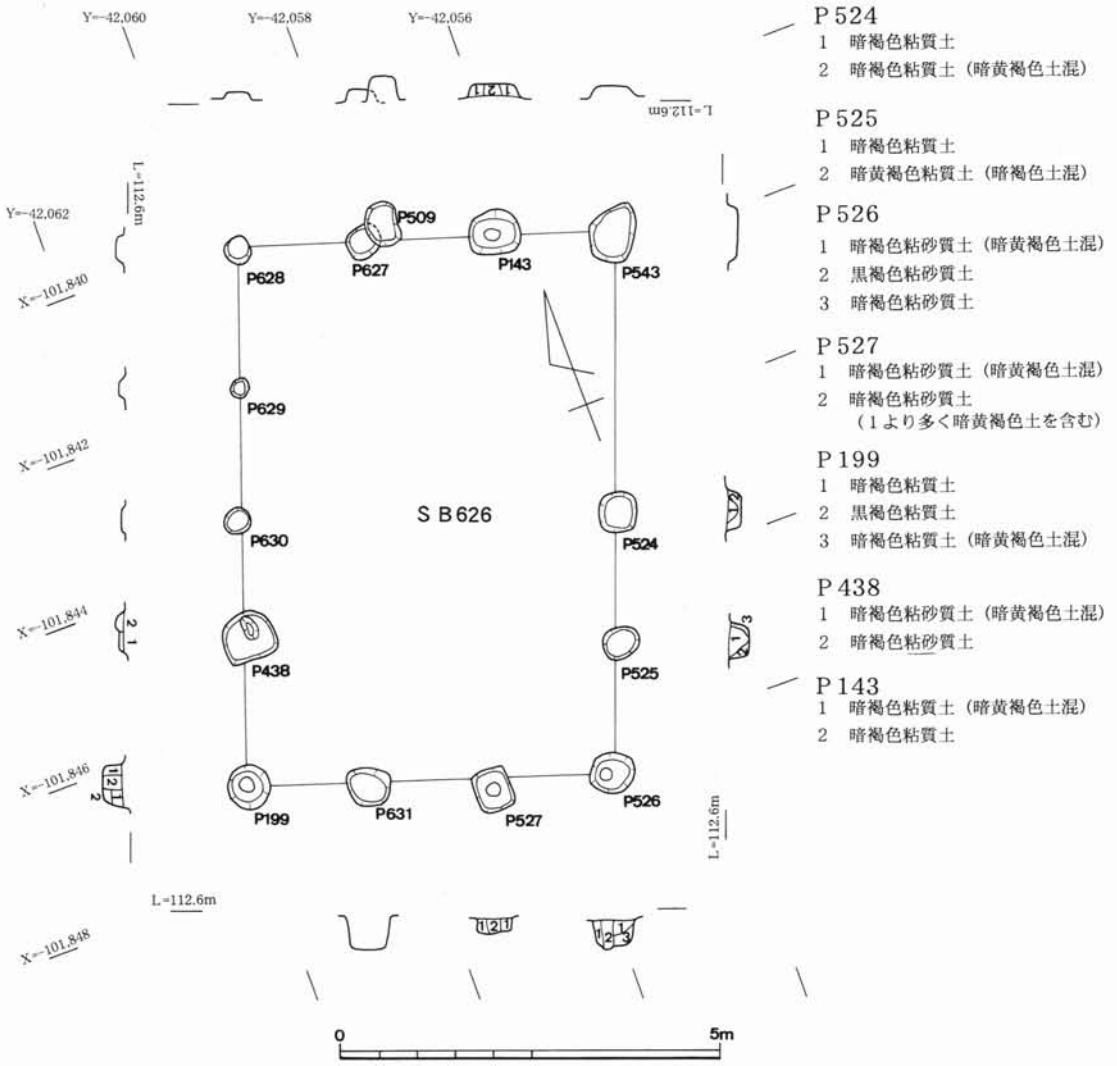
0 5m

第85図　掘立柱建物跡ＳＢ326・625実測図

掘立柱建物跡ＳＢ625（第86図）　大半が調査区外にのびると考えられる掘立柱建物跡で、東西２間、南北２間以上の規模を持つ。東西方向の柱間約1.5m、南北方向約２m以上である。建物の軸は北で10°東に振る。調査区内で検出できた柱穴は、Ｐ122・123・248・498の４か所である。

掘立柱建物跡ＳＢ626（第86図）　東西方向３間、南北方向４間の掘立柱建物跡である。建物の軸は北で20°東に振る。柱間は1.8m前後である。柱掘形の検出面における形状は、方形と円形のものが混在するが、北側の柱掘形に円形のものが多い。方形の柱穴は概ね一辺が0.5mで、円形のものは直径0.3mである。

掘立柱建物跡ＳＢ632（第87図）　２間×３間の総柱建物跡である。建物の軸は北で17°西に振る。調査区内で検出できた柱穴は、Ｐ407・634～641の９か所が検出できた。古墳時代として位置づけたが、柱穴は直径0.25mと小さく平安時代の建物に似る。



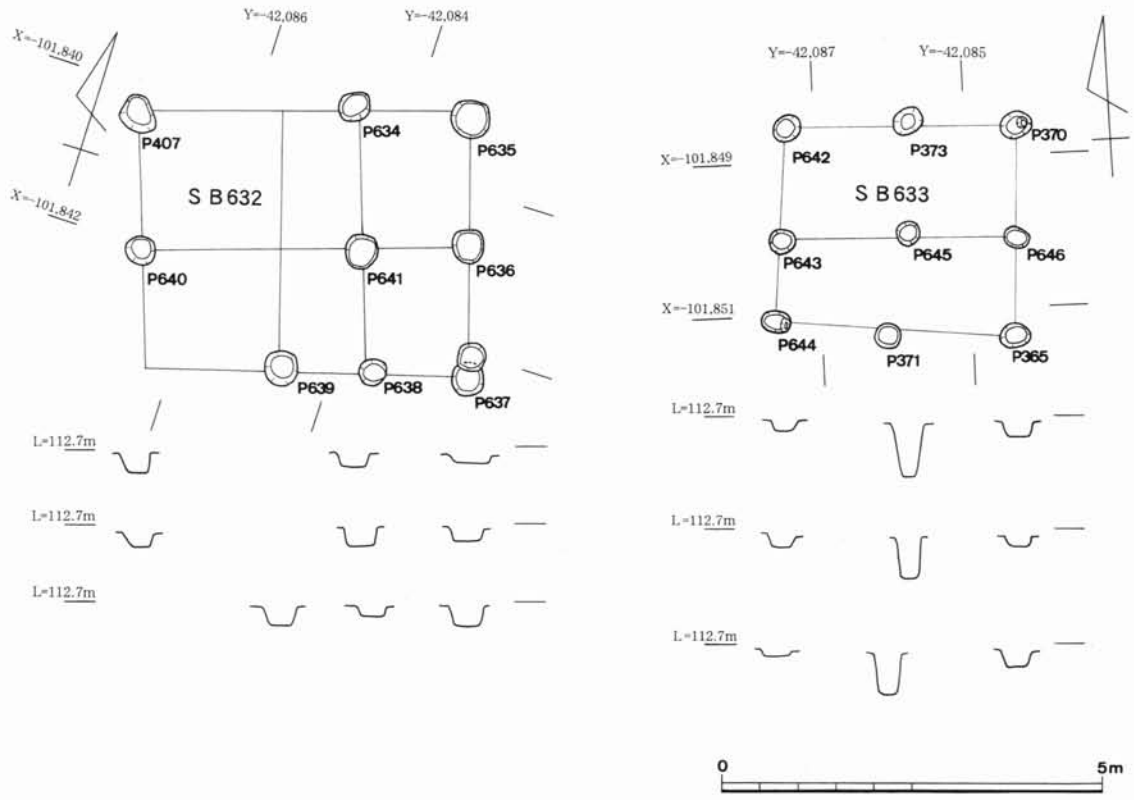
第86図　掘立柱建物跡ＳＢ626実測図

掘立柱建物跡ＳＢ633(第87図)　２間×２間の総柱建物跡である。建物の軸は北で２°東に振る。調査区内で検出できた柱穴は、Ｐ365・370・371・373・642～646の９か所が検出できた。古墳時代として位置づけたが、柱穴は直径0.2ｍと小さく平安時代の建物に似る。

竪穴式住居跡ＳＨ12－516(第76図)　第12次調査で北半部が検出された竪穴式住居跡の南半部である。住居の南辺は、重機掘削深度がやや深かったことと、下層にある弥生時代の溝ＳＤ12－01の存在によって明確には確認できなかった。そのため、出土遺物には下層遺物との混在が認められる。住居の南北方向の規模は４ｍと推測され、東西方向は４ｍで、検出面からの深さは0.2ｍである。

竪穴式住居跡ＳＨ12－517(第88図)　第12次調査で北半部が検出された竪穴式住居跡の南半部である。住居の方向は真北に対して角度をなす。住居の規模は６×６ｍで、検出面からの深さは0.2ｍである。

竪穴式住居跡ＳＨ12－534(第89図)　第12次調査の概報では未報告の住居跡である。遺構検出の初期段階では部分的に検出されていたが、遺構が複雑なため前後関係確認のため精査を繰り返



第87図　掘立柱建物跡ＳＢ632・633実測図

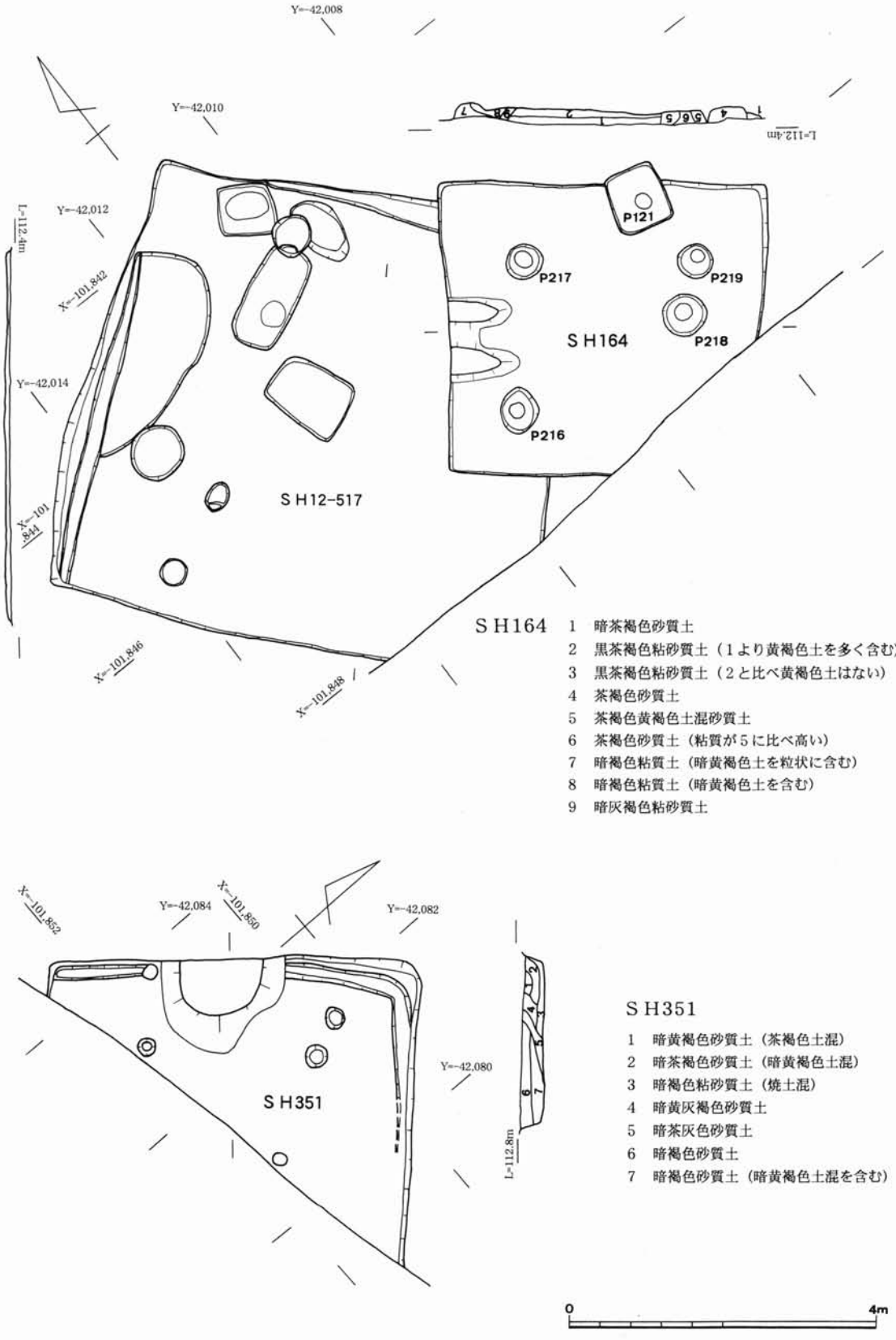
した結果、正確な検出が不可能となった。今回の調査区では比較的残存状態がよかったため、新たに認識し報告する。番号は第12次調査平板実測時の番号を踏襲する。住居跡は今回の調査区でも西側ほど残りがよかった。住居の南北方向の規模は2.8m以上で、東西方向は６ｍと推測され、検出面からの深さは0.1mである。

竪穴式住居跡ＳＨ12－540（第76図）　今回調査したのは第12次調査区で検出した竪穴式住居跡の南東、北東隅部にあたる。住居の南北方向の規模は6.4m、東西方向は6.4m、検出面からの深さは0.2mである。第12次調査の概報ではＳＨ562と遺構規模が入れ替わっている。

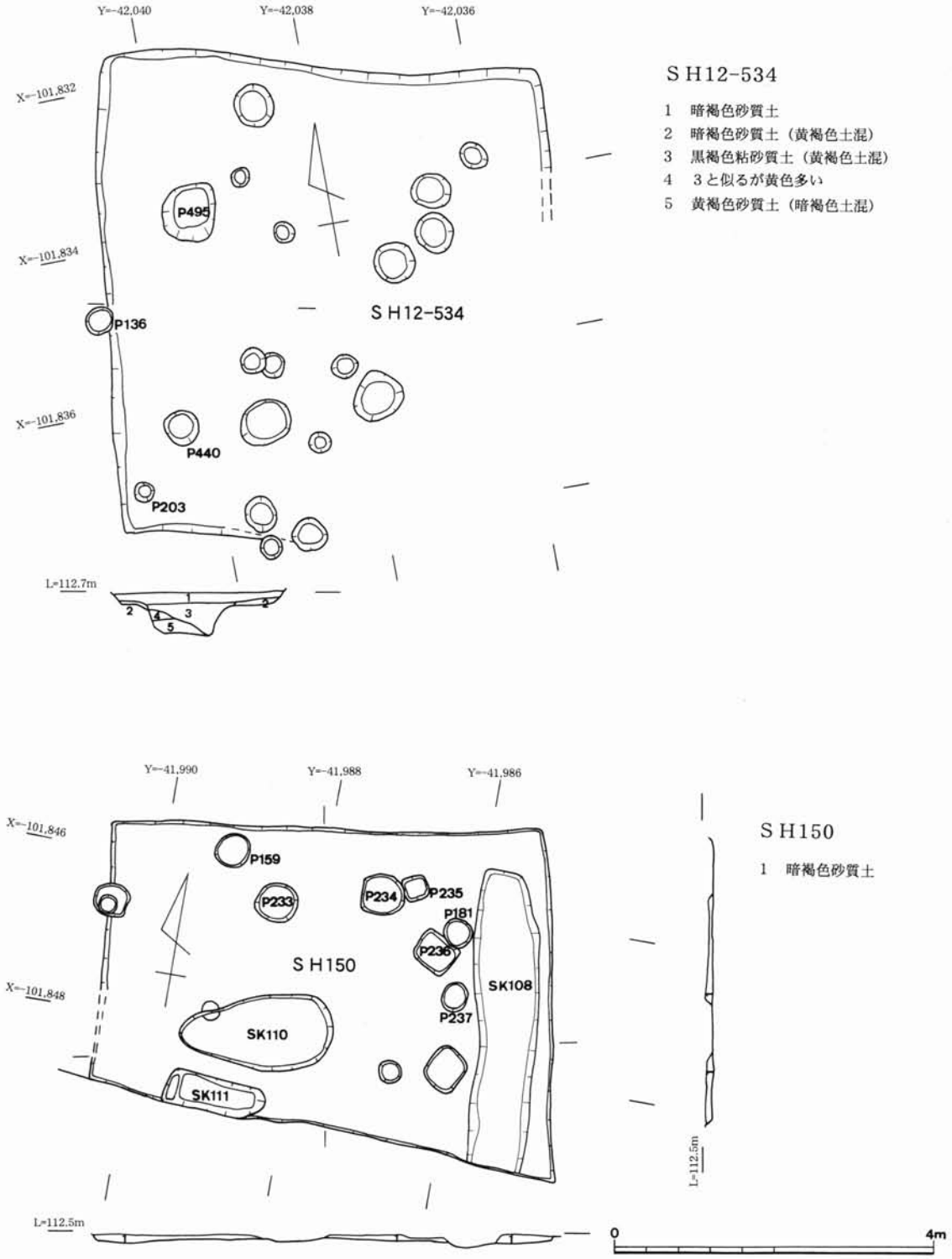
竪穴式住居跡ＳＨ150（第89図）　南辺が調査区外となる竪穴式住居跡である。竈跡、周壁溝は検出できなかった。東辺に沿って床面で検出した溝状の土坑ＳＫ108は竪穴式住居跡に伴う施設と考えられる。住居の南北方向の規模は4.5m以上、東西方向は5.4m、検出面からの深さは0.1mである。

竪穴式住居跡ＳＨ152（第90図）　北隅部分が検出された竪穴式住居跡である。ＳＨ153と重複し、先行する遺構である。ＳＨ153に比べ床面が低いため、ＳＨ153床面で重複部分が検出できた。住居の北東辺の規模は４ｍ以上、北西辺は5.2m以上、検出面からの深さは0.3mである。

竪穴式住居跡ＳＨ153（第90図）　南辺部が調査区外になる竪穴式住居跡で、重なり合う３棟の住居跡では最も新しい。潰れた竈跡が北辺中央部に検出できた。竈中央部には支柱として使われた破損した須恵器の高杯が、天地を逆にして据えられていた。床面で検出した土坑ＳＫ225は北辺と東辺が住居のそれらと共有していることから、住居に伴う施設と考えられる。住居の南北方



第88図　竪穴式住居跡ＳＨ12－517・164・351実測図

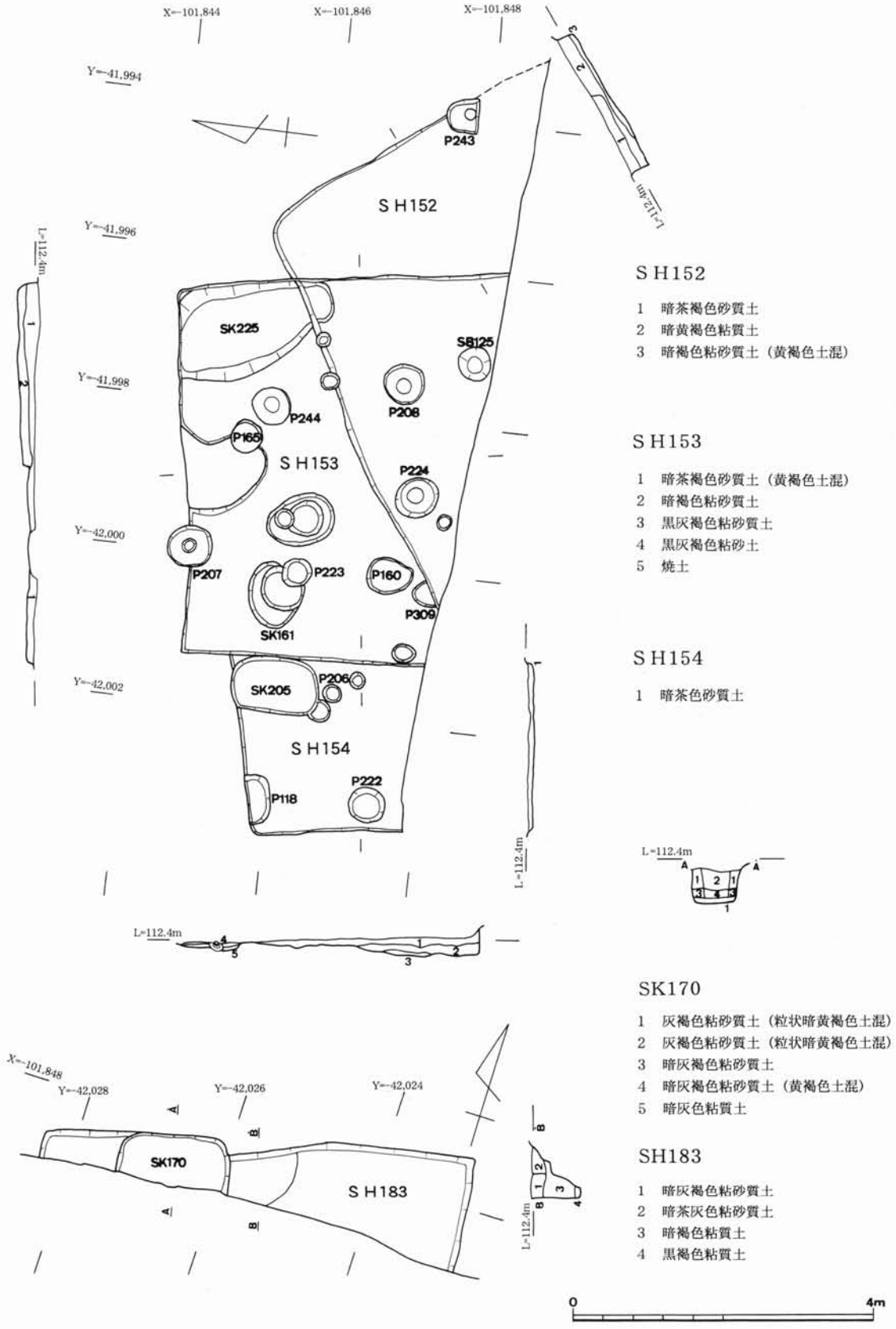


第89図　竪穴式住居跡ＳＨ12－534・150実測図

向の規模は4.5m以上、東西方向は５ｍ、検出面からの深さは0.15mである。

竪穴式住居跡ＳＨ154（第90図）　ＳＨ153に先行する竪穴式住居跡であるが、ＳＨ153の床面がＳＨ154に比べ低いため、削平され東部は検出できなかった。検出面からの高さは0.1mである。

竪穴式住居跡ＳＨ164（第88図）　真北に対して45°の角度を持つ住居跡で、南隅は調査区外となる。北西辺中央部分には、内側に向かって開く馬蹄形の竈基底部が認められる。竈中央部には支



S H152

1　暗茶褐色砂質土
2　暗黄褐色粘質土
3　暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）

S H153

1　暗茶褐色砂質土（黄褐色土混）
2　暗褐色粘砂質土
3　黒灰褐色粘砂質土
4　黒灰褐色粘砂土
5　焼土

S H154

1　暗茶色砂質土

SK170

1　灰褐色粘砂質土（粒状暗黄褐色土混）
2　灰褐色粘砂質土（粒状暗黄褐色土混）
3　暗灰褐色粘砂質土
4　暗灰褐色粘砂質土（黄褐色土混）
5　暗灰色粘質土

SH183

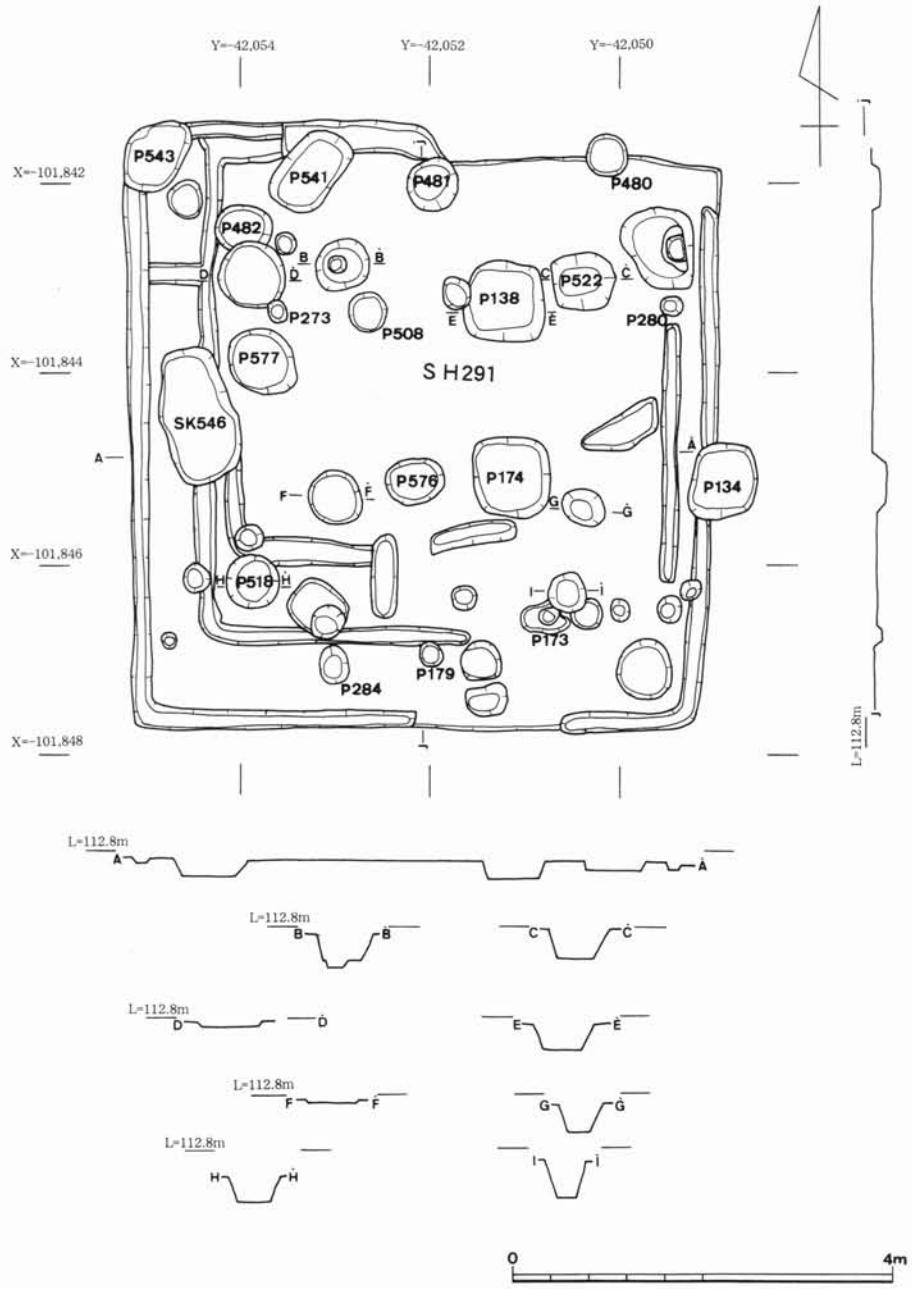
1　暗灰褐色粘砂質土
2　暗茶灰色粘砂質土
3　暗褐色粘質土
4　黒褐色粘質土

第90図　竪穴式住居跡S H152・153・154・183実測図

柱として使われた破損した須恵器の高杯が、天地を逆にして据えられていた。北西辺、南西辺には周壁溝が確認できた。P216・218・219が支柱穴にあたる。住居の規模は4.1m×3.7mで、検出面からの深さは0.2mである。

竪穴式住居跡ＳＨ169(第75図)　非常に大型の竪穴式住居跡ではあるが、残存状態が非常に悪いため、第12次調査区では確認できなかった。遺物が少ないため時期の特定はできない。住居の南北方向の規模は8.5m、東西方向は8.5m、検出面からの深さは0.05mである。

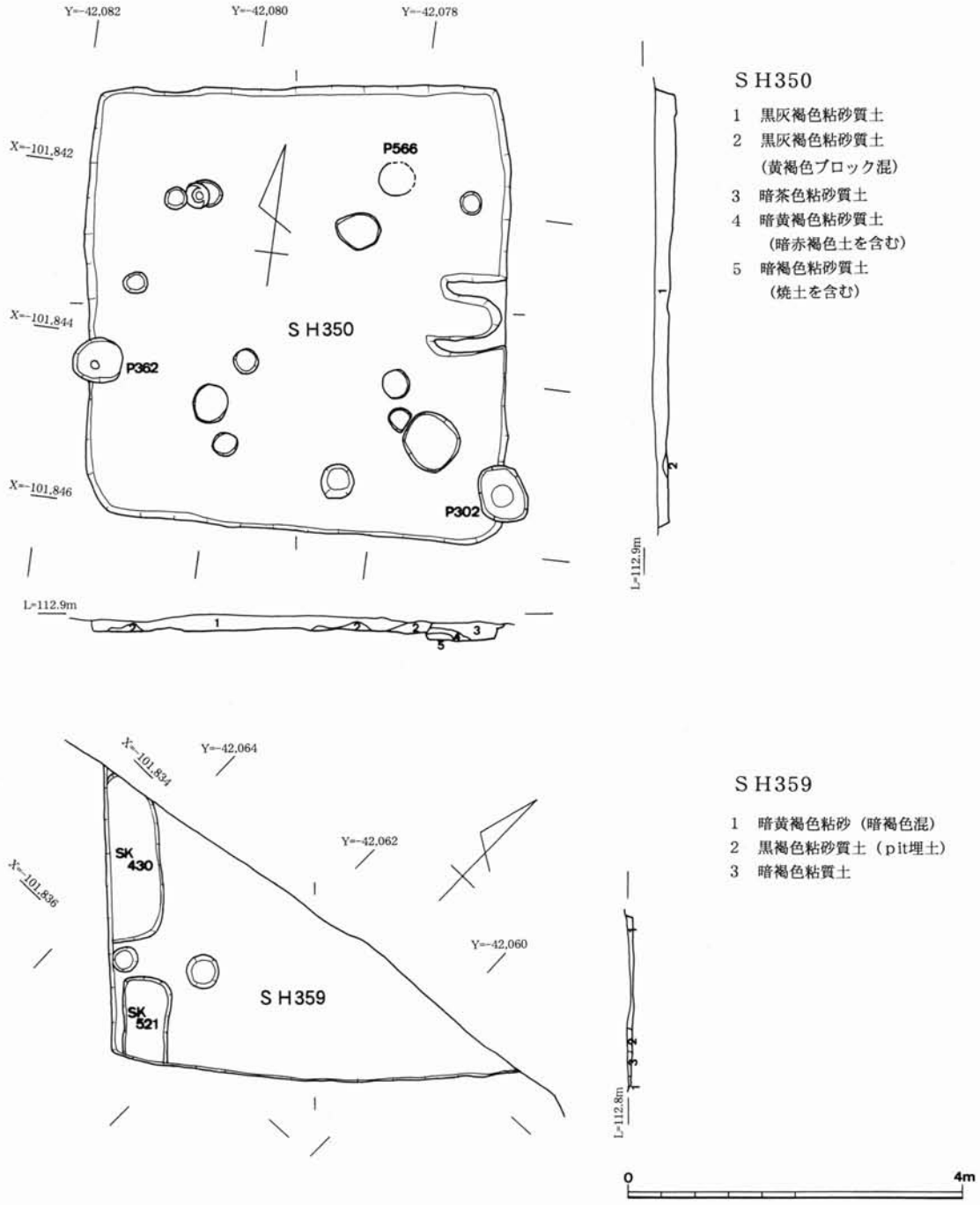
竪穴式住居跡ＳＨ183(第90図)　北辺部のみが調査区内で検出した竪穴式住居跡である。北辺部中央には竈の痕跡と考えられる焼土が認められたが、形状などは判らなかった。住居の南北方向の規模は1.5m以上、東西方向は5.5m、検出面からの深さは0.2mである。



第91図　竪穴式住居跡ＳＨ291実測図

竪穴式住居跡ＳＨ291（第91図）　周壁溝がめぐる竪穴式住居跡である。竪穴部立ち上がりはほとんどなく、検出面がほぼ床面であった。平面形は方形に近いが北辺の中央から西側にかけて一様に張り出す。この位置まで周壁溝は続く。溝は三重にめぐるが、溝どうしを繋ぐ溝もあり、一般的に見られる住居建て替えに伴う状況とは考えにくいことから特殊な施設を持った住居跡として位置づけられる。また、竈跡は検出できなかったが、北辺内側に焼土が若干認められた。住居の南北方向の規模は6.3m、東西方向は6.2m、検出面からの深さは0.03mである。

竪穴式住居跡ＳＨ350（第92図）　東辺中央部に竈を持つ、方形の住居跡である。竈は内側に馬蹄形状に開く形状が見られた。住居の南北方向の規模は5.2m、東西方向は5.1m、検出面からの



第92図　竪穴式住居跡ＳＨ350・359実測図

深さは0.25mである。

竪穴式住居跡ＳＨ351(第88図)　周壁溝を持つ方形の竪穴式住居跡で、北半部は調査区外にのびる。竈は完全に潰れており形状がはっきりしなかった。出土遺物から古墳時代中期の遺構と考えられ、韓式土器も含まれる。住居の規模は南西辺4.9m、北東辺3.8m以上で、検出面からの深さは0.3m、床面から周壁溝の深さは0.1mである。

竪穴式住居跡ＳＨ356(第74図)　調査区内で南隅部だけが検出できたプランが方形と考えられる住居跡である。多くの古墳時代遺物を含むＳＫ468に先行するが、出土遺物に明確な時期差は認められない。検出面からの深さは0.3mである。

竪穴式住居跡ＳＨ359(第92図)　調査区内で南隅部が検出できた方形プランの住居跡である。床面では南西辺に取り付いて土坑ＳＫ430、ＳＫ521が検出されている。住居に伴う施設と考えられる。また、支柱穴が１か所検出されている。検出面からの深さは0.05mである。ＳＫ430は長さ２m、幅0.8m、床面からの深さ0.2mを測る。ＳＫ521は長さ１m、幅0.5m、床面からの深さ0.1mを測る。

溝ＳＤ451(第74図)　ＳＨ351の北側を円弧を描くように二重に囲む溝の１つである。柱穴に切られている部分も多く、出土遺物からの時期認定は若干問題を含むが、古墳時代と位置づけた。検出面からの深さは0.1mを測る。

溝ＳＤ453(第74図)　ＳＤ458延長部にあたると考えられる溝である。古墳時代の遺物を若干含む。検出面からの深さは0.1mを測る。

溝ＳＤ471(第75図)　ＳＨ291の東側で検出した溝である。当初は方形周溝墓の周溝の一部と考えたが、埋土の状態が弥生時代のものと異なることと、掘り進むにつれ２条に分かれたことから、周溝墓との関係はないことがわかった。この２条に分かれた溝のうち、東側の溝がＳＤ471になる。検出面からの深さは1.5mを測る。

溝ＳＤ472(第75図)　ＳＤ471に平行する溝である。検出面からの深さは1.5mを測る。

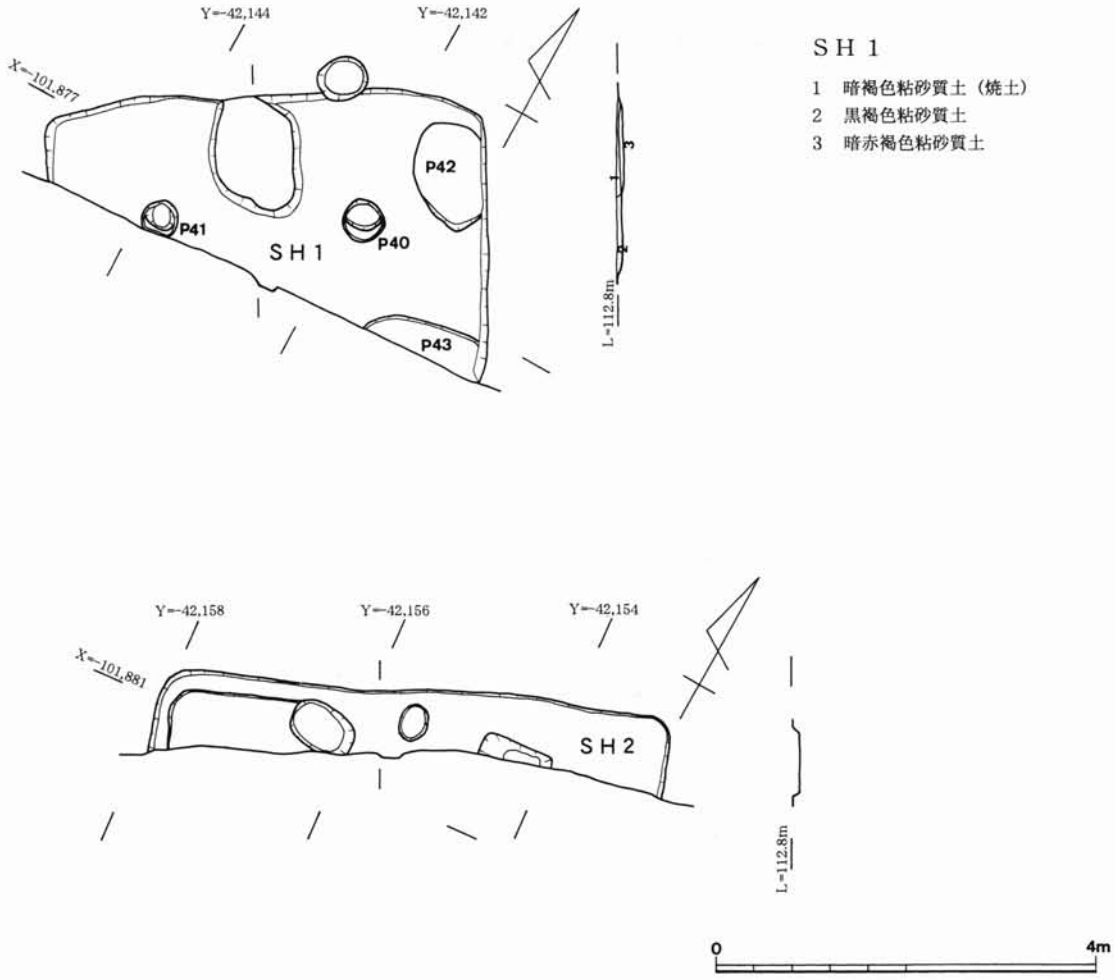
溝ＳＤ568(第74図)　ＳＤ451の内側に沿ってつくられた溝である。柱穴に切られている部分も多く、出土遺物からの時期認定は若干問題を含むが、古墳時代と位置づけた。検出面からの深さは0.1mを測る。

土坑ＳＫ364(第75図)　東地区中央部分で検出した土坑である。平面形は検出面では隅丸方形であったが、掘り進むにつれ中央部が円形にくぼんだ。井戸跡とも考えられたが、浅く湧水層にまでは達していなかった。長さ2.1m、幅1.9m、検出面からの深さは0.7mを測る。

土坑ＳＫ468(第74図)　ＳＨ356と重複して検出された土坑である。この土坑は後に作られた。直径１m、検出面からの深さは0.45mを測る。出土遺物は遺構の規模に比べ多い。

土坑ＳＫ413(第75図)　調査区北辺で検出した円形の土坑である。直径２m、検出面からの深さは0.2mを測る。

土坑ＳＫ531(第75図)　大半が調査区外になる遺構で、検出面での形状は竪穴式住居跡の検出状況に似る。床面が不整形なため土坑として位置づけた。検出面からもっとも深い部分で0.25m



第93図　竪穴式住居跡ＳＨ１・２実測図

を測る。

土坑ＳＫ450（第75図）　大半が調査区外になる遺構で、検出面での形状は竪穴式住居跡の検出状況に似る。竪穴部分の立ち上がりが斜めになることや、床面が不整形なため土坑として位置づけた。東西幅５ｍ、南北1.5m以上、検出面からもっとも深い部分で0.7ｍを測る。

土坑ＳＫ491（第75図）　東区の北側で検出された不定形の土坑である。奈良時代の掘立柱建物跡ＳＢ322の柱穴との前後関係から奈良時代より古いことがわかり、遺物から古墳時代のものと考えられる。

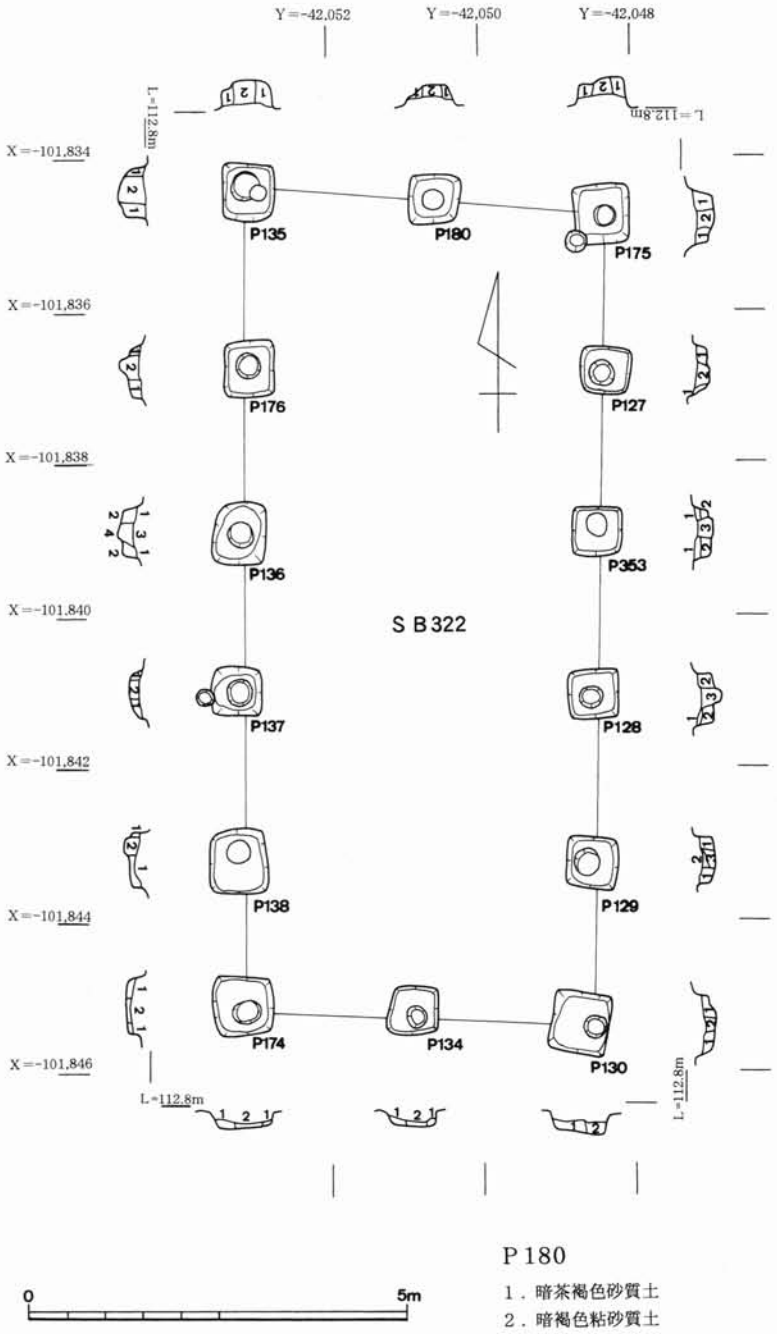
西地区

竪穴式住居跡ＳＨ１（第93図）　西地区で検出した竪穴式住居跡である。北辺に竈を持つ。北西方向4.6m、南東方向３ｍ以上、検出面からの深さ0.1ｍを測る。

竪穴式住居跡ＳＨ２（第93図）　西地区で検出した竪穴式住居跡である。北西方向5.4ｍ、南東方向0.9m以上、検出面からの深さ0.1ｍを測る。

③奈良時代

掘立柱建物跡ＳＢ322（第94図）　長軸方向が南北を向く、２間×５間の方形柱掘形を持つ掘立柱建物跡である。柱掘形の一辺は0.4ｍ前後である。主軸は北で２°東に振る。柱掘形はＰ127～



P175
1 暗褐色礫混粘砂質土（黄褐色土混）
2 暗褐色粘質土

P127
1 暗黄褐色粘砂質土（暗褐色土混）
2 黒褐色粘砂質土

P353
1 暗茶褐色粘砂質土
2 暗褐色粘砂質土
3 暗褐色粘質土

P128
1 淡茶褐色砂質土
2 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）
3 暗褐色粘質土

P129
1 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）
2 暗褐色粘質土
3 暗褐色粘質土（黄褐色土混）

P130
1 暗茶褐色粘砂質土
2 暗褐色粘質土

P134
1 暗茶褐色砂質土
2 暗褐色砂質土

P174
1 暗茶褐色粘砂質土
2 暗褐色粘質土

P138
1 暗褐色粘砂質土
2 黒褐色粘質土（黄色土粒を含む）

P137
1 暗褐色粘砂質土（黄褐色土混）
2 黒褐色粘質土

P136
1 暗褐色粘砂質土
2 暗黄褐色礫混粘砂質土（暗褐色土混）
3 黒褐色粘質土
4 黄褐色砂混粘質土

P176
1 暗茶褐色粘砂質土（暗黄褐色土混）
2 暗褐色粘質土

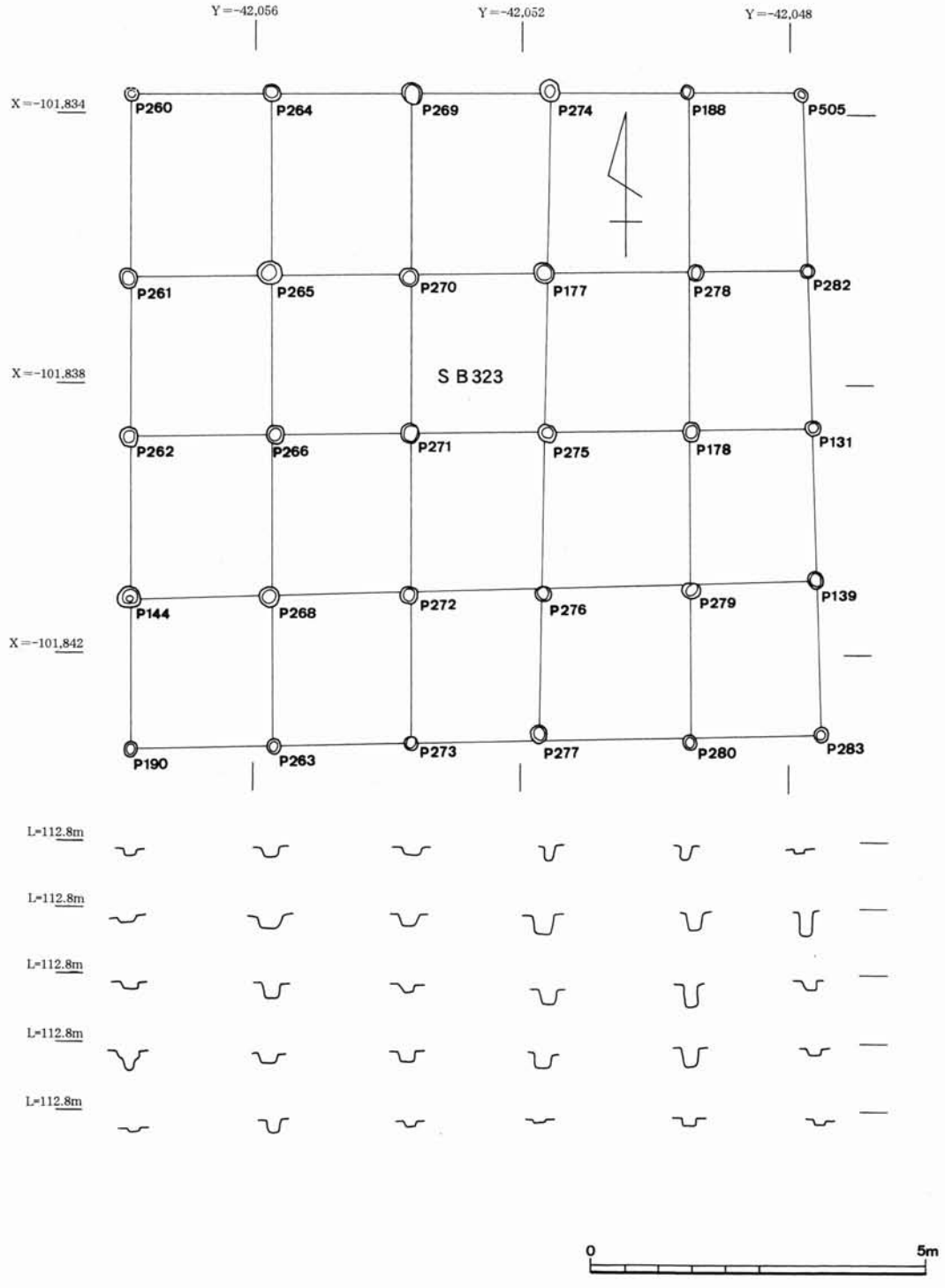
P135
1 暗褐色礫混粘砂質土
2 暗褐色粘質土（黄褐色土混）

P180
1．暗茶褐色砂質土
2．暗褐色粘砂質土

第94図　掘立柱建物跡ＳＢ322実測図

130・134～138・174・175・176・180・353の14か所が検出されている。出土遺物から奈良時代前半に位置づけられ、第12次調査のＳＢ12－505と同じ時期に位置づけられる。

井戸ＳＥ133(第80図)　平面形が正方形の掘形を持つ井戸である。掘削の結果木枠の痕跡は確認できなかった。埋土中には人頭大の礫などが確認できた。井戸の検出面は黄褐色の砂質土層であったが、数10cm下でしまりの悪い礫層となる。図化した部分までは人力による掘削を行ったが、事故の恐れがあるため最終的に重機によって底を確認した。そのため図示した以下の土層断面図は存在しない。



第95図　掘立柱建物跡ＳＢ323実測図

溝ＳＤ428(第75図)　ほぼ南北方向を向く直線状の溝で北端は浅くなり、ＳＤ445との関係は不明瞭であった。出土遺物から奈良時代と位置づけた。溝は北で3°東に振っており、直線状を呈する。検出面からの深さは0.1mである。

隣接するＳＢ322とは出土遺物から同じ時代であることがわかり、遺構の計画軸もほぼ同じであることから関連した施設であると考えられる。

④平安時代以降

掘立柱建物跡ＳＢ323(第95図)　４間×５間の総柱の建物跡である。柱穴の径は約0.2mである。柱列はほぼ揃うが、柱間寸法は不ぞろいである。南北方向のほうが東西方向に比べ柱間寸法が長い傾向が見られる。出土遺物から11世紀の遺構と考えられる。

溝ＳＤ101(第76図)　調査区東部で検出した東西方向の溝である。途中途切れるが同一のものとして同じ遺構番号をつけた。第12次調査のＳＤ12－561と同一の溝である。埋土は淡黄灰色砂質土で平安時代の遺構と考えられる。溝は東で北に85°振る。検出面からの深さは0.2mである。出土遺物には白磁・近江系の緑釉などがある。

この遺構のある部分は南北で直線状に池上と刑部の２つの字に別れる場所であることから、条里関連の遺構であることが指摘できる。

溝ＳＤ117(第76図)　南北方向の溝で、埋土がＳＤ101と似る。ＳＤ101との関係は調査区外となるため確認できなかった。北端は削平のため浅くなって終了している。溝は北で西に５°振る。検出面からの深さは0.2mである。

⑤時期不明遺構

土坑ＳＫ365(第74図)　平面形が円形をした土坑で、断面や底部の円形の窪みから大型の柱が立てられていたものと考えられる。埋土の状態は少なくとも古墳時代以前の遺構であることを示していた。出土遺物がないため時期は不明である。

風倒木痕ＳＸ431(第74図)　ＳＴ601の墳丘上で検出した自然遺構である。検出面での形状は長方形に近いが、底部は深く、埋土の状況は地層が横倒しになった状況を示す。遺物は認められない。長軸方向は2.4m、短軸1.3m、検出面からの深さ0.8mを測る。

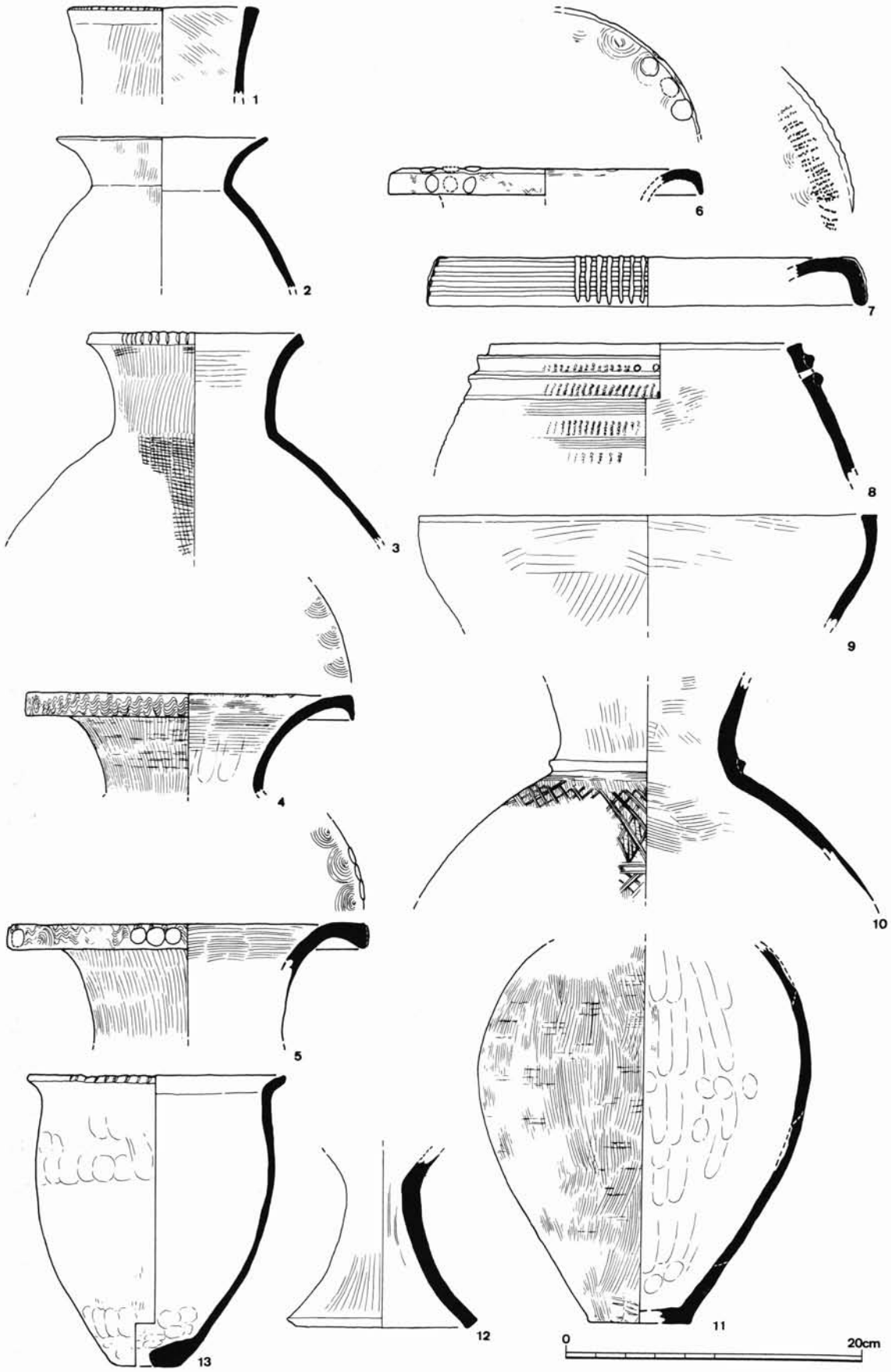
風倒木痕ＳＸ470(第75図)　平面形が長楕円形を呈する土坑であるが内部の形状は不整形である。また、堆積層は一般の遺構とは異なり同心円状に検出面では見られた。長軸の方向はＳＴ431と似る。長軸方向は４m以上、短軸1.5m、検出面からの深さ0.5mを測る。

Ｂ．出土遺物

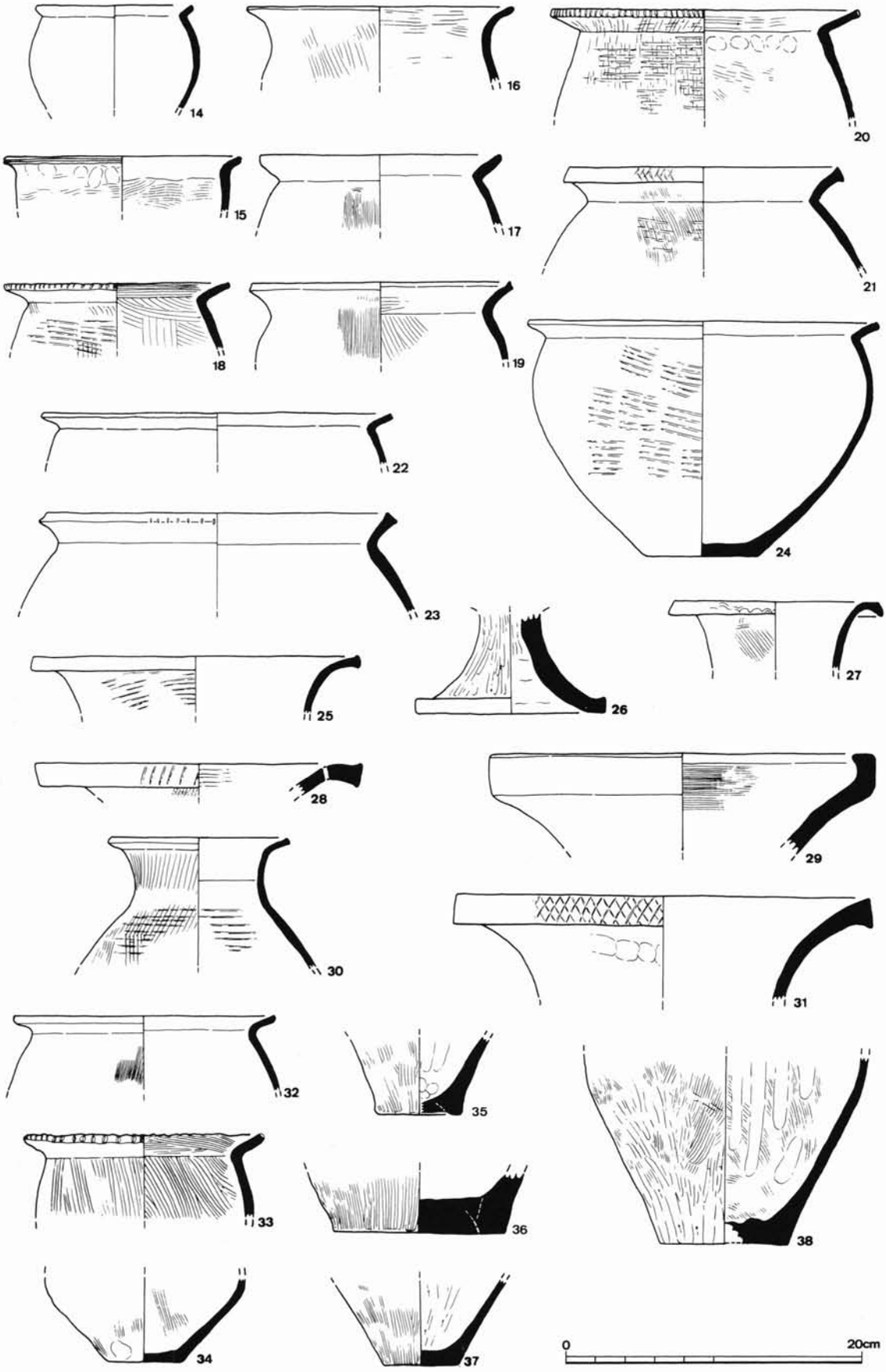
①土器

ａ．弥生時代

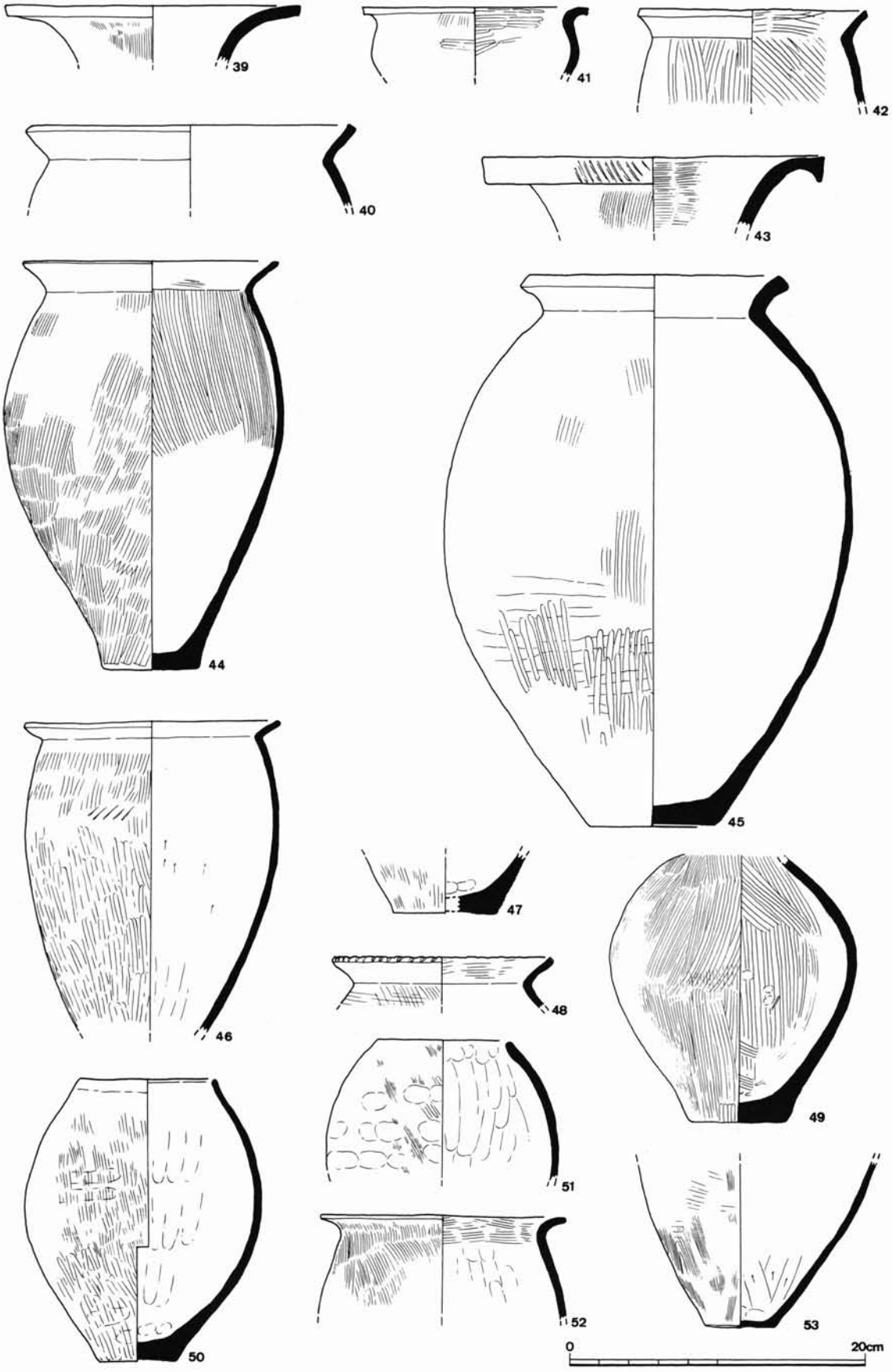
溝ＳＤ12－01(第96・97図１～24)　弥生時代中期の土器が出土している。１～９は壺である。１は直行壺の口縁部である。口縁端部には刻み目が施され、内外面ハケ調整である。２は短頸壺で、体部外面はタタキ後ハケ調整で、内面は不明である。３は壺で口縁端部にキザミ、外面はタタキ後ハケ、内面は不明である。４は広口壺口縁部で、口縁端面には波状文、口縁内面端には扇形文が施される。外面はタタキ後ハケ調整、内面はハケ調整である。外面の外反部にはハケが及ばずタタキが残る。５は広口壺口縁部で、口縁端面には波状文の後、円形浮文、口縁内面端には扇形文が施される。外面はハケ調整、内面もハケ調整である。６は広口壺口縁部で、口縁端面には波状文の後円形浮文、口縁内面端には扇形文と円形浮文が施される。外面はタタキ、内面はハケ調整である。７は大型の広口壺の口縁部である。口縁端面には凹線文が４条回り、それに直行するように７本の棒状浮文が施される。口縁内面には列点文が施される。調整は不明である。８



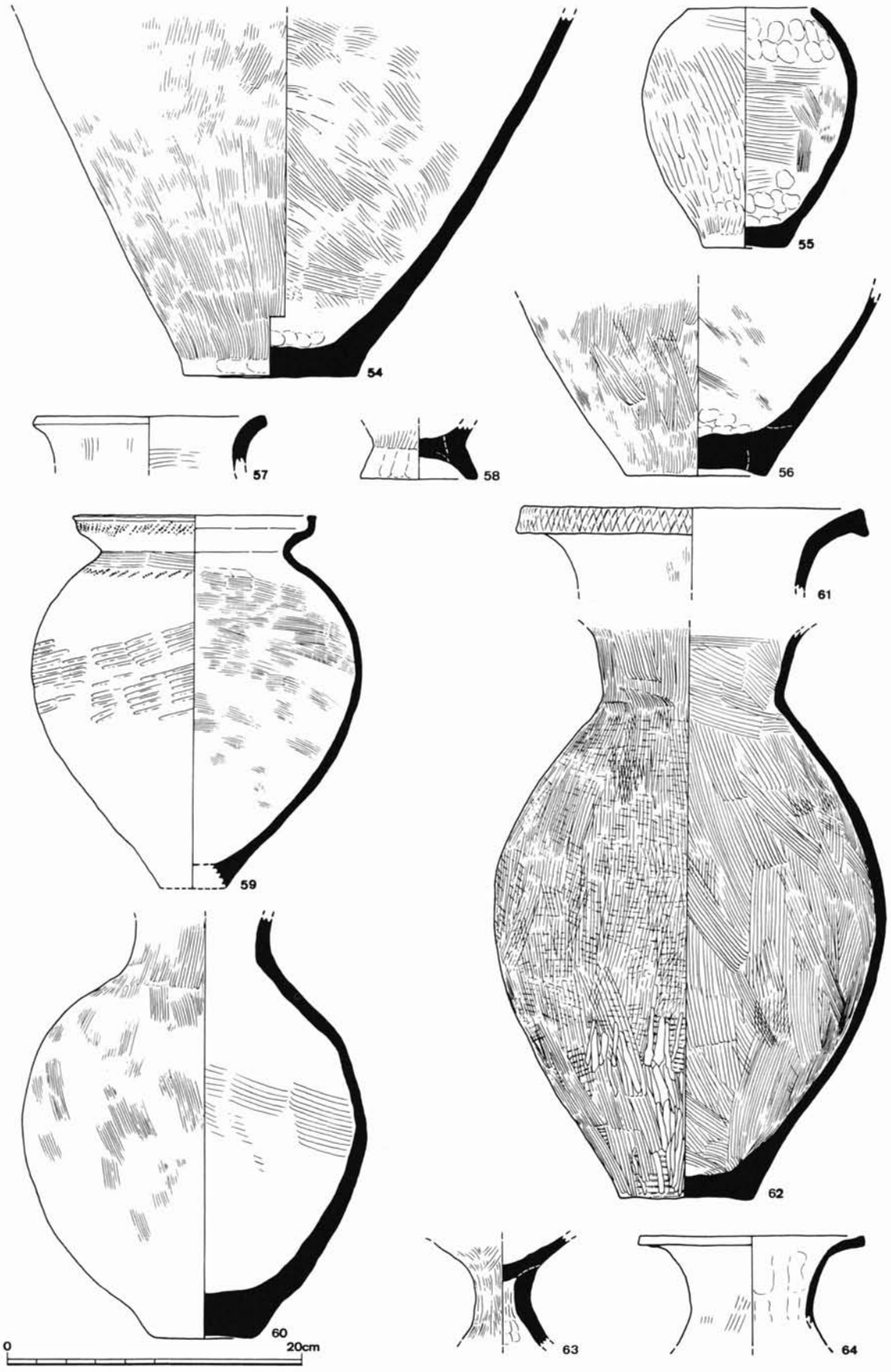
第96図　池上遺跡第13次調査出土弥生土器(1)



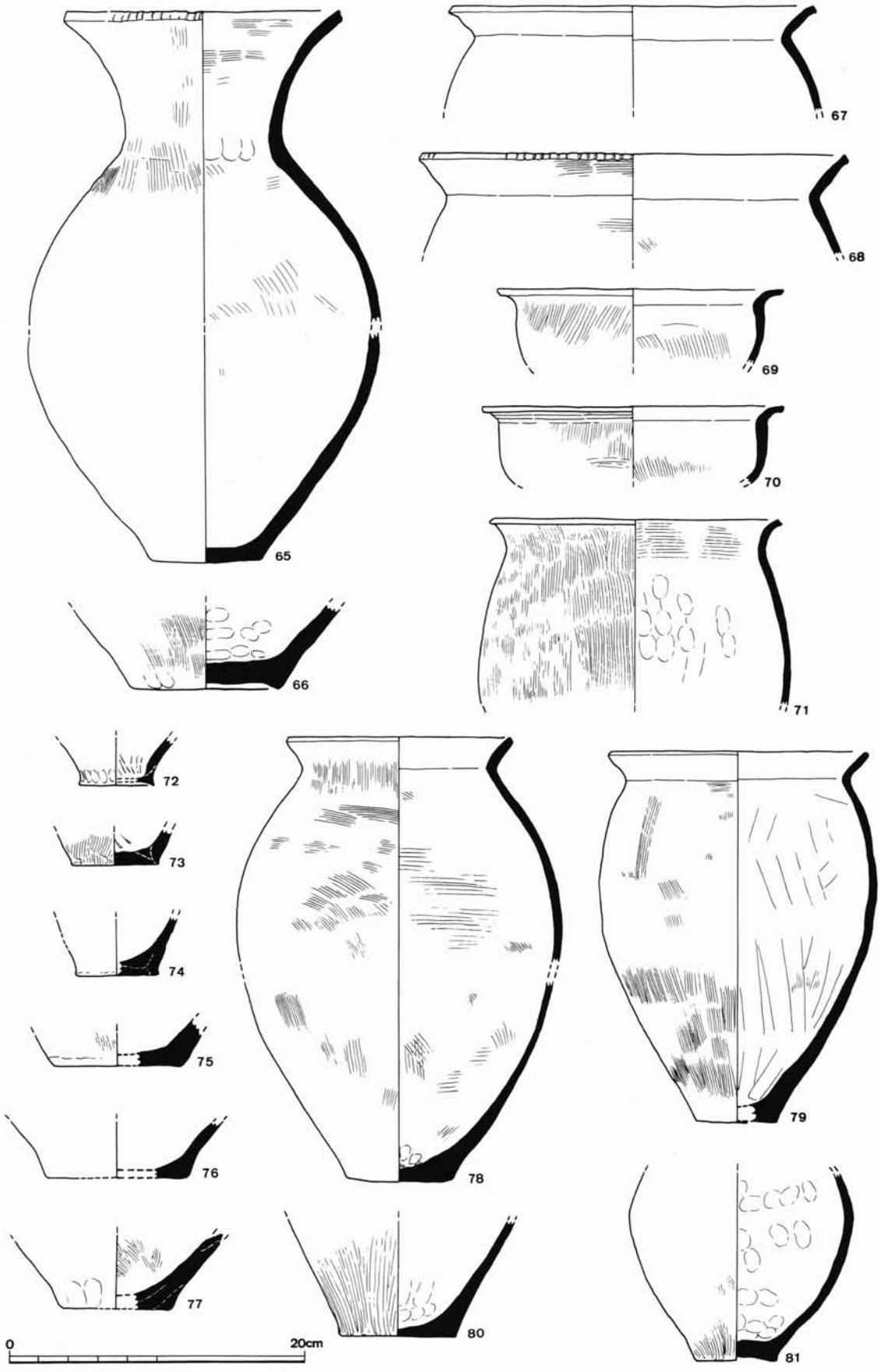
第97図　池上遺跡第13次調査出土弥生土器(2)



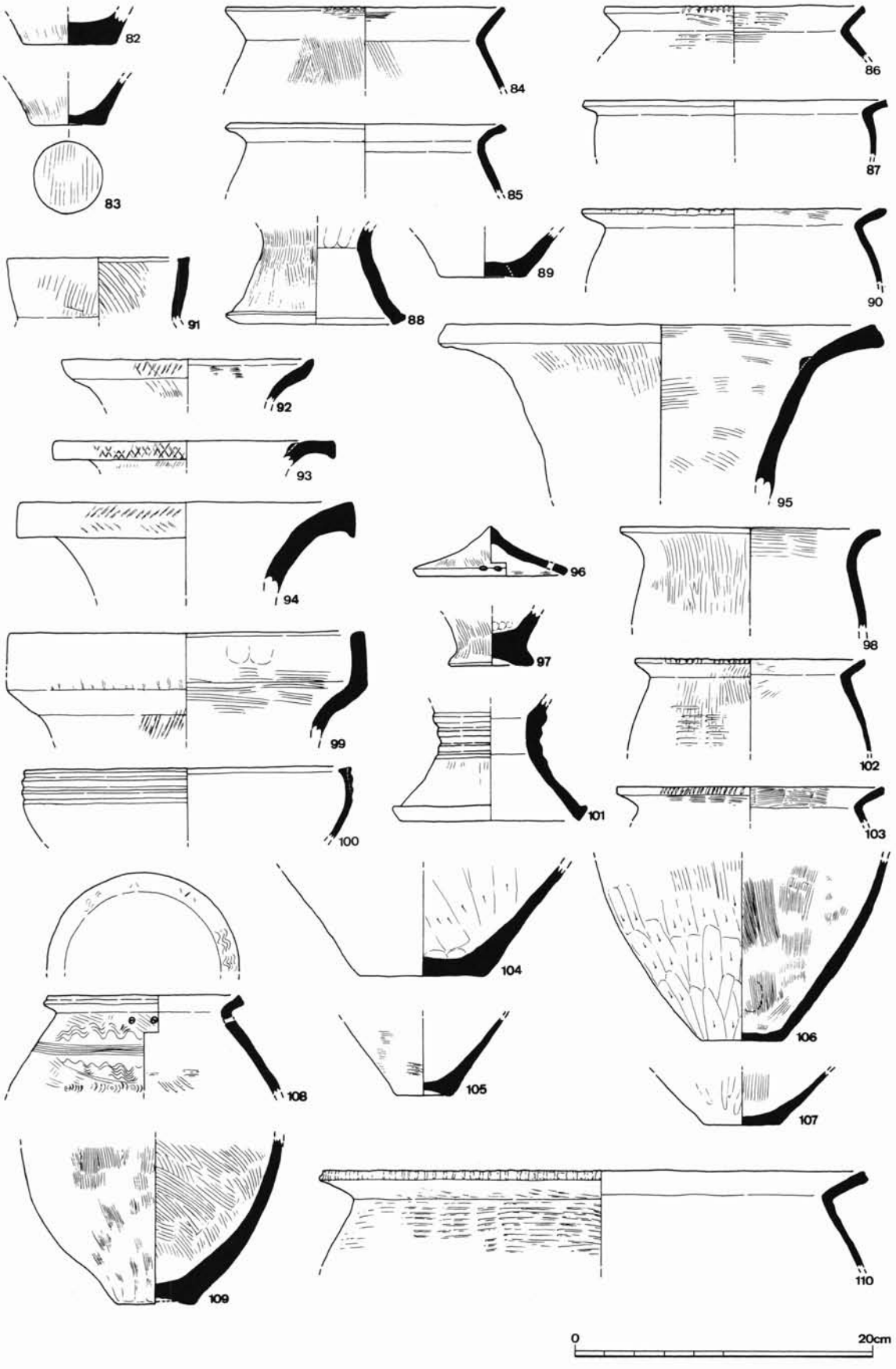
第98図　池上遺跡第13次調査出土弥生土器(3)



第99図　池上遺跡第13次調査出土弥生土器(4)



第100図　池上遺跡第13次調査出土弥生土器(5)



第101図　池上遺跡第13次調査出土弥生土器(6)

は大型の無頸壺である。口縁外面には断面三角形の張り付け凸帯が回り、間を列点文が埋める。その下は列点文とクシ描き直線文が交互に施される。凸帯の間に２か所穿孔される。外面の調整は施文のため不明であるが、内面はハケ調整である。11は壺の体部で、外面はタタキ後ハケ、内面は強い指ナデが残る。９は大型の壺の口縁部で、内外面ともにハケ調整である。10は大型壺の頸部から体部にかけての破片である。頸部付け根には断面三角形の張り付け凸帯が回り、体部にはクシ描き直線文が組み合わされる。調整は内外面ともハケ調整である。12は脚部で外面はハケ、内面はナデ調整である。13～23は甕である。13は小型の甕で、口縁端部にはキザミが施され、底部に一か所の穿孔が認められる外面はハケ後ナデ、内面はナデ調整である。14の内外面は不明である。15の内外面はハケ調整である。16の内外面はハケ調整である。17の外面はハケ調整、内面はナデである。18の口縁端部にキザミが施され、外面はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。19の口縁端部がハネ上がり、内面はハケ調整である。20の口縁端部はキザミが施され、外面はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。21は口縁端部が上下に拡張した土器で、端面には波状文が見られる。外面はタタキ後ハケ、内面はナデである。22は口縁端部にキザミが施されるが、内外面の調整は不明である。23は口縁端部が上下に拡張した土器で、端面角部にはキザミが施される。内外面の調整は不明である。24は鉢である。調整は体部外面がタタキ、内面がナデである。

溝ＳＤ12－553（第97図25～38）　25は広口壺の口縁部である。外面はタタキ後ナデ、内面はナデである。26は脚部である。外面はケズリ、内面がナデである。27は壺の口縁部で、口縁端面とその内側には波状文が施される。外面はハケ、内面は不明である。28は広口壺の口縁部で、端面には列点文が配される。内外面はハケ調整である。29は大型の受け部を持つ壺の口縁部で、口縁端部は内側に肥厚する。外面はナデ、内面は横方向にハケ調整である。30は壺の口縁部から体部にかけての破片で、外面はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。31は大型の壺の口縁部で、口縁端部には沈線で格子目文が描かれる。磨滅のため内外面の調整は不明である。32は甕で、外面の調整はハケ、内面はナデである。33は甕で、口縁端部にキザミが施され、内外面ともにハケ調整である。34は壺または鉢の底部である。内外面ともにハケ調整である。35・36は底部で、外面はハケ調整、内面はナデで、円盤充填によって底部が形成されている。37は底部で、外面はケズリ後ハケ、内面はケズリ調整である。38は体部から底部にかけての遺物で、外面は底部近くがケズリ、上がハケ後ミガキ、内面はハケ後ナデ調整である。

溝ＳＤ12－620（第98図43）　43は壺の口縁部で、口縁端面は沈線によって施文される。内外面の調整はハケである。

溝ＳＤ12－640（第98図39・40～42）　39は壺の口縁部で、外面はハケ、内面はナデ調整である。40は甕で内外面ともに調整は不明である。41は鉢で、外面は頸部にはハケ、体部にはミガキ、内面はミガキが見られる。42は甕で、口縁端部にはキザミが施される。内外面ともにハケ調整である。

溝ＳＤ249（第98図44・49）　44は全形のわかる甕で、内外面ともにハケ調整である。49は内外面ハケの壺胴部である。

溝ＳＤ392（第98図45）　45は全形のわかる短頸壺である。口縁部内外面はナデ、外面体部上半

はハケ調整、下半はハケ・ミガキ、内面はナデである。

溝ＳＤ395(第98図47)　47は底部で、外面はハケ調整内面はナデである。

溝ＳＤ396(第98図46・48・53)　46は甕で、胴部に沈線で施文される。口縁部内外面はナデ、外面体部上半はハケ調整、下半はミガキ、内面はケズリ後ナデである。48は甕の口縁部で、口縁端部はキザミが施され、外面はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。49は口縁部を欠く壺で内外面ハケ調整である。53は底部から体部にかけての破片で、外面はタタキ後ハケであるが、上に行くほどタタキが残る。内面はケズリである。

溝ＳＤ434(第98・99図50～52・54・56)　50は無頸壺で、外面体部上半がハケ、下半がミガキ、内面はナデ調整である。51は無頸壺で外面がハケ・ミガキ後ナデ、内面がナデ調整で、内外面とも指頭圧痕が多く見られる。52は甕で、外面はハケ、口縁内面は横ハケ、体部はナデである。53は底部で表面に接合痕が現れ、円盤充填の様子がわかる。内外面ともに調整は不明である。54・56は大型の土器の底部である。内外面ともにハケ調整である。

溝ＳＤ442(第99図55・59)　55は無頸壺で、外面は上半部がハケ、下半部がミガキ、底部付近がハケ、内面はハケ調整で口縁近くと底部に指頭圧痕が多く確認できる。59は受け口口縁を持つ甕で、口縁外面と肩部に列点文がめぐる。体部の外面の調整はタタキで、内面はハケである。

溝ＳＤ443(第99図57)　57は短頸壺の口縁部と考えられる。内外面ともにハケ調整である。

溝ＳＤ466(第99図58・60)　58は高台を持つ底部で、高台部は内外面ともにナデ、体部は外面がハケ内面はナデ調整である。60は口縁部を欠く壺である。器壁が厚く、整形が正確でない。内外面ともにハケ調整である。

溝ＳＤ467(第99・100図61～70・72・73・75～77)　61は広口壺の口縁部で、口縁端面には沈線で格子目文が描かれる。外面の調整はナデ、内面もナデである。62は口縁部を欠く広口壺である。外面は頸部および体部上半はタタキ後ナデ、下半部にはミガキがその上から施される。内面はハケ調整である。63は脚部である。脚外面はケズリ後ハケ、体部はケズリ後ミガキ、脚内面はケズリ後ナデ、体部はナデ調整である。64は壺で、外面はハケ、内面はナデ調整である。65は壺で底部と接点はないが胎土などから同一個体とした。口縁端部にはキザミが施される。調整は磨滅のため不明瞭であるが、内外面ともにハケが認められる。67は甕で調整不明である。68は甕で口縁端部にキザミメがあり、内外面はハケが認められる。69・70は鉢で、内外面ともにハケ調整である。66は土器の底部で外面がハケ、内面がナデ調整である。72は底部で外面はナデ、内面はハケ調整である。73は底部で外面がハケ、内面がナデ調整である。75は底部で外面ハケ、内面はナデ調整である。76は底部であるが、磨滅のため調整は不明である。77は底部で外面がナデ、内面がハケ調整である。

溝ＳＤ487(第100図71・74・78・79・81)　71は甕で外面はハケ、内面はナデ調整である。74は底部で、外面の調整は剝離のため不明、内面はナデ調整である。78は広口短頸壺である。内外面の調整はハケである。79は甕で、内外面ともにハケ調整である。81は壺の体部で、外面はハケ、内面はナデで指頭圧痕が多く残る。

溝ＳＤ596（第100図80）　80は土器の底部で、外面がハケ、内面がナデ調整で、底部に葉脈痕が残る。

土坑ＳＫ110（第101図82）　82は土器の底部で外面はハケ、内面はナデである。

土坑ＳＫ170（第101図83～85）　83は底部で外面はハケで、内面はナデ調整である。84は甕で口縁端部にはキザミが施される。内外面ともにハケ調整である。85は甕で、内外面の調整は不明である。

土坑ＳＫ252（第101図86～90）　86は甕で口縁端にはキザミが施される。外面はタタキ、内面はナデである。87は鉢で内外面の調整は不明である。88は脚部で外面はハケ、内面はナデである。89は底部である。外面は不明、内面はナデである。90は甕の口縁端部で、外面の調整は不明、内面は口縁がハケ、そのほかは不明である。

柱穴Ｐ121（第101図96・107）　96は一対の紐穴を持つ蓋である。内外面の調整はハケ調整である。107は底部で、外面はミガキ、内面はハケ調整である。

柱穴Ｐ221（第101図92）　92はいわゆる近江系甕の口縁部である。内外面ともに粗いハケ調整である。

柱穴Ｐ284（第101図105）　105は底部で外面はタタキ、内面はハケ後ナデ調整である。

柱穴Ｐ318（第101図104）　104は底部で、外面は磨滅のため不明、内面はケズリである。

柱穴Ｐ555（第101図95）　95は広口壺の口縁部で、内面に突起がつく。内外面ともにハケ調整である。

包含層（第101図91・93・94・97～103・106・108～110）　91はＳＨ12－516出土の直行壺の口縁部で内外面ともにハケ調整である。93はＳＨ12－540埋土出土の広口壺口縁部で、内面に突起と口縁端面には沈線による格子目文が施される。外面はハケ、内面はナデ調整である。94は壺の口縁部で、口縁端面には綾杉文が施される。内外面ともに不明である。97は底部で外面はハケ、内面はナデ調整である。98はＳＨ172埋土から出土した甕で、外面はハケ、内面口縁部は横ハケ、体部はナデ調整である。99はＳＨ183出土の壺の口縁部である。口縁屈曲部外面にはキザミが施される。内外面ともにハケ調整である。100は3条の凹線を口縁部外面に持つ鉢である。内外面ともに調整はナデである。101はＳＨ172の埋土から出土した脚部で3条の凸帯が回り、外面はハケ調整、内面はナデ調整である。102は甕で、口縁端部にはキザミが施される。外面はタタキ後ハケ、内面はハケ調整である。103は甕の口縁部で、口縁端部にはキザミが施される。外面はタタキ、内面はハケ調整である。106はＳＨ12－516出土の底部である。外面の体部はハケ、底部近くはケズリ、内面はハケ調整である。108はＳＨ188出土の広口短頸壺で、口縁内面には波状文、体部には波状文、直線文、扇形文が施される。頸部には対になる穿孔が行われている。外面はハケ調整、内面は不明である。109は底部から体部にかけての土器で、内外面ともにハケ調整である。110は大型の甕で口縁端部にキザミが施される。外面はタタキ、内面は不明である。

ｂ．古墳時代

ＳＨ351（第102図111～124）　111は土師器椀で、受け口状の口縁部を持つ。内外面ともにケズ

リが見られる。112は土師器の小型の甕で、外面はミガキ・ナデ、内面はケズリ調整である。113は土師器の鉢の口縁部で、外面が格子目状タタキである。接点はないが同一個体と考えられる破片には、格子目タタキより下に縄蓆文が見られる。内面はナデである。114は土師器の平底の鉢である。内外面の調整は剥落のため不明である。113・114はいわゆる韓式系の土器である。117～120・123・124は土師器の布留式甕である。117は小型の甕で口縁端部がわずかに肥厚する。外面はハケ調整、内面はナデである。118は口縁端部が肥厚し、体部外面はナデ、内面はケズリである。119は口縁端部が肥厚し、体部外面はハケ、内面はケズリである。120は口縁端部が肥厚する二重口縁を持つ。体部内外面はナデである。123は体部外面肩部に2本の沈線が施文され、外面はハケ調整、内面はケズリである。124は肩部に3本の沈線が施され、外面はハケ調整、内面はケズリで底部には多くの指頭圧痕が残る。115は土師器の高杯杯部で内外面ともナデ調整である。116は屈曲する杯部を持つ土師器の高杯である。内外面ともにハケ調整である。121は屈曲する杯部を持つ土師器の高杯である。内外面ともにハケ調整である。122はほぼ完形の屈曲する杯部を持つ土師器の高杯である。杯部外面はハケ調整、内面はナデ、脚部外面はナデ、内面はケズリとナデ調整が施される。

竪穴式住居跡ＳＨ137（第103図125）　125は須恵器の杯身である。

竪穴式住居ＳＨ150（第103図126）　126は須恵器の甕口縁部と考えられる破片で、傾きから6世紀代のものと考えられる。

竪穴式住居ＳＨ152（第103図127・128）　127は小型の二重口縁を持つ土師器壺で、体部外面はミガキ調整で赤彩が認められる。内面はナデ調整である。128は土師器丸底壺で内外面ともナデ調整である。

竪穴式住居ＳＨ153（第103図129～133）　129・130は須恵器の杯蓋である。131は須恵器の杯身である。132は須恵器の高杯である。133は竈で出土した土師器の甕である。内外面は磨滅のため調整は不明であるが、内面は工具があたった跡が見られる。

竪穴式住居ＳＨ164（第103図134・136）　134は須恵器の有蓋高杯の杯部である。136は土師器の甕で、内外面の調整はナデである。

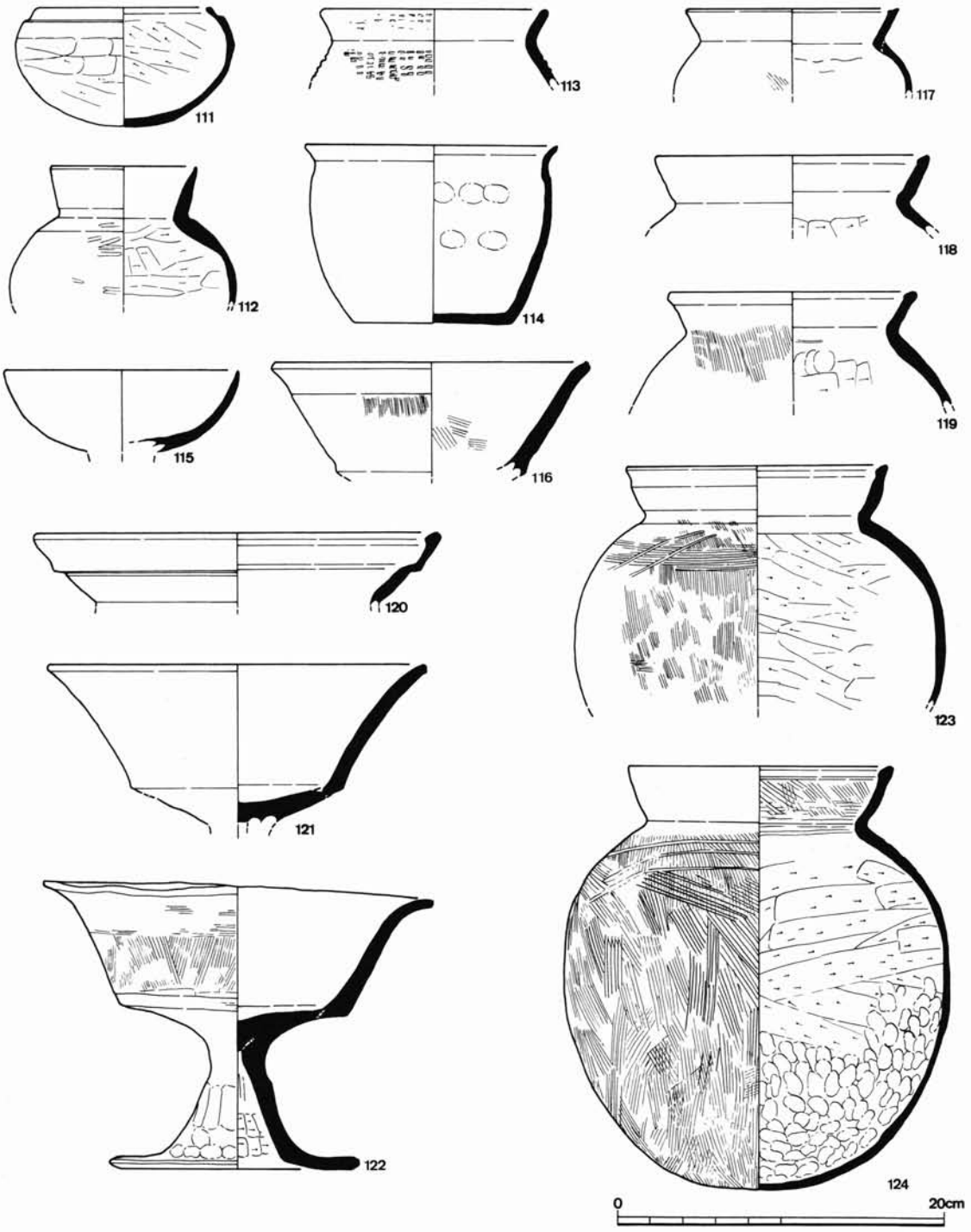
竪穴式住居ＳＨ331（第103図135）　135は土師器の高杯の杯部で、内外面の調整はナデである。

竪穴式住居ＳＨ350（第103図137～152）　137は土師器の壺の口縁部である。内外面はナデ調整である。138～142は内外面ナデ調整の土師器の杯である。143は須恵器の甕で体部に波状文が施される。144は須恵器の有蓋高杯の蓋である。145は須恵器の杯蓋である。146は須恵器の杯身である。147は須恵器の高杯の脚部である。円形の透かしが穿たれる。148～150は手づくねの土師器のミニチュア土器である。内外面には指頭圧痕が多く見られる。151・152は土師器の甕である。151の内外面は不明である。152の外面はハケ、内面はナデ調整である。

竪穴式住居ＳＨ539（第103図153）　153は土師器の甕で、外面はハケ、内面はケズリである。

竪穴式住居ＳＨ352（第104図159）　159は須恵器の杯身である。

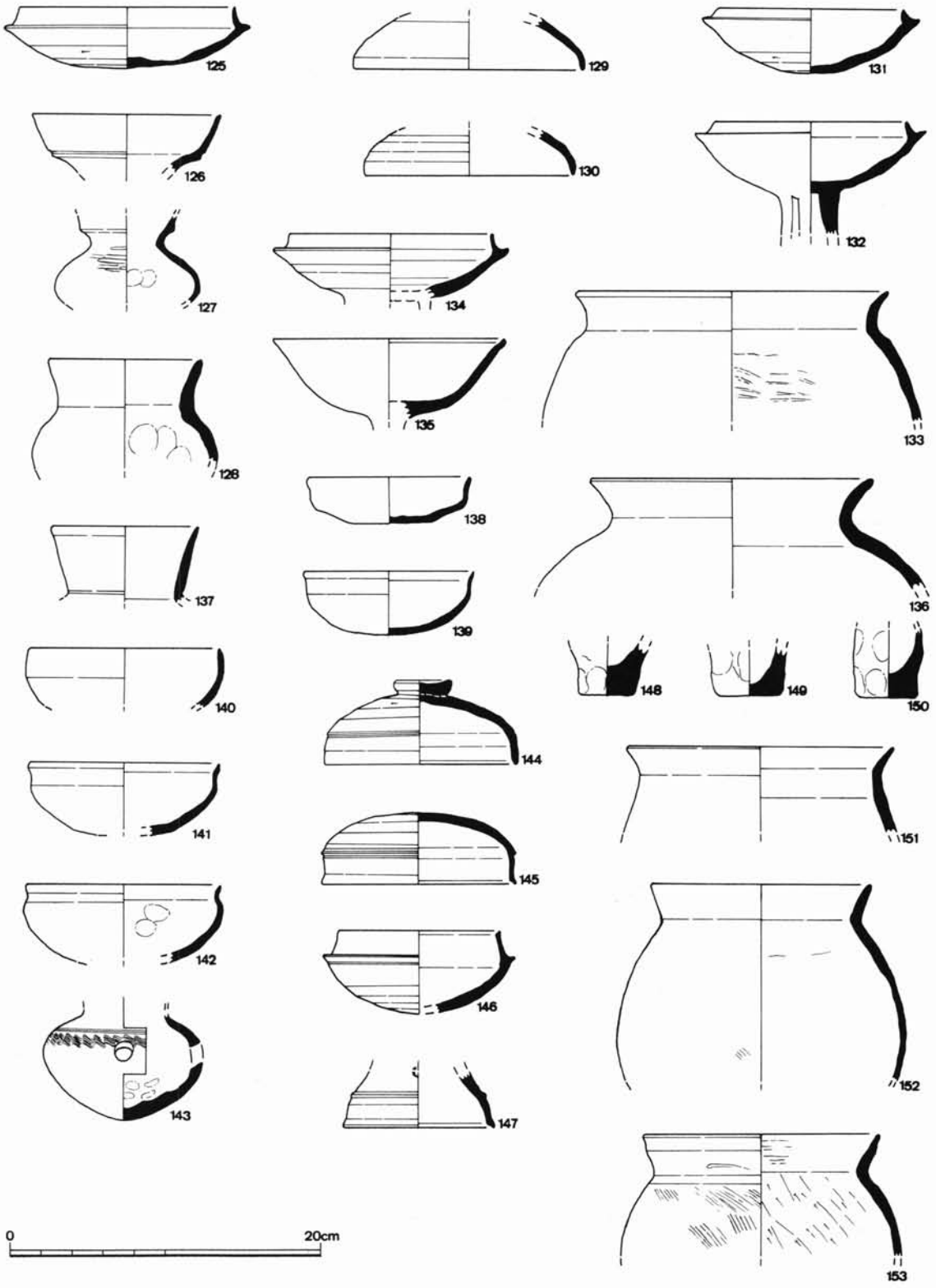
竪穴式住居ＳＨ356（第104図154～158・160・162～168）　154・155・157は土師器の甕である。



第102図　池上遺跡第13次調査出土古墳時代土器(1)

154は外面がハケ調整、内面は口縁部がハケ、体部がケズリである。155の調整は内外面ともに不明である。157は外面がハケ、内面がナデ調整である。156は土師器の甑の把手部である。160は甑の口縁部である。内外面ともハケ調整である。158・164は須恵器の有蓋高杯の蓋である。166は須恵器の杯蓋、165・167は須恵器の杯身である。162・163は須恵器高杯の脚部である。168は須恵器の器台杯部である。外面にはタタキ、内面口縁端には同心円状の当具が残る。

竪穴式住居ＳＨ12－534(第104図161)　161は土師質の製塩土器片である。



第103図　池上遺跡第13次調査出土古墳時代土器(2)

土坑ＳＫ468(第105図173～179・181～187・189～192・194)　173は土師器の杯で内外面はナデ調整である。174・175は須恵器有蓋高杯の蓋である。176・177は須恵器の杯蓋である。178～180・184～186は須恵器の杯身である。181・182・189～192は土師器の甕である。181・189・191は外面がハケ、内面がケズリ調整である。190は内外面の調整は不明である。192は外面ナデ、内

面ケズリ調整である。194は須恵器高杯の脚部である。

土坑ＳＫ460(第105図172)　172は土師器の甕で、内外面はナデ調整である。

土坑ＳＫ452(第105図193)　193は土師質のミニチュア土器である。

土坑ＳＫ491(第105図180・188・195～197)　180は須恵器の杯身である。188は土師器の杯で、外面はナデ、内面は不明である。195は土師器の甕である。内外面は不明である。197は土師器の甕で外面はハケ、内面は調整不明である。

土坑ＳＫ564(第105図198)　198は土師器の高杯杯部である。内外面の調整は不明である。

土坑ＳＫ471(第105図196)　196は土師器の甕で、外面はハケ、内面はケズリである。

溝ＳＤ452(第106図200・202)　200・202は須恵器の杯蓋である。

溝ＳＤ512(第106図204)　204は須恵器の杯身である。

柱穴Ｐ138(第106図206)　206は土師器の杯部である。内外面はナデ調整である。

柱穴Ｐ148(第106図207)　207は須恵器の杯身である。

柱穴Ｐ196(第106図208)　208は須恵器の杯身である。

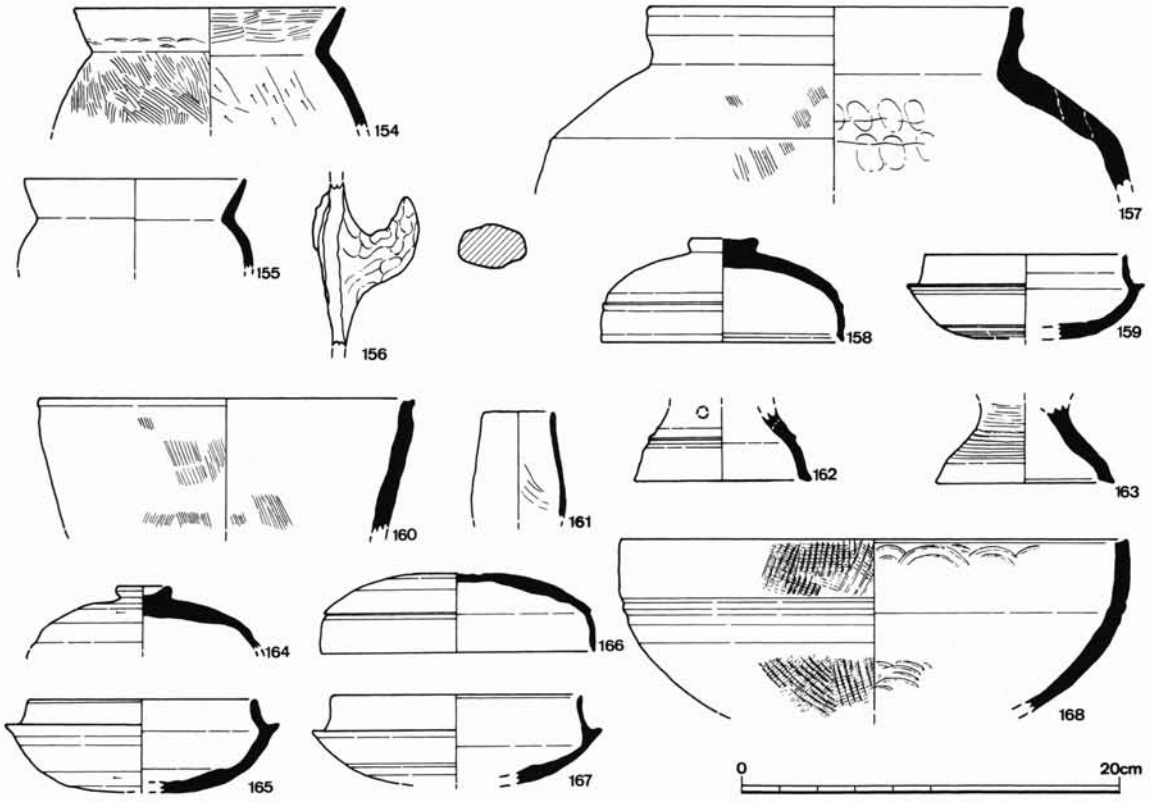
柱穴Ｐ211(第106図213)　213は須恵器の杯蓋である。

柱穴Ｐ257(第106図214)　214は須恵器の杯身である。

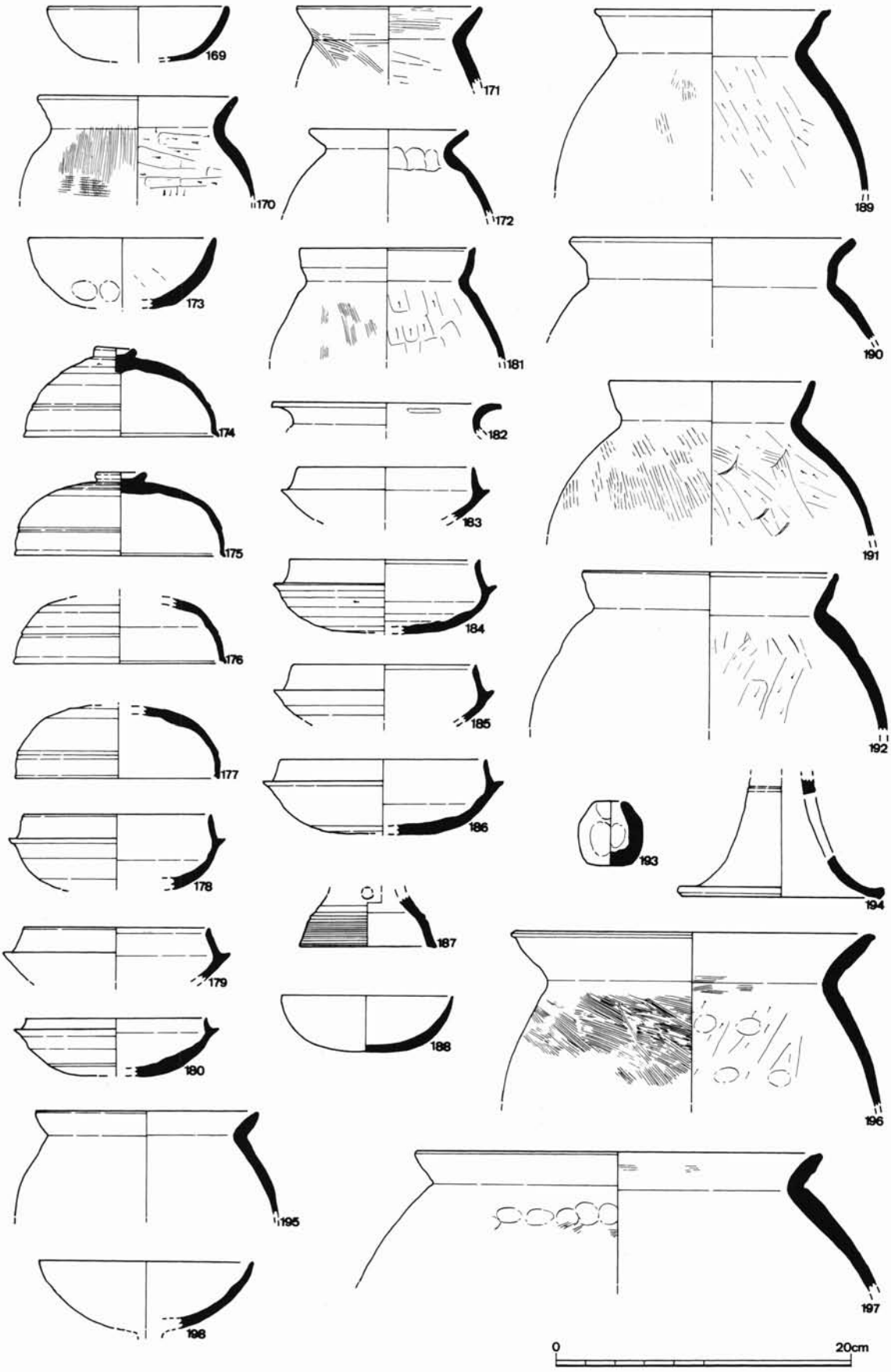
柱穴Ｐ258(第106図215)　215は須恵器の杯身である。

柱穴Ｐ268(第106図209)　209は須恵器の杯蓋である。

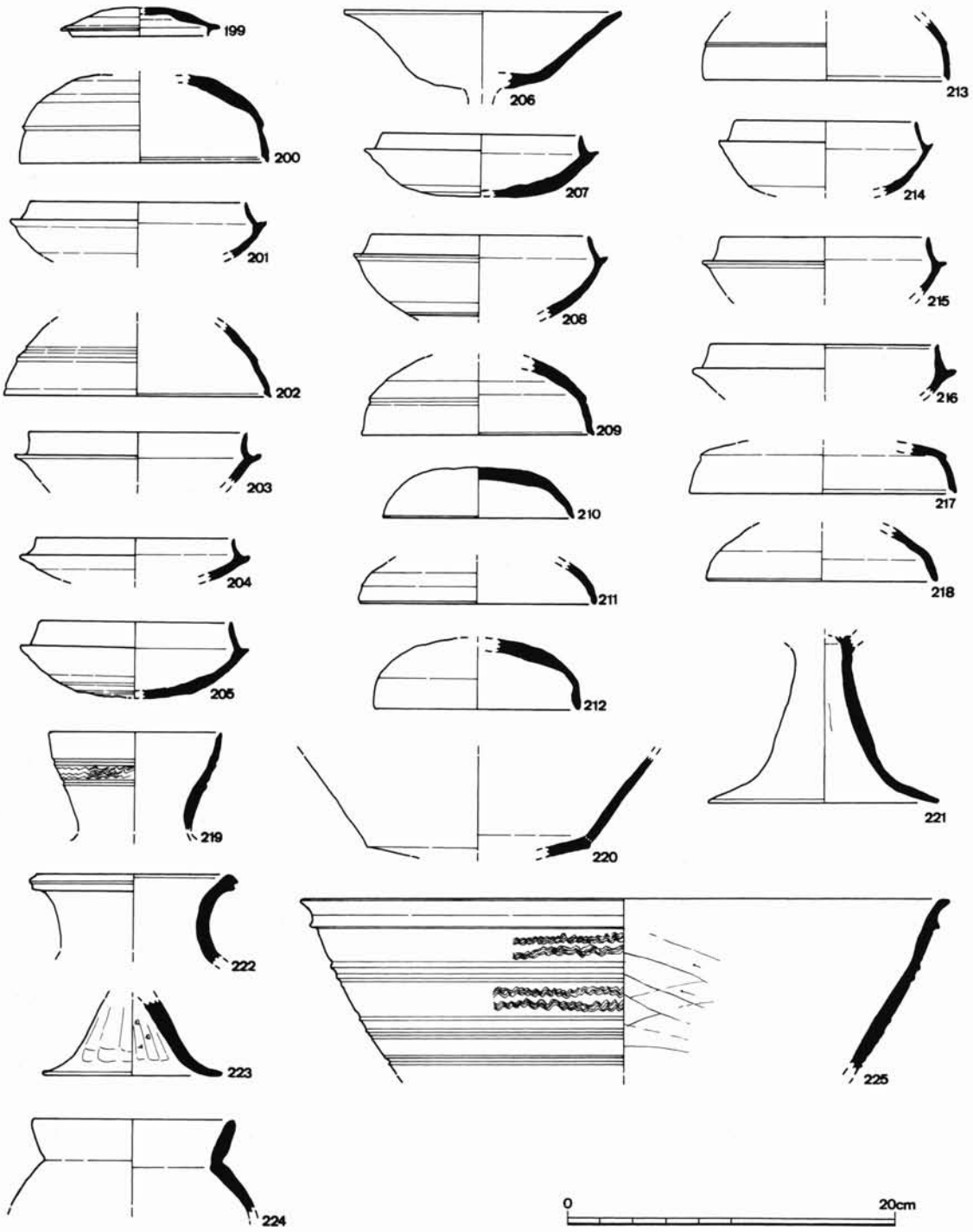
柱穴Ｐ292(第106図210)　210は須恵器の杯蓋である。



第104図　池上遺跡第13次調査出土古墳時代土器(3)



第105図　池上遺跡第13次調査出土古墳時代土器(4)



第106図　池上遺跡第13次調査出土古墳時代土器(5)

柱穴 P 305(第106図216)　216は須恵器の杯身である。

柱穴 P 360(第106図219)　219は須恵器の壺の口縁部で、外面には沈線と波状文がめぐる。

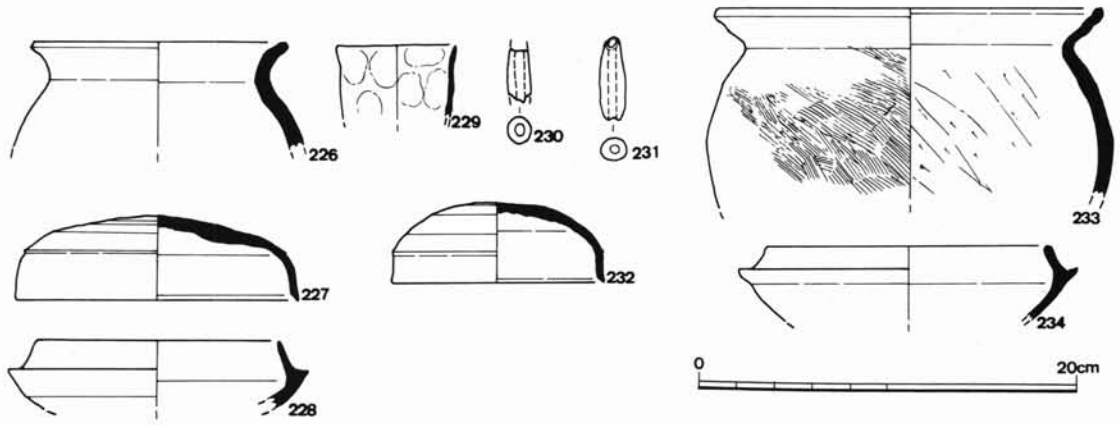
柱穴 P 363(第106図217)　217は須恵器の杯蓋である。

柱穴 P 407(第106図212)　212は須恵器の杯蓋である。

柱穴 P 437(第106図211)　211は須恵器の杯蓋である。

柱穴 P 543(第106図222)　222は須恵器の壺の口縁部である。

包含層(第105・106図169～171・199・201・203・205・218・220・221・223～225)　169～



第107図　池上遺跡第13次調査出土古墳時代土器(6)

171・218は奈良時代の井戸内から出土した古墳時代の遺物である。169は土師器の杯である。170は土師器の甕で、外面はハケ調整、内面はケズリである。171は内外面ハケ調整の土師器の甕である。218は須恵器の杯蓋である。199はＳＤ398出土の須恵器である。弥生時代の溝と考えられるが、多くの遺構が切りあっているため混在したものと考えられる。201・203・205は須恵器の杯身である。220は土師器の高杯杯部である。221は土師器高杯脚部である。223は土師器の高杯脚部で、内外面ケズリである。224は土師器の甕で内外面ナデ調整である。225は須恵器の器台の杯部である。外面には凸帯と波状文がめぐる。杯部外面が黒灰色で古い須恵器の特徴を持つ。

西地区古墳時代遺物

竪穴式住居跡ＳＨ01(第107図226～231・233・234)　226は土師器の甕である。外面の調整は不明、内面はナデ調整である。227は須恵器の杯蓋である。228は須恵器杯身である。234は竈出土の須恵器の杯身である。229は土師質の製塩土器である。230・231は土師質の土錘である。233は土師器の甕で、外面はハケ、内面はケズリである。

柱穴Ｐ14(第107図232)　232は須恵器の杯蓋である。

Ｃ．飛鳥時代

土坑ＳＫ413(第108図236)　236はつまみを持つ須恵器の杯蓋である。

柱穴Ｐ194(第108図237)　237は須恵器の杯身である。

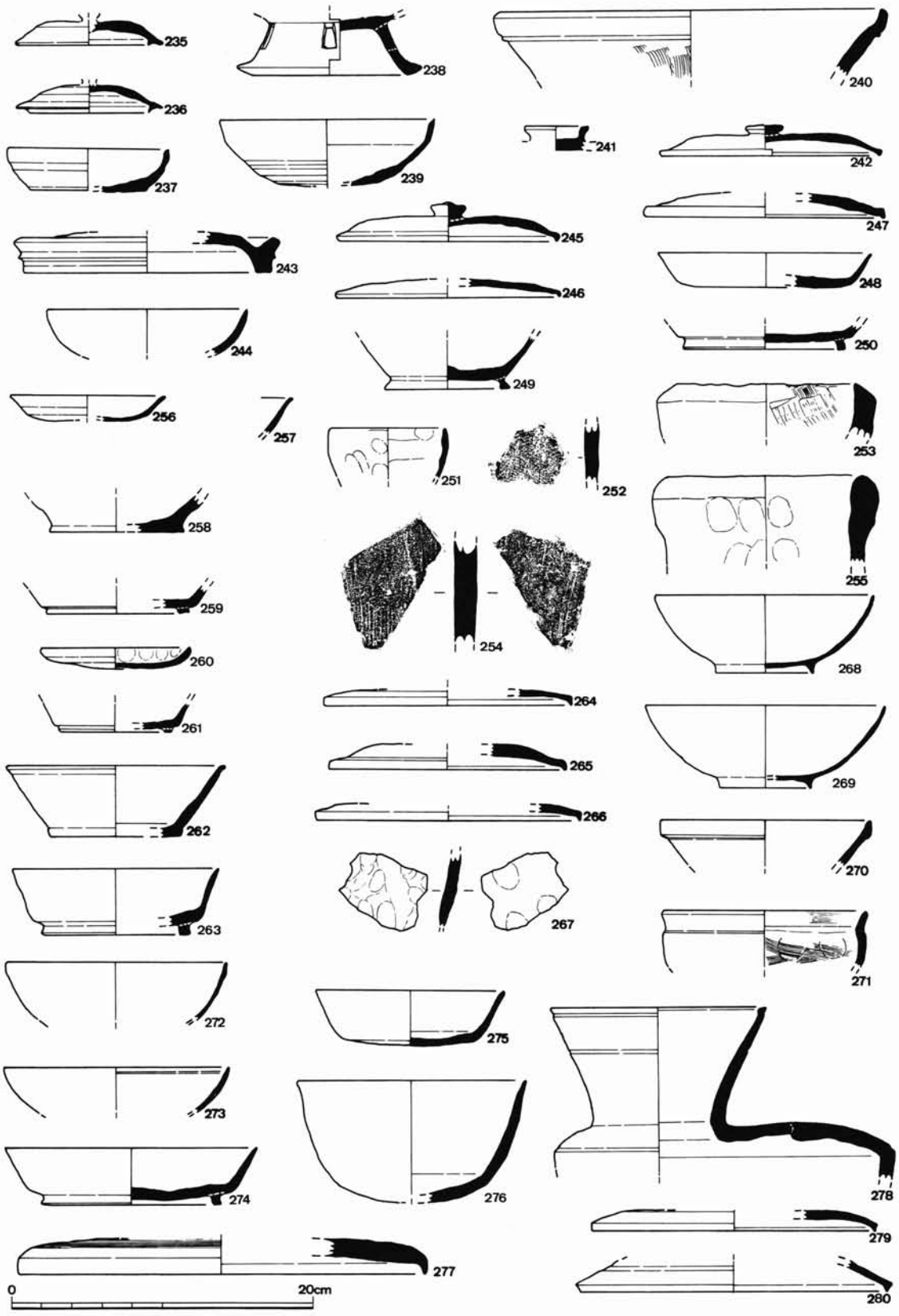
柱穴Ｐ200(第108図238)　238は須恵器の脚部である。

柱穴Ｐ363(第108図235)　235はつまみを持つ須恵器の杯蓋である。

ｄ．奈良時代

土坑ＳＫ133(第108図241～255)　243は須恵器の円面硯である。第12次調査でも１個体出土している。244は土師器の杯である。241・242・245～247は須恵器の杯蓋である。248は須恵器の杯Ａである。249は須恵器壺の底部である。250は須恵器の杯Ｂである。251～253・255は製塩土器である。251は古墳時代に属する可能性がある。252は内面に布圧痕が認められる。これ以外にも図化できない砕片が一定量存在する。254は平瓦片である。

土坑ＳＫ205(第108図264)　264は須恵器の杯蓋である。



第108図　池上遺跡第13次調査出土歴史時代土器

柱穴Ｐ129(第108図261)　261は須恵器の杯Ｂである。

柱穴Ｐ135(第108図267)　267は土師質の製塩土器と考えられる。

柱穴Ｐ138(第108図263)　263は須恵器の杯Ｂである。

柱穴Ｐ137(第108図265)　265は須恵器の杯蓋である。

柱穴Ｐ174(第108図266)　266は須恵器の杯蓋である。

柱穴Ｐ558(第108図278)　278は須恵器の平瓶である。

包含層(第108図274～277・279)　274は須恵器の杯Ｂである。275は須恵器の杯Ａである。276は土師器の鉢である。277は大型の須恵器の蓋で、上面には同心円状にカキ目が施される。279は須恵器の杯蓋である。

ｅ．平安時代以降

溝ＳＤ101(第108図256～258)　256は土師器の皿である。257は緑釉椀の口縁部である。258は底部糸切りの須恵器の椀の底部である。

柱穴Ｐ131(第108図260)　260は土師器の皿である。

柱穴Ｐ134(第108図262)　262は須恵質の平底の椀である。

柱穴Ｐ139(第108図272)　272は瓦器椀であるが内外面は剥落している。

柱穴Ｐ188(第108図268・269)　両者ともに瓦器椀である。

柱穴Ｐ278(第108図270・273)　270は白磁の椀である。273は瓦器椀である。

柱穴Ｐ329(第108図271)　271は内面が黒い黒色土器の甕である。

ｆ．時期不明遺構

土坑ＳＫ364(第108図239)　239は古墳時代の須恵器杯蓋に似るが、底部が平らにていねいに削られており杯身とした。

②石器

ａ．縄文時代以前(第109図1・2・8)　1は包含層出土のチャート製の剥片を横位に用いた台形石器で、両側辺は背腹両面からの加工が施される。2は包含層出土のチャート製の縦長剥片である。背面には他の風化面とは異なる剥離面が大きく残されている。主要剥離面側は、剥離痕が多く見られるが、1回の打撃で生じたものと考えられる。また、側縁の剥離は不ぞろいで意図的な剥離の可能性は少ない。8は安山岩製の両面加工尖頭器と考えられる。風化が非常に深いためこの時期に位置づけられる。

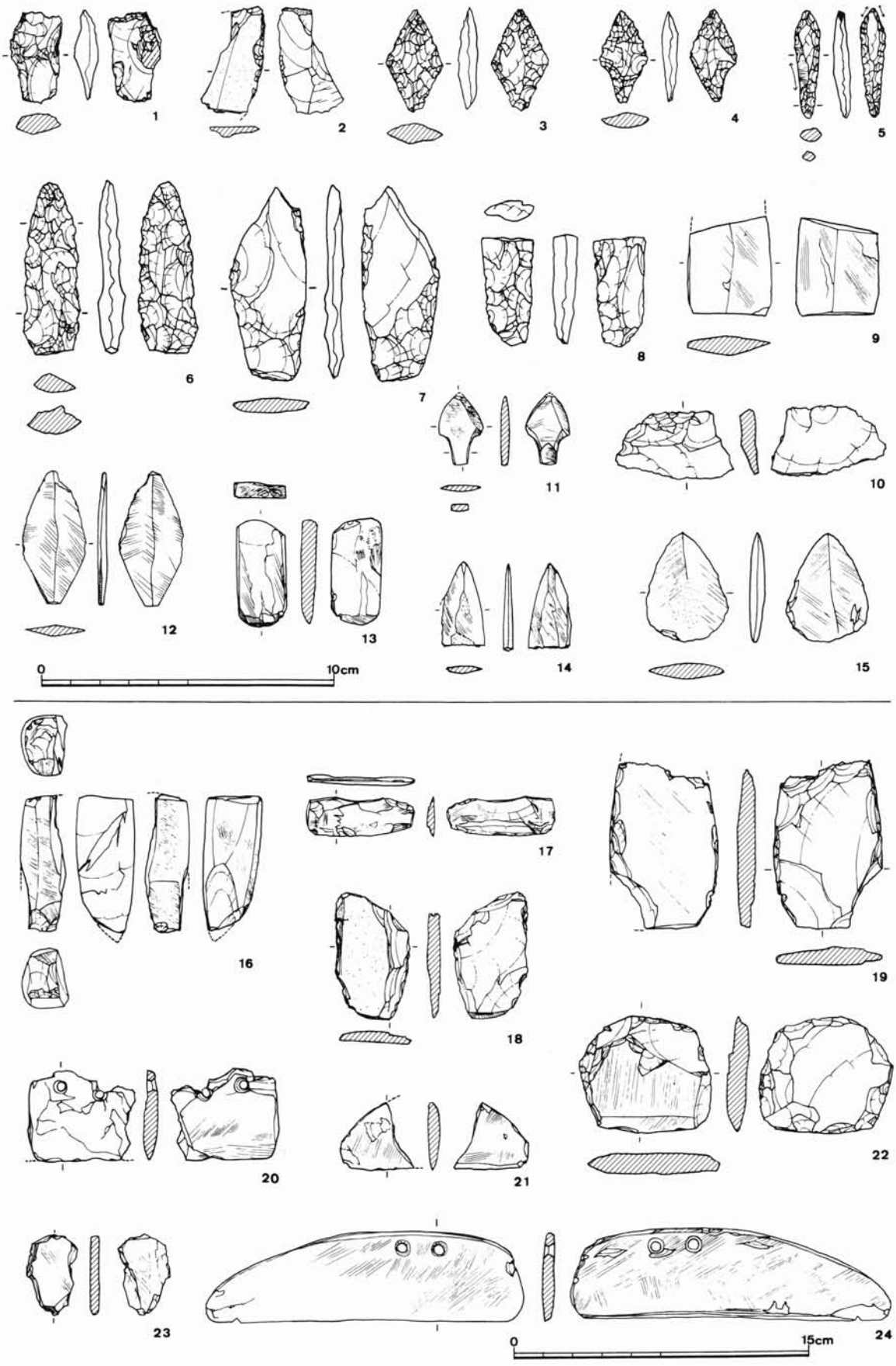
ｂ．弥生時代(第109～111図3～7・9～57)

打製両面加工石器　7は安山岩製の打製石器で、両面加工が施され、基部になる可能性が指摘できる。類似する石器には打製石剣があるが、この石器と同じ石材でできた石剣は、京都府下では発見されていない。6はＳＫ434で出土したサヌカイト製の大型の石鏃または石槍と考えられる。基部は古い折れ面で、全体の風化は弥生のものに比べて深いと肉眼的に観察できる。

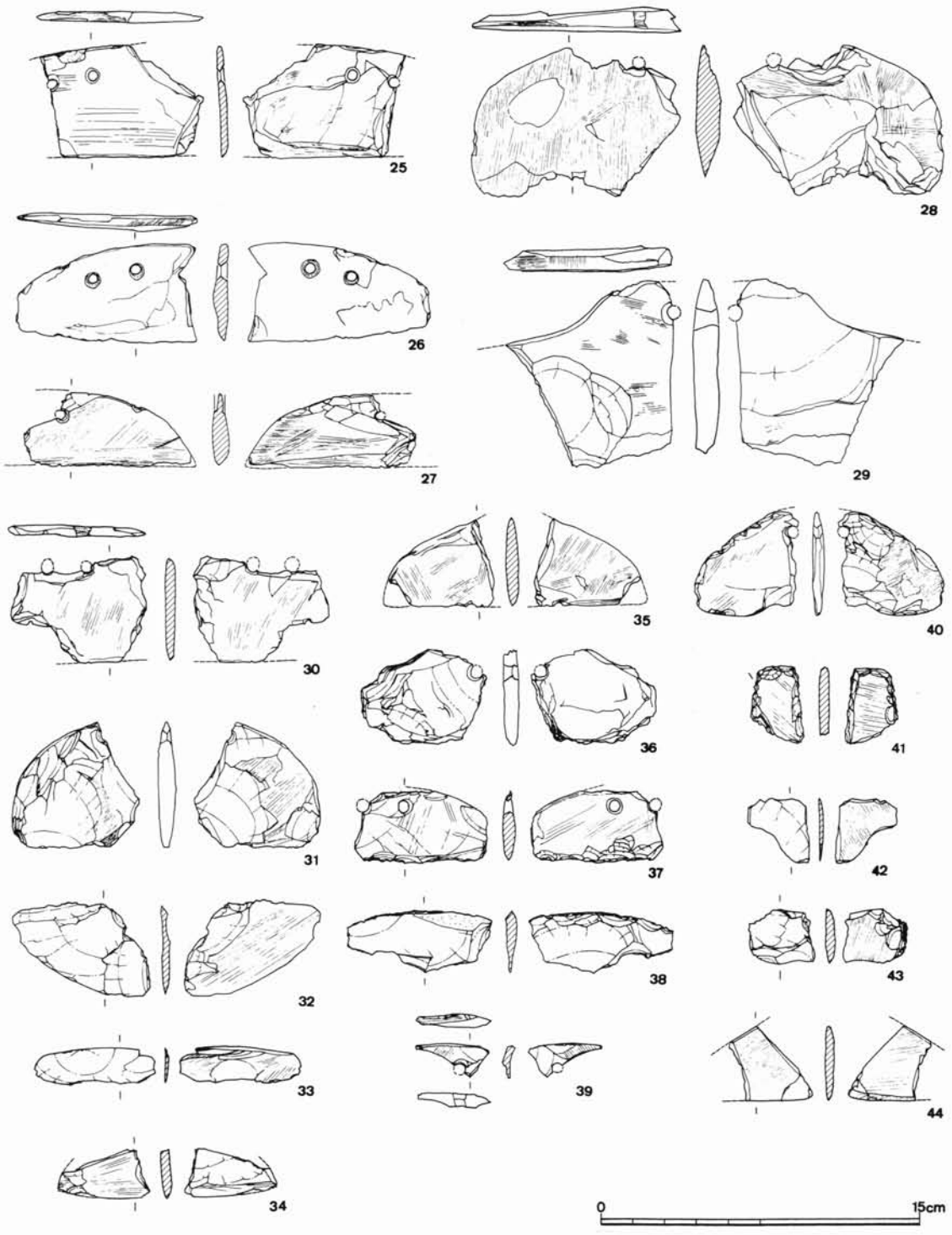
打製石鏃　3は平面形が菱形のサヌカイト製の石鏃である。石材は細かい縞目があり、二上山や金山産のものとは異なる。4はサヌカイト製の有茎石鏃である。

石錐　5はサヌカイト製の錐で、中央部、および末端部に使用による、研磨痕がある。

剥片　10は7と似た材質の横長の剥片で、横方向に連続して剥離した痕跡が認められる。



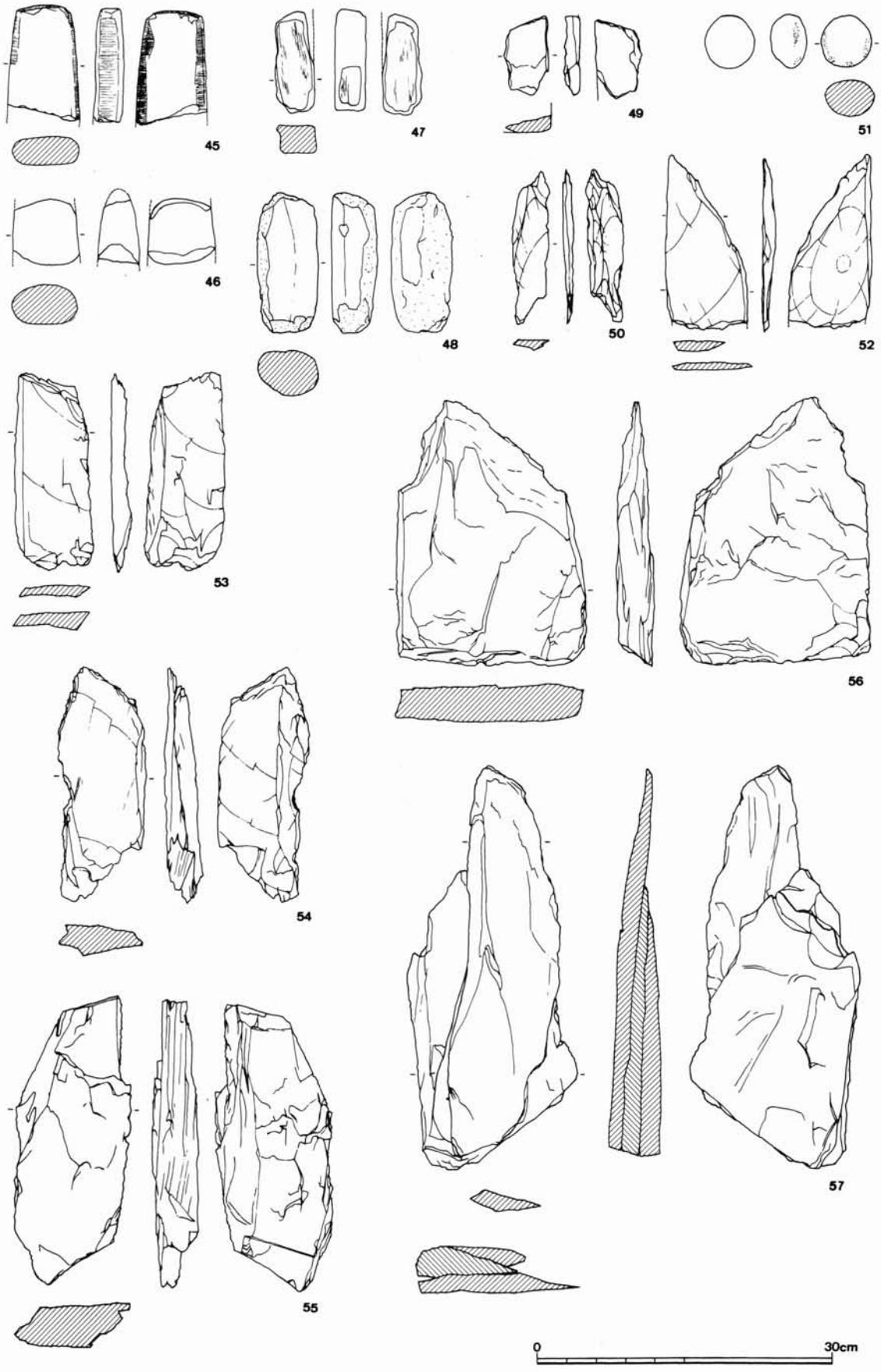
第109図　池上遺跡出土石器(1)



第110図　池上遺跡出土石器(2)

磨製石剣　9は包含層から出土した粘板岩製の磨製石剣の基部で、横断面は菱形で下端部は研磨されている。

磨製石鏃　12は菱形の平面形を持つ粘板岩製磨製石鏃である。先端部と下端部に一部欠損が見られるがほぼ完形である。方形周溝墓の棺内であるＳＫ252から出土している。14は包含層から出土した灰色の粘板岩製の磨製石鏃の先端部である。11は包含層から出土した粘板岩製有茎石鏃である。15は黒色粘板岩製の磨製石鏃であるが、先端の角度や、厚さ、陵の状況から磨製石剣切



第111図　池上遺跡出土石器(3)

っ先の再加工品の可能性が指摘できる。

柱状片刃石斧　16はＳＤ12－01から出土した縞目を持つ乳白色の頁岩を素材とした柱状片刃石斧である。刃部と右側面が欠損し、左側面も一部欠損している。

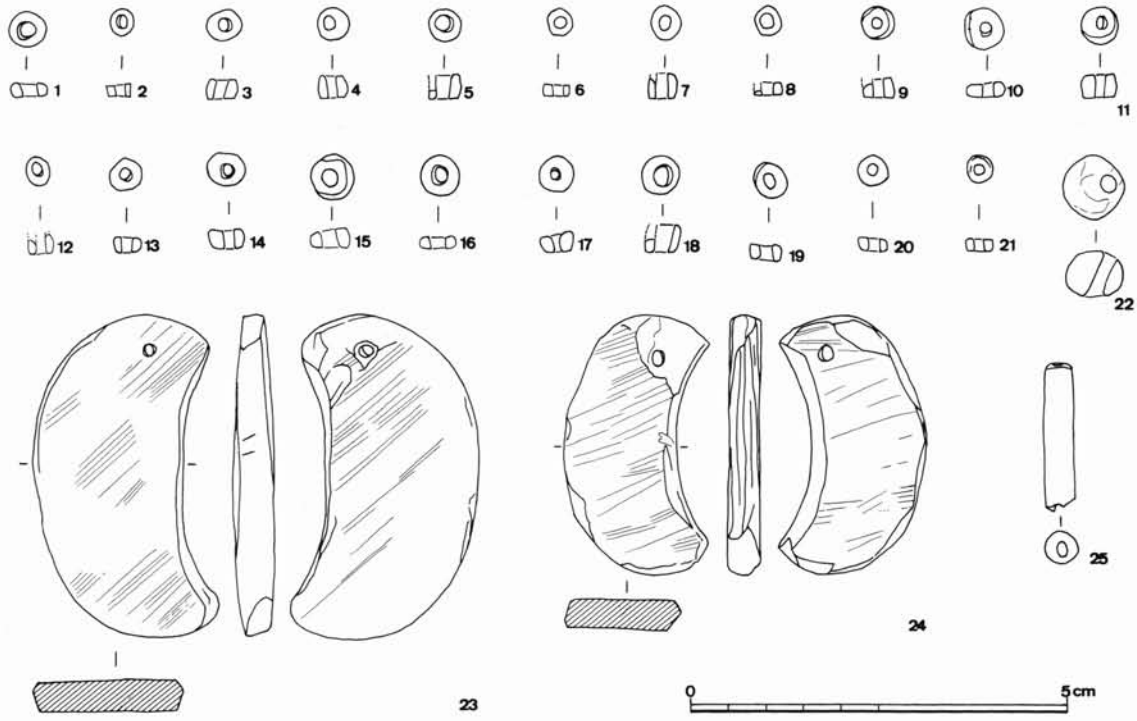
扁平片刃石斧　13は包含層から出土した粘板岩製の小型の扁平片刃石斧で、両側面と其端面が研磨されている。19は粘板岩製の研磨痕のある石器で両側辺には面取りがあり刃部は見られない。扁平石斧の未成品と考えられる。古墳時代のＳＨ164埋土から出土している。22はサヌカイト製石庖丁を素材とし、周辺を整形した石器で、石斧の未成品と考えられる。23はＰ495から出土した粘板岩製の磨製石器である。図面向かって左面下部に研磨方向が違う刃部と考えられる部分が見られる。上部が丸く整形されていることから、石斧の未成品の可能性が指摘できる。41はＰ234から出土した粘板岩製の表裏に平らな研磨面を持つ石器である。両側辺の整形加工により、研磨面が切られる。形状から13に見られる小型の扁平片刃石斧の未成品と考えられる。

太型石斧　45は古墳時代のＳＨ183から出土した閃緑岩製の石斧で、両側辺は長軸に直行する方向に、擦痕が認められる。刃部は欠損している。46はＳＤ12－01から出土した閃緑岩素材の磨製石斧である。

石庖丁　18は包含層から出土した粘板岩製の石庖丁である。石庖丁の刃部の残欠とともに、下端に研磨による刃部が設けられている。これは石庖丁を石斧または石鍬に転用したものと考えられる。20はＰ307から出土した粘板岩製の石庖丁で、両面から２か所穿孔されている。図面向かって左面は熱による剥離をうけている。21はＳＤ12－533から出土した粘板岩製の石庖丁の端部で、片側から刃が付けられている。24はＳＤ391から出土した粘板岩製の石庖丁で、両面から２か所穿孔されている。25はＳＤ12－533から出土した粘板岩製の石庖丁である。両面から２か所穿孔され、背に研磨痕が見える。26はＳＤ12－553から出土した粘板岩製の石庖丁である。両面から2か所穿孔され、背には研磨痕がみられる。27はＳＫ434から出土した粘板岩製の石庖丁で両面穿孔であると認められる。刃部に粗い研磨痕が残っている。28はＳＤ12－01から出土した板岩製の大型石庖丁で、両面穿孔が認められる。背に面取りの研磨痕が見られる。29はＰ208から出土した砂岩製の大型石庖丁で、両面穿孔が認められる。湾曲した背に面取りの研磨痕が見える。30はＰ204から出土した粘板岩製の石庖丁である。両面から2か所穿孔されている。31は包含層から出土した粘板岩製の石庖丁で、両面穿孔が認められ、背には面取りの研磨痕が見られる。32は包含層から出土した粘板岩製の石庖丁で、図面向かって右面の下部にわずかながら研磨方向が変わる刃部を持つ。33はＳＫ434から出土した粘板岩製の磨製石器である。背を研磨して面取りしていることから石庖丁の一部と考えられる。34は包含層から出土した粘板岩製の石庖丁で片側から刃が付けられている。35は包含層から出土した粘板岩製の石庖丁の端部で、片側から刃が付けられている。36は包含層から出土した暗赤褐色の粘板岩製の石庖丁である。両面穿孔が認められる。多方向から剥離痕が見られることから、再加工し何かに転用する過程のものと考えられる。37はＳＤ463から出土した緑白色の粘板岩製の石庖丁で、両面から2か所穿孔されている。刃部端は剥離しており刃部の研磨痕を見ることができない。38はＳＤ12－640から出土した粘板岩製の

付表2　臼玉ほか観察表

No.	直径(mm)	孔径(mm)	高さ(mm)	重量(g)	材質	出土地
1	4.8	2.6	2.0	0.06	ガラス	包含層
2	3.3	1.3	2.0	0.03	滑石	包含層
3	4.5	1.6	(2.5)	0.08	滑石	包含層
4	4.3	1.5	3.0	0.08	滑石	包含層
5	4.3	2.0	3.3	0.05	滑石	包含層
6	3.5	1.5	1.5	0.03	滑石	包含層
7	4.0	1.7	3.5	0.07	滑石	包含層
8	3.7	1.6	2	0.02	滑石	包含層
9	4.3	1.5	2.5	0.08	滑石	SH12−517
10	5.1	1.5	2.0	0.08	滑石	SH12−517
11	5.0	1.3	3.5	0.13	滑石	SH169
12	3.0	1.5	(2.5)	0.03	滑石	SH169
13	4.2	1.6	2.0	0.06	滑石	SH169
14	5.0	1.7	2.5	0.10	滑石	包含層
15	5.7	2.5	2.5	0.11	滑石	包含層
16	5.0	2.5	1.5	0.06	滑石	SH350
17	4.5	1.0	2.5	0.09	滑石	包含層
18	5.0	2.0	3.2	0.10	滑石	P336
19	4.5	2.0	2.1	0.05	滑石	包含層
20	5.0	1.6	1.8	0.05	滑石	包含層
21	3.7	1.3	1.2	0.03	滑石	P302
22	8.0	1.5	6.0	0.38	土玉	P143
23	4.2	1.6	18.5	7.10	滑石	SK408
24	−	−	−	4.32	滑石	P495
25	−	−	−	0.58	滑石	包含層



第112図　池上遺跡第13次調査出土玉類

石器で、背を整形加工によって丸く作り出している。この形状は石庖丁の背部に似るため、石庖丁の失敗品と考えられる。39は紐孔の部分である。P210から出土した。40は包含層から出土した粘板岩製の石庖丁で、両面穿孔された紐孔が1か所認められる。44は包含層から出土した粘板岩製の石庖丁で、片側から刃が付けられている。

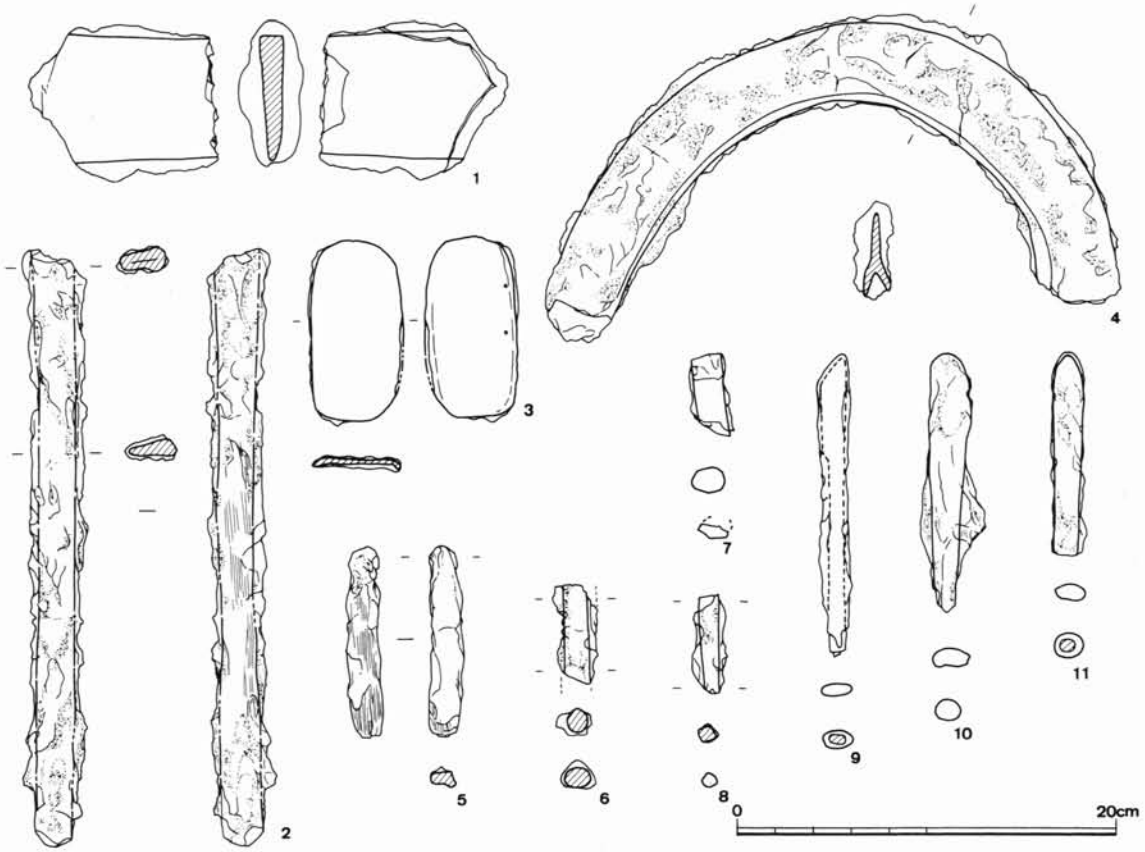
用途不明石製品　17は包含層から出土した粘板岩製の磨製石器である。背に鞍部をもち、面取りの研磨痕が見られる。42は粘板岩製の磨製石器で、図面向かって左面は全面が剝離している。古墳時代の遺構であるSH172の埋土から出土している。43はSK161から出土した粘板岩製の磨製石器である。一側面に整形加工痕がみられる。

敲石　51はP292で出土した砂岩製の敲石である。

粘板岩剝片および素材　50はSD12－01から出土した粘板岩製剝片である。52はSD512出土の粘板岩製剝片である。一方の剝離面には熱破砕による剝離と考えられる特徴を持つ。53はSD512出土の板状の粘板岩製剝片である。54はSD512出土の粘板岩製剝片である。55は奈良時代の井戸SE133から出土した粘板岩剝片であるが、SE133は弥生時代の周溝墓の溝を潰して作られている。56は重機掘削中に発見した粘板岩で、表裏は古い風化面であるが上端部はそれに比べ新しい風化を示す。57は第12次調査のSK12－726の上面で検出していた粘板岩で、3枚の粘板岩が接合した。前年度の報告が間に合わなかったため今回掲載した。

c．古墳時代(第111図)

砥石　47はSH183出土の白色砂岩製の柱状を呈する砥石である。48はSD443出土の砂岩製の



第113図　池上遺跡第13次調査出土鉄器

砥石である。敲打痕と比熱した痕跡が認められる。49はＳＨ12－516から出土した粘板岩製の砥石である。

③玉類(第112図)

１はＳＴ601精査中に検出した、緑色のガラス小玉である。２～21は滑石製の臼玉である。25は滑石製の管玉である。22は土玉で、黒色を呈する。23・24は滑石製の勾玉である。出土位置などは付表２に譲りたい。

④鉄器(第113図)

１は奈良時代の井戸ＳＥ133から出土した刀の破片である。２はＰ440から出土した鉇と考えられる。基部末端は丸く仕上げられており、一部に木質が残存する。４は古墳時代の住居跡ＳＨ350から出土した鋤先である。３は古墳時代住居跡ＳＨ351から出土した小判状の鉄片で小札と考えられる。この住居からは韓式土器が出土している。５～11は鉄鏃と考えられる。９は古墳時代の土坑ＳＫ491から出土した。先端部が残存し逆刺が片側に認められる。５～７・11はＳＫ468から出土した。10はＰ123、８は包含層から出土している。

４．第18次調査の概要

Ａ．調査概要(第114図)

平成14年度の第13次調査の東地区、西地区に挟まれた約200㎡の三角地の調査である。当初から竪穴式住居跡や方形周溝墓が検出されることが期待されていた。調査地の基本層序は、整地土の下に旧耕作土・床土・暗褐色土(包含層)・黄褐色土の順で深くなる。遺構検出面は、黄褐色土上面である。今回の調査区は狭小ではあるが、古墳時代の竪穴式住居跡６基・土坑、弥生時代の方形周溝墓・土壙が検出されている。

①弥生時代

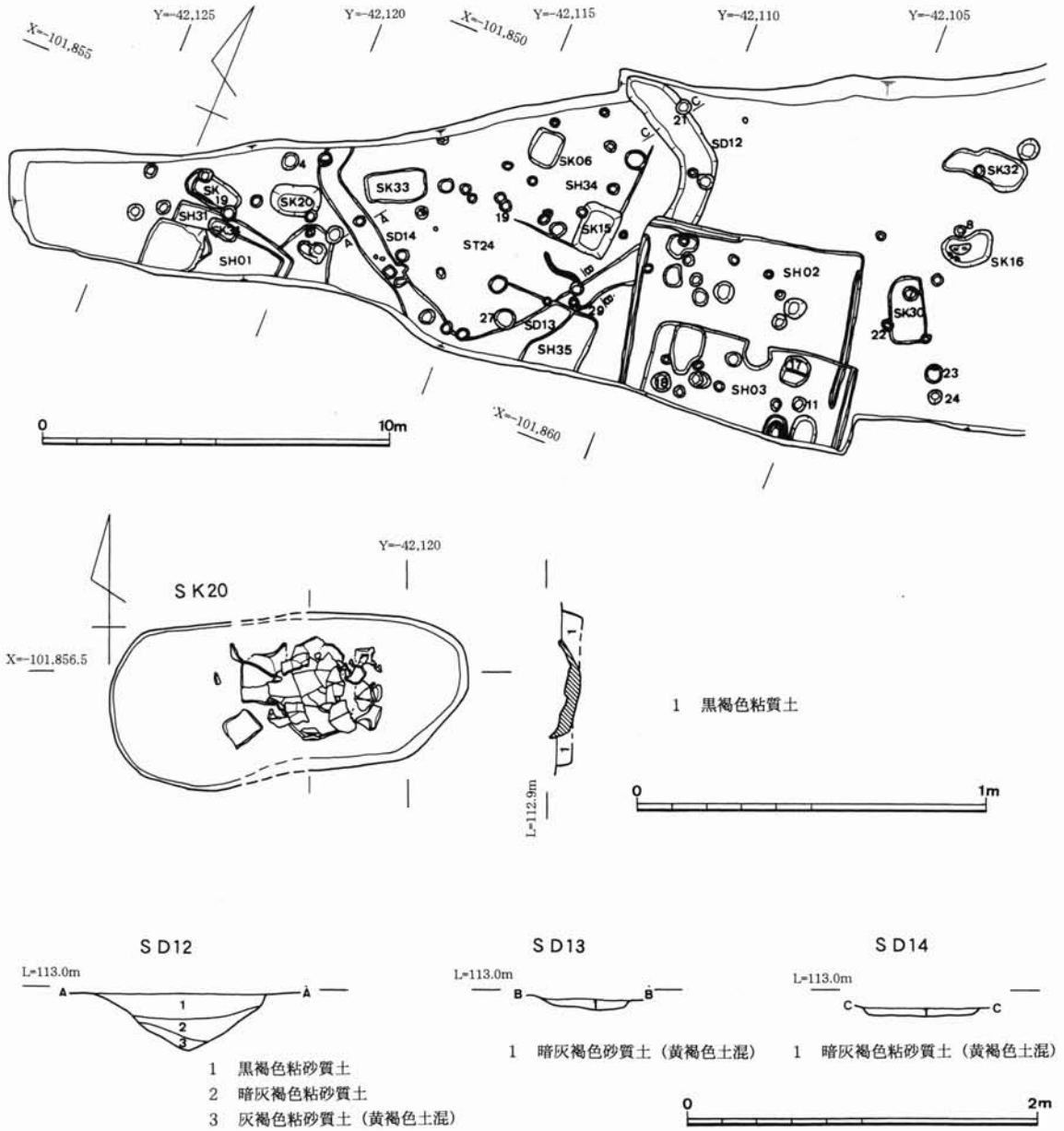
方形周溝墓ＳＴ24　長方形プランの方形周溝墓である。北東溝ＳＤ12、東南溝ＳＤ13、南西溝ＳＤ14によって囲まれる。出土遺物は少ないが、遺物から弥生時代中期のものと考えられる。埋葬主体部にあたる土壙は、ＳＫ06・33があるがいずれも浅く埋葬施設は不明である。主軸の方向は方形周溝墓と異なるが、後述の弥生時代の土壙とは同じものも存在する。

土壙ＳＫ20　楕円形のプランを持つ土壙で、内部からは壺が横位で出土している。当初図化したよりも一回り大きなプランで検出されたが非常に浅く、土器の出土状態図(第114図)では中心の深い部分だけを描いた。

②古墳時代

竪穴式住居跡ＳＨ01　調査区西で検出した遺構で、ＳＨ31と重複するが、ＳＨ31が先行する。東西方向は約3.7m、南北の検出長は約1.5m、検出面からの深さ約0.15mである。

竪穴式住居跡ＳＨ02　ＳＨ03と重複するが、ＳＨ02が先行する。周壁溝を持ち、北辺中央の竪穴立ち上がりから少し離れた部分に焼土が確認できた。東西方向は約6.5m、南北の検出長は約5.4m、検出面からの深さ約0.05mである。



第114図　池上遺跡第18次調査遺構実測図

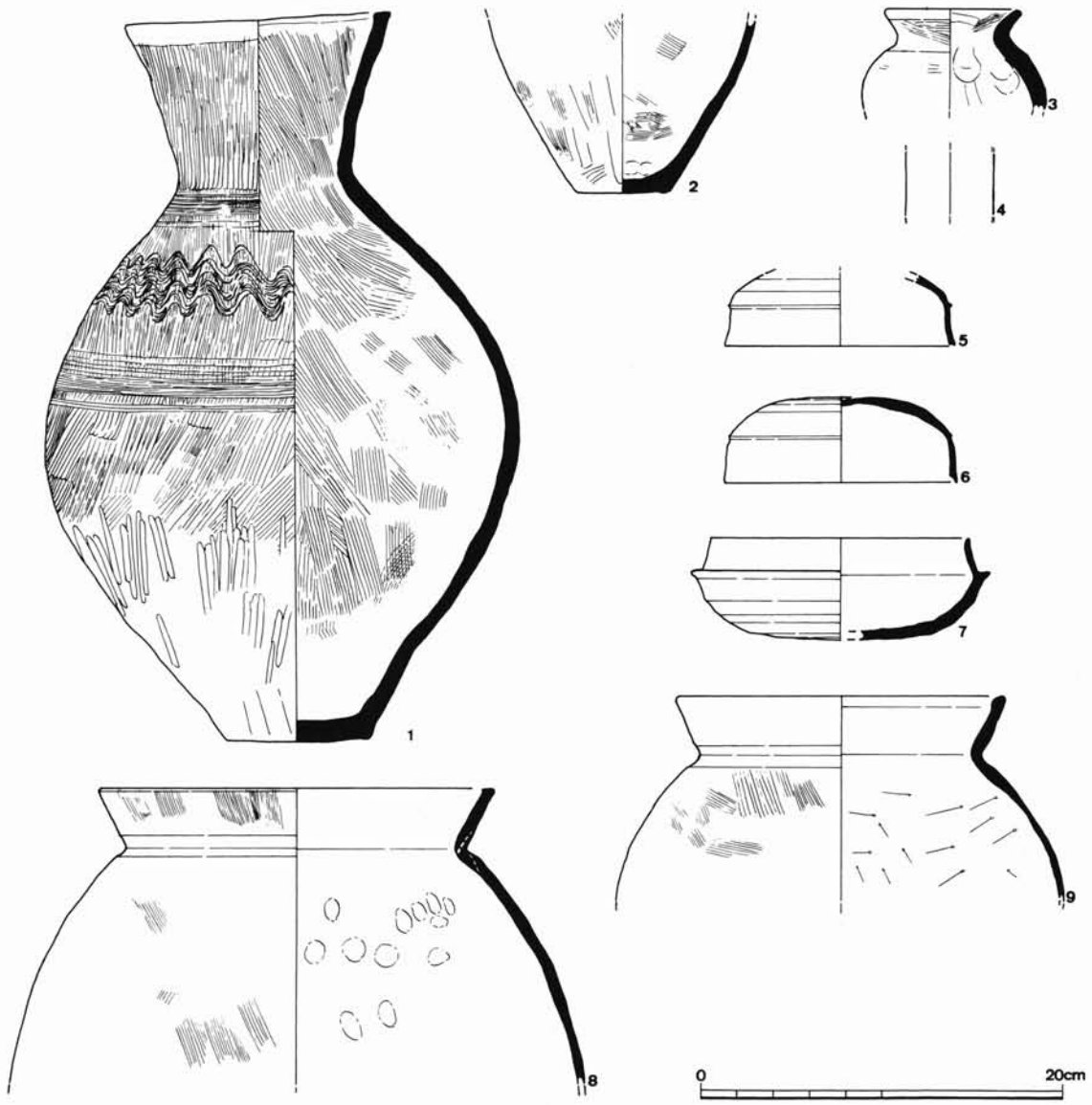
竪穴式住居跡ＳＨ03　北辺中央部に竈跡を持つ住居跡である。東西方向は約６ｍ、南北の検出長は約2.5m、検出面からの深さ約0.1mである。

竪穴式住居跡ＳＨ31　ＳＨ01の先行する住居跡で、わずかの部分しか確認できなかった。東西方向は約3.8m、南北の検出長は約0.6m、検出面からの深さ約0.1mである。

竪穴式住居跡ＳＨ34　南東隅部のみが検出できた竪穴式住居跡でその住居跡に取り付くようにＳＫ15が掘削される。検出面からの深さが深い所で0.03mである。ＳＫ15の長さ1.5m、幅１ｍ、検出面からの深さは0.2mである。

竪穴式住居跡ＳＨ35　北東方向のみが検出できた竪穴式住居跡の残欠である。わずかの色の違いのみで確認できた。

③時期不明遺構



第115図　池上遺跡第18次調査出土土器

土坑ＳＫ19　埋葬主体部に似た形状を示すが、遺物がないため時期が不明である。長さ1.7m、幅0.7m、検出面からの深さは0.25mである。

土坑ＳＫ30　埋葬主体部に似た形状を示すが、遺物がないため時期が不明である。長さ1.8m、幅１m、検出面からの深さは0.05mである。

Ｂ．出土遺物（第115図）

①弥生時代

方形周溝墓ＳＴ24　東側の溝から２の弥生土器の底部が出土している。外面底部付近はケズリ、胴部はハケ、内面はハケ調整である。

土坑ＳＫ20　１は完形の壺で、頸部胴部にクシ描き直線文、その間をクシ描き波状文で飾る。外面は頸部胴部がハケ、胴部下半がミガキ、底部付近がケズリである。

②古墳時代

竪穴式住居跡ＳＨ31　３は土師器の小型の甕である。外面はハケ、胴部内面はナデ調整である。

4は製塩土器の胴部片である。

5は須恵器の杯蓋である。6は須恵器の杯蓋である。7は須恵器の杯身である。8は土師器の甕である。口縁端部は内面に張り出す。外面はハケ、内面はケズリが見られる。9は布留式土器の甕で、外面はハケ、内面はケズリが見られる。

ま と め

Ⅰ期　旧石器時代

近畿地方では後期旧石器時代後半には、サヌカイトを用いた国府型ナイフ形石器や横剥ぎのナイフ形石器が多く用いられる。池上遺跡ではサヌカイト製の遺物のうち旧石器時代に特定できる遺物はないが、同じ丹波地域の蒲生遺跡では、サヌカイト製の国府型ナイフ形石器が発見されており、チャートの原産地帯である丹波においても瀬戸内技法とサヌカイトとの結びつきの強さがうかがえる。

池上遺跡で発見されている石器は、第8次調査では縦長剥片を用いたナイフ形石器、今回の調査では台形石器や縦長剥片などである。このようなチャート製石器は、兵庫県氷上町七日市遺跡や同西紀町板井遺跡では、姶良（あいら）Tn火山灰降灰以前の石器群に認められる。このことから、正確な包含層は把握できていないが、姶良Tn火山灰降灰以前の石器群の一部が発見されていると考えられる。

Ⅱ期　縄文時代

第5次調査時に縄文土器片が採集されている。また第13次調査の石器の中には、チャート製の凹基無茎の石鏃が見られる。時期が特定できる遺物が非常に少ないため、詳細は不明である。

Ⅲ期　弥生時代（第116図）

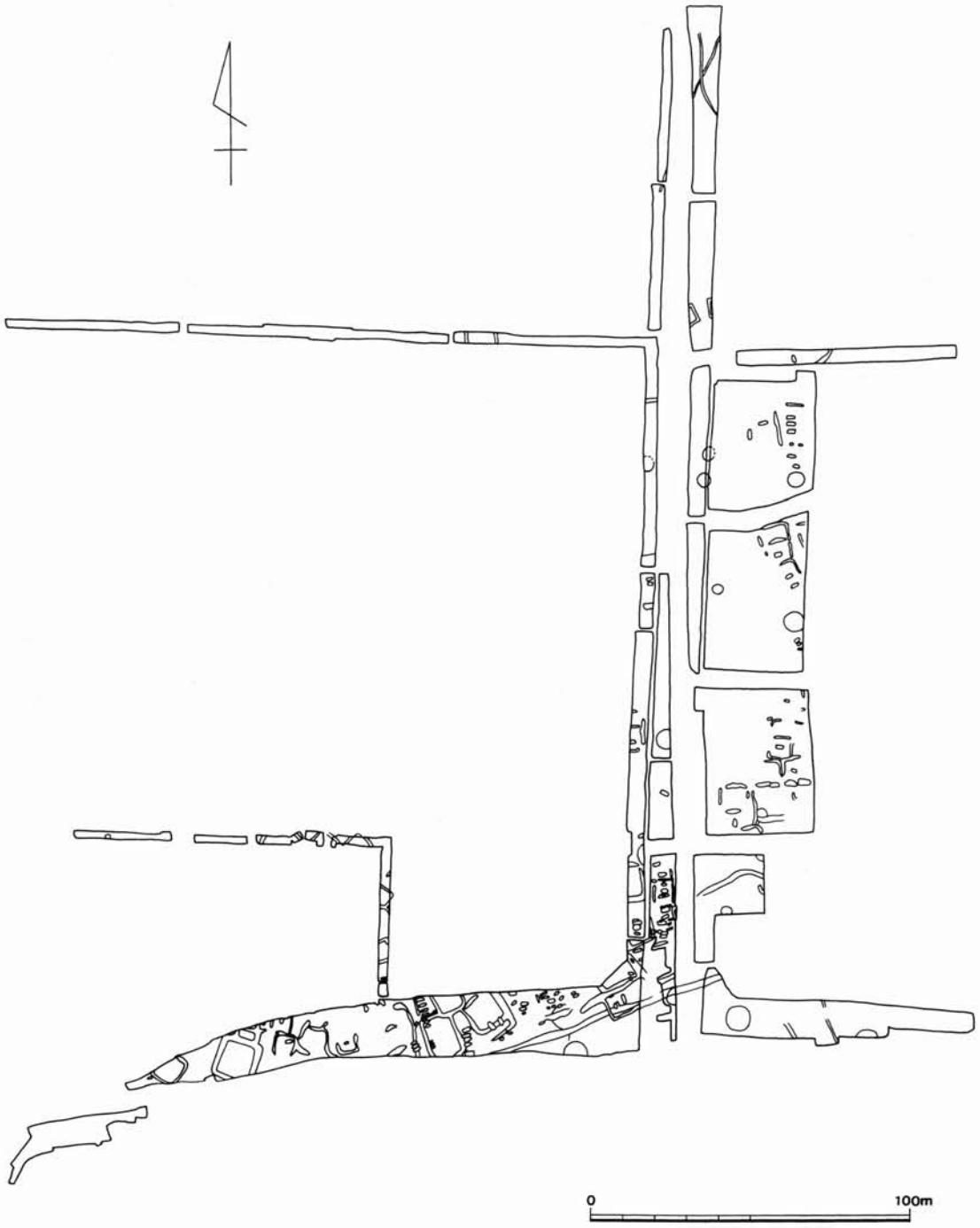
弥生時代は最も遺構が多い時期の1つである。今回の調査区周辺では、住居と周溝墓が重複して検出される場合がある。こうした場合、例外なく住居跡のほうが方形周溝墓に対して形成時期が先行する。また、鋭角の逆台形状を呈するSD12－01は第5・8・12・13次調査区を直線状に貫く。この溝は重複部を持つ場合、他のすべての弥生時代遺構に先行する検出状況を示している。

方形周溝墓はSD12－01の北側に作られ、墓域の東の端は不明であるが、西端は第18次調査で検出している地域までは延びていることがわかり、第13次調査西地区は大きく削平が及んでいるが、弥生土器などが確認できることから、丘陵裾部まであったものと考えられる。また、北側は第5次調査第2トレンチで検出している。第16次調査の第2トレンチ以北では遺構密度が希薄になり、流路が流れる。

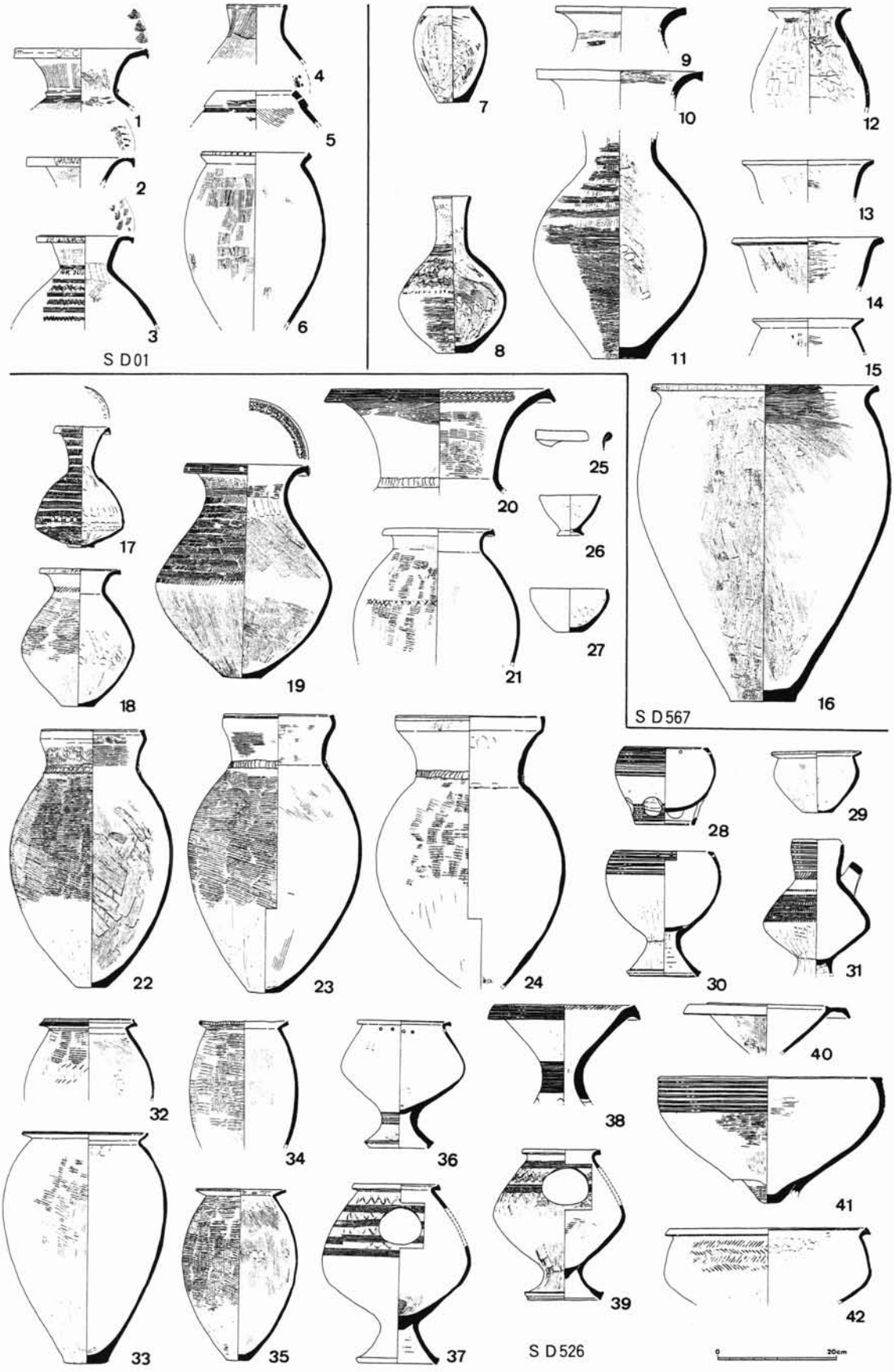
①中期中葉　出土遺物から最も古い時期の遺構であるSD12－01からは、中葉の初めと考えられる土器が出土している。第12次調査では、検出した最上層に土器群があり、下層と分離できる可能性が指摘できた。第13次調査では明確に分離できなかったが、概ね池上遺跡の中期では古い様相の土器群と言える。竪穴式住居跡に共伴する遺物はほとんどないため、時期は明確化できない。また、第12次調査の土坑または、周溝墓の一部の可能性があるSD12－567から出土した土

器群は中期中葉の一括時群としてとらえられる。方形周溝墓は再掘削や作り変えのため周溝出土遺物では築造時期を正確に捉えることはできないが、この遺物が周溝に伴うものであれば、周溝墓の築造が中期中葉にさかのぼる可能性も指摘できる。ＳＤ12－567は一定量の土器と器種が出土していることからこの地域の基準資料の１つとなる。

中期の遺構やそれ以後の遺構からは数多くの粘板岩剥片が出土する。第111図で示したように粘板岩素材も出土しており、近接地に粘板岩の産出地があることを示している。また、この地域では拙校で述べたように、石鏃における磨製と打製の比率において磨製の占める割合が高く、こ



第116図　池上遺跡第３～５・８・12～16・18次調査検出弥生時代遺構

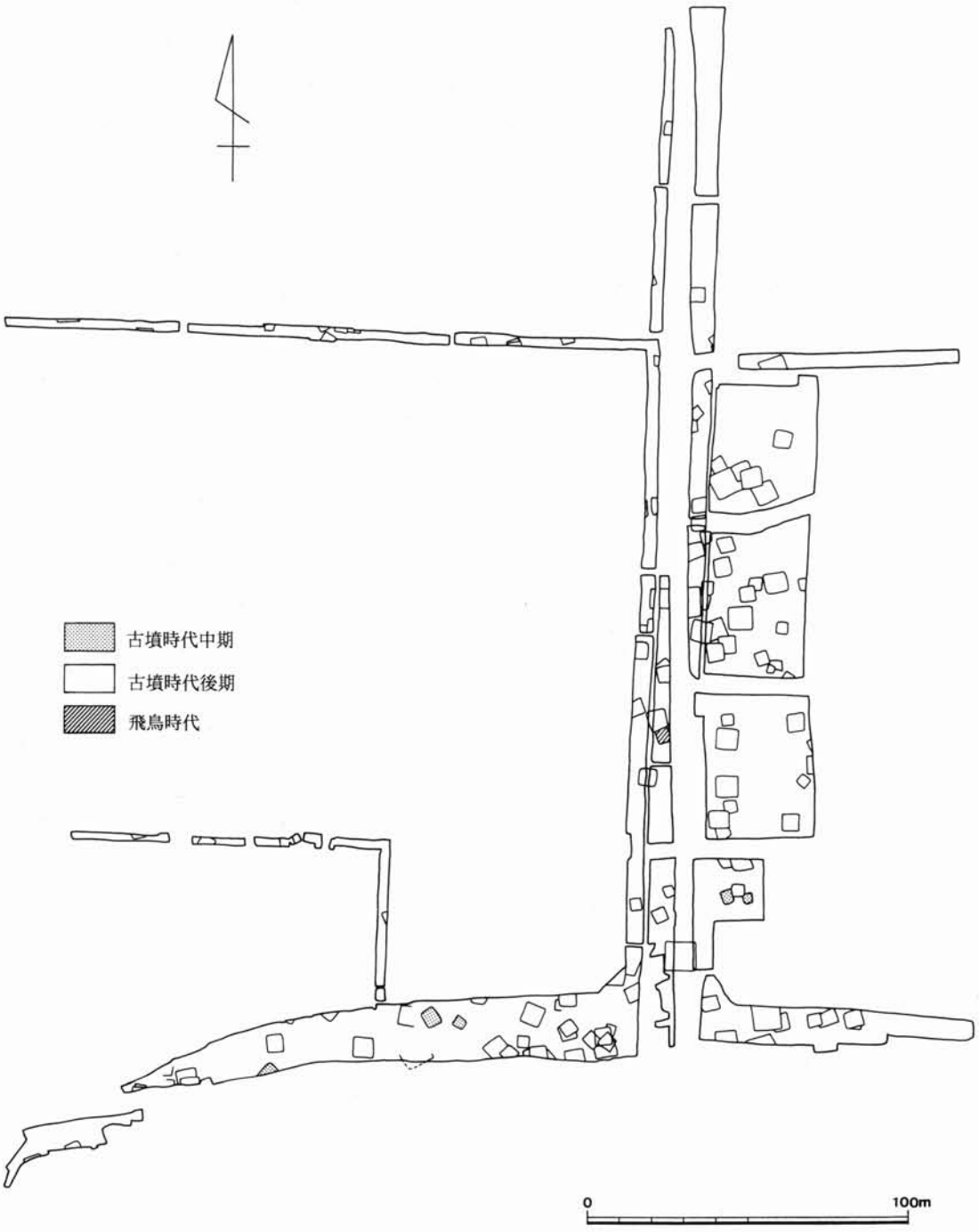


第117図　池上遺跡出土弥生土器

の傾向は石剣においても認められる。

②中期後葉　弥生時代では最も遺構が多い時期である。方形周溝墓の形成時期もこの時期に属する。今回報告の第13・18次調査の方形周溝墓も中期中葉のものと考えられる。弥生時代住居跡は中葉、後葉に属すかいずれか判別しがたいが、方形周溝墓との切り合いから、住居域が墓域に変わったことが確認できるため、中期後葉以前とのみ位置づけられる。

方形周溝墓は幾度となく溝の最掘削や、作り替えを経ていることが検出状況からわかる。また、主体部が多く検出できることも池上遺跡の特徴である。傾向は周溝の浅い方形周溝墓や大きな周



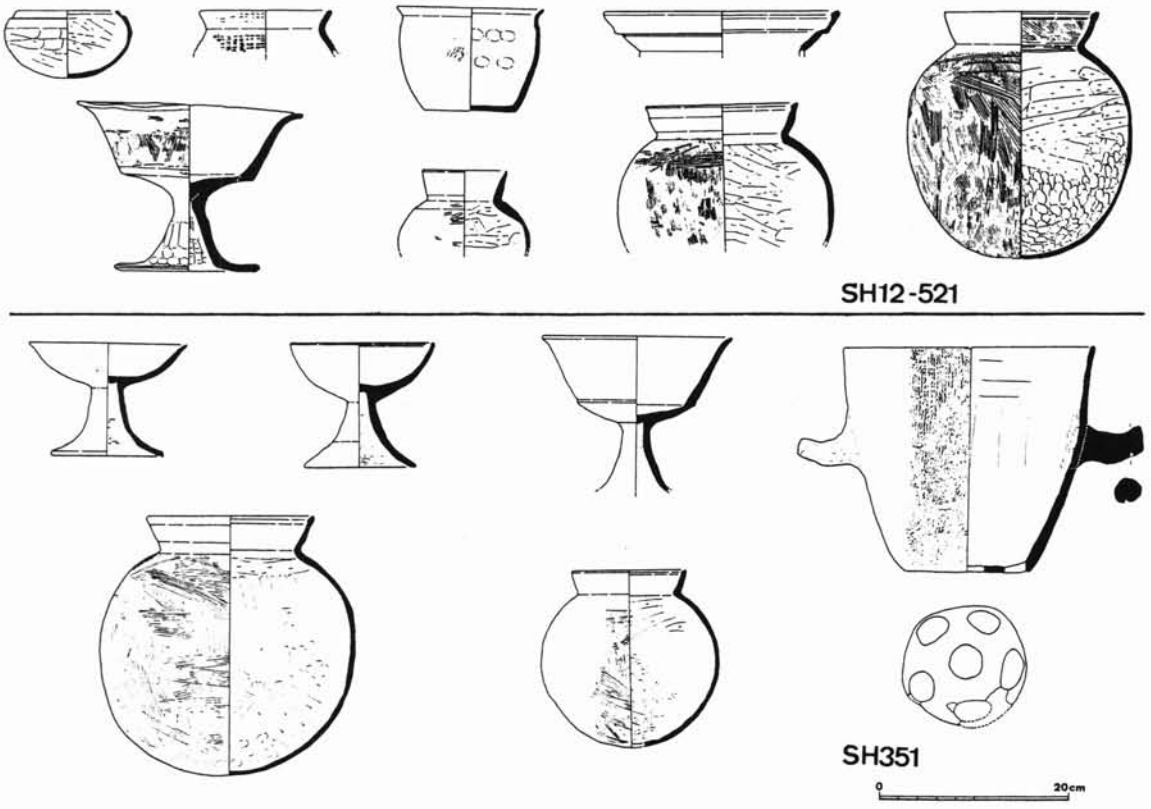
第118図　池上遺跡第３～５・８・12～16・18次調査検出竪穴式住居跡

溝墓に囲まれて、その間を区画した周溝墓などに多くの主体部が残されている。このことは、溝の深い周溝墓はその残土を多く墳丘部に盛っていたため、埋葬施設の位置が高くなり後世に削られたと考えられる。

③後期　後期に属する遺構や遺物は第13・15次調査でのみ検出されておりいずれも遺跡内では、指定区域の西南部に位置する。そのほかの調査区では、包含層を含め後期の遺物は発見できていない。これらのことから後期の集落は池上遺跡の西あるいは南側に広がる可能性がある。

Ⅳ期　古墳時代(第118・120図)

①中期　第13次発掘調査では、住居跡ＳＨ351が検出できている。この時期の竪穴式住居跡は第４次調査のＤトレンチ、第12・13次調査区で検出されており、現在の遺跡指定地域では南部に見られる傾向がある。中期は古墳時代の遺物遺構としては、池上遺跡では最も古い時期である。したがって、弥生時代との集落の連続性は、調査地点内では認められない。初期の布留式土器を出土する遺構や庄内式土器は池上地区では検出できていない。土器の観察から布留式土器でも最末期に位置づけられる。ＳＨ351では、外面平行タタキが施され、内面の当具痕がナデ消された須恵器が出土している。同じ時期の遺構には、第12次調査のＳＨ12－521・ＳＨ12－522がある。第12・13次調査の共通点として住居跡内から韓式土器の出土が挙げられる。第12次調査では外面縄席文タタキの土師質の甑が、第13次調査では格子目タタキと縄席文を持つ土師器の鉢、平底の土師器の鉢が出土している。５世紀代の須恵器は、住居跡としては、第４・12次調査などで検出しているＴＫ208段階のものである。また包含層では、甕の口縁部・器台・樽型瓶・縄席文を持

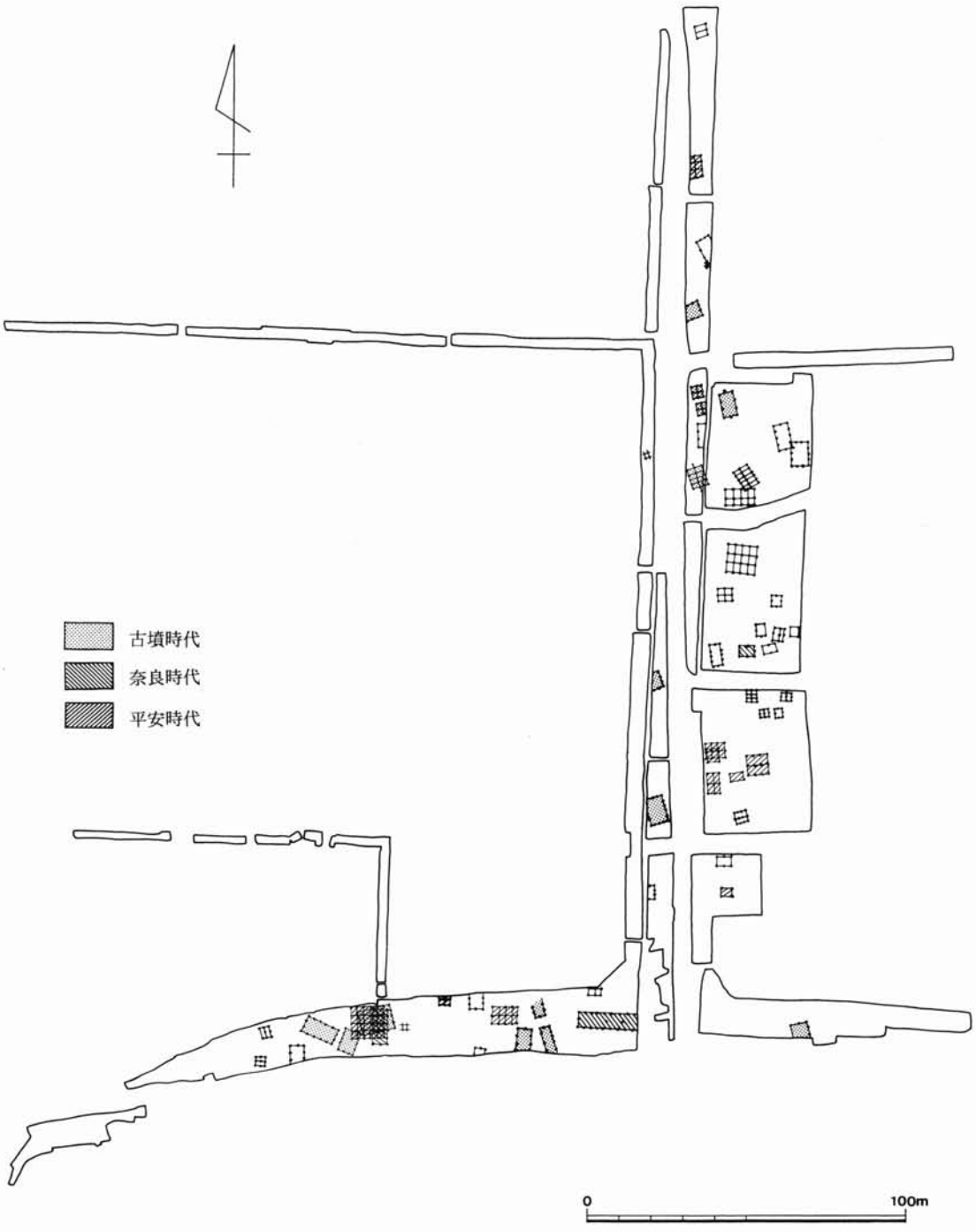


第119図　韓式土器を含む土器群

つ甕などがある。こうした大型の器種は陶邑産須恵器の特徴を持つ。

②後期　ＴＫ10・ＭＴ15の６世紀代の竪穴式住居跡は大型のものが含まれ、一辺が９ｍ前後のものが出現する。時期が新しくなるにつれ６ｍ以下のものになる傾向が見られる。竈は概ね北側の辺の中央部につけられるが、まれに西、東に作られるものが存在する。周辺の住居跡との入り口の配置などからの考察が可能であろう。また、竈の作り方で、焚口部分の骨材として粘板岩が用いられる例がある。

住居の中からは滑石製の臼玉や勾玉が出土している。中期の住居内では検出できていない。ま



第120図　池上遺跡第３～５・８・12～16・18次調査検出掘立柱建物跡

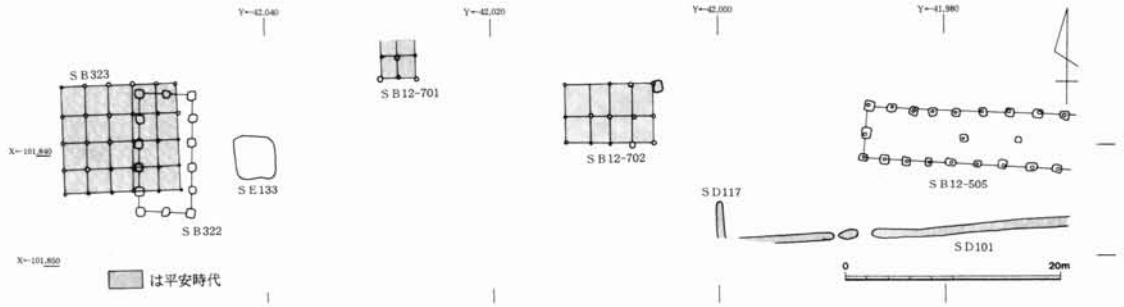
た、多種類の鉄器の出土も池上遺跡の特徴といえる。後期の遺構からは、武器の鉄鏃・刀、工具の鉇、農具の鋤先のほか第12次調査では住居跡内から鉸具輪金具が出土している。中期の住居跡内であるが、小札も出土している。鉸具輪金具や小札が竪穴式住居跡内で発見される点はこの集落の性格を示していると考えられる。

この時期の特徴としては、掘立柱建物跡が見られることである。遺物が少ないため特定の時期に位置づけにくいが、奈良時代以降は北を意識した建物が主体を占めているのに対して古墳時代のものは角度を持つものが多い。第13次調査では３棟の古墳時代と考えられる建物跡が検出できている。奈良時代のこれまで検出できている建物は褄部の柱が奇数で、棟をささえる柱が明らかであるが、古墳時代のものは偶数になるものの比率が高い。また、第４次調査では６世紀後半期の独立棟持ち柱建物が検出されている。この調査区に近接した第５次調査第３トレンチでは、独立棟持ち柱を持つ総柱建物が検出され、建物軸を同じくして３回以上の建て替えが認められる総柱の倉庫２棟が検出されている。この第４次調査の建物周辺では竪穴式住居跡が途切れる。

池上地域は狐塚古墳群があった場所で、最近まで塚があったとの伝承が存在する。第12次調査では、須恵質の陶棺片が出土している。

Ⅴ期　飛鳥時代　７世紀代と考えられる遺物を出土する遺構は、第13次調査では土坑や柱穴だけで建物は検出できていない。第５次調査ではＳＨ５－391が検出されている。各調査時で、７世紀代の遺物は散見できるが、６世紀代の竪穴式住居跡の量に比べて著しく減少する。この時代に桂川対岸の八木嶋遺跡では、４面庇を含む建物群が検出されており、豪族居館跡として注目されている。６世紀後半期に豪族居館または神殿として注目されている独立棟持柱を持つ建物が池上遺跡で発見されているが、八木嶋遺跡の建物群が立てられた時期には集落規模が小さくなる。このことは、亀岡盆地北端における政治情勢を示している可能性もあり注目される。

Ⅳ期　奈良時代　第12次調査では東西棟の２間×９間以上の方形掘形を持つ掘立柱建物跡ＳＢ505が検出されている。この建物の内部には、間仕切りか棟を支えるための柱穴が１か所検出されている。第12次調査ではＳＢ505の他時期が奈良時代に特定できる建物はないが、土坑ＳＫ523からは纏まって奈良時代の土器が出土している。第13次調査では南北棟の２間×５間の掘立柱建物跡ＳＢ322とそれと近接し軸を合わせた状態で掘られた、方形掘形を持つ井戸ＳＥ133が検出できた。また、方形掘形を持つ井戸ＳＥ810が第15次調査の第８トレンチで検出されている。奈良時代の明確な建物遺構は、第12・13次調査で検出されておりこの位置は、指定された池上遺跡の



第121図　池上遺跡における奈良・平安時代の遺構

南部に集中することがわかる。またこの時期の建物は計画軸が北で東に２～４°振る特徴を持つ。

出土遺物には、第12・13次調査で須恵器製円面硯が、ＳＥ133からは布目瓦片、製塩土器片などが出土している。これらの遺物は、文字の書けた人物の存在や、一部にでも瓦葺建物があったことを示しており、大型の建物や井戸がある意味を示唆していると考えられる。

Ⅶ期　平安時代

①10～11世紀前半

平安時代の遺構は、その前期段階に遡るものは発見されていない。奈良時代の前期以降から出土遺物を見ても、奈良時代後半から平安時代前期の明確な特徴を示すものは発見されていない。建物跡の検出例は第５次調査第２トレンチＳＢ５－115とそれに隣接した井戸ＳＥ５－270の資料がある。方形掘形であることから律令期以降の建物としたが、ＳＢ115が大きく北から振り角を持つことと、近接した井戸の掘形との前後関係から見て時期を考え直す必要もある。ＳＥ５－115の井戸からは多くの黒色土器が出土しており、丹波地域の基準資料の１つとなる。

第12次調査では拡張区で、第13次調査では調査区東側で東西方向の溝ＳＤ101を検出している。この溝からは10世紀代の遺物が出土していることと、現在の大字池上と刑部を南北に二分する字界に近接することから、条里地割の痕跡と位置づけた。この溝は西で南に振る溝で、奈良時代の建物とは計画線が異なる。この溝との接点は判らないがＳＤ101と直行する溝ＳＤ117があり区画の溝である可能性が高い。また、第15次調査第８トレンチで東西方向の溝ＳＤ885が現在の大径畔である農道の直下から検出されている。また、池上遺跡と北で接する野条遺跡の第９次調査では、現在の大字池上と野条を南北に二分する字界に近接する地点から、東西方向の溝が検出されている。地割の溝と奈良時代の建物との計画線の違いは、池上地区周辺の条里が奈良時代以前には遡らないことを示唆している。

池上遺跡周辺地域では、条里地割状のものが確認できる。この地域は明治時代に若干の土地区画整備を受けたといわれているが、その当時の改変は現在のものとは違い従前の畦の位置をほとんど変えずに行われたと考えられる。条里そのものの痕跡は現在の道、字界、畦と重なっていることが分かった。

②11世紀後半

11世紀には、柱と変わらない径の柱穴を持つ総柱建物が遺跡の東部にまで広がり分布する。第13次調査ではＳＢ323がそれにあたるが、第12次調査では４間×２間の総柱建物ＳＢ12－702と２間×２間以上の建物ＳＢ701が検出されている。いずれも建物の軸が北でわずかに西に振る傾向が見られる。これらの建物に見られる主軸方向は、10世紀の溝の方向と齟齬しないことから地割が踏襲されたことが確認できる。

第４次調査においてもこの時期と考えられる特徴を持つ建物が多く検出されているが、時期の特定が困難で時期不明の建物とされているものが多く、広がりを持ってこの時期の建物が展開していたことを示している。また、同時に土壙墓も作られ、第４・12次調査区で検出されている。

（中川和哉）

参考文献

久保弘幸・藤田淳『七日市遺跡(Ⅰ)旧石器時代遺跡の調査』　兵庫県教育委員会　1990
山口卓也他『板井寺ケ谷遺跡—旧石器時代の調査—』　兵庫県教育委員会　1991
石井清司・田代弘『京都府遺跡調査報告書第５冊　北金岐遺跡』　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1985
上島享「池上院と神護寺・丹波国府—新史料の紹介と皇慶の活動をめぐって」(『郷土誌八木』第10号　八木史談会)　2000
鵜島三壽「国道9号線バイパス関係遺跡平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1991
鵜島三壽『京都府遺跡調査報告書第16冊　千代川遺跡』　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1992
岸岡貴英「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成13年度調査概要〔１〕池上遺跡第10次」(『埋蔵文化財発掘調査概報2002』　京都府教育委員会)　2002
岸岡貴英「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成14年度調査概要〔１〕池上遺跡第14次」(『埋蔵文化財発掘調査概報2003』　京都府教育委員会)　2003
岸岡貴英編『京都府遺跡地図〔第３版〕第２分冊』　京都府教育委員会　2002
黒川孝宏『南北朝時代の丹波・亀岡』　亀岡市文化資料館　1993
柴暁彦「国道478号バイパス関係遺跡(2)沢ノ谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第62冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1995
柴暁彦・原田三壽「国道478号バイパス関係遺跡(1)八木嶋遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第62冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1995
田代弘「木津川河床遺跡出土の円窓付土器」(『京都府埋蔵文化財情報』第17号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985
田代弘「亀岡市時塚遺跡採集の石製品類」(『京都府埋蔵文化財情報』第26号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987
田代弘「池尻遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第48冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1992
田代弘「池上遺跡第11次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第104冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2002
田代弘・岡崎研一・野島永「南丹区域農用地総合整備事業関係遺跡　池上遺跡第８次・池上古里遺跡第２次」(『京都府遺跡調査概報』第103冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2002
谷口悌『八木町遺跡地図—町内遺跡詳細分布調査報告書—』　八木町教育委員会　1997
谷口悌『池上遺跡発掘調査概要—第２次調査—』　八木町教育委員会　1998
谷口悌『町内遺跡発掘調査概要—野条・室橋・新庄・諸畑遺跡—』　八木町教育委員会　1999
谷口悌ほか『池上遺跡発掘調査報告書—第３次・第４次調査—』　八木町教育委員会　2000
谷口悌『町内遺跡発掘調査概要—第３次野条遺跡・第２次新庄遺跡—』　八木町教育委員会　2000
谷口悌『新庄遺跡発掘調査概要—第３次調査—』　八木町教育委員会　2001
谷口悌『町内遺跡発掘調査概要—池上遺跡(第９次調査)・木原遺跡—』　八木町教育委員会　2002
中川和哉「池上遺跡第12次発掘調査概報」(『京都府遺跡調査概報』第108冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2003
中川和哉「京都における石器石材の獲得とその利用」(『京都府埋蔵文化財情報』第89冊　(財)京都府埋蔵

文化財調査研究センター）　2004
中川和哉「池上遺跡の方形周溝墓の景観復原」（『京都府埋蔵文化財情報』第90冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2004
中川和哉ほか「池上遺跡第５次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第91冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2000
中川和哉・中村周平「池上遺跡第15・16次発掘調査概報」（『京都府遺跡調査概報』第108冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2003
中沢勝「天川遺跡発掘調査報告書」　亀岡市教育委員会　1993
中村研「丹波国吉富庄の古絵図について」（『史朋』２号　史朋同人）　1963
野々口陽子「余部遺跡第２次調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第81冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1998
野々口陽子「余部遺跡第５次調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第88冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1999
奈良康正「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成11年度調査概要〔１〕池上遺跡」（『埋蔵文化財発掘調査概報2000』　京都府教育委員会）　2000
奈良康正「国営地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成13年度発掘調査概要〔１〕案察使遺跡第２・３次」（『埋蔵文化財発掘調査概報2002』　京都府教育委員会）　2002
樋口隆久「御上人林遺跡第３次発掘調査報告」（『亀岡市文化財調査報告書』第６集）　1978
樋口隆久・吉田野乃「千代川遺跡第11次発掘調査概要」（『亀岡市文化財調査報告書』第15集　亀岡市教育委員会）　1987
水谷尋克・村尾正人・引原茂治「国道９号線バイパス関係遺跡昭和56年度発掘調査概要(千代川遺跡・南金岐遺跡)」（『京都府遺跡調査概報』第１冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1982
村田和弘　「池上遺跡第７次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第98冊　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　2001
村尾正人・田代弘ほか『京都府遺跡調査報告書第６冊　大田遺跡』（(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1986
吉水真彦「馬場ヶ崎遺跡発掘調査報告」（『亀岡市文化財調査報告書』第５集　亀岡市教育委員会）　1978
亀岡市史編さん委員会『新修亀岡市史　資料編第１巻』　2000

3．長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足遺跡発掘調査概要

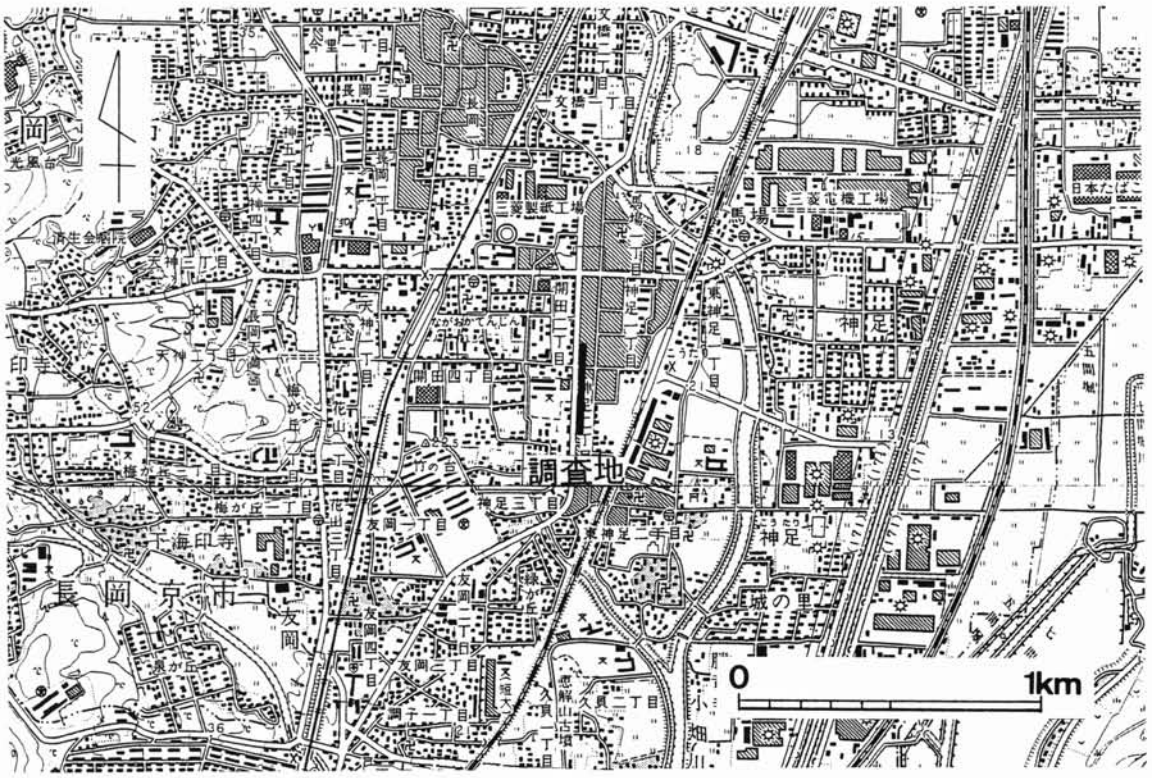
1．はじめに

今回の調査は、府道御陵山崎線(府道西京高槻線)の拡張事業に伴い、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。

調査地は、長岡京市開田二丁目および同神足二丁目地内で、長岡京跡右京六条一坊十五・十六町(新条坊では、右京六条一坊十三・十四町)、同右京五条一坊十三町(新条坊では、右京六条一坊十五町)にあたり、神足遺跡の西辺部に位置している(第122図)。

これまでに、調査地周辺では多くの発掘調査が実施され、長岡京期の掘立柱建物跡群などを多数確認した右京第630次調査[注1]や、弥生時代の方形周溝墓群・土坑・竪穴式住居跡を検出した右京第606次調査などでは、貴重な成果があがっている。また、昨年度実施した右京第750次調査では、中世の大溝を確認している。こうした遺構の検出は今回の調査でも十二分に推定できた。

発掘調査は、生活道路を確保しながら、下水道・上水道・ガス・雨水などの埋設管を考慮して、南北長約630m内に12か所の調査区を設定し(第123図)、延べ1,450㎡にわたって、平成15年７月



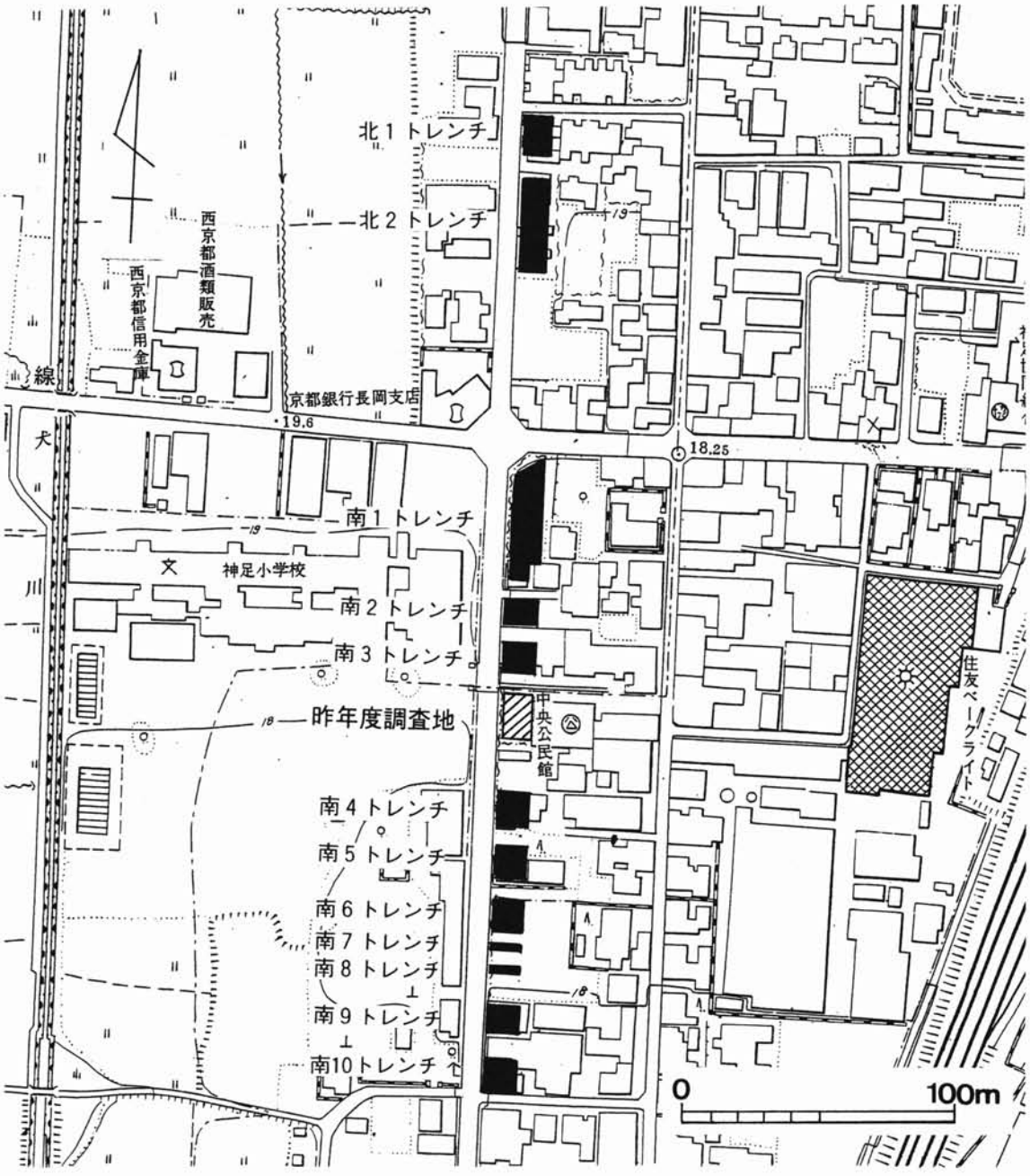
第122図　調査地位置図(国土地理院1/25,000京都西南部・淀)

9日～平成16年1月29日まで行った。

調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長伊野近富、同主任調査員松井忠春、同専門調査員石尾政信、同調査第3係調査員高野陽子が担当した。

調査に当たっては、京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・京都府乙訓土木事務所をはじめ、地元自治会・住民の方々から指導・協力を賜った。また、酷暑から寒中まで発掘調査・整理業務に従事していただいた作業員・調査補助員・整理員[注2]に対して、あわせて厚くお礼申し上げます。

なお、調査に係わる経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。



第123図　調査地位置図

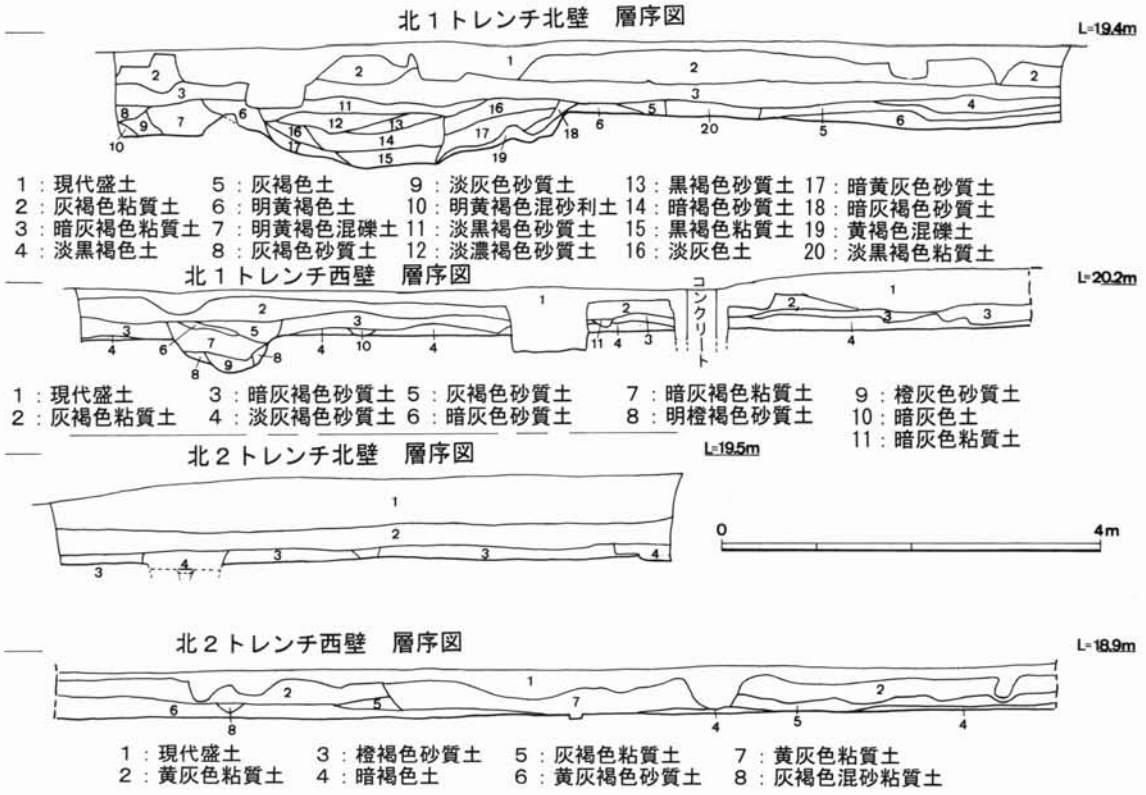
2．調 査 概 要

長岡京跡条坊新復原案に従って、右京六条一坊一三・一四・一五町地内に位置する北１～２トレンチ、南１～３トレンチ、南４～10トレンチに三分して、以下簡略に報告する。

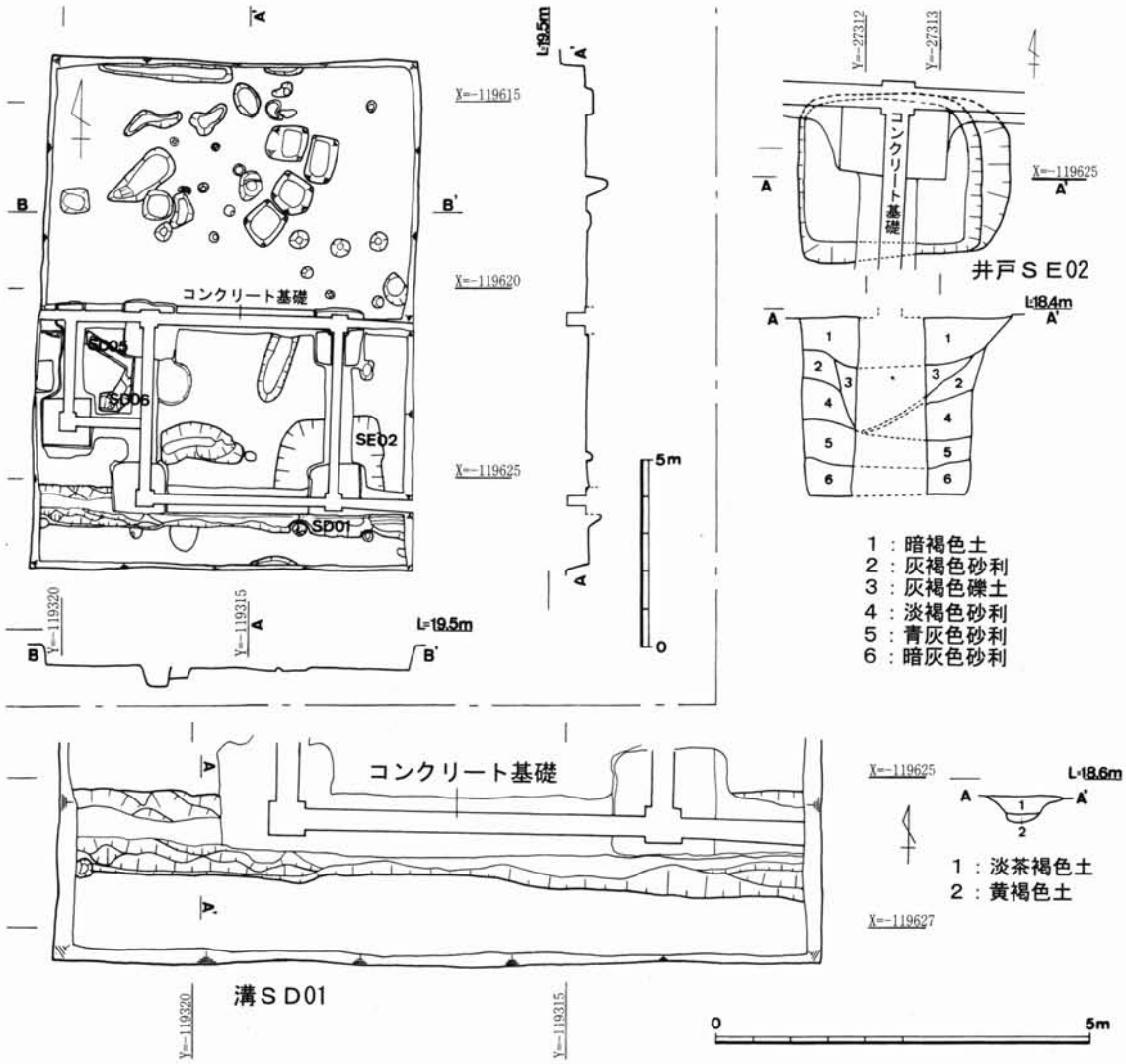
(1)北１～２トレンチの検出遺構(第124～127図、図版第74～78－(1))

①基本層序(第124図)

調査地の周辺地勢は、北西→南東への傾斜を示し、北１トレンチ北端の現地表面の標高は約19.2mで、北２トレンチ南端では約18.7mを測る。遺構面は標高18.2～18.5mの地山面である。地山面から長岡京期～江戸時代に推定できる各時代の諸遺構を確認した。遺物包含層は北２トレンチ中央西側で薄く帯状に残存していたにすぎない。層序は、第１層は現代盛土であり、20～30cmの厚さを測るが、部分的に砕石・コンクリート砕などの攪乱坑が大きく１m近く穿っている。第２層は、両調査区で確認できる灰褐色粘質土であり、近・現代の旧耕作土と考えられる。第３層は暗褐色粘質土で、30～40cmの厚さで堆積している。近世の耕作土で、陶磁器片が少量出土したにとどまった。 第４層は地山面直上に堆積する暗灰褐色粘質土で、上述したように北２トレンチＳＥ13周辺にのみ堆積していた。層中からは長岡京期～鎌倉時代の土師器や瓦器の小片が検出できた。これより下位は地山面で、黄色粘質土あるいは砂利層となる。北１・２トレンチともに早い段階で上面を削平されたため、遺構の多くは地山面直上で確認された。



第124図　北１・２トレンチ層序図



第125図　北１トレンチ調査地実測図

②北１トレンチの検出遺構（第125図、図版74－(2)～75－(2)）

このトレンチでは、南半部がコンクリート製基礎による攪乱のため、全体を把握するには至らなかったが、顕著な遺構として溝ＳＤ01・05・06、井戸ＳＥ02がある。

溝ＳＤ01　幅約1.1m、深さ約0.4mを測り、調査区外へのびる。埋土は上層が淡茶褐色土で、下位は砂や小石を含む黄褐色土である。北辺の大部分はコンクリート製基礎下に埋没する。底面はゆるやかな「U」字形で西方に向かって傾斜する。江戸時代後期の陶磁器片が数点出土した。

溝ＳＤ05・06　30～50cm幅で、深さは20～30cmを測る。埋土は淡黄褐色土である。遺物の出土はない。２本の溝は直角に交わる点から、弥生時代の方形周溝墓の周溝の一部と推定できる。

井戸ＳＥ02　概ね隅丸方形を呈し、一辺約2.4mを測る。深さも検出面より底面まで2.4mである。中央南北および南辺がコンクリート製基礎で被われているため完掘できなかった。平面的には東西方向の長方形ではあるが、これは西辺に幅40cm、深さ40cmにわたって傾斜面を造り出したことによる。おそらくは、木製井戸枠材を再利用するために、枠材を抜き取る作業にあたって実施した結果であろう。埋土は中央部分は不明であるが、左右の層序を考慮する限り、６層に分層

できる。底面は平坦で、40cmの厚さの暗灰色砂利、その上に60cmの厚さの青灰色砂利が水平に堆積している。中間の第4層である淡褐色砂利の上面近くまで、本来井戸枠材が残存していたことによると判断でき、第3層の灰褐色礫混じり砂利が大きく「U」字形に堆積していることにも裏づけされる。この第3層から長岡京期の遺物が多く出土し、瓦類・土師器・須恵器などを含む。

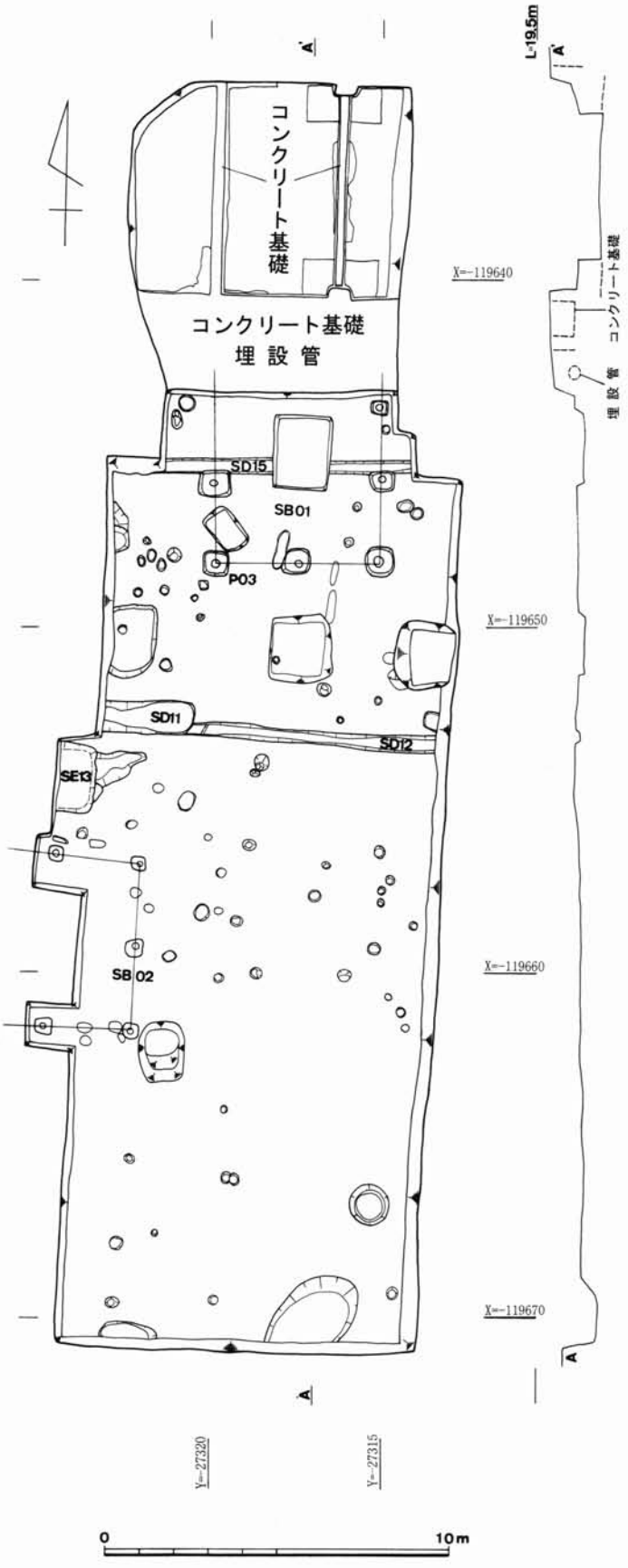
③北2トレンチの検出遺構

(第126・127図、図版第75－(1)～78－(1))

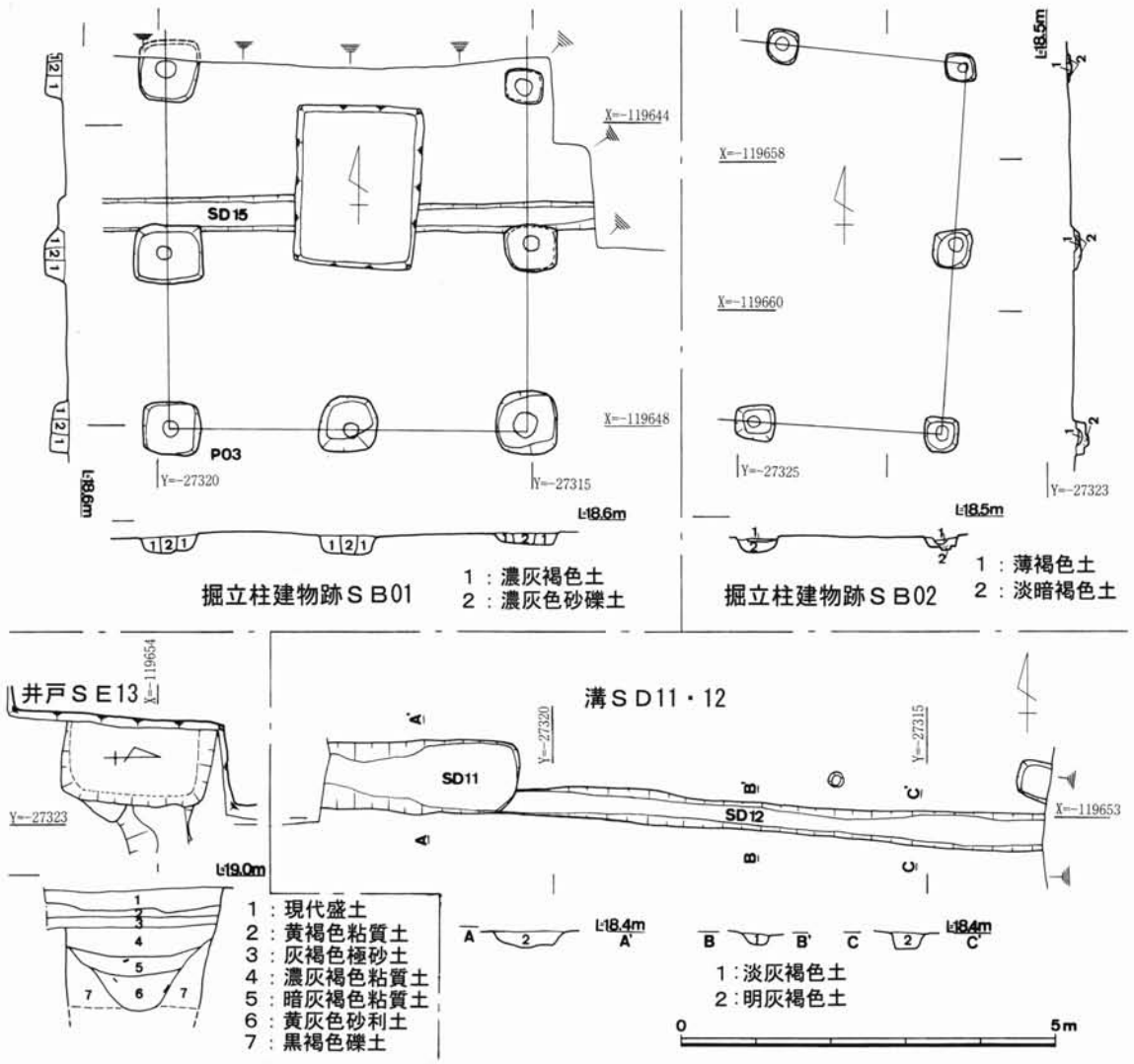
北半部は、建造物のコンクリート製基礎や雨水・下水管などの埋設のため、大部分は削平破壊されていた。南半部は5～6か所のコンクリート製基礎坑以外は破壊されず、掘立柱建物跡・溝・井戸・土坑・ピットなどを多数検出した。

掘立柱建物跡ＳＢ01　南北2間以上×東西2間の規模で、柱間は2.4mである。北側は推定の域を出ないが、1間をもって集約できよう。柱穴は隅丸方形で、一辺約80cmを測る。残存高は20cm前後、柱痕跡の径は20cm前後で、柱穴Ｐ03より土師器・須恵器の小片が各1点出土した。

掘立柱建物跡ＳＢ02　南北2間×東西1間以上の規模で、柱間は2.4mである。西側は府道内に埋没しているため断言できないが、2～3間を想定できる。ＳＢ01とは長軸を異にする東西棟となる。柱穴は一辺約



第126図　北2トレンチ調査地実測図



第127図　北２トレンチ検出遺構実測図

40cmの隅丸方形を呈し、残存高は10～20cmである。柱痕跡の直径は18cm前後を数える。柱穴の埋土は薄褐色土で、ＳＢ01の柱穴の埋土が暗褐色粘質土とは相違する。柱穴内からの遺物の出土はなかった。主軸が東西軸で若干東側に振れている点や、埋土の色調の差異や柱穴の大きさが小型化していることなどから判断して、建物の時期は、長岡京期以降から鎌倉時代以前に比定できる。

溝ＳＤ12　調査区のほぼ中央を東西に走行する。幅40～50cmを測り、深さは約20cmである。底面の高さはわずかに西側が高い。調査区西端では土坑ＳＫ11で消滅しているが、総延長は８ｍである。土坑ＳＫ11も場合によれば溝の再掘削・幅拡張のため、現況を呈している可能性もある。埋土は淡灰褐色土で砂粒を含む。土坑ＳＫ11では明灰褐色土で、近世平瓦片を少量出土した。

溝ＳＤ15　掘立柱建物跡ＳＢ01を南北に二分するかのように、東西方向に走行する。溝幅は40cm前後で、深さは約10cmで、底面は平坦である。埋土は溝ＳＤ12と同様で、淡灰褐色土である。総延長約５ｍを測る。無遺物であるが、層序から推して江戸時代後期に開削したと判断できる。

井戸ＳＥ13　掘立柱建物跡ＳＢ02の北辺に隣接して穿たれた隅丸方形の井戸である。当初は僅かなピット状遺構で、長岡京期の土師器片を含むことから本調査区での調査最終段階で、西側

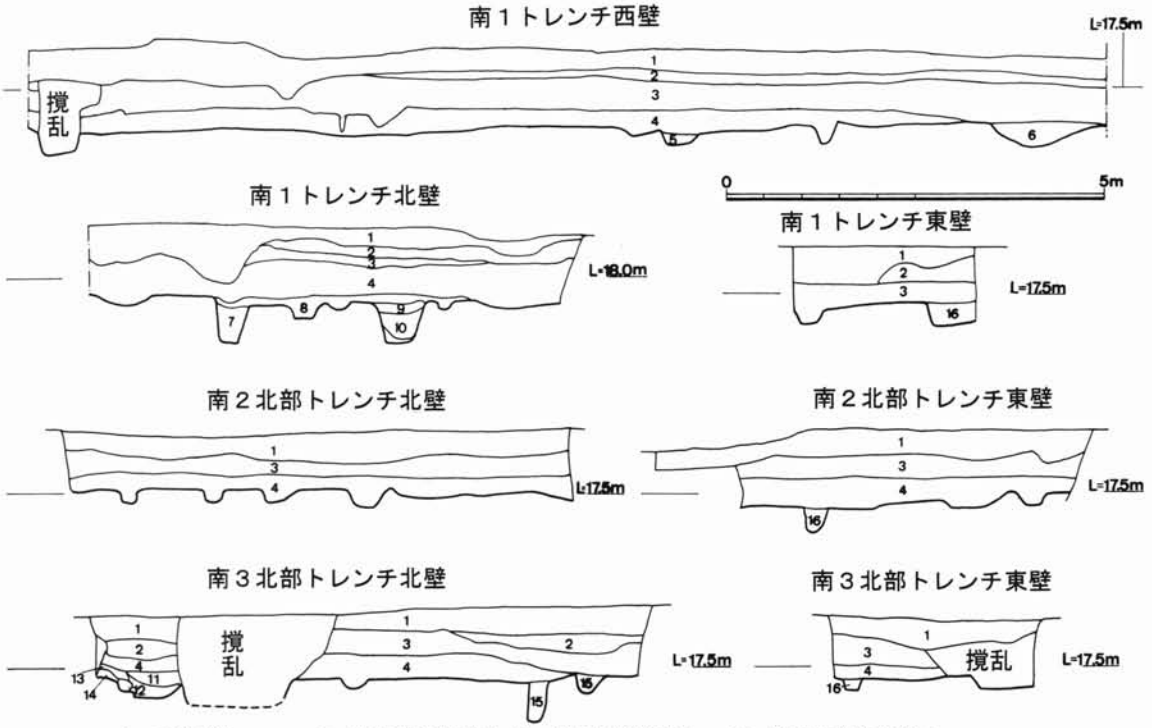
(府道側)に約1.2m拡張した。南北一辺長が2mで、東西長も同様と考えられる。深さは約1mまで掘り下げたが、自動車の振動による危険性から断念した。東辺の掘形に、一部南側で傾斜面を有しており、井戸枠の抜き取り用と推定できる。埋土は周辺部を黄灰色砂利で成し、中央凹部には礫が、長岡京期の瓦類や土器類とともに充填されていた。

(松井忠春)

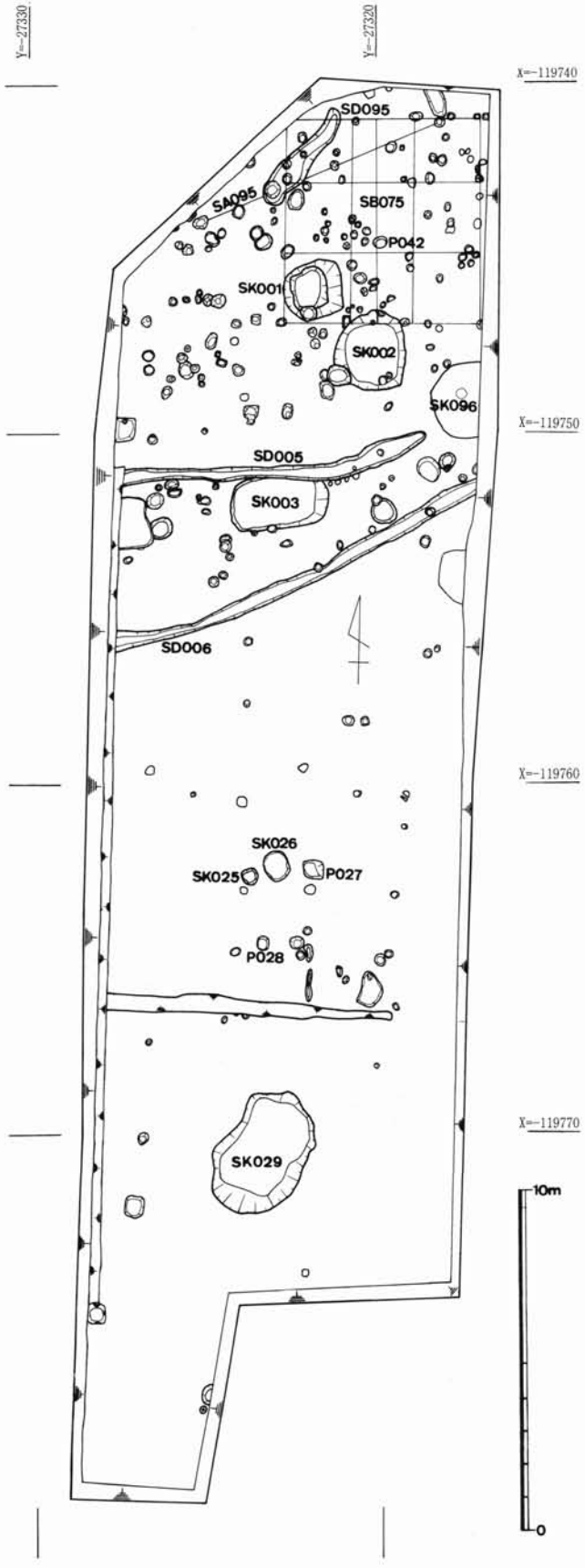
(2)南1～3トレンチ(第128～133図、図版第78－(2)～81)

①基本層序(第128図)

調査地は、小畑川右岸に形成された低位段丘上に立地する。周辺の地勢は、北西から南東へとゆるやかに傾斜し、南1トレンチ北端の現地表面の標高約18.3m、南3トレンチ南端では約17.5mを測る。遺構面は一面であり、標高17.6m付近の地山面で弥生～江戸時代と推定される各時代の遺構群を検出した。遺物包含層は、約50～60cmの厚さを測る。層序は、第1層(以下、第128図参照)は、現代盛土であり、約20cmの厚さを測る。第2層は、南1トレンチ・南3北部トレンチなどの一部で確認した灰褐色粘質土である。近・現代の旧耕作土と考えられる。第3層は、暗褐色粘質土で、南1トレンチから南3トレンチのいずれの地点でも約10～15cmの厚さで堆積している。近世遺物包含層であり、層位中からは染付け片や天目茶椀片が出土した。第4層は、地山面直上に堆積する暗灰褐色粘質土である。この層位は、南1トレンチから南3トレンチのほぼ全面で、約10cm前後の厚さで検出した。層位中から、主に瓦器片や土師器片などの中世遺物が出土し



第128図　南1～3トレンチ層序図

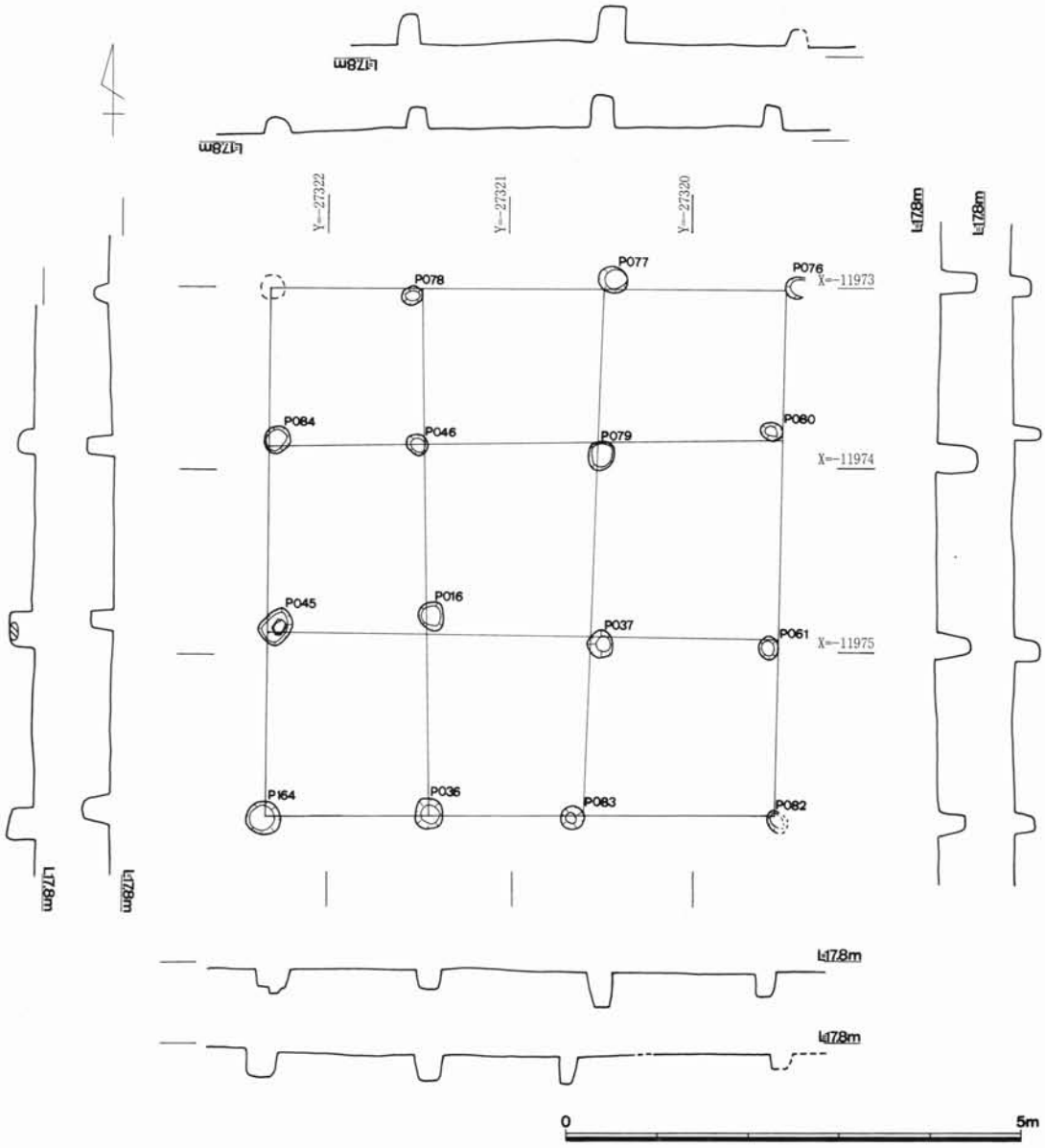


第129図　南１トレンチ調査地実測図

ている。第５層は、南１トレンチの一部において、第４層下層で検出した濁淡褐色土である。部分的な検出のため層位中の遺物は確認していないが、層序から、古代～中世の堆積と推定される。南１トレンチの調査では、柱穴群には、中世遺物を出土するものと、近世遺物を含むものがみとめられたが、土層観察でも、第４層から掘削された柱穴と、第５層から掘削された柱穴があることを確認した。

②南１トレンチの検出遺構（第129～132図、図版第78－(2)～80））

主な検出遺構としては、長岡京期の土坑および柱穴、平安時代の土坑、中世以降と推定される掘立柱建物跡・柵列・土坑、近世の溝などを検出した。弥生時代の遺物が出土した遺構はみとめられないが、トレンチ北端で検出した溝は、重複する柱穴に削平されることや、埋土の状況から弥生時代の溝の可能性がある。また、調査区北半で集中的に検出された柱穴群の多くは遺物を出土せず、時期を明確にできない柱穴が多い。しかしながら時期の判明するものには、長岡京期の遺物を出土する柱穴と、瓦器などの中世土器を出土する柱穴があり、両時期の建物跡が混在するものとみられる。長岡京期の遺物を含む柱穴については、周辺の柱穴群との柱間を検討したが、建物跡を復原するには至らなかった。なお、南１トレンチの西側約20ｍの地点で

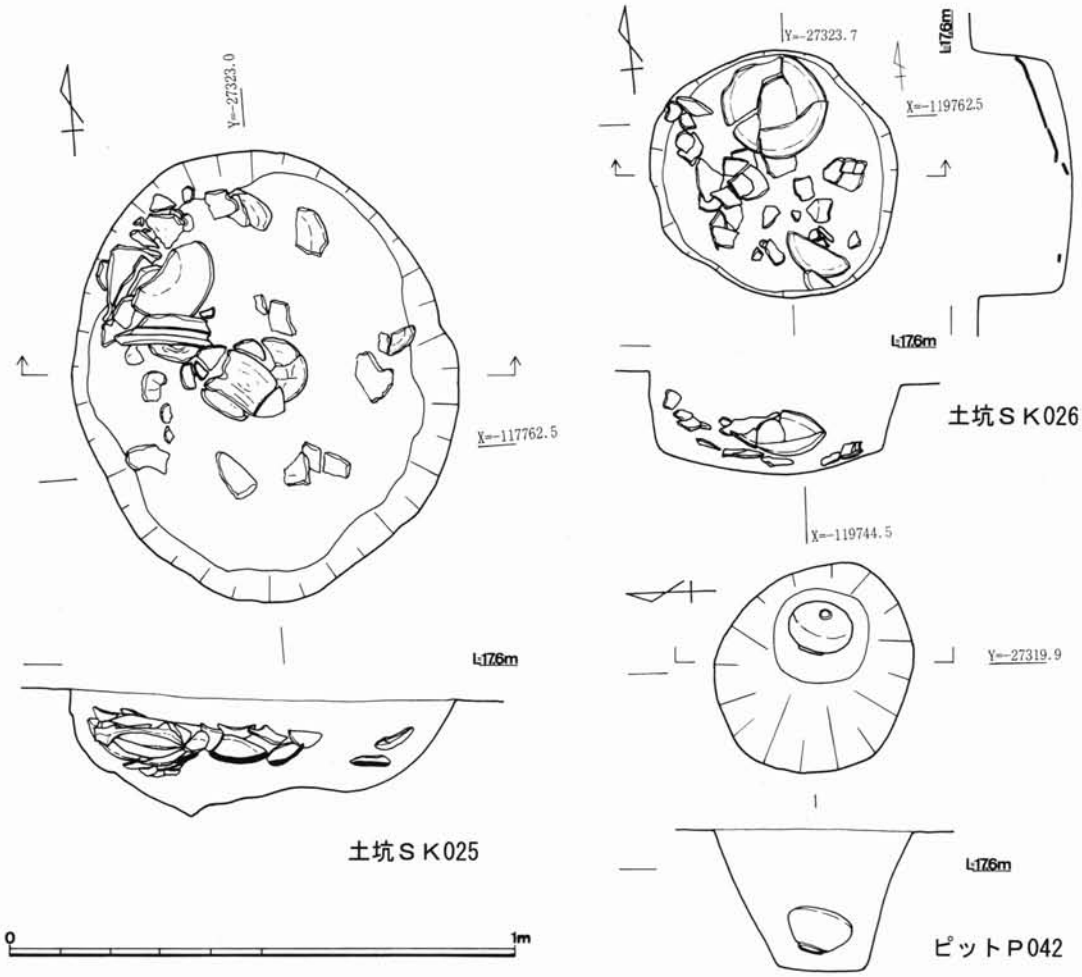


第130図　南１トレンチ掘立柱建物跡ＳＢ075実測図

は、長岡京右京第77次調査において、西一坊大路の東側溝が検出されている。

掘立柱建物跡ＳＢ075(第130図)　トレンチ北側で検出された掘立柱建物跡である。北西隅の柱穴が調査区外となるが、東西３間、南北３間を測る総柱建物とみられる。柱間寸法は、東西1.7～2.1mであり、南端の柱列は、やや不等間隔となっている。柱穴は、直径約25～40cm、深さ約20～30cmを測る。いずれの柱穴からも遺物は出土していないが、一部で根石を検出したことから、中世以降の建物跡と推定される。南１トレンチ北約20mの地点では、長岡京右京第751次調査において、主に瓦器片などの中世土器を出土する柱穴群が検出されており、この周辺一帯が中世において、居住域となっていた可能性が高い。

柵列ＳＡ095　トレンチ北側で検出した柱列である。柵列と考えられるが、南東側にも柱穴群があり、建物跡となる可能性も否定できない。柱間隔は、約1.1～2.1mで、直径約20～40cm、深



第131図　南１トレンチ検出遺構実測図(1)

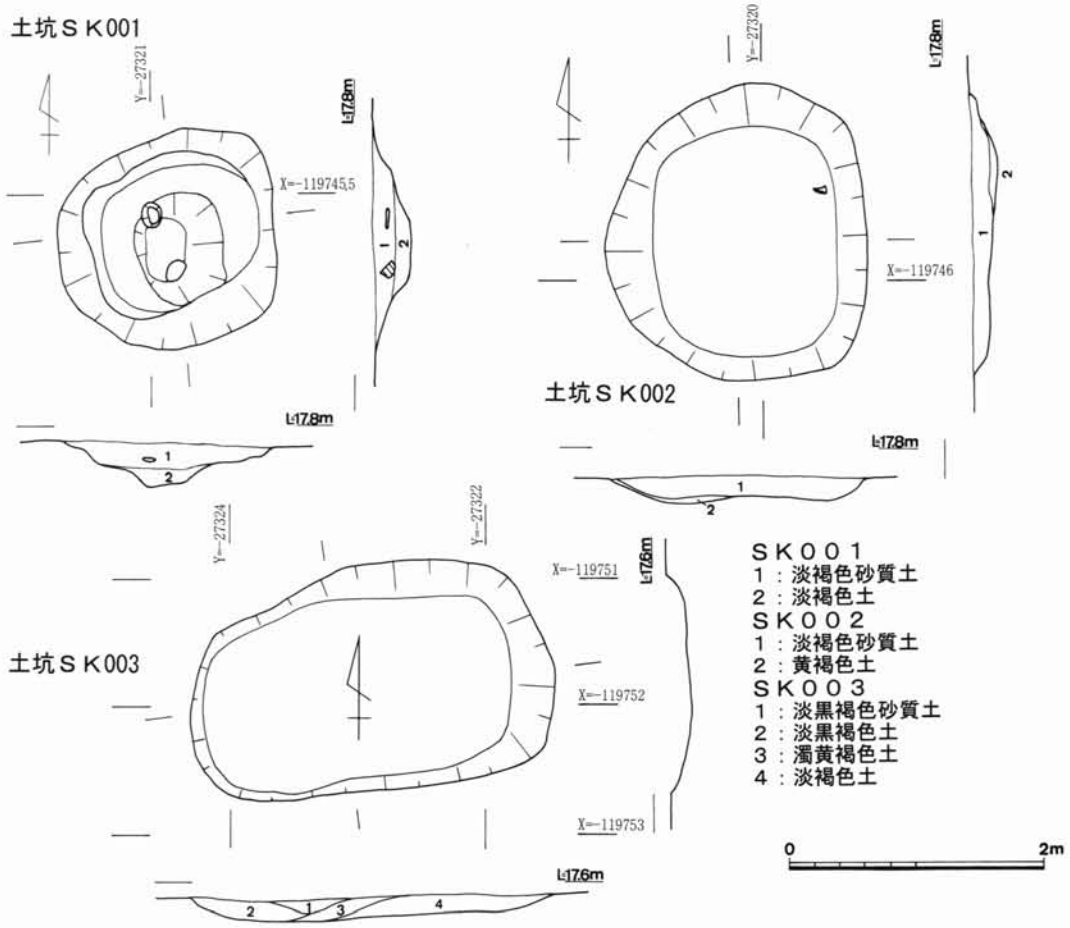
さ15～25cmを測る。柱穴からは土師器片が出土した。柱列の方位は、大きく西に振れ、N68°Eに主軸をとることから、中世以降の遺構となる可能性が高い。

土坑ＳＫ001　トレンチ北側で検出した土坑である。平面形は、歪な方形を呈し、２段の掘形を持つ。規模は、1.95×1.7m、下段の掘形は、約40×90cm、深さは約30cmを測る。遺物は出土せず、時期は不明である。

土坑ＳＫ002　ＳＫ001の南東で検出した土坑である。平面形は不整円形を呈し、規模は径約2.0～2.35m、深さ約25cmを測る。土坑内から、中国福建省龍泉窯産とみられる内面に陰刻花文を施した青磁椀が出土しており、時期は鎌倉時代と推定される。

土坑ＳＫ003　トレンチ北側で検出した土坑である。平面形は歪な長方形を呈し、規模は1.5×2.85m、深さ0.2mを測る。出土遺物はみとめられないが、鎌倉時代の溝と推定されるＳＤ005に一部を削平されることから、時期は中世以前と考えられる。

土坑ＳＫ025　トレンチ中央南寄りで検出した円形の土坑である。規模は、径約50cm、深さ約20cmを測る。土坑内から、土師器杯・土師器皿など、ほぼ完形の土器が出土した。出土土器から、時期は平安時代初頭～前期とみられる。



第132図　南１トレンチ検出遺構実測図(2)

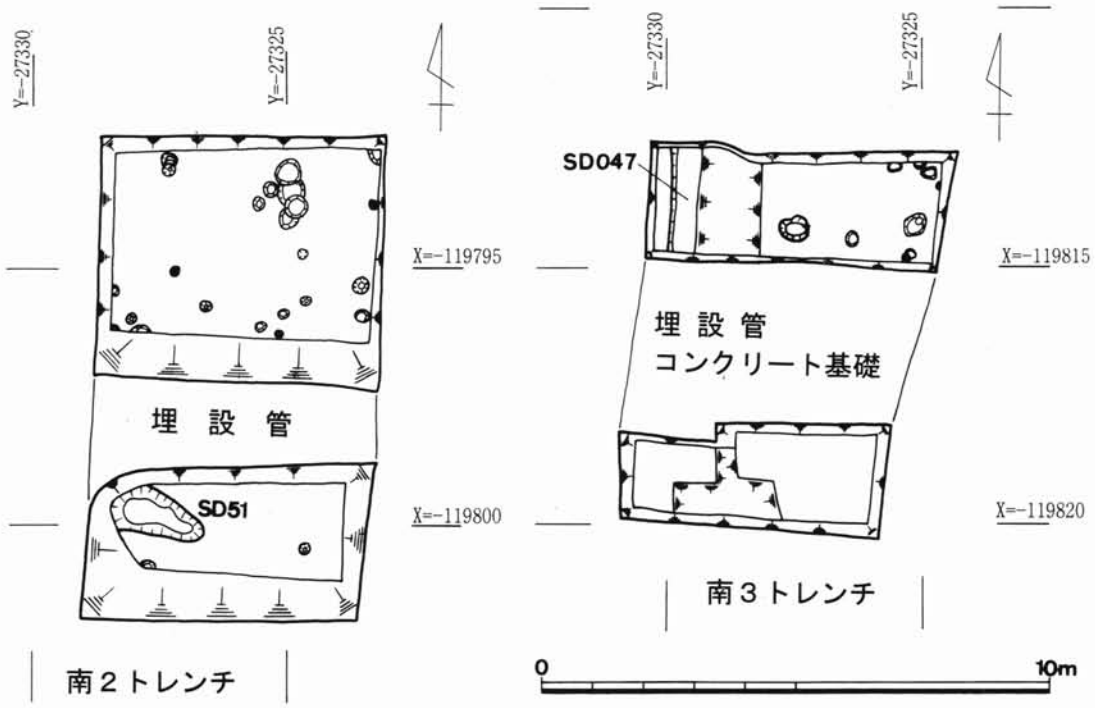
土坑ＳＫ026　ＳＫ025の東側で検出した円形の土坑である。規模は、径約75～90cm、深さ30cmを測る。須恵器杯身・土師器杯・土師器皿など、ほぼ完形に近い土器が出土した。このうち土師器皿１点には、「戊」と判読可能な墨書が施されている。時期は長岡京期と推定される。

土坑ＳＫ029　トレンチ南側で検出した楕円形の土坑である。規模は、2.5×3.8m、深さ約70cmを測る。土層の断面観察では、基盤層が上層に及び、風倒木痕である可能性が高い。

土坑ＳＫ096　トレンチ北東端で一部を検出した。遺構の東側は、対象地外に拡張すると考えられるため、安全対策上の措置から、遺構の規模を確認するに留め、掘削は行っていない。遺構の平面形態や埋土の状況から、井戸と推定される。出土遺物は、精査時に瓦器片が出土し、鎌倉時代の遺構と推定される。

溝ＳＤ005　トレンチ北側で、長さ約8.8mにわたって検出した東西方向の溝である。西側は、調査区外へのびている。規模は、幅約25～65cm、深さ約30cmを測る。溝内から、瓦器片、土師器片が出土しており、時期は鎌倉時代と推定される。

溝ＳＤ006　ＳＤ005の南側で検出した溝である。北東から南西に向かって、長さ約11.3mにわたって検出したもので、調査区外にのびる。規模は、幅50～90cm、深さ約20cmを測る。トレンチ壁面における断面観察から、江戸時代以降の溝と推定される。



第133図　南２・３トレンチ調査地実測図

溝ＳＤ095　トレンチ北端で検出した溝である。規模は、長さ3.3m、幅45～85cmを測る。深さは一様ではなく、溝中央部が深く、約40cmを測る。遺物はみとめられないが、柱穴群に一部を削平されることや土色などの違いから、長岡京期以前の溝であり、弥生時代の溝の可能性がある。

柱穴Ｐ042　トレンチ北部で検出した柱穴である。径40cm、深さ30cmを測る。底部から、口縁部を打ち欠いた須恵器壺が出土している。出土土器から、時期は長岡京期と推定される。

③南２トレンチの検出遺構（第133図、図版第81）

南２トレンチは、一部調査が実施できない地点を含むため、南北に設定し、北側を南２北部トレンチ、南側を南２南部トレンチとした。南２北部トレンチでは、柱穴群を検出した。柱穴は、径10～40cm、深さ約10～30cmを測る。柱穴群の埋土には、暗灰褐色粘質土と暗茶褐色粘質土の２群があるが、時期を明確にできる遺物はみとめられず、建物跡を復原するには至っていない。また南２南部トレンチでは、溝１条と柱穴を検出した。溝ＳＤ051は、トレンチ北西隅で、約2.5mにわたって検出したもので、幅1.0m、深さ35cmを測る。遺物は出土していないが、南１トレンチで検出されたＳＤ095と同様、埋土の土色などから、弥生時代の溝となる可能性がある。

④南３トレンチの検出遺構（第133図、図版第81）

南３トレンチは、北側を南３北部トレンチとし、南側を南３南部トレンチとする。

南３北部トレンチでは、西側の一部が建物基礎のため削平されていたが、溝１条と、柱穴群を検出した。溝ＳＤ047は、トレンチ西端で検出した南北方向の溝である。規模は、長さ2.2m、幅50cm、深さは約20cmを測る。溝の西側立ち上がりに沿って、面を揃えて積まれた２個の人頭大の石材を検出した。遺物は、須恵器の小片が出土したが、時期を確定できる資料ではない。

南３南部トレンチでは、攪乱が著しく、明確な遺構を確認していない。北部で検出したＳＤ

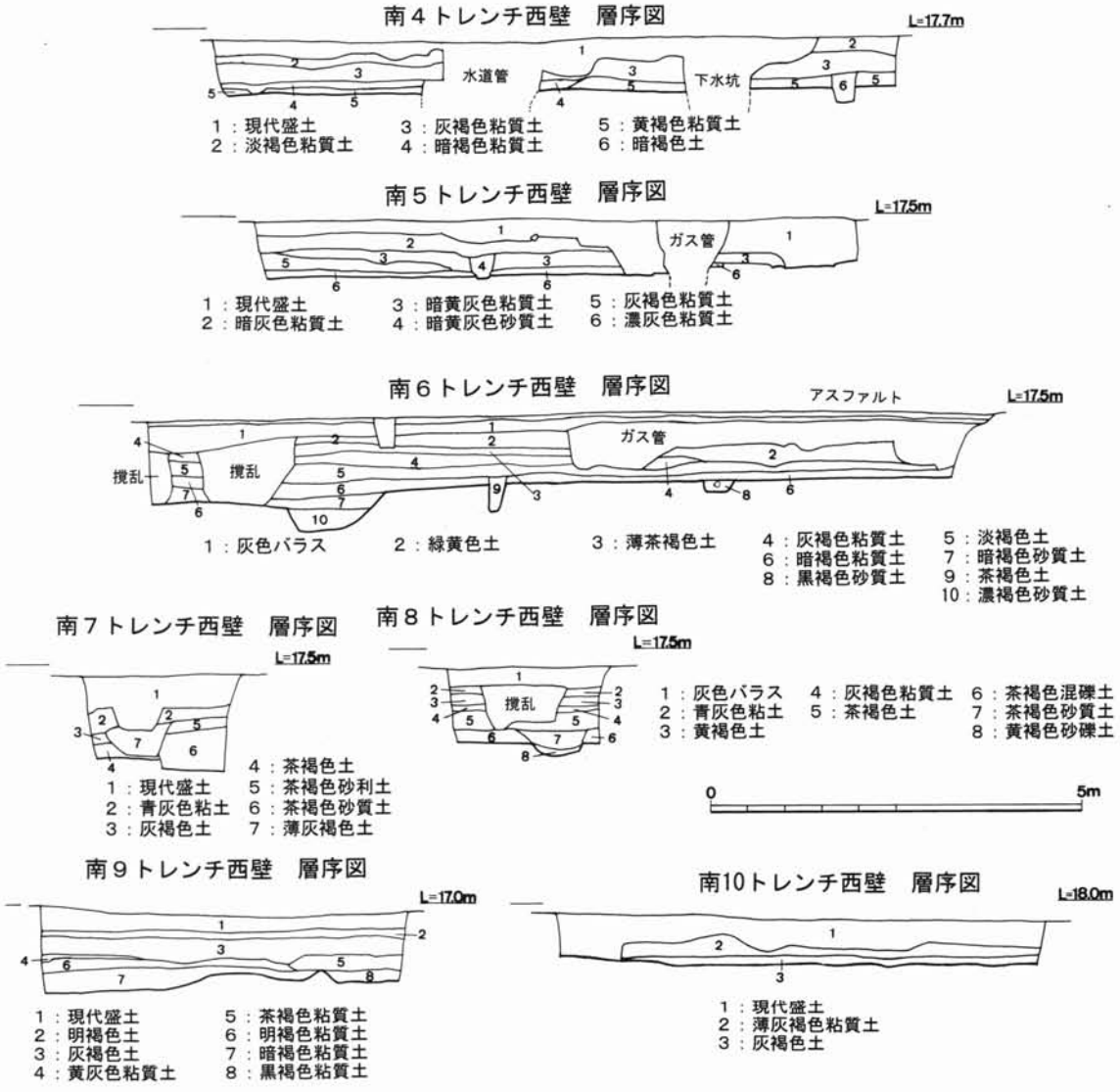
047の延長は確認できない。この調査地の南に約2.5mの地点に、六条条間南小路の北側溝が位置すると考えられる。また、トレンチの南約12mの地点では、長岡京右京第750次の調査が行われ、南北方向の鎌倉時代の大溝が検出されたが、本調査ではその延長は検出していない。

(高野陽子)

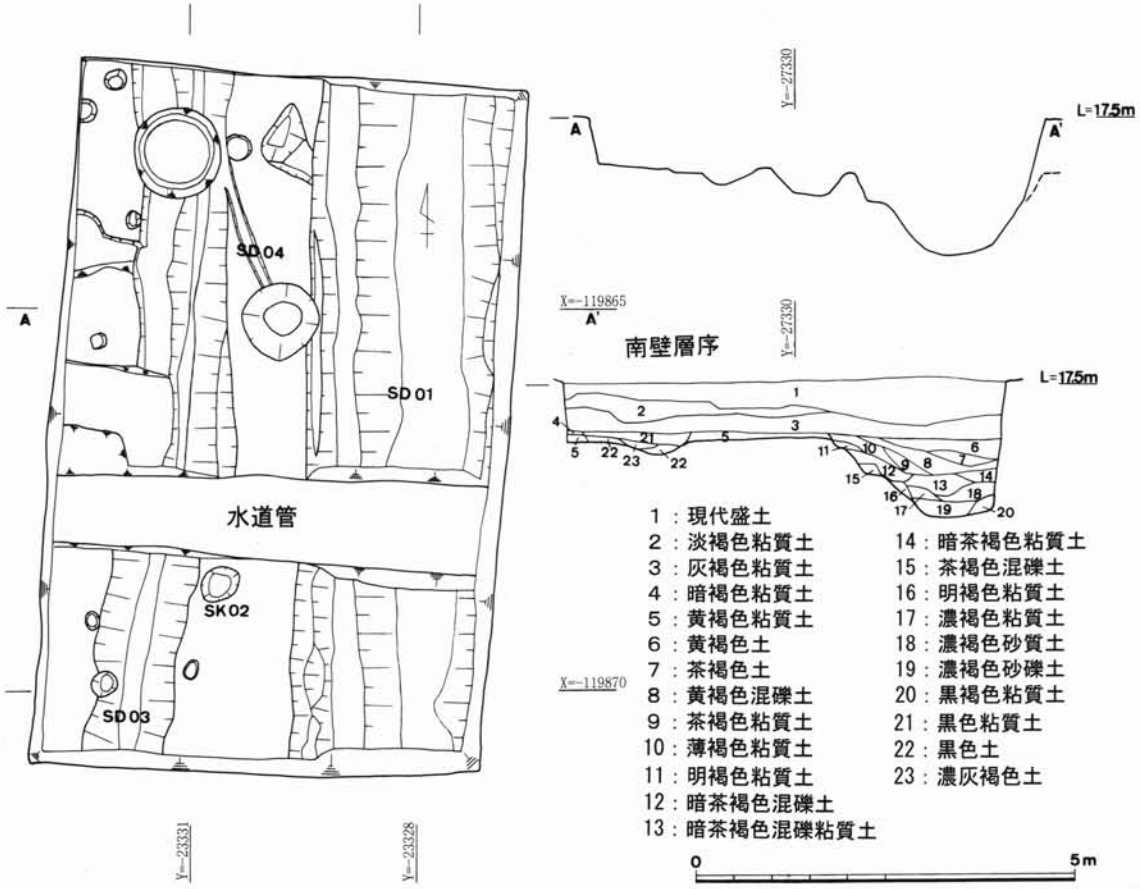
(3)南4～10トレンチ(第134～140図、図版第82～90)

①基本層序(第134図)

上記2地区同様に南方に向かってゆるやかに低下する地勢ではあるが、南8トレンチ南側約1mで急激に下り、約50cmの段差を生じている。第123図の標高18m地点である。遺構面は標高16.1～16.8mを数えるが、南5トレンチを境に約30cm下がり、南10トレンチまで続いている。遺物包含層は相対的に薄く、10～20cmの厚さで南6トレンチ周辺が最大値を示す。南10トレンチでは推定長岡京六条大路路面上で皆無であった。層序は基本的には前記2地区と大差ない。第1層



第134図　南4～9トレンチ層序図



第135図　南４トレンチ調査地実測図

は現代盛土であり、砕石、コンクリート砕、アスファルト層や土木工事に伴う攪乱坑が支配的である。第２層は灰褐色粘質土で、近・現代の旧耕作と考えられる。第３層も第２層と類似する。南６トレンチでは相互に床土を敷いており、第３層からは、江戸時代後期の陶器片が出土した。近世の耕作である。その下位には茶褐色粘質土があり、長岡京期の遺物を若干含む。

②南４トレンチの検出遺構（第135図、図版第82～83－(1)）

トレンチの中央南側を水道管が遺構面よりも深く横断するため、調査を南北分断状態で実施した。また、西壁際では北側に大きな水道管坑や旧下水管・雨水管工事で地山面が壊されていた。

溝ＳＤ01　調査区東側の大部分を占めて南北走する溝で、断面「U」字形を成し、深さは検出面より約1.1ｍを測る。溝西辺は幅40cm、高さ40cmを下ってテラス状に30～40cm成して底面へゆるやかに下降する。東辺もまた同様と想定できるが調査区外にのびるため不詳である。埋土はレンズ状の堆積を示すが、中間点付近では礫群や礫の帯を確認し、下層より中世の瓦質土器が出土した。

溝ＳＤ03　溝ＳＤ01の西側を併走する幅1.1ｍ、深さ約20cmの比較的浅い溝である。中央部を、幅狭いがさらに一段掘り下げ、その後礫を配して暗渠状にする。埋土は濃褐色粘質土で、唯一須恵器壺Ｌの口縁部（第143図38）が南壁面より出土した。

そのほかに、土坑ＳＫ02からは長岡京期の土師器片が少量出土した。また、溝ＳＤ03で切られたＳＤ04があるが、無遺物で時期は不明である。

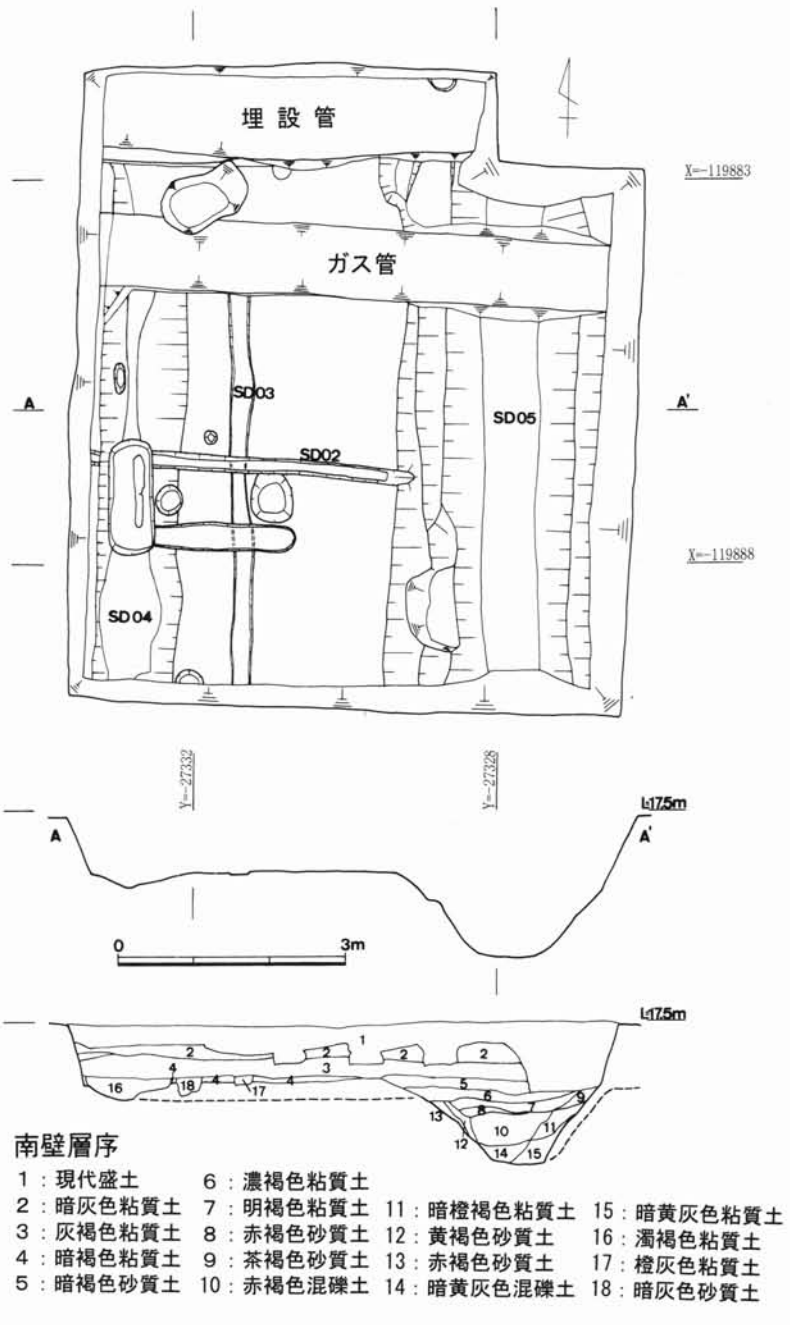
③南５トレンチの検出遺構

(第136図、図版第83－(2)～84－(2))

調査区の北側は、ガス管や下水道管、水道管が横走し、遺構面の大部分が削平を受けたため、南側が調査の中心になった。電流アース線坑や建物のコンクリート基礎坑が見られた。

溝ＳＤ02　調査区のほぼ中央を東西走する幅約20cm、深さ10cmを測り、埋土は灰褐色土である。無遺物であるが、地層的には江戸時代後期に比定できる。おそらくは北１・２トレンチで検出した同期の溝と性格を同じくすると考えられる。

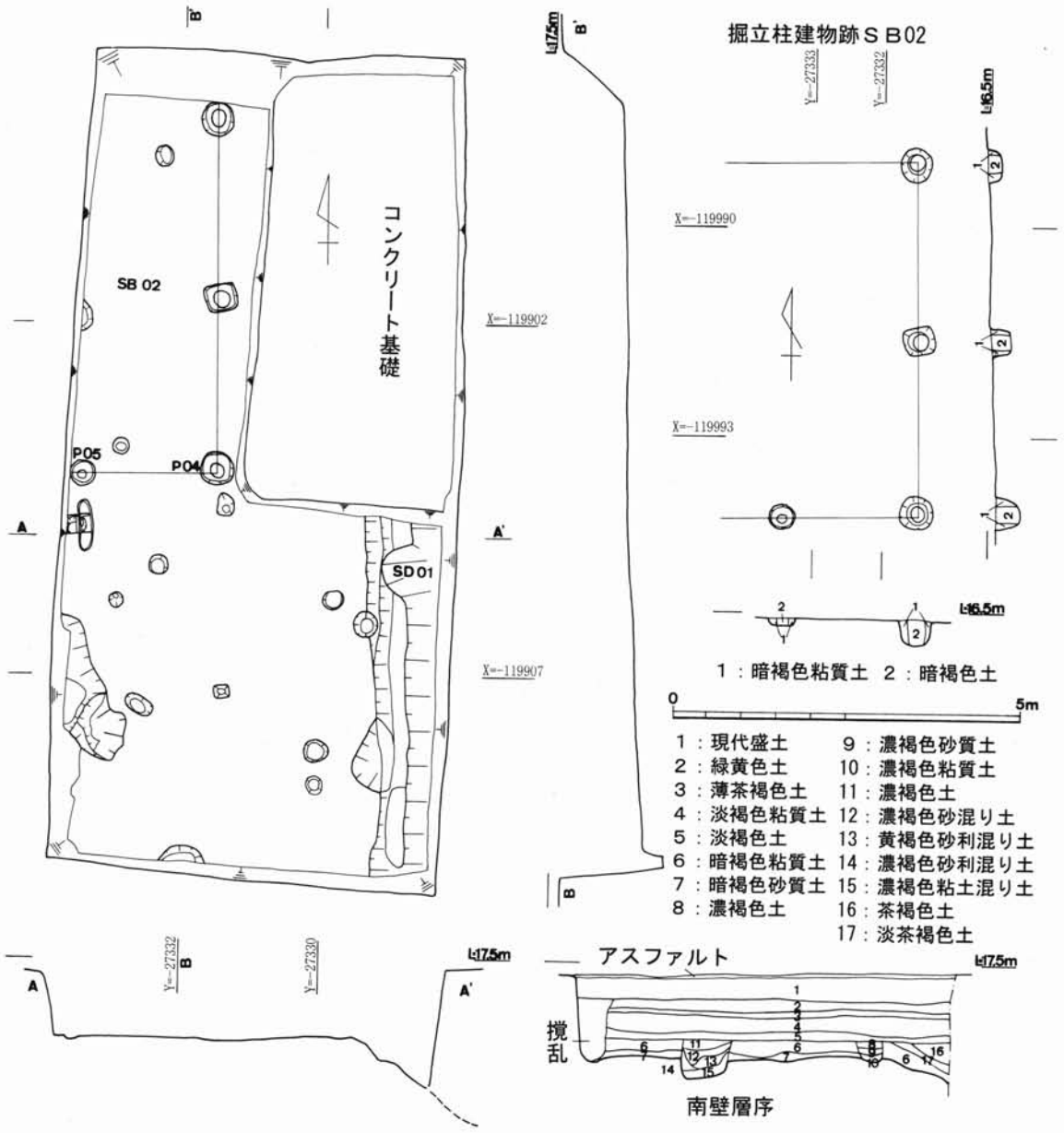
溝ＳＤ03　幅30cm、深さ４～５cmの浅い溝である。埋土は灰色土で、溝ＳＤ02と大差ないが、切り合い関係からより古い段階に比定できる。無遺物であるが、江戸時代と考えられる。



第136図　南５トレンチ調査地実測図

溝ＳＤ04　調査区西壁に沿って南北方向に検出した。幅1.1m、深さ20cm前後を測る。底面は北側が幅狭く、南側に向かって広くなり、北側底面には小型の砂利を配していた。埋土は黒褐色土で、遺物は全く含まなかった。概ね南４トレンチ検出の溝ＳＤ03の延長溝と把握でき、長岡京期に比定して大過ない。

溝ＳＤ05　調査区東半部全体を占める南北長の溝である。検出最大幅は2.8mで深さは1.0～1.1mを測る。溝の西辺は幅30～40cm、高低差40cmをもってゆるやかなテラス状斜面を幅30cmにわたって展開する。これより70cm下がって底面に到る「Ｕ」字形の断面である。埋土は数回にわたり、再掘削を繰り返しつつ利用された状況を呈し、最下層は地山の黄褐色粘質土が流れ込んで堆積した暗黄灰色粘質土である。中間層の礫層は厚さ40cmを測り、やや大形の礫を使用している。



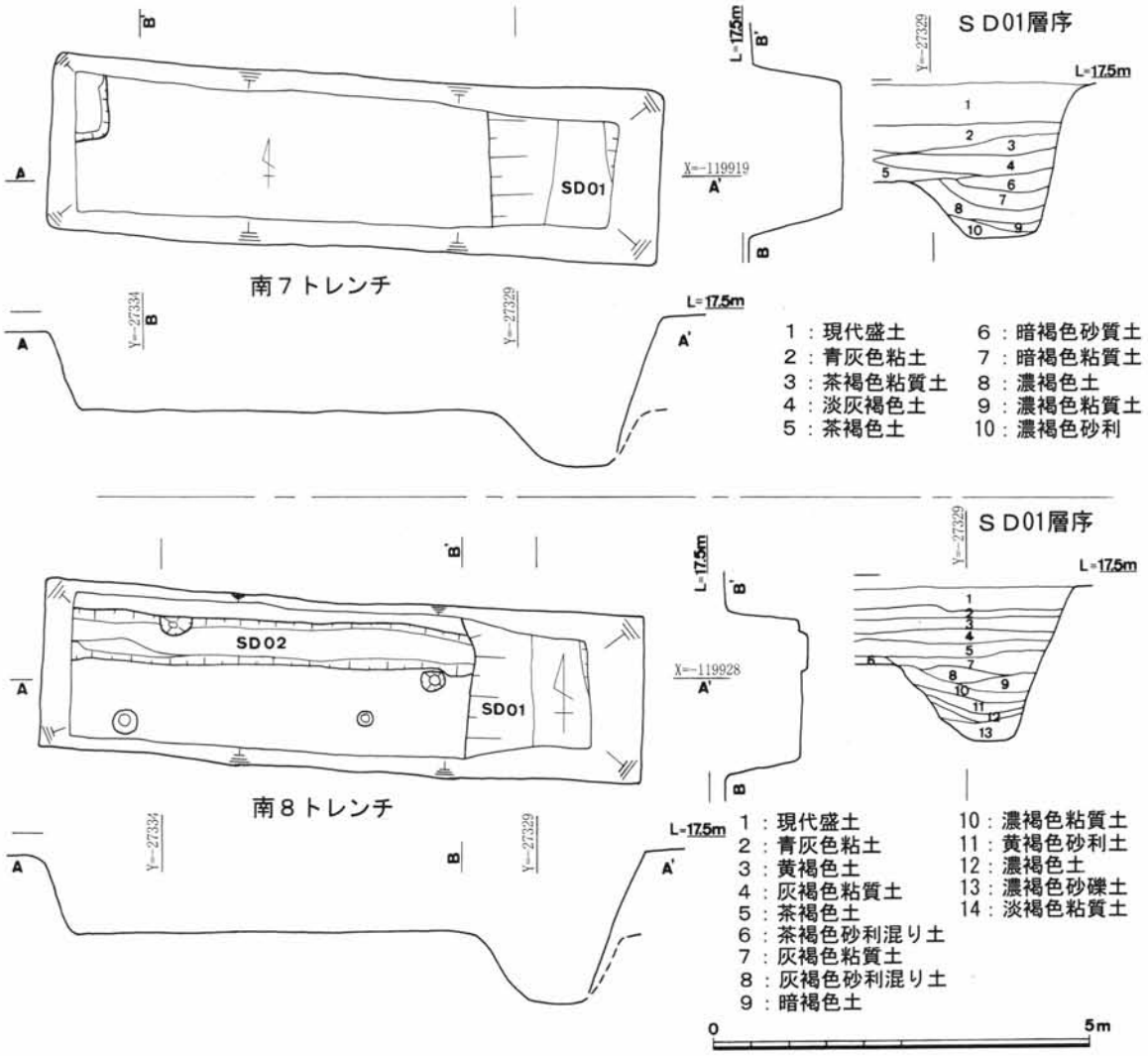
第137図　南６トレンチ調査地実測図

遺物は礫層を挟んで長岡京期の土師器片や須恵器片とともに、13世紀代の瓦器の小片が出土している。この溝は南４トレンチの溝ＳＤ01の南伸部に相当する。

④南６トレンチの検出遺構（第137図、図版第84－(1)～85）

調査区の北東側にコンクリート基礎が大きく広がっており、その下位の発掘を断念せざるを得なかった。そのため、検出した掘立柱建物跡の構造をより一層明確にはできない。

溝ＳＤ01　西辺を約５ｍ検出したに止まり、大部分は東側の調査地外へと広がる。南４・５トレンチ同様に、テラス状遺構を造作していた。幅20～30cmを測り、西肩より20～30cmゆるやかに下がった地点である。これより下降・上昇して「Ｕ」字形を成すと判断できる。埋土は茶褐色土や茶褐色粘質土で、東側に斜行して堆積している。出土土器片から13世紀代と推定できる。



第138図　南７・８トレンチ調査地実測図

掘立柱建物跡ＳＢ02　北西側で検出した南北２間以上の建物跡で、東西の規模は不明である。南北一列の柱穴は一辺約40cmの隅丸方形で、深さも北側に向かって浅くなるものの、安定した20～30cmを有する。西側の柱穴Ｐ05は若干小さく浅い。この点から西側に張り出した庇を支える柱跡と考えられる。柱穴の埋土は暗褐色粘質土である。出土遺物からも長岡京期に比定できる。

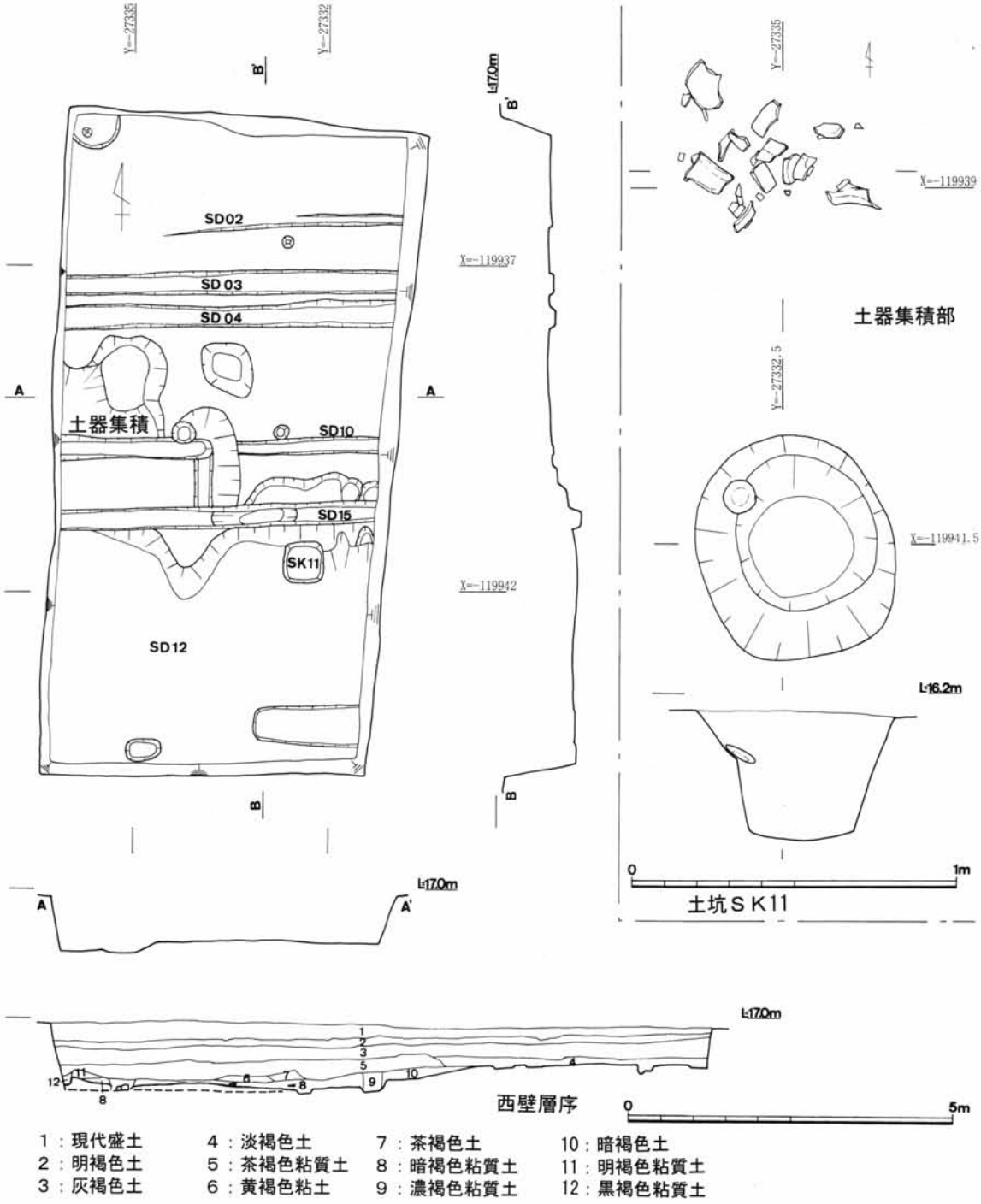
⑤南７トレンチの検出遺構(第138図、図版第86)

調査区東端部で大きく凹む溝１条を検出した以外は皆無である。

溝ＳＤ01　南北長約1.5mを測り、両端とも調査地外のため、全長は確認できない。西辺はゆるやかに下る形状で、東側に80cmで70cm下がり底面となる。さらに70cmの幅をもって立ち上がり、東側調査区外へとのびる。埋土は大別すると４層で、濃褐色系の色調である。中間層には幅約30cmで、南北に河原礫を敷き詰めたかのように礫が確認できたが、遺構として把握するには到らなかった。中世の瓦質土器片や土師器片が少量出土した。

⑥南８トレンチの検出遺構(第138図、図版第87)

隣接する南７トレンチの様相と大差ない。調査区東端部で溝１条および北辺に沿って溝１条を



第139図　南９トレンチ調査地実測図

検出するとともに、ピットを４か所確認したに過ぎない。

溝ＳＤ01　南北最大長約1.8mを測り、西辺は急激に下がる。東側へ80cmで90cm下がり、幅70cmの底面をもって立ち上がり調査地東側へと潜み込む。ゆるやかな「Ｕ」字形の断面をなす。埋土は暗褐色系の粘質土が主で、中間層には拳大の礫を含む砂利層がある。少量ではあるが土師器片や瓦器椀の小片を中間層を中心に採集した。南７トレンチ溝ＳＤ01と同一産物と考えられる。

溝ＳＤ02　南北幅60cmをもって、東西長5.3mを測る。西端は調査地外にのびるが、東側は上記の溝ＳＤ01で切られて消滅しているため不明である。深さは検出面では10cmであるが、西壁で観

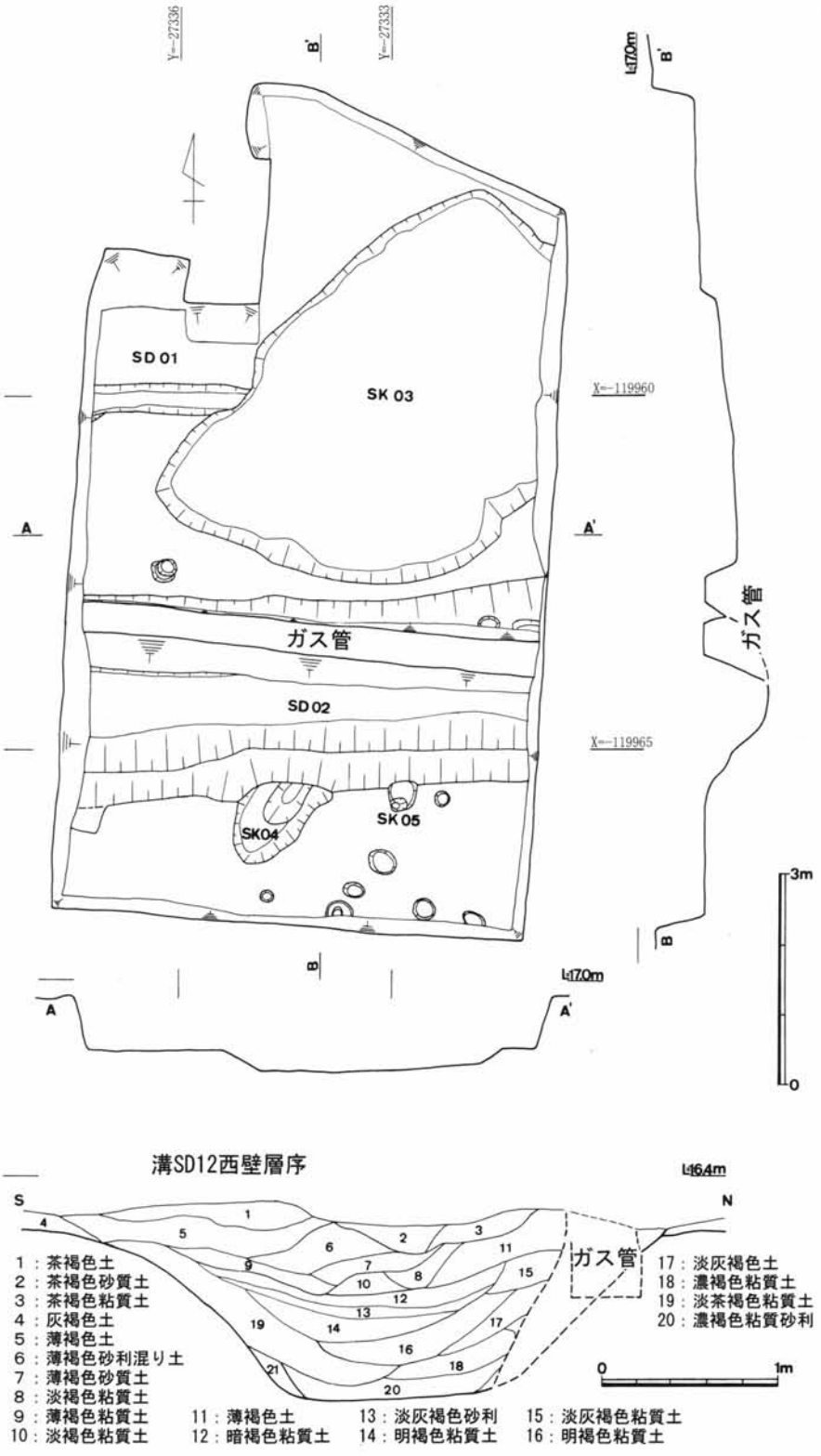
察する限り30cmである。上下２層に分けられ、２層とも砂質である。無遺物である。

⑦南９トレンチの検出遺構(第139図、図版第88～89－(2))

東西走する大小の溝６条および土器埋納坑１基・ピット・土坑などを検出した。溝ＳＤ02・04は、江戸時代後期の田畑に伴うものであろう。また、長岡京期の土器の集積も認められた。

溝ＳＤ10・15

幅30cmで、西方に向かって底面が下降する、検出長約５ｍの溝で、調査地外へとのびる。層序の切り合い関係から溝ＳＤ10が新しいが大差ない。長岡京期の遺物を包含する。



第140図　南10トレンチ調査地実測図

溝ＳＤ12　溝ＳＤ15より調査地南端までの幅約３．５ｍを有し、深さは40cmで、底面は平坦である。北辺は直線的でなく、南辺も地山面の状況から同様と思われる。暗褐色粘質土が埋土である。土師器・須恵器を中心にして、少量の瓦片や土馬など、長岡京期の遺物のみ出土した。

埋納土坑ＳＫ11　南北70cm、東西60cmの２段掘り土坑で、深さは40cmを測る。埋土は淡灰褐色土である。北西斜面から斜行状態で土師器片が１枚出土したのみである。室町時代であろう。

⑧南10トレンチの検出遺構（第140図、図版第89－(3)・90）

調査区を南北に三分するかのように雨水管とガス管が東西走していたため、発掘作業では難儀を極めた。遺構としては、江戸時代後期の東西走する溝１条（ＳＤ01）、長岡京期に属する土坑ＳＫ04、同期の土馬片を出土した土坑ＳＫ05やピットを多数確認したが、顕著な遺構としては土坑ＳＫ03と溝ＳＤ02のみである。

土坑ＳＫ03　調査区の北半部を北東→南西に長方形状に展開する凹地がある。中央部最深部で40cmと比較的浅く、底面も南辺は起伏があるものの、北辺はゆるやかな傾斜面をなす。埋土は灰色や茶褐色粘質土などで充填されてはいたが、攪拌された状態である。長岡京期の土器片を少量含むものの、時期を特定できない。層位から判断すれば、溝ＳＤ01よりは古い。

溝ＳＤ02　調査区南半部を占めるかのように東西走する溝である。北辺はガス管と並走するため、落ち込み部分のみ確認できた。南辺の形状は、60cmをもって40cm下がり、それよりさらに40cm降下して底面となる。断面は「Ｕ」字形である。検出長約７ｍ、幅３ｍ、深さ１ｍを測る。埋土はレンズ状に堆積しているが、溝が数回にわたり、掘削・再利用された状態を示している。中間層には、砂利・礫を含んだ暗褐色系の粘質土が40～50cm幅で溝全体に広がっていた。この粘質土および直下層から瓦器椀片などの中世土器片が若干量出土した。

３．出土遺物

今回の調査で出土した遺物には、縄文土器・弥生土器・埴輪片が含まれるが、主に長岡京期の土師器・須恵器・瓦類である。中世の遺物には瓦器椀・鍋や中国製陶磁器があり、近世陶磁器や土師器片なども出土した。長岡京期の遺物は、北１トレンチ井戸ＳＥ02、北２トレンチ井戸ＳＥ13、南１トレンチ土坑ＳＫ26、南９トレンチ溝ＳＤ12から多く出土した。また、中世の遺物は南４トレンチ溝ＳＤ01、南５トレンチ溝ＳＤ05、南６トレンチ溝ＳＤ01、南７トレンチ溝ＳＤ02、南８トレンチ溝ＳＤ01、南10トレンチ溝ＳＤ02から出土した（第141～143図、図版第91・92）。

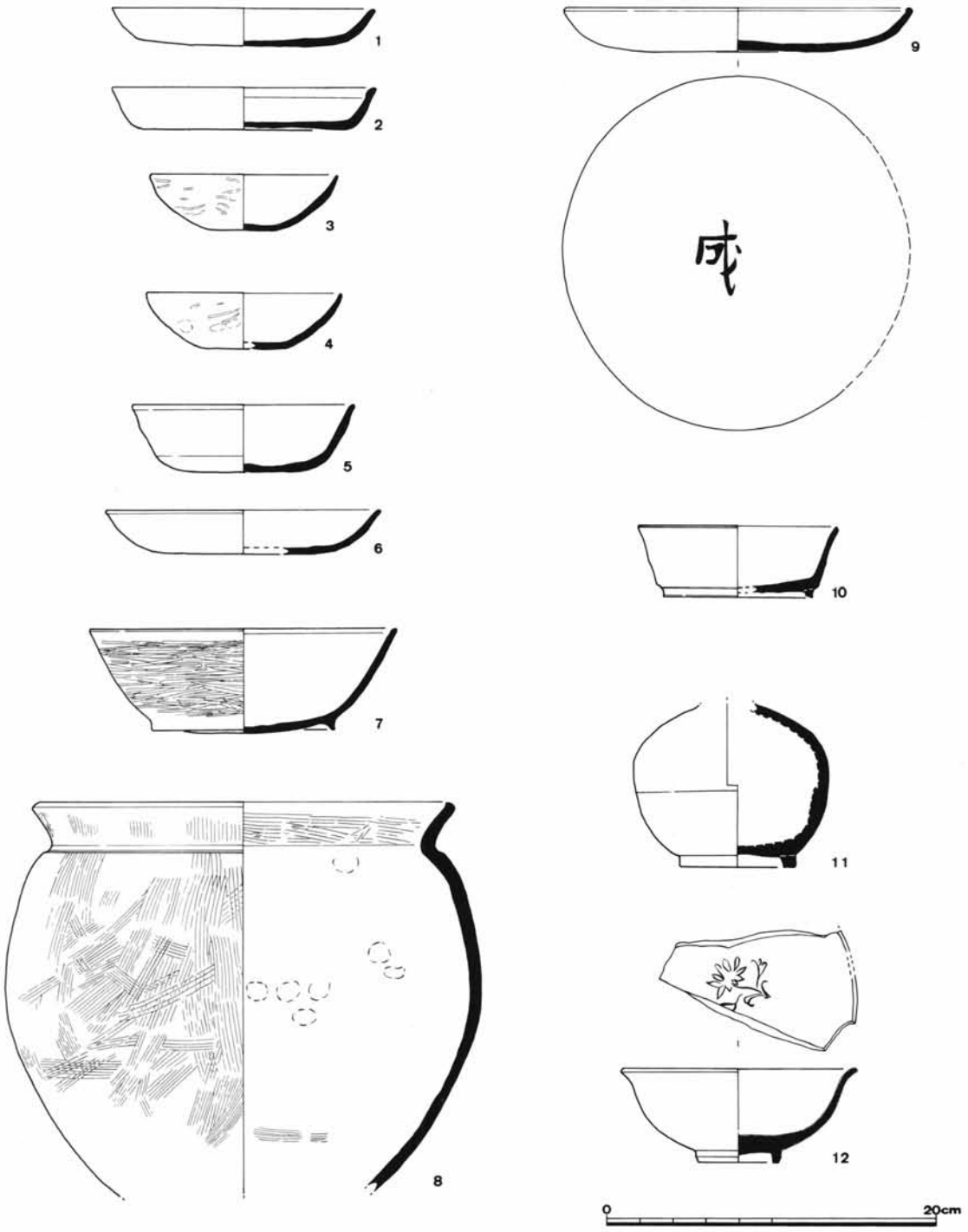
長岡京期の遺物には、土師器・須恵器・瓦類・土馬がある。須恵器には蓋Ａ・杯Ｂ・壺Ｇ・壺Ｌ・甕Ａ・平瓶などがあり、甕Ａの口縁外面に釉をハケで施したかのような破片（24）もある。

土師器には皿Ａ・椀Ｃ・杯Ｂ・甕Ａ・高杯Ａのほかに羽釜がある。皿Ａには外面全体をヘラケズリするＣ手法による例があり、底部には「戊」とも判読できる墨書をしている（第141図９、図版第91－９）。煮炊き用としての羽釜片もある。

瓦類は、軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦の各種破片に分類できる。均整唐草文軒平瓦（第142図26、図版第92－26）以外は瓦当面を欠失しているため、瓦当文様は不明である。この均整唐草文軒平瓦は左半部の破片で、平瓦凸面も剥離し、詳細にはできないが、瓦当文様は中心飾りから、左へ３反回転する唐草文を配している。長岡宮式7731Ａ型式に属するが、中心飾り内の中央部が欠損しているため、細分できない。ほかに平瓦凸面に横縄目叩き文様を施す例（第142図27）もある。

平安時代に属する遺物には、南1トレンチ土坑SK025より出土した土師器皿A・椀Cがある。この土坑以外からの当該期遺物の出土はない。

中世の遺物には、中国製陶磁器(第141図12、図版第91－12)や瓦器椀・鍋(図版第92－50)などがある。中国製陶磁器は内側底面に花文を描いた青磁椀で、外面へラケズリ調整が顕著で、施釉



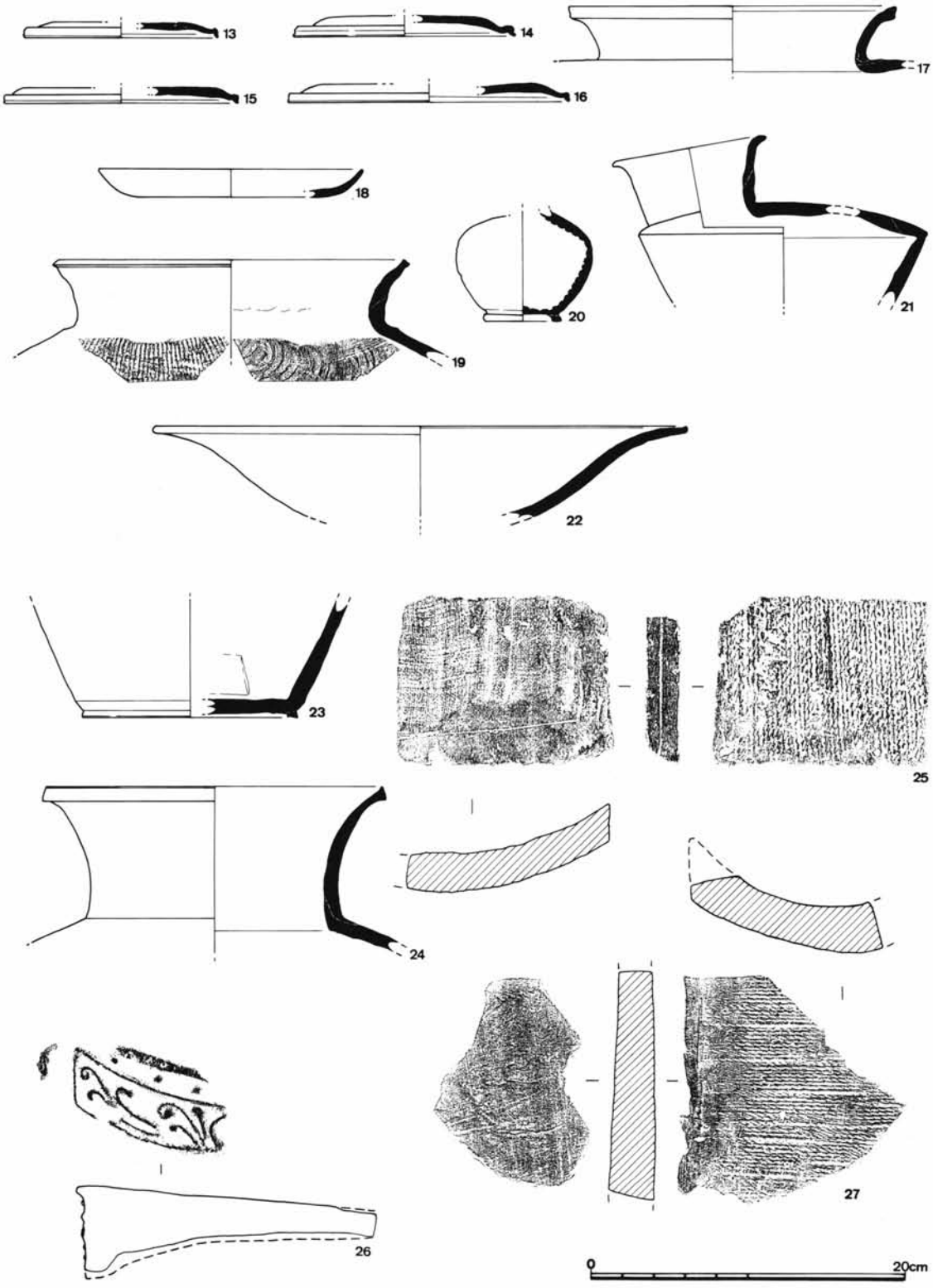
第141図　出土遺物実測図(1)

1～4・7～10：南1トレンチ土坑SK026　　5・6：南1トレンチ土坑SK025

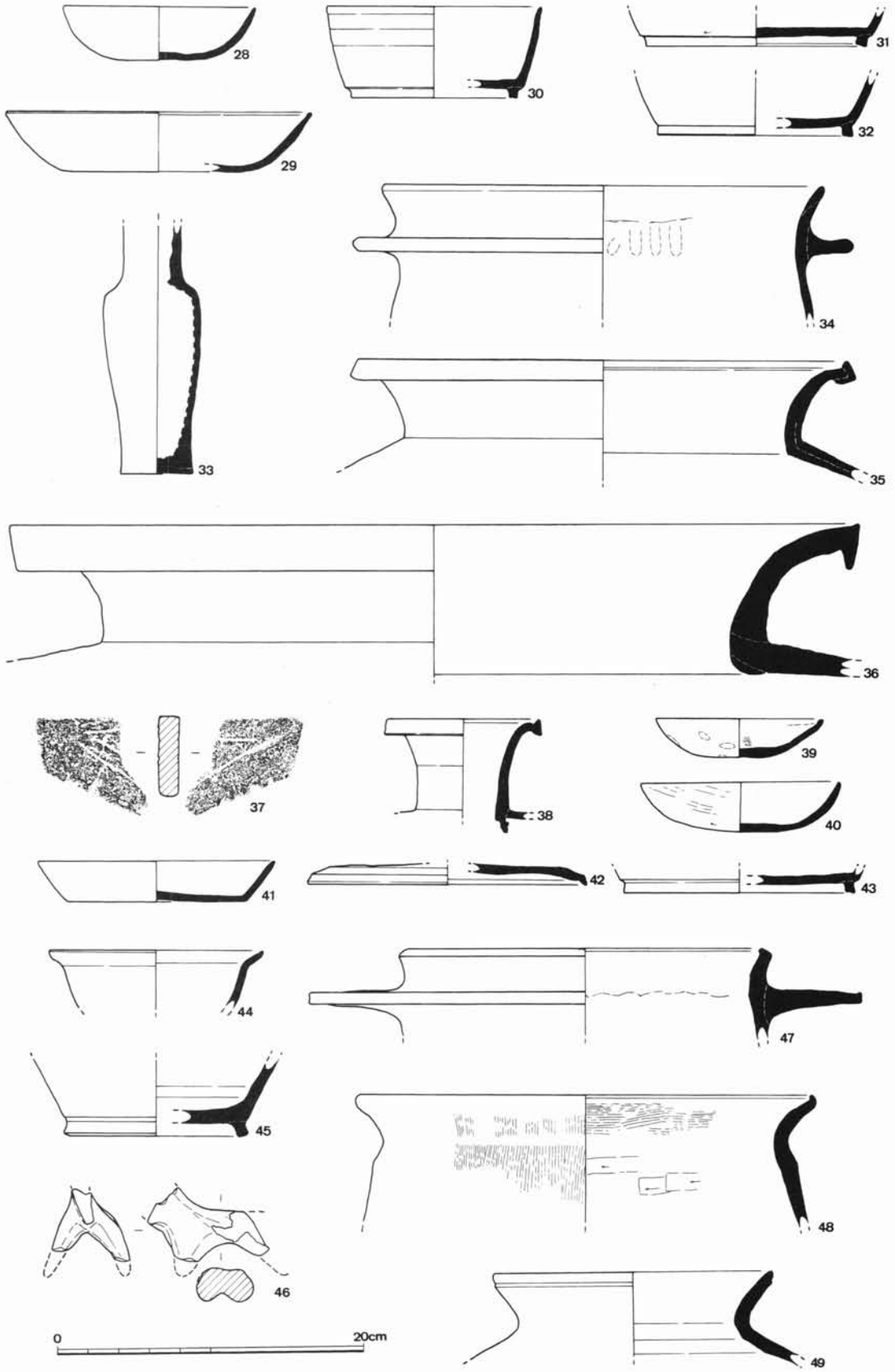
11：南1トレンチピットP042　　12：南1トレンチ土坑SK002

は底部高台外面までである。恐らくは13世紀代に比定できるであろう。

古墳時代の遺物には、北１トレンチ井戸ＳＥ02出土の埴輪片がある。３方の端面はていねいにヘラケズリされ、表裏両面にヘラ先による三角状の沈線を描き、その内側に格子目状に沈線を施



第142図　出土遺物実測図(2)
13～27：北２トレンチ井戸ＳＥ13



第143図　出土遺物実測図(3)

28～37：北1トレンチ井戸ＳＥ02　　38：南4トレンチ溝ＳＤ03　　39：南9トレンチ土坑ＳＫ11
40～47：南9トレンチ溝ＳＤ12　　48・49：南9トレンチ土器集積部

す。黄褐色を呈する。蓋形埴輪の立ち飾りの一部分と推定できる(第143図37、図版第92－37)。

4．ま と め

今回の発掘調査を通じて多くの遺構・遺物を検出し、その概要を記述してきた。以下、その調査成果を簡略にまとめることにする。

まず、長岡京期については、新条坊での右京六条一坊十三・十四町・十五町地内で、明確な掘立柱建物跡を検出し、それに付随するかのように隅丸方形井戸跡も確認できた。井戸や溝・小土坑などの小規模な遺構しか昨今まで知られていない現状下にあって新たな成果を追加できた。また、南９トレンチ溝ＳＤ12は、右京第630次調査で発掘された六条大路の北側築地と宅地とを区画する溝と考えられ、立会第01166次調査でも部分的に確認されていた延長部に相当する。さらに、北２トレンチ井戸ＳＥ13より出土した均整唐草文軒平瓦は、左京北一条三坊三町で採用・使用され、その後、平安京西寺・平安京右京四条二坊淳和院や京都市伏見区嘉祥寺で用いられた型式瓦である。この右京六条一坊十五町域とどのような関係にあったのか、今後の課題である。

次に、中世の遺物としての大溝が南４～８トレンチで確認でき、さらに南下して南10トレンチ東隣接で直角に曲って西方向にのびるものと推定できる。それは、南４～８トレンチでの溝西辺の座標軸がＹ＝-27,330に沿っていること、中間層に礫を挟み、溝内堆積物が酷似し、出土遺物が鎌倉時代のものを含む点などから一条の大溝と理解でき、さらに右京第750次調査で検出された堀状遺構ＳＤ02がその北端を形成していると判断できる。とすれば、南北総延長約130ｍにも達する大溝となる。鎌倉時代の居館に伴う溝とも考えられよう。

北１トレンチ井戸ＳＥ02出土の、両面に直弧文を線刻した蓋形埴輪片は、右京六条一坊十五町を中心にした隣接地に、少なくとも５世紀代に古墳が築造・存在し、その後何らかの契機で、この井戸内に遺棄されたことを物語っている。

(松井忠春)

注１　岩崎誠・木村泰彦・山本輝雄『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第26集　(財)長岡京市埋蔵文化財センター　2002、なお、そのほかの参考文献は省略した。

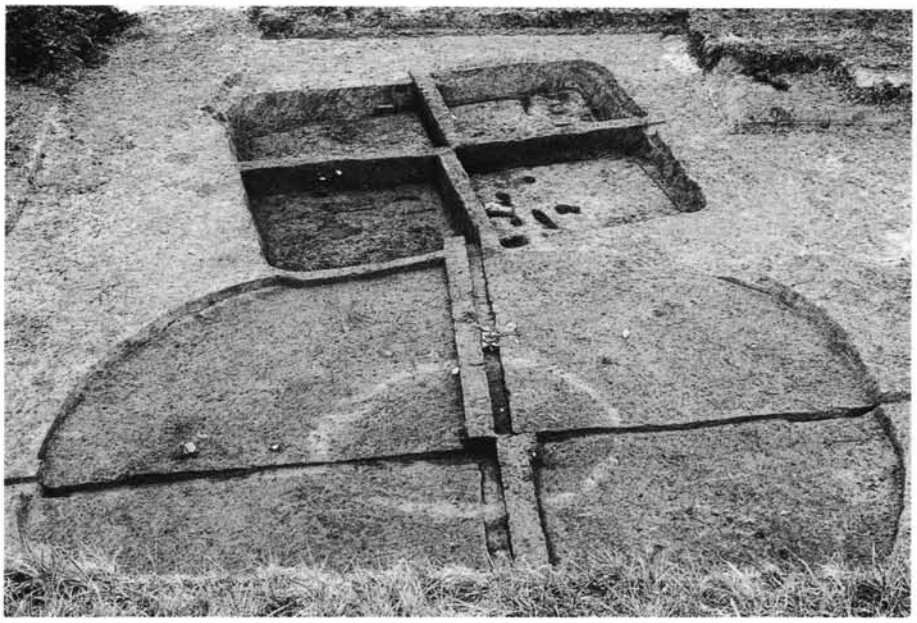
注２　**補助員**　大石琢磨・渋谷梓・田村和成・那須葵・南下由・村上計太

整理員　有澤明子・稲垣あや子・大石琢磨・春日満子・木村悟・田中美恵子・田村和哉・西村香代子・村上計太・村上優美子・森川敦子・安田裕貴子

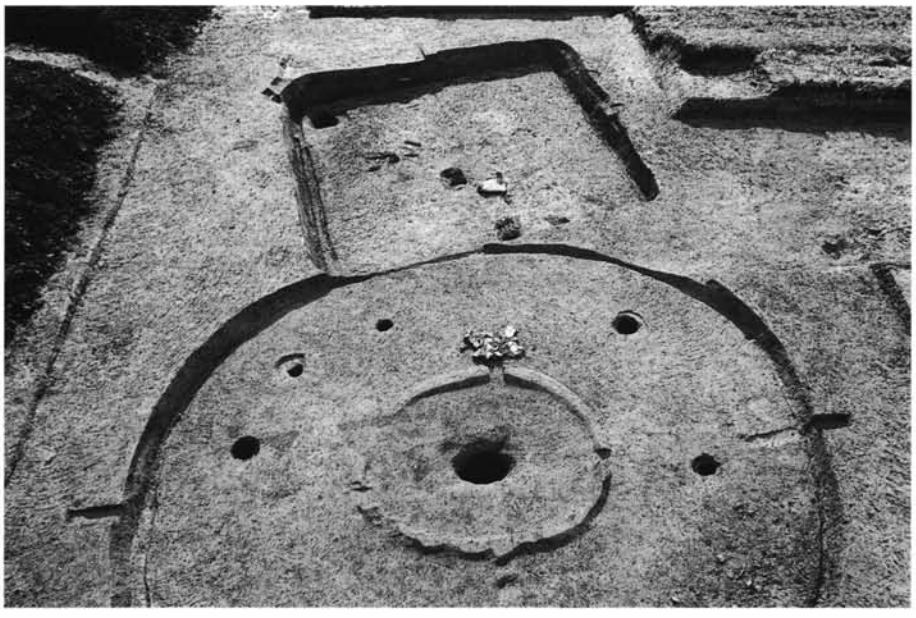
図　　版

図版第１　里遺跡第３・５・６次

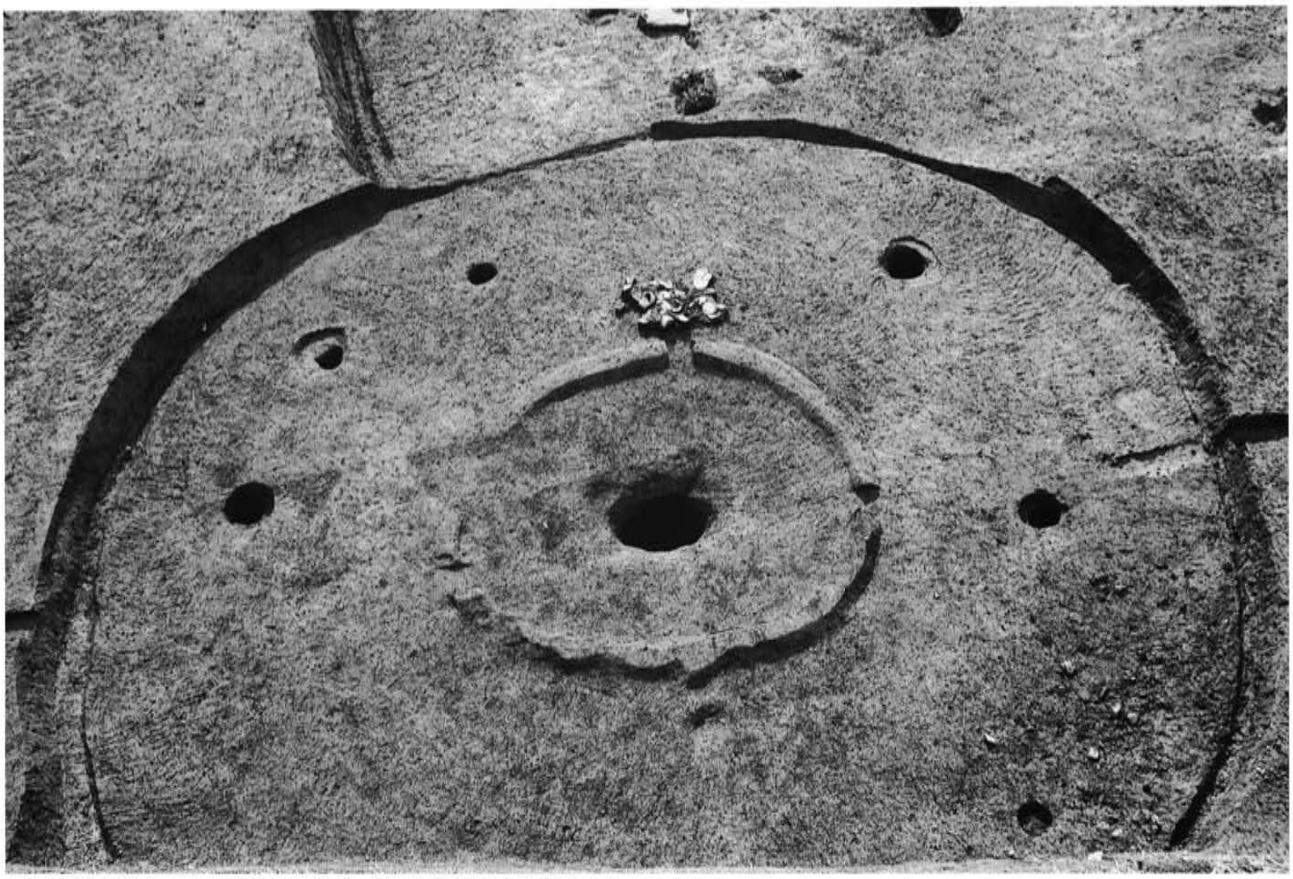
(1)第３次調査地近景(南から)



(2)第３次第４トレンチ
竪穴式住居跡１・２調査状況
(北から)



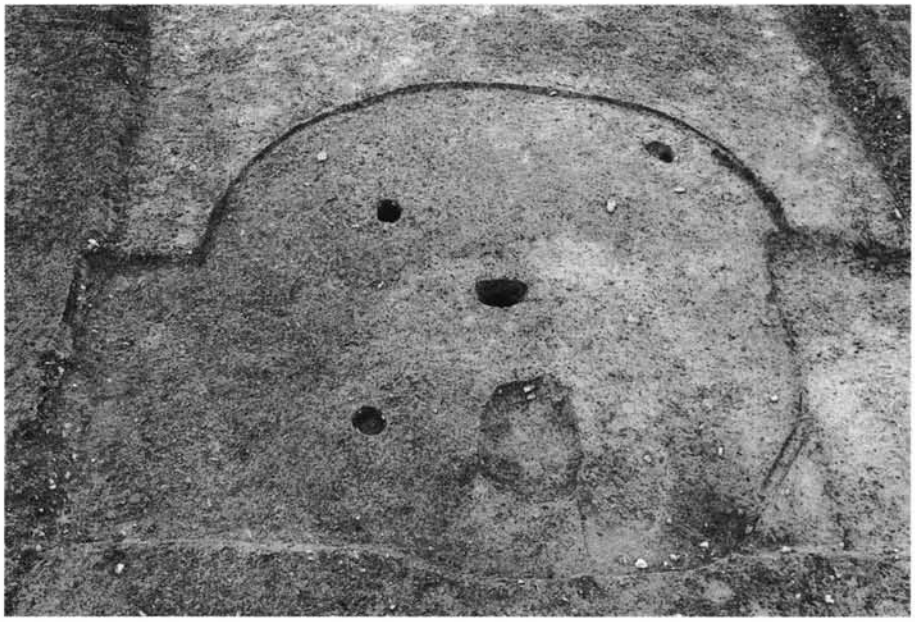
(3)第３次第４トレンチ
竪穴式住居跡１・２完掘状況
(北から)



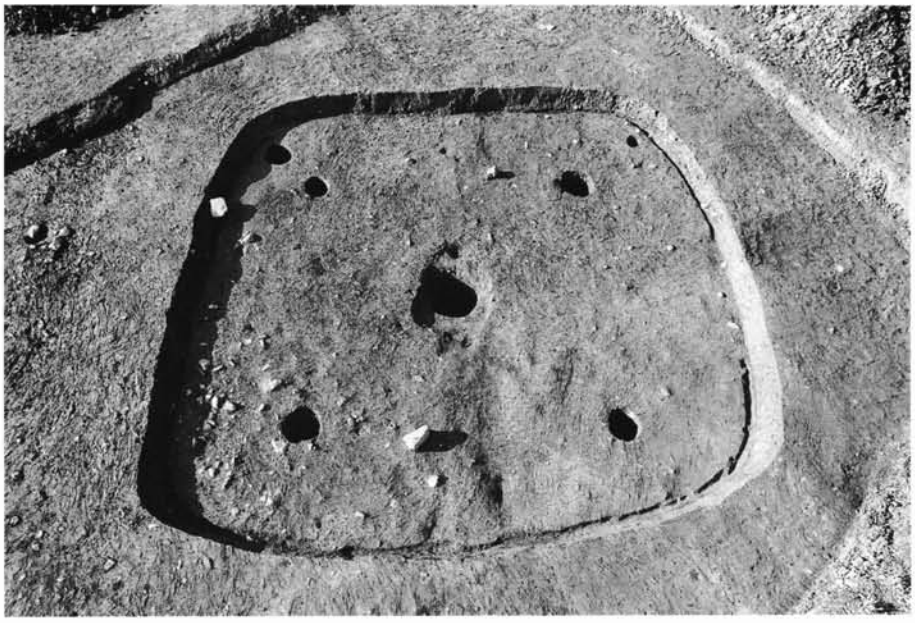
(1)第３次第４トレンチ竪穴式住居跡１完掘状況(北から)

(2)第３次第４トレンチ竪穴式住居跡２完掘状況(北から)

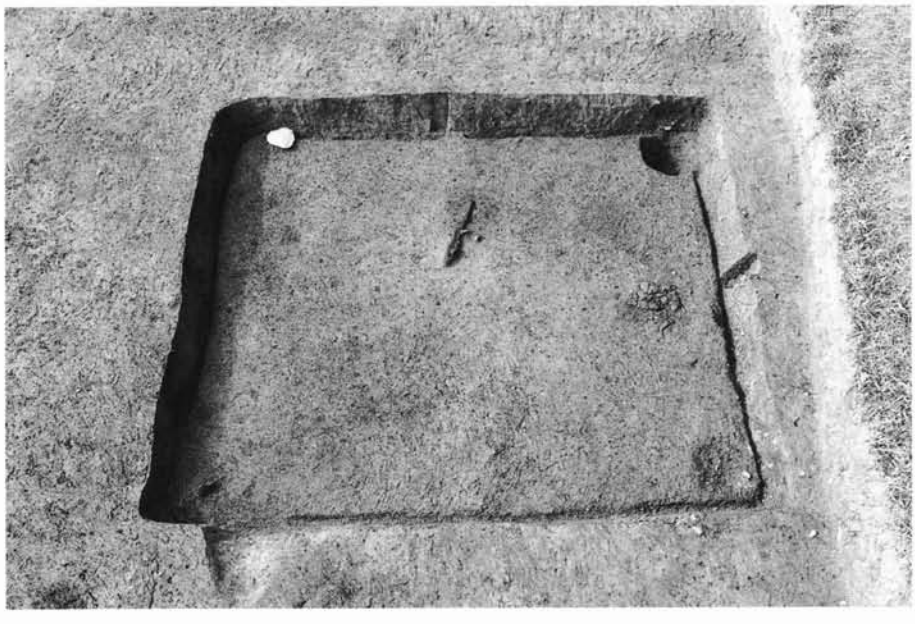
図版第３　里遺跡第３・５・６次



(1)第３次第１トレンチ
竪穴式住居跡８完掘状況
（北から）



(2)第３次第２トレンチ
竪穴式住居跡７完掘状況
（東から）

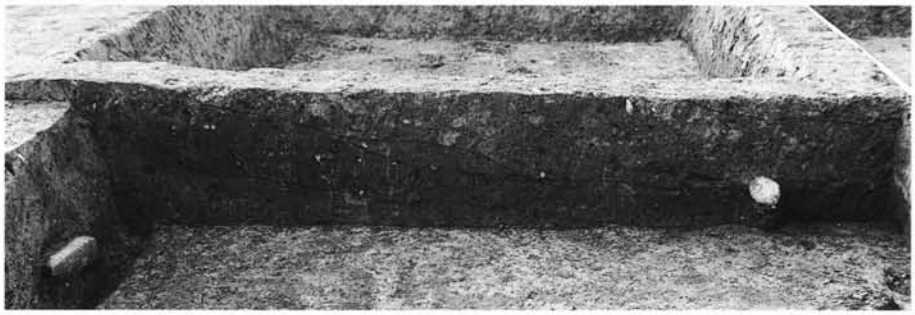


(3)第３次第３トレンチ
竪穴式住居跡６完掘状況
（東から）

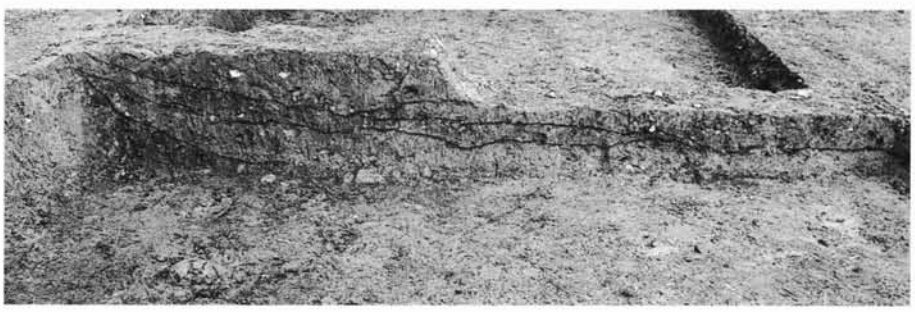
図版第４　里遺跡第３・５・６次

(1)第３次第４トレンチ
竪穴式住居跡２炭化材出土状況
(北東から)

(2)第３次第４トレンチ
竪穴式住居跡１土層断面
および遺物出土状況(西から)



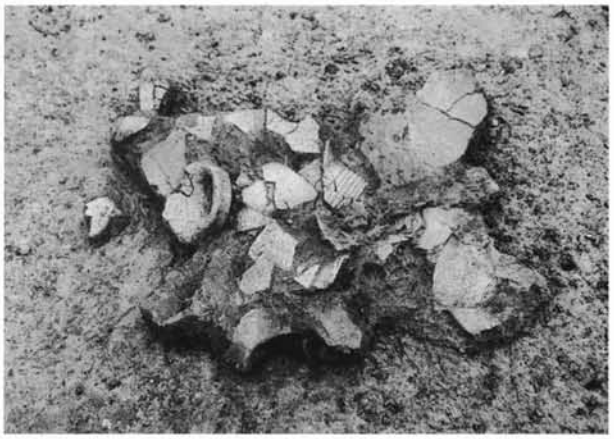
(3)第３次第４トレンチ
竪穴式住居跡２土層断面
(東から)



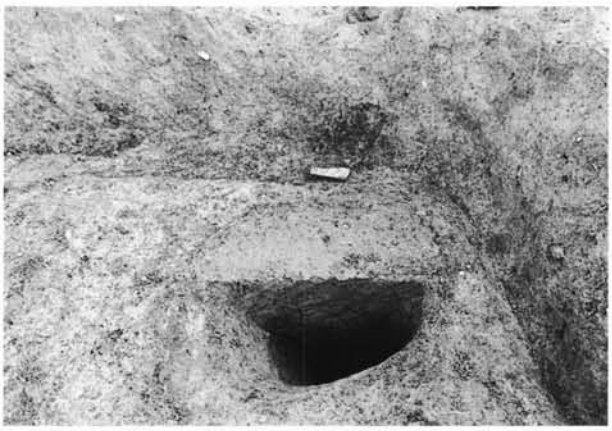
(4)第３次第３トレンチ
竪穴式住居跡６土層断面
(西から)

図版第5　里遺跡第3・5・6次

(1)第3次第4トレンチ竪穴式住居跡1中央炉(北から)

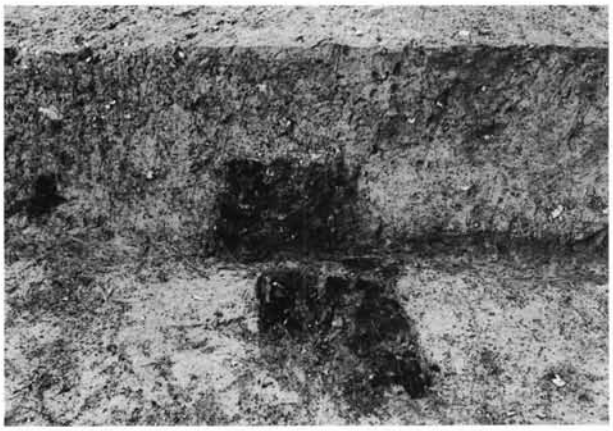


(2)第3次第4トレンチ竪穴式住居跡1遺物出土状況(北から)



(3)第3次第4トレンチ土坑4上層断面(西から)

(4)第3次第4トレンチ竪穴式住居跡2炉断面(南から)



(5)第3次第4トレンチ竪穴式住居跡2炭化材出土状況(西から)

(6)第3次第4トレンチ竪穴式住居跡2遺物出土状況(北から)

(7)第3次第3トレンチ土坑9検出状況(南から)

(8)第3次第1トレンチ竪穴式住居跡8炉断面(東から)

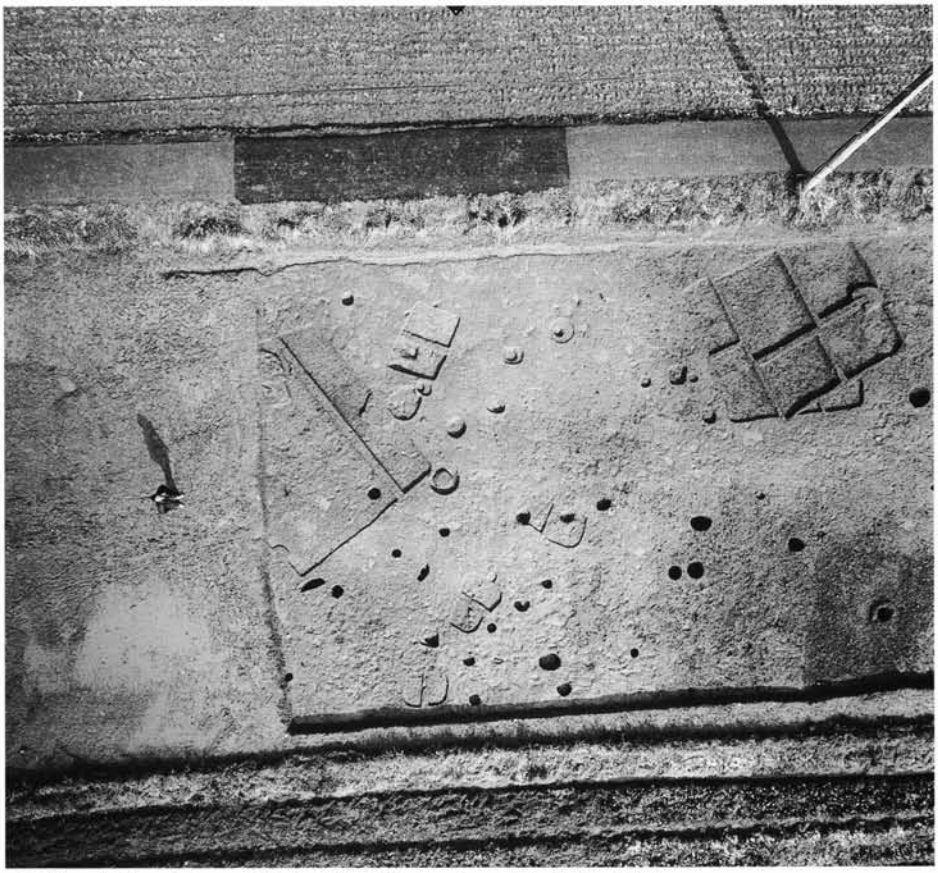
図版第６　里遺跡第３・５・６次

(1)第５次第１・２トレンチ全景
（下が北）

(2)第５次第１・２トレンチ遠景
（西から）

(1)第５次第１トレンチ
竪穴式住居跡７・21全景
（下が北）

(2)第５次第１トレンチ
竪穴式住居跡１・11・18・
22全景（上が北）



(1)第５次第１トレンチ竪穴式住居跡１・４・11全景(上が北)

(2)第５次第１トレンチ竪穴式住居跡７土器出土状況(北から)

(1)第５次第１トレンチ竪穴式住居跡21竈検出状況(北から)

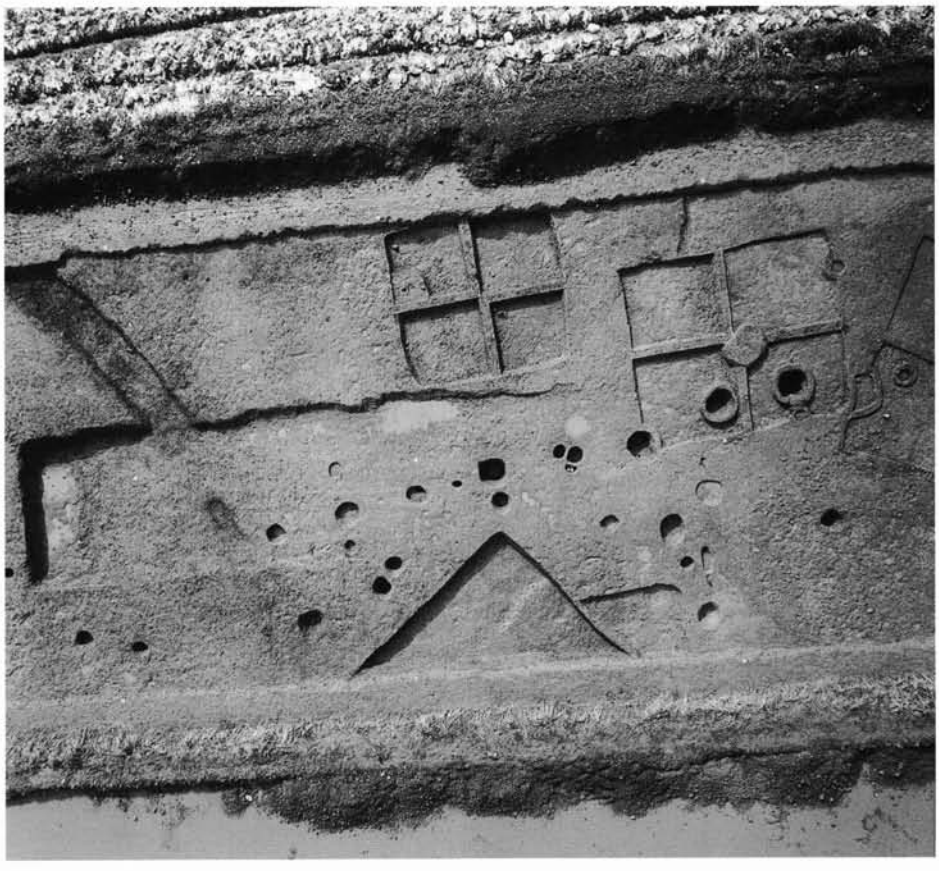
(2)第５次第１トレンチ竪穴式住居跡21竈内土器出土状況(南西から)

(1)第５次第１トレンチ竪穴式住居跡21竈内土器出土状況(北西から)

(2)第５次第１トレンチ竪穴式住居跡22竈検出状況(南東から)

図版第11　里遺跡第３・５・６次

(1)第５次第２トレンチ
西半部検出遺構全景
（下が北）



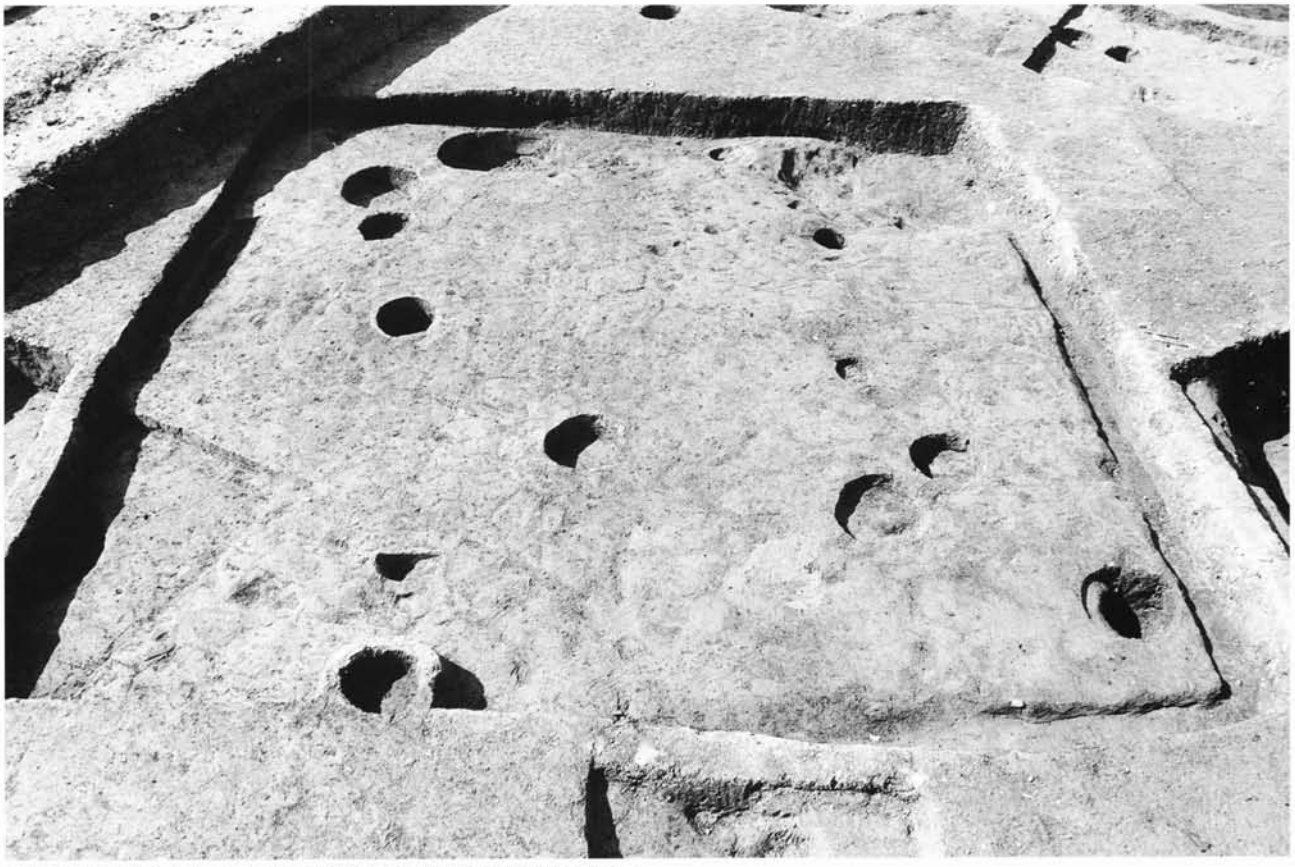
(2)第５次第２トレンチ
東半部検出遺構全景
（下が北）

(1)第５次第３トレンチ全景(上が北)

(2)第５次第３・４トレンチ遠景(北から)

図版第13　里遺跡第３・５・６次

(1)第５次第３トレンチ近景(北東から)



(2)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡57検出状況(北東から)

図版第14　里遺跡第３・５・６次

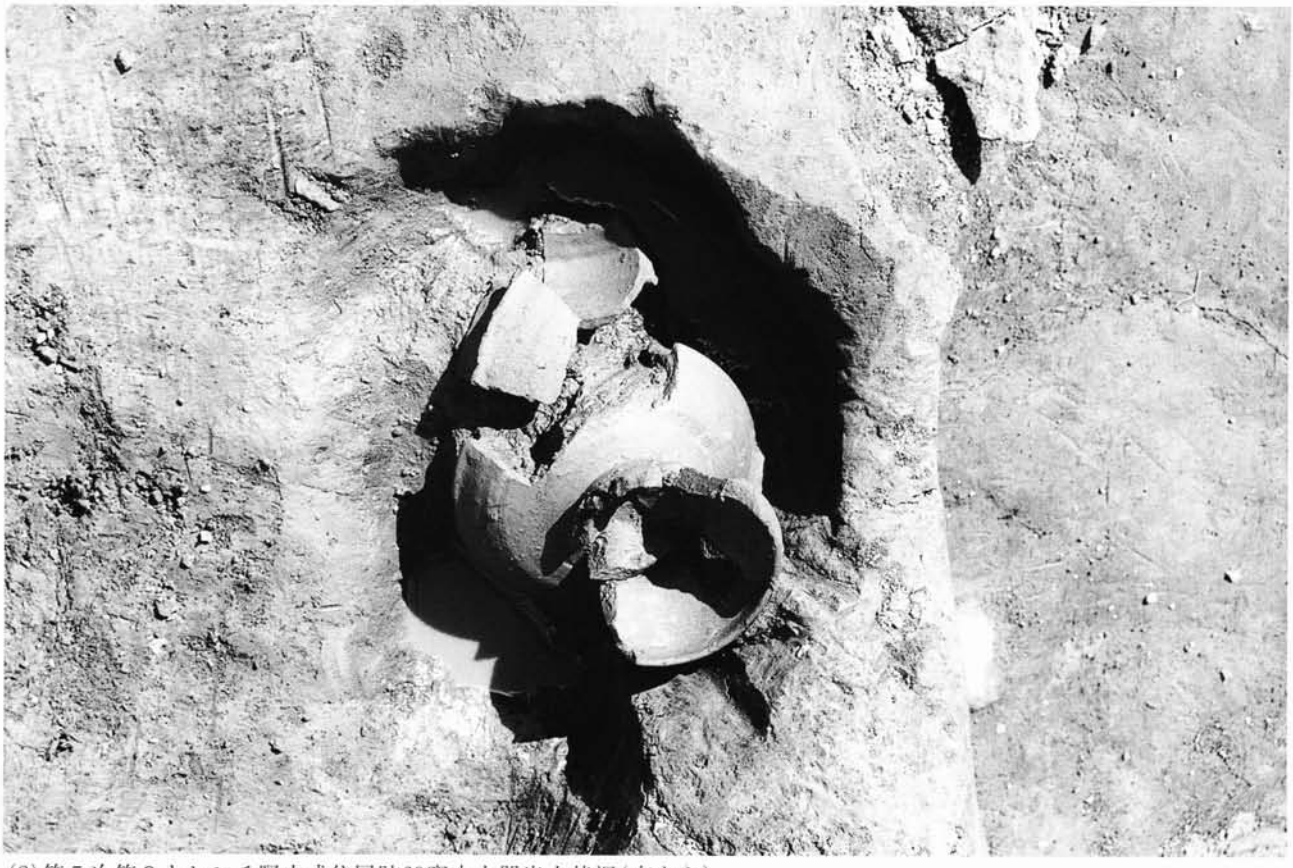
(1)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡63内土坑141検出状況(東から)

(2)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡67検出状況(北から)

(1)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡69および風倒木痕検出状況(西から)

(2)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡69および風倒木痕検出状況(北から)

(1)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡69南壁および風倒木痕断面(南から)



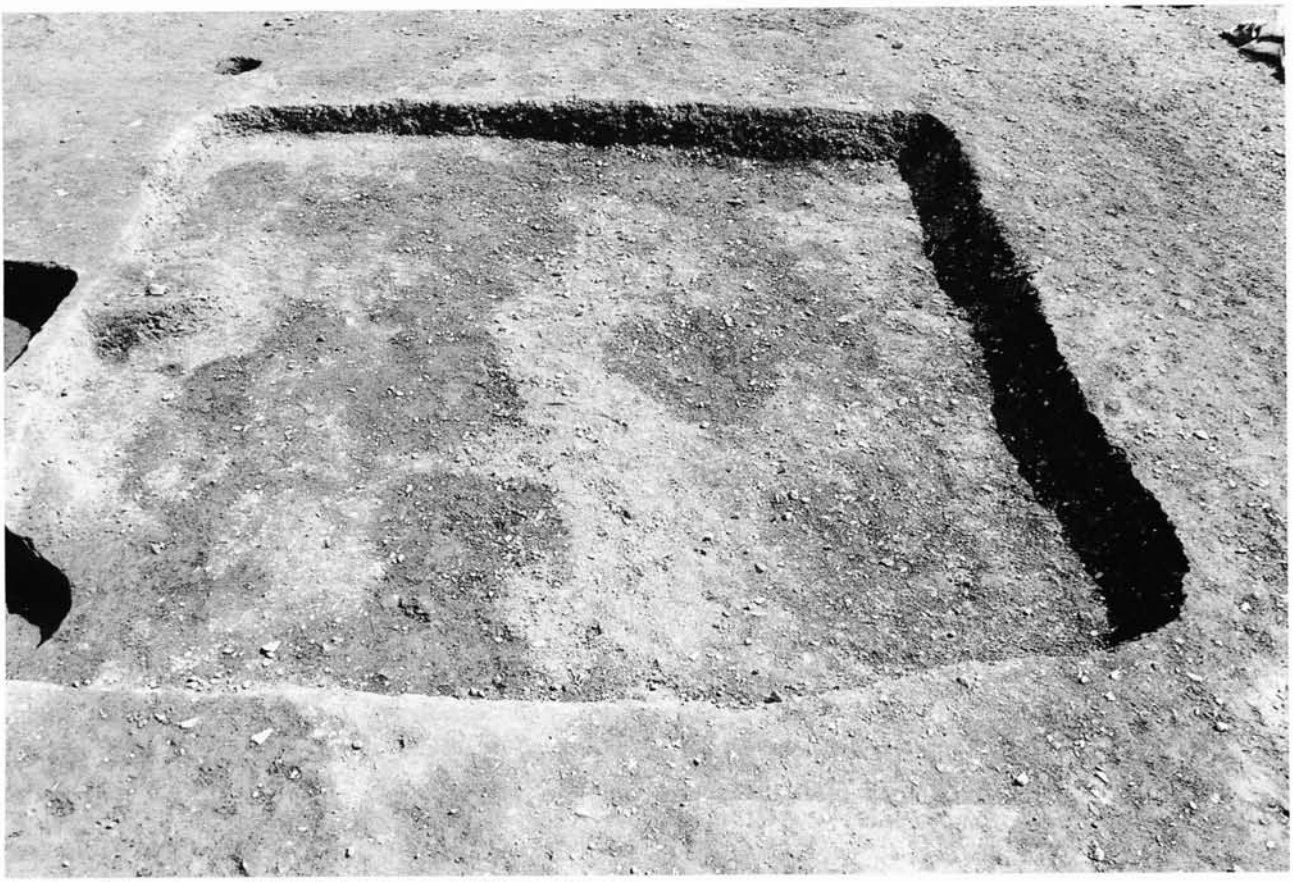
(2)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡69竈内土器出土状況(南から)

図版第17　里遺跡第３・５・６次

(1)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡85、ピット86土器出土状況(東から)

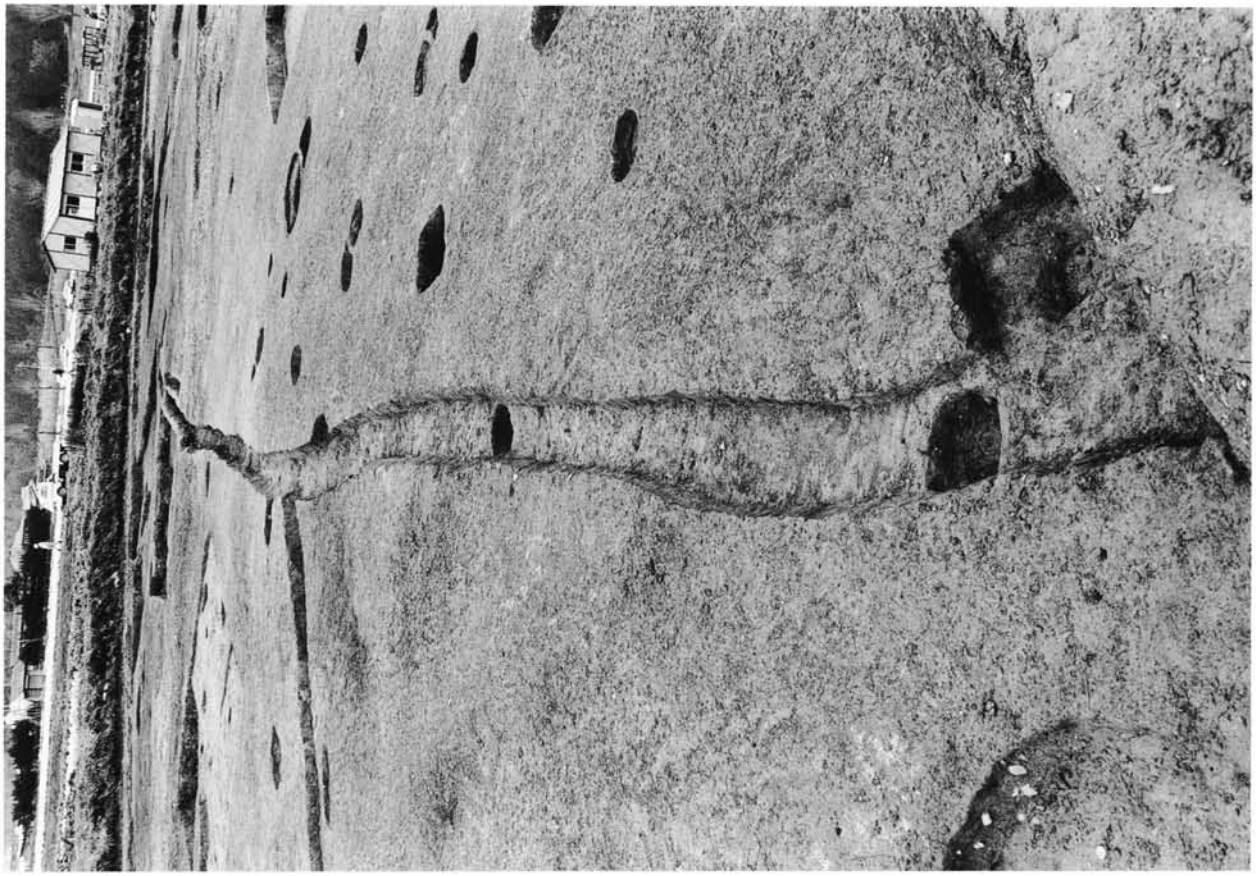
(2)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡93遺物出土状況(西から)

図版第18　里遺跡第３・５・６次



(1)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡100完掘状況(西から)

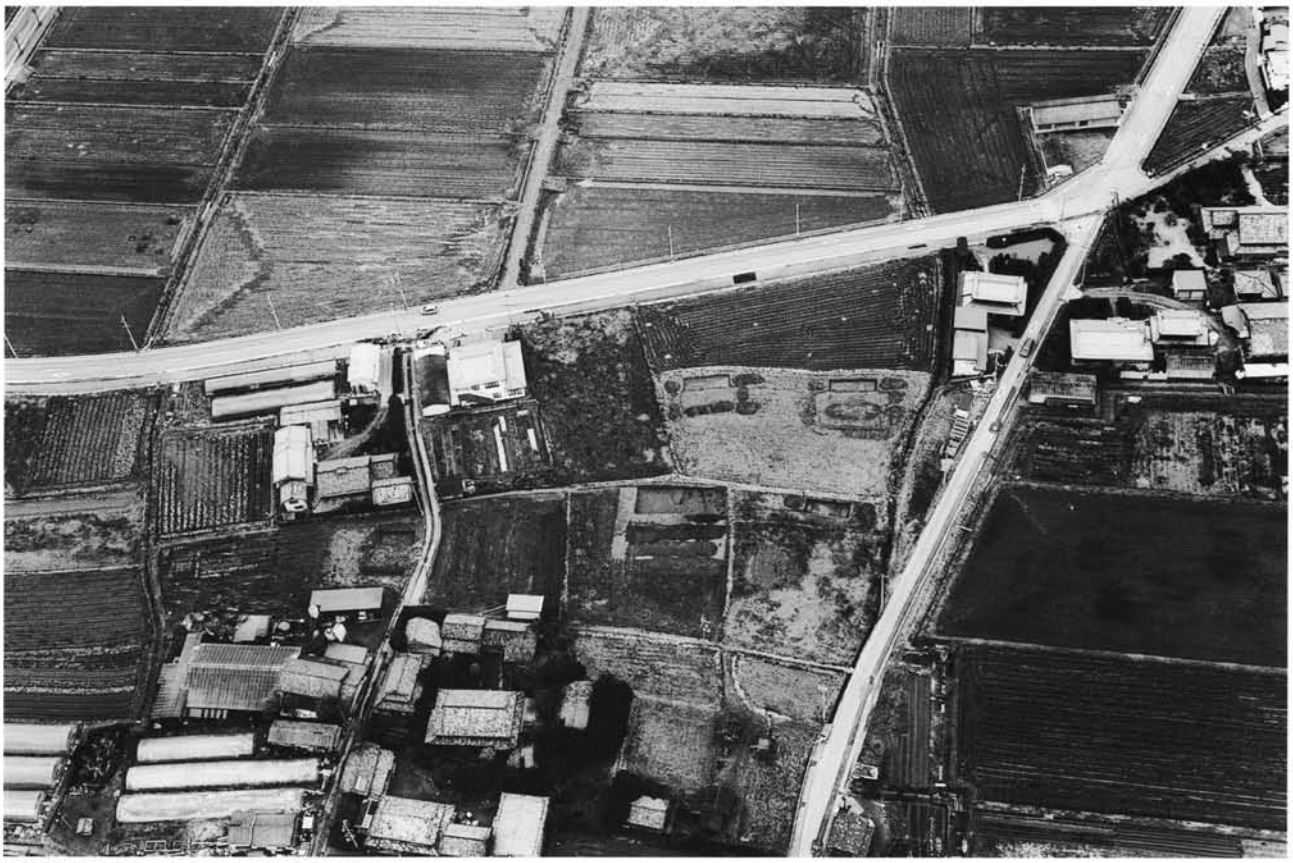
(2)第５次第３トレンチ竪穴式住居跡101、ピット103土器出土状況(東から)



(2)第５次第３トレンチ溝87検出状況(南から)

(1)第５次第３トレンチ柱穴列１検出状況(南から)

(1)第５次第４トレンチ全景(上が北)



(2)第５次第４トレンチ遠景(下が北)

(1)第５次第４トレンチ近景(1)(北西から)

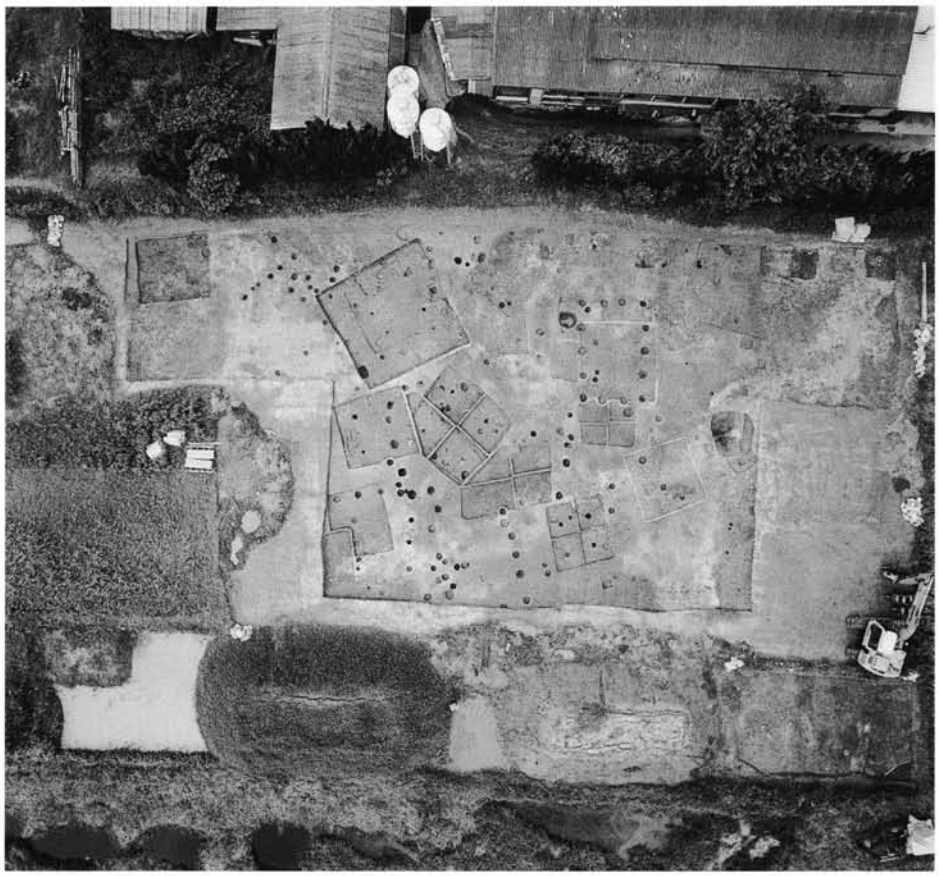
(2)第５次第４トレンチ近景(2)(北西から)

図版第22　里遺跡第３・５・６次

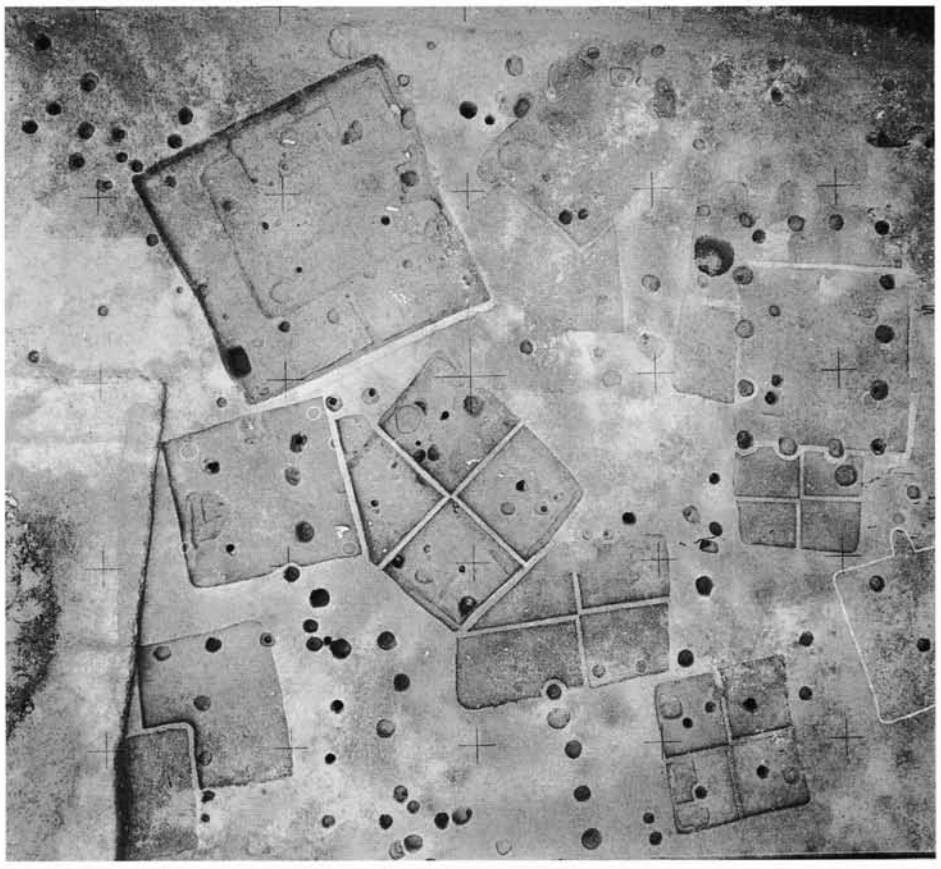
(1)第６次第５トレンチ遠景
（南から）

(2)第６次第５トレンチ近景
（西から）

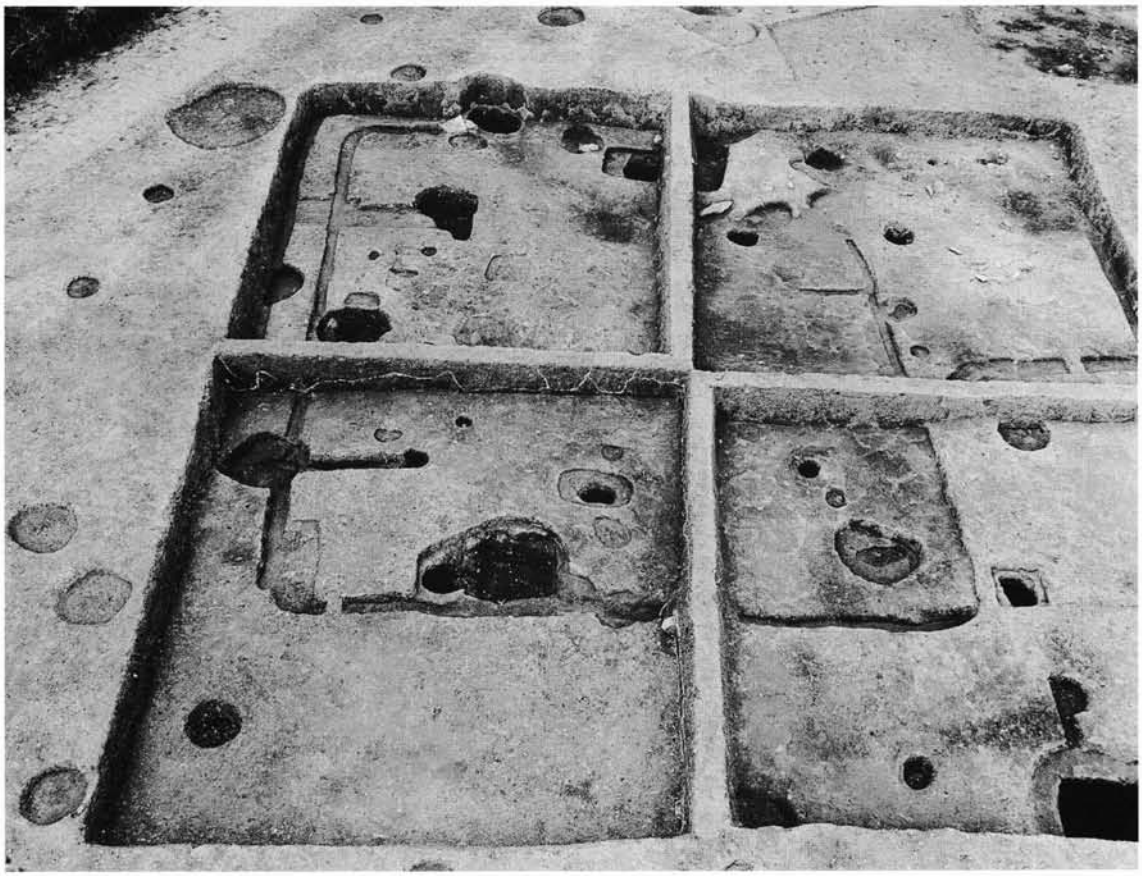
図版第23　里遺跡第３・５・６次



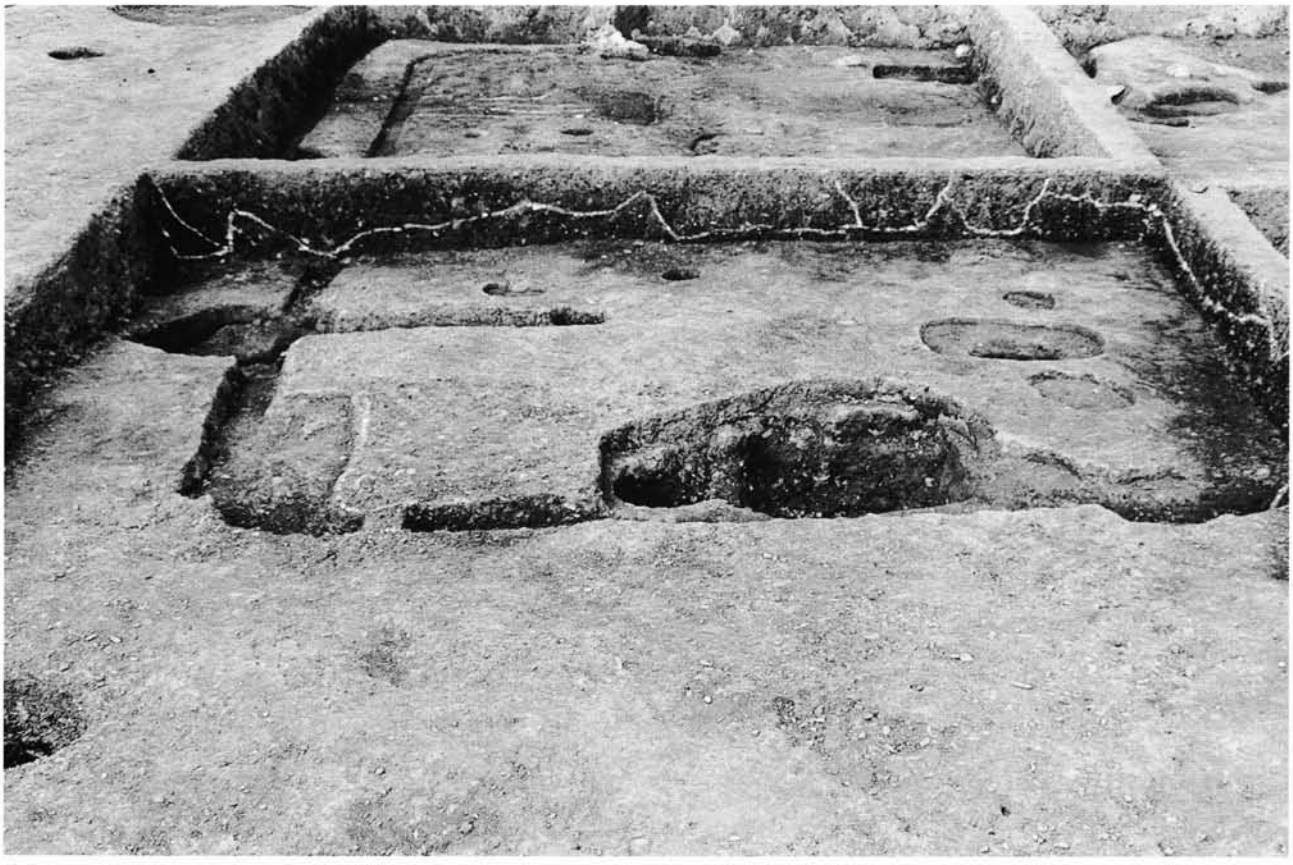
(1)第６次第５トレンチ全景
（上が北）



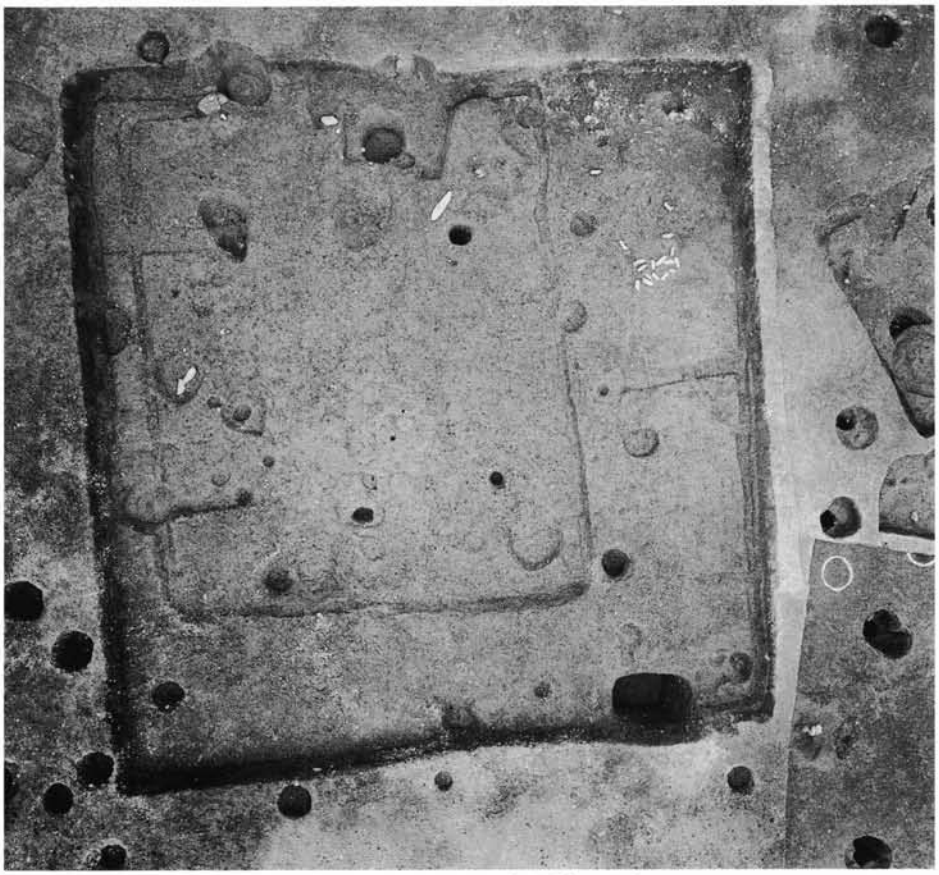
(2)第６次第５トレンチ
竪穴式住居跡群全景
（上が北）



(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡158検出状況(西から)

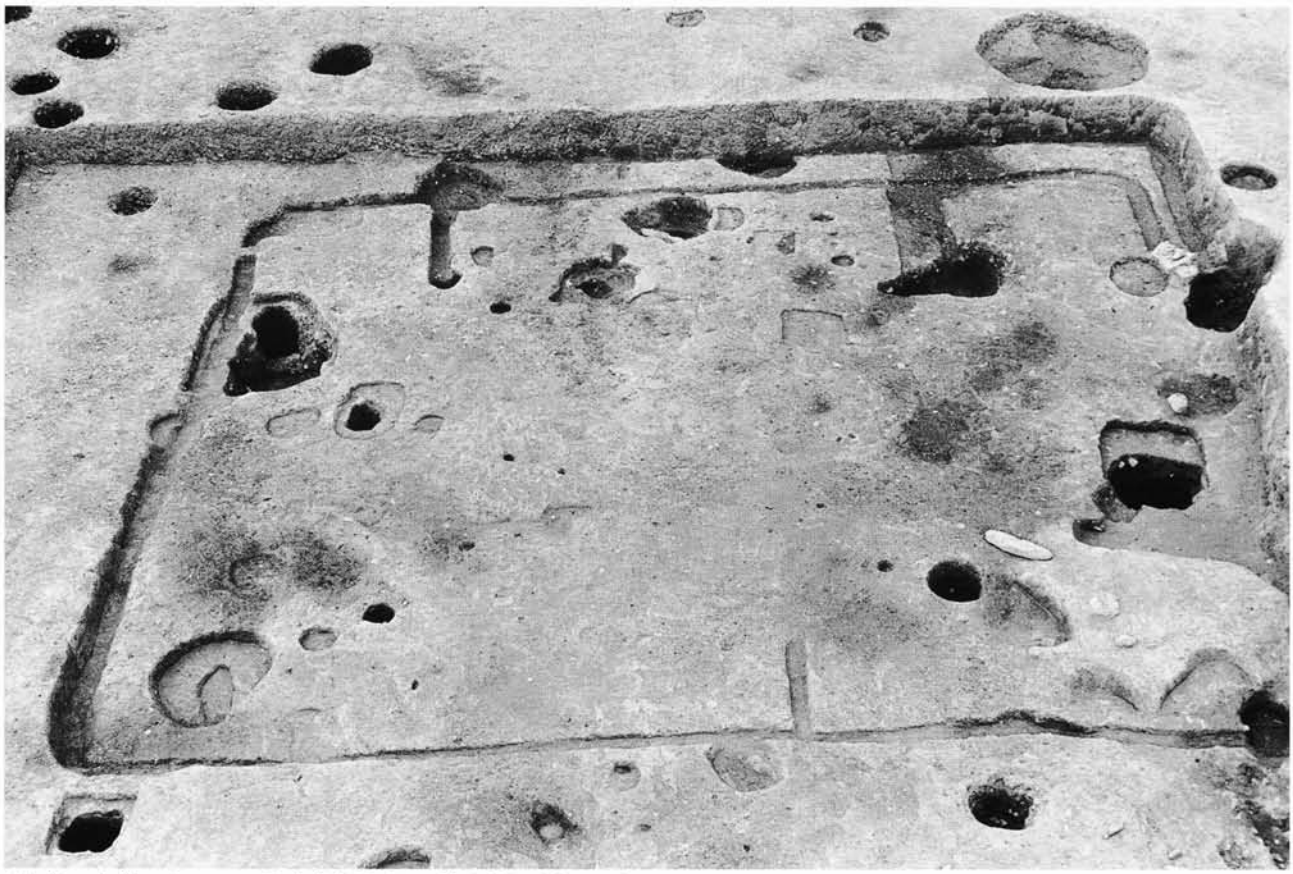


(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡136土層堆積状況(西から)



(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡136・158全景(左が北)

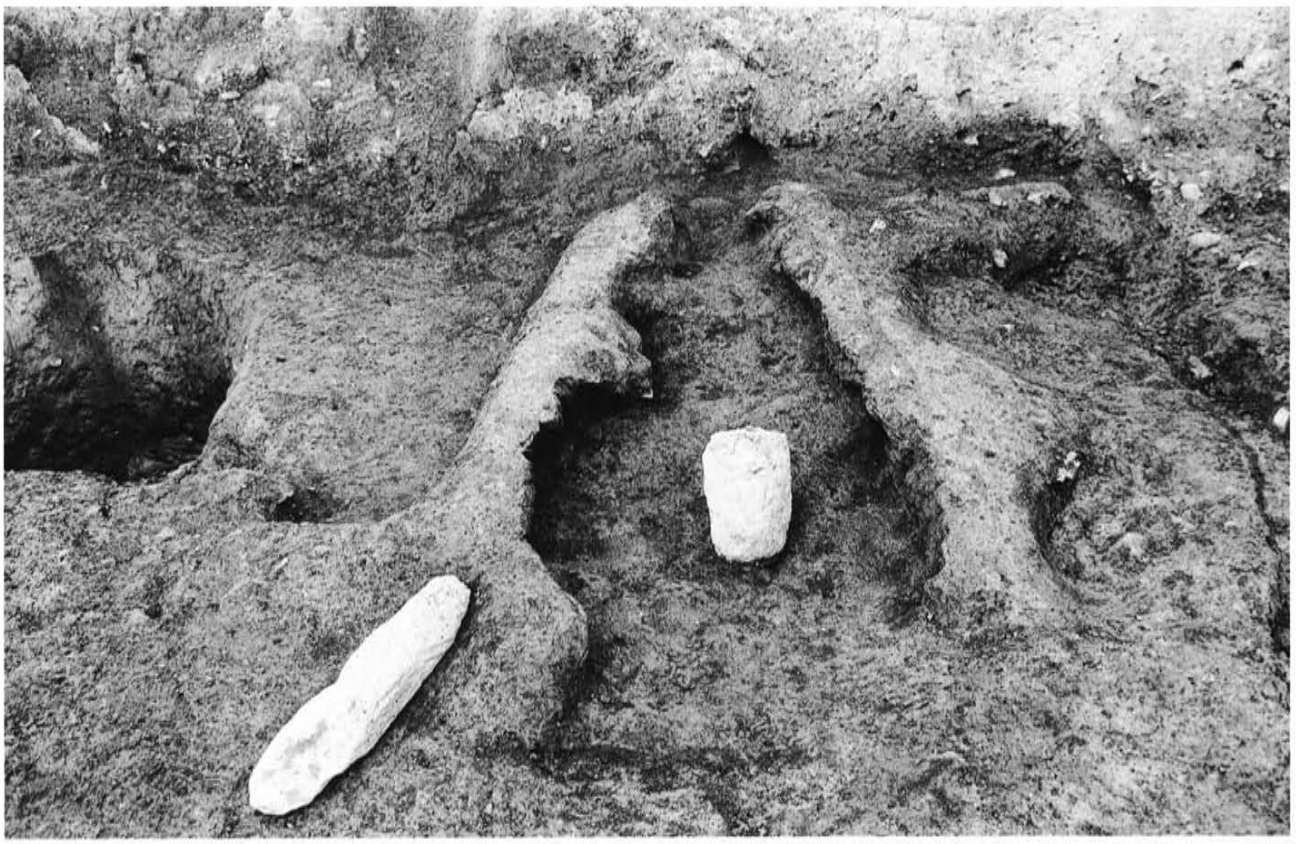
(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡136・158検出状況(左が北)



(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡158検出状況(南から)

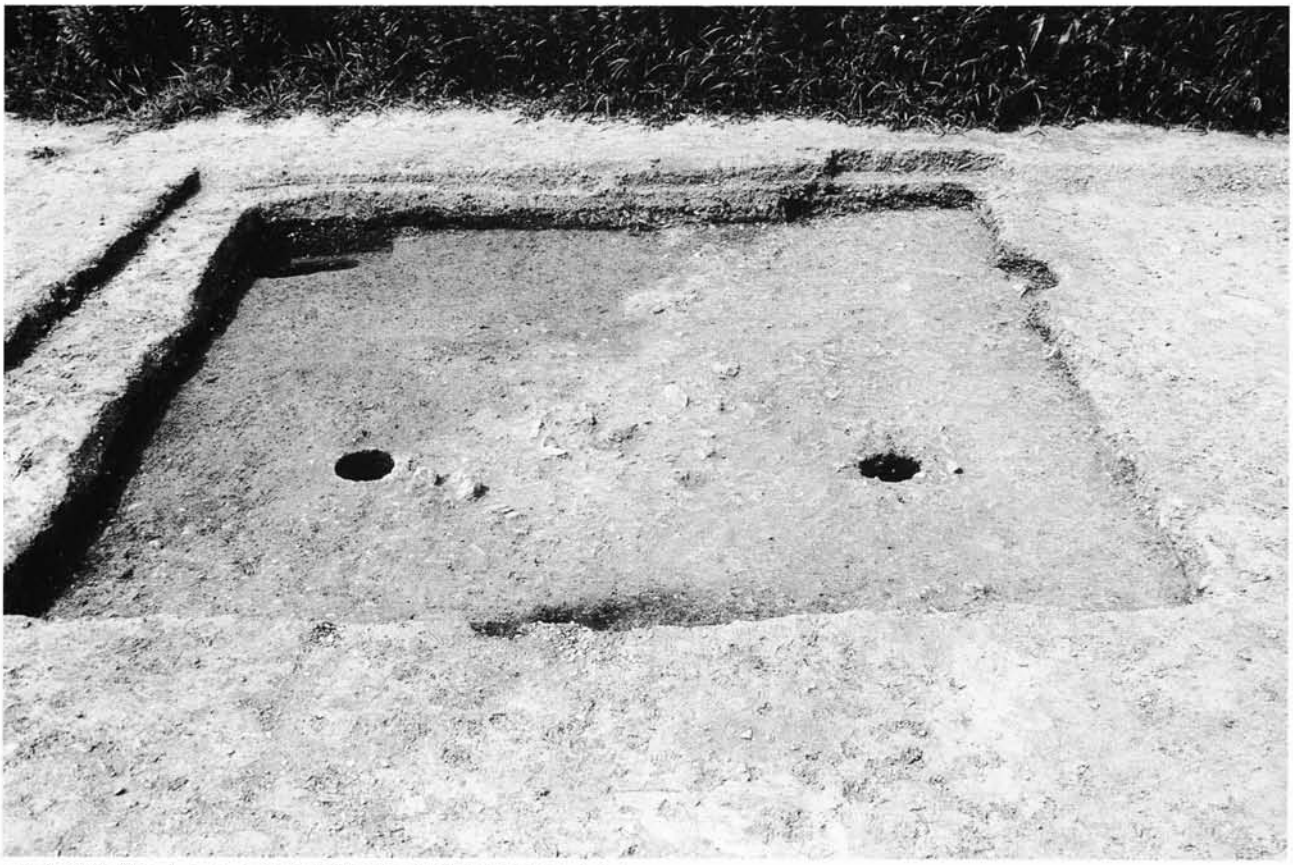
(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡136礫群検出状況(南から)

(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡136検出礫近景(南から)



(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡136竈検出状況(西から)

(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡136竈検出状況(南西から)



(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡137検出状況(南から)

(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡198検出状況(南から)

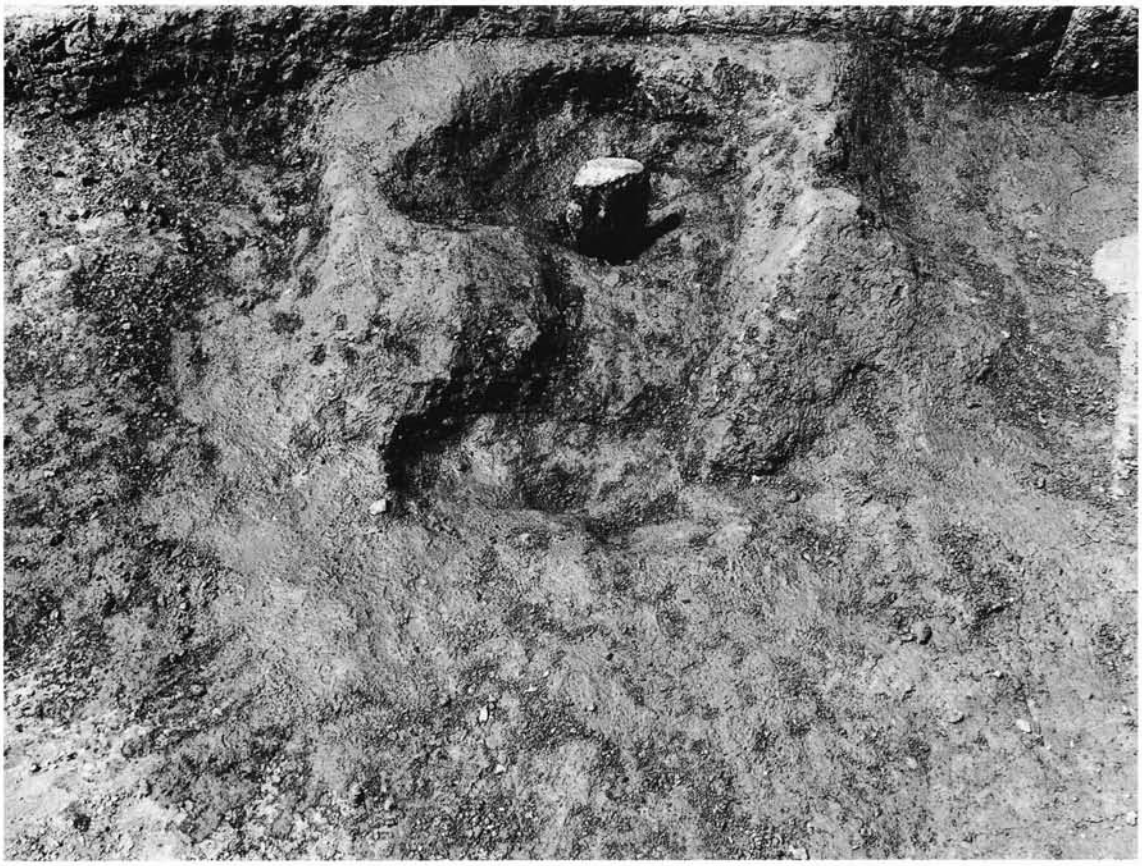
(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡198竈検出状況(南から)

(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡198竈検出状況(南西から)

(2)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡193竈検出状況(南西から)

図版第31　里遺跡第３・５・６次

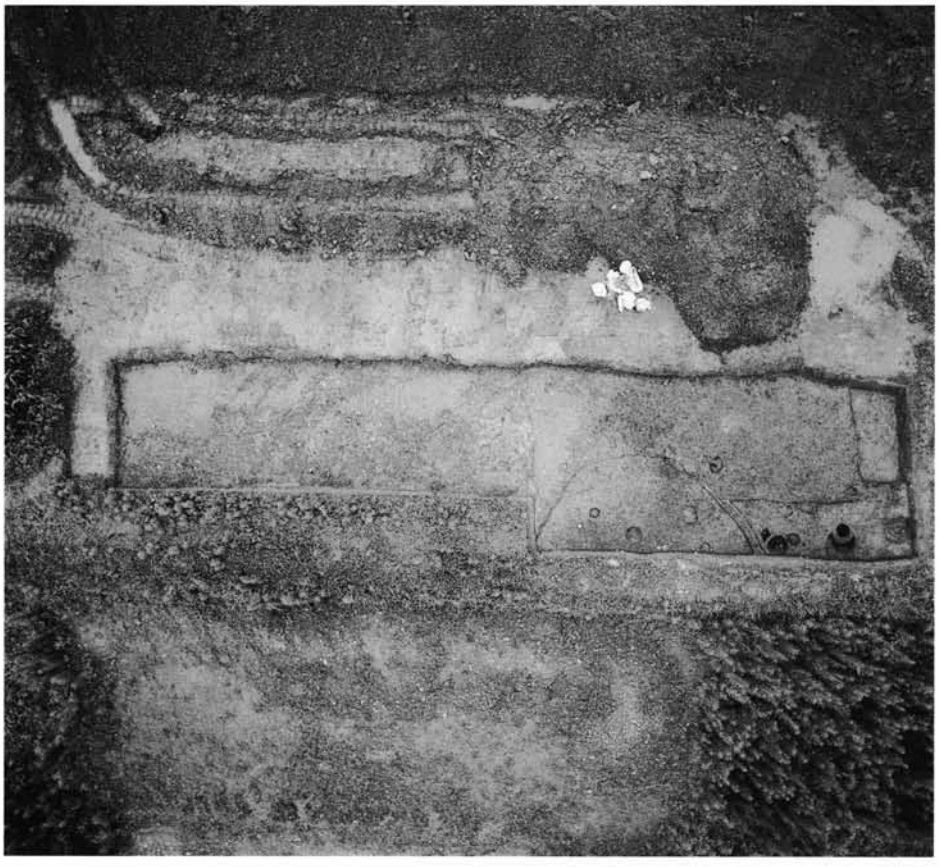
(1)第６次第５トレンチ竪穴式住居跡193竈支柱石検出状況(南から)



(2)第６次第１トレンチ竪穴式住居跡193竈完掘状況(南から)

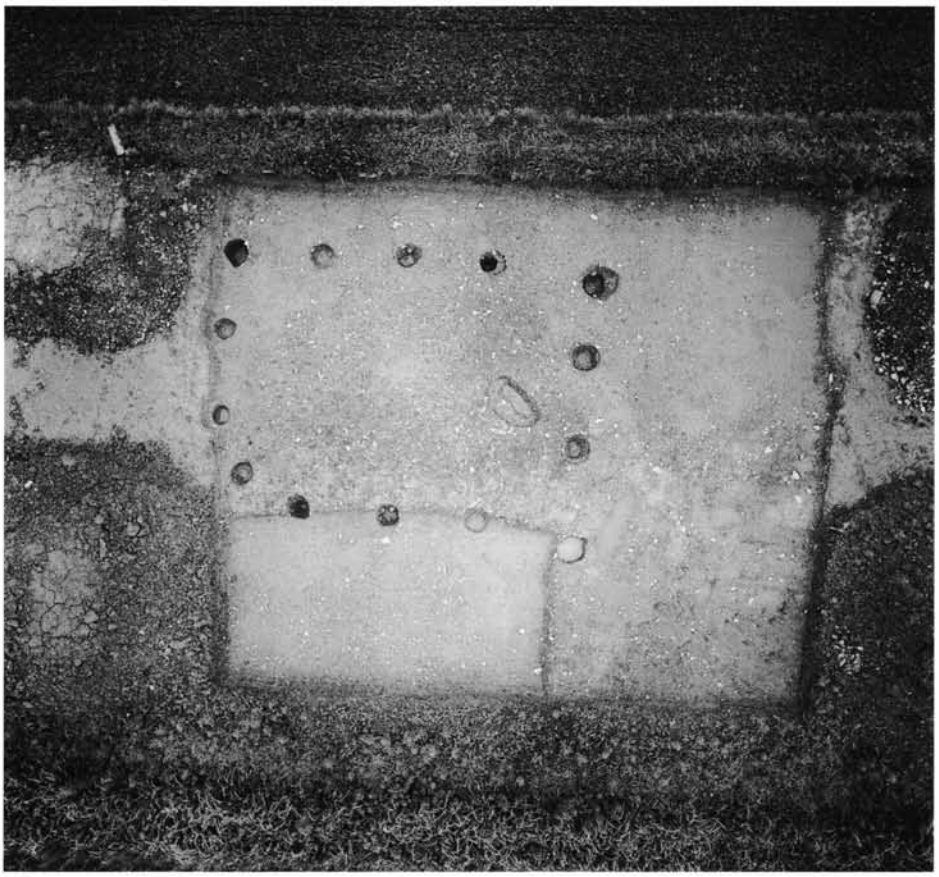
図版第32　里遺跡第３・５・６次

(1)第６次第６～８トレンチ遠景
（下が北）



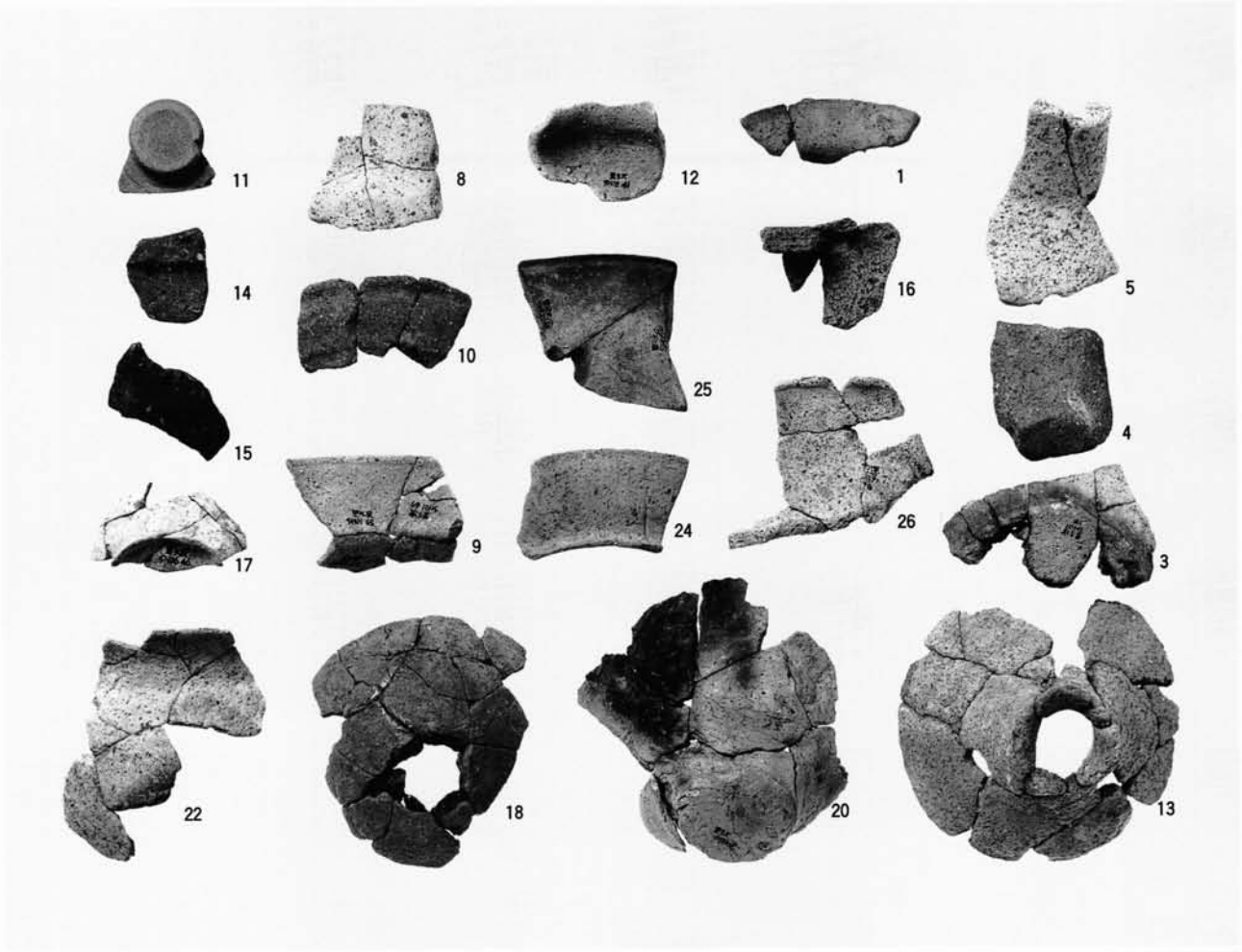
(2)第６次第７トレンチ全景
（上が北）

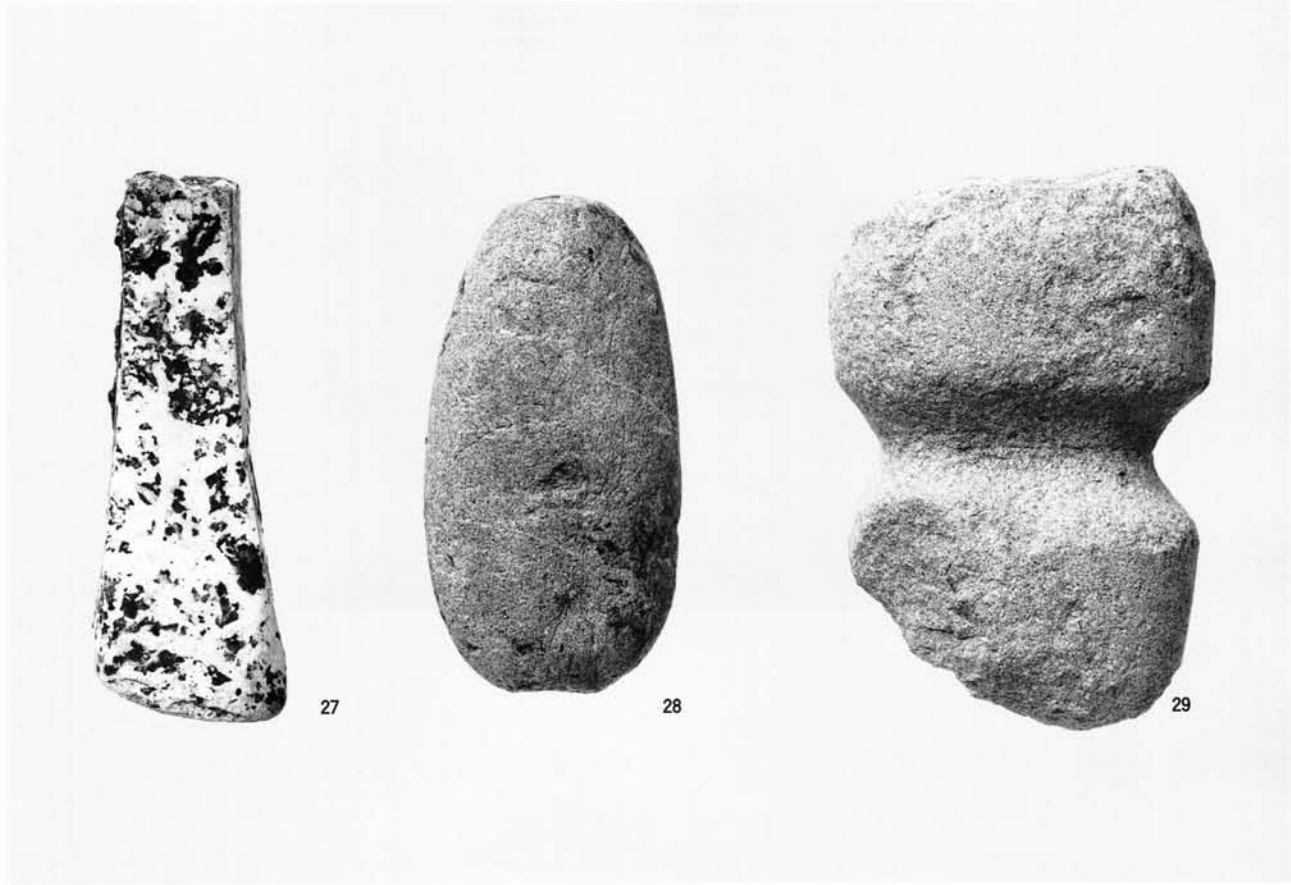
図版第33　里遺跡第３・５・６次



(1)第６次第８トレンチ全景(下が北)

(2)第６次第８トレンチ掘立柱建物跡検出状況(南東から)





出土遺物(1)

47

95

58

96

61

105

71

78

120

出土遺物(2)

143

170

172

151

174

167

178

169

240

出土遺物(3)

186

343

202

379

368

295

111

295

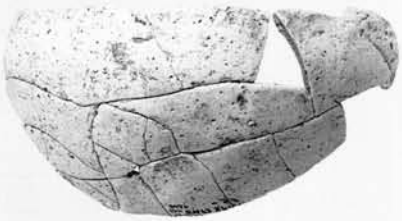
368

295

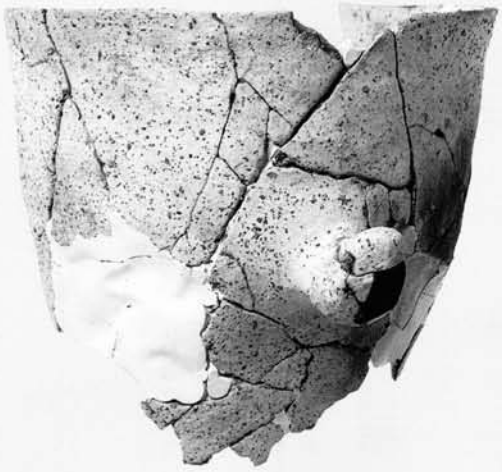
111

出土遺物(4)

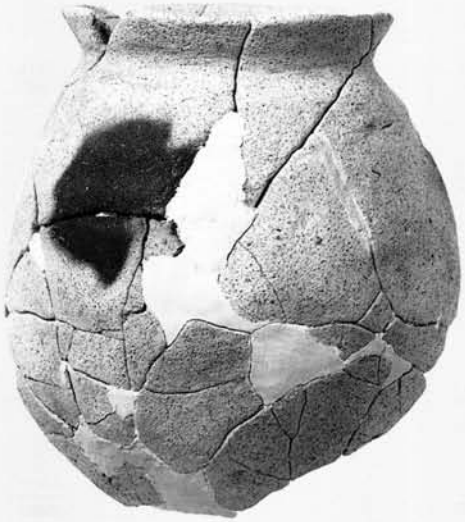
175



205



351



354

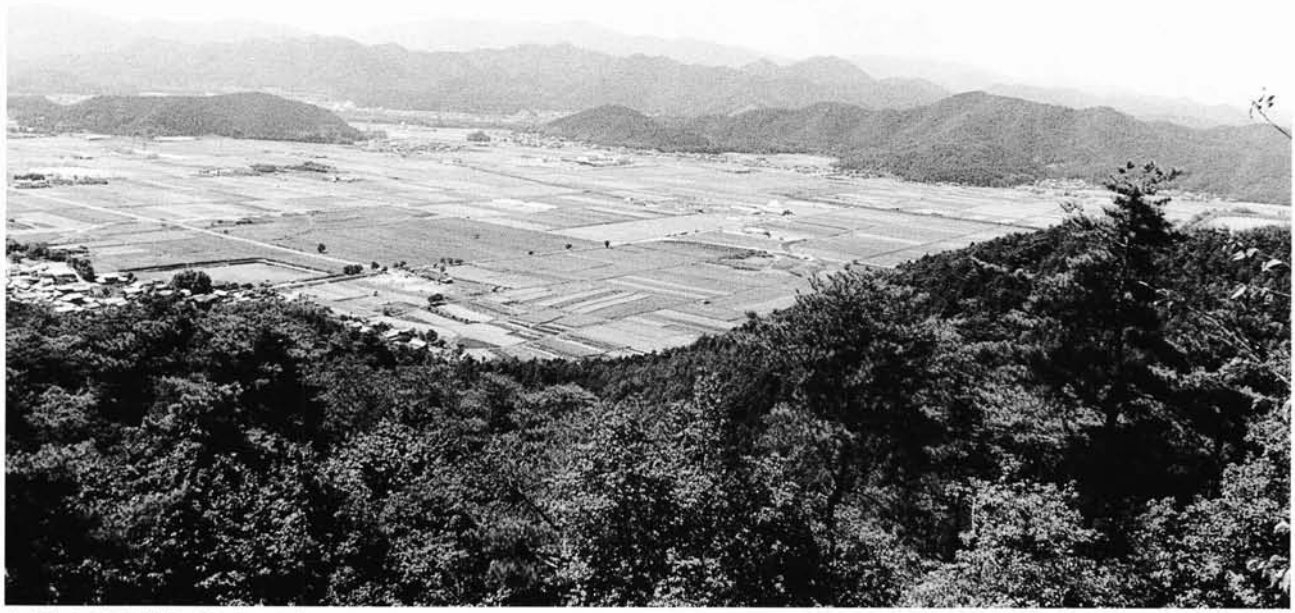
296

296

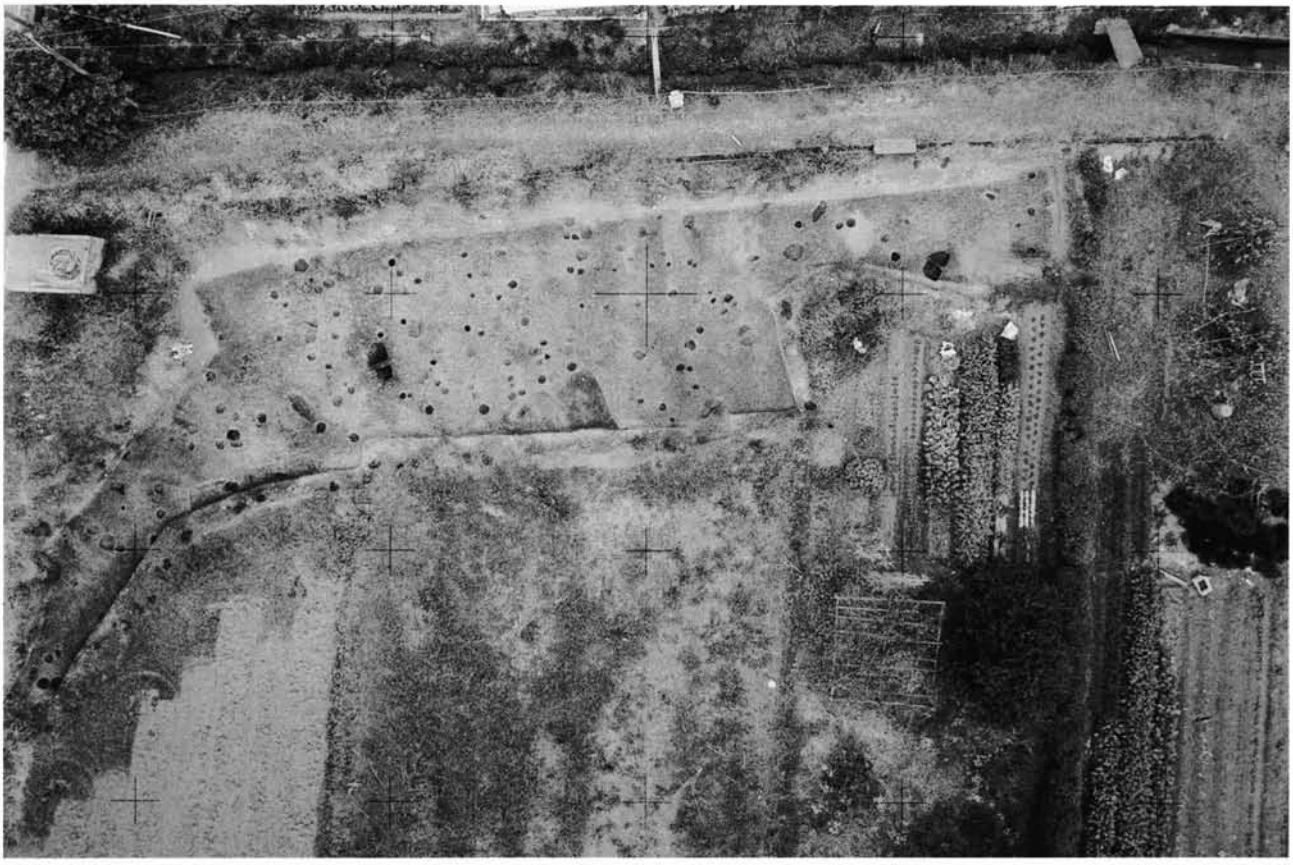
包含層

出土遺物(5)

図版第39　池上遺跡第13・18次



(1)池上遺跡遠景(北東から)



(2)第13次調査西地区(上が北)

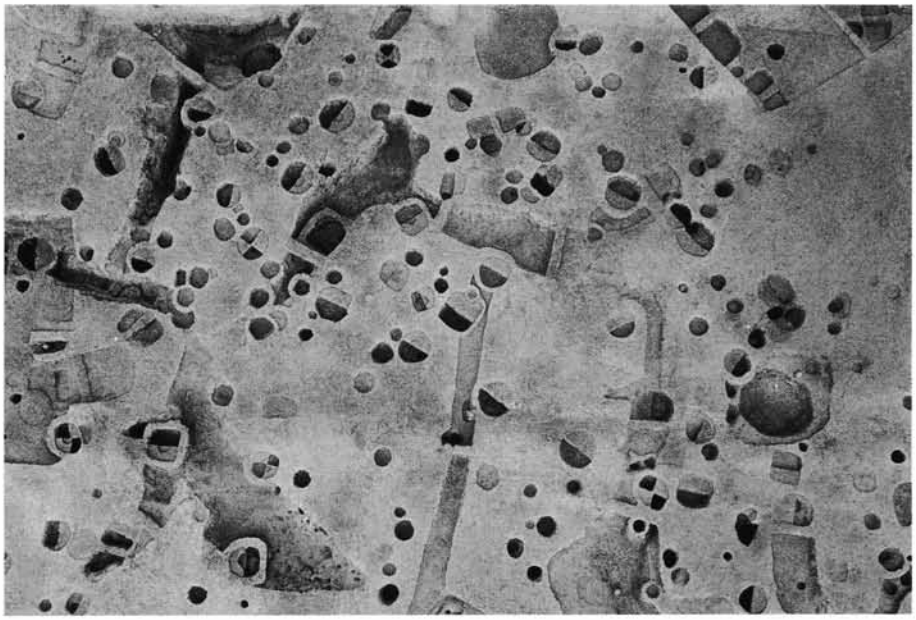
図版第40　池上遺跡第13・18次

(1)第13次調査(上が南)

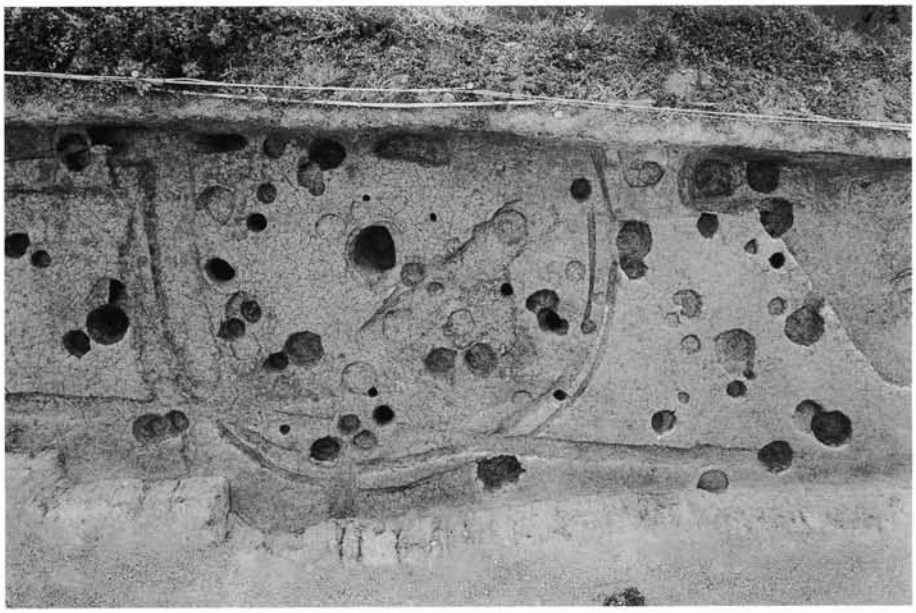
(2)第13次調査(上が北)

図版第41　池上遺跡第13・18次

(1)第13次調査作業風景(東から)



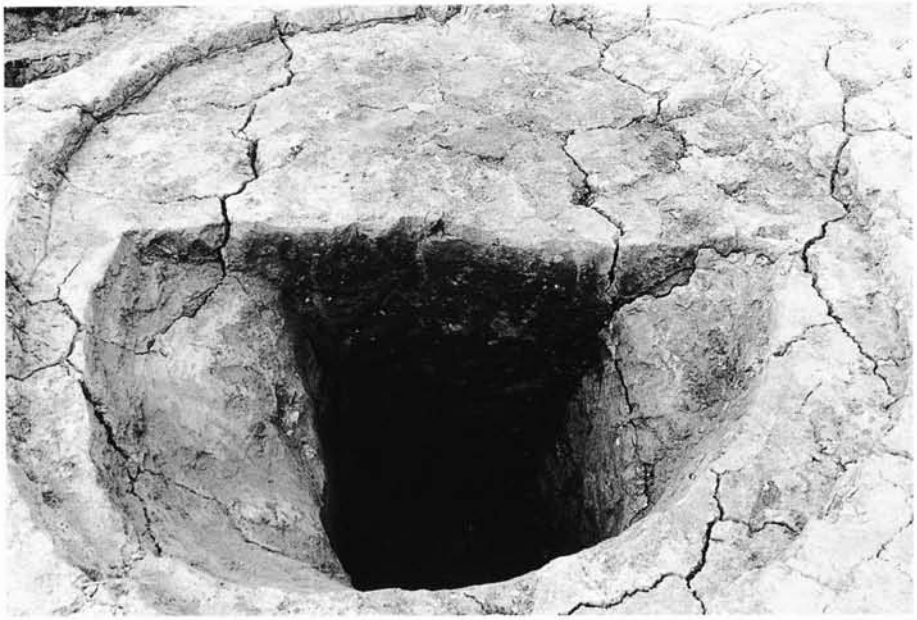
(2)第13次掘立柱建物跡ＳＢ825、
方形周溝墓ＳＴ612(上が北)



(3)第13次竪穴式住居跡ＳＨ226
(上が南)

図版第42　池上遺跡第13・18次

(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ226
（西から）



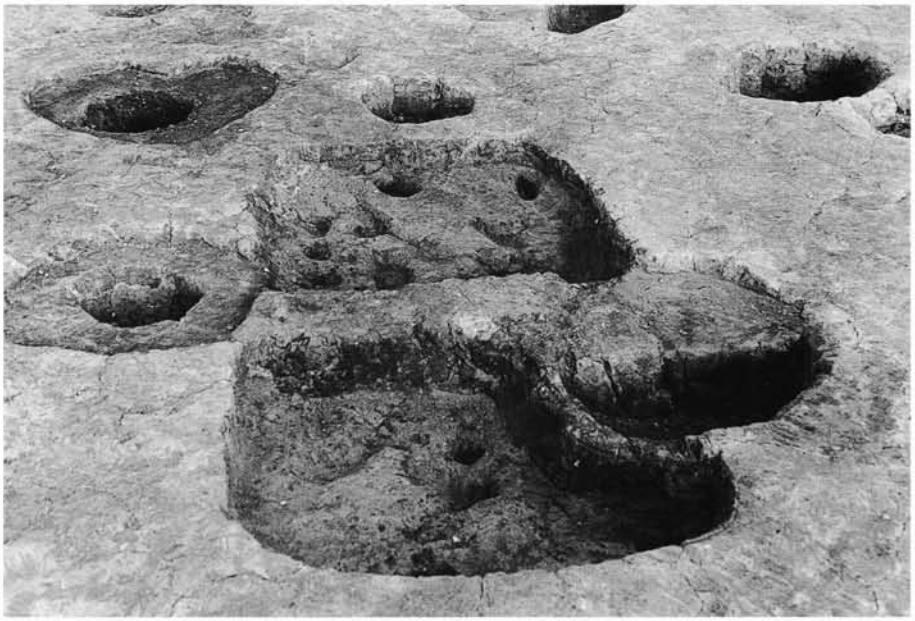
(2)第13次竪穴式住居跡ＳＨ226内
中央土坑ＳＫ238(南から)

(3)第13次竪穴式住居跡ＳＨ226
周壁溝(北から)

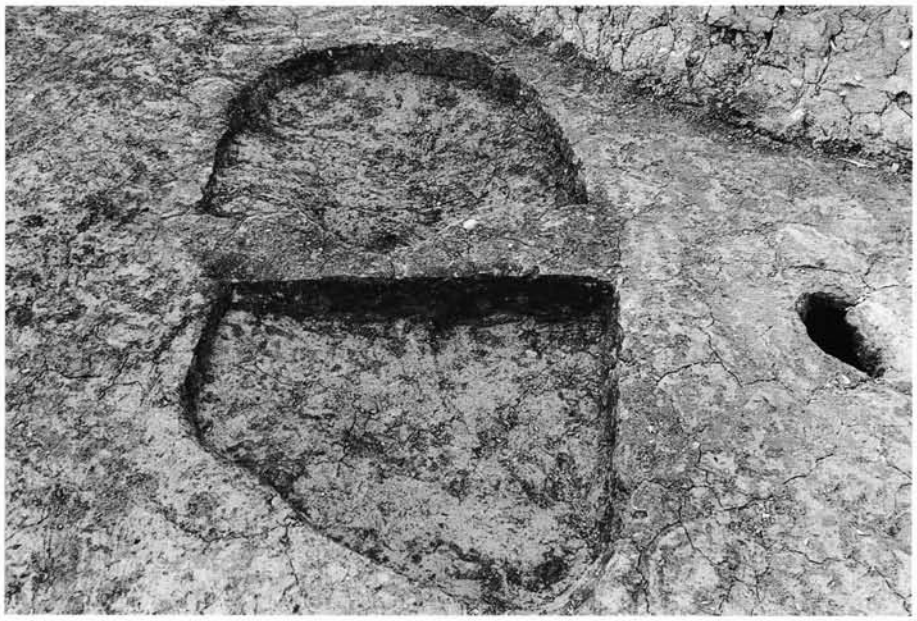
図版第43　池上遺跡第13・18次

(1)第13次方形周溝墓ＳＴ601(東から)

(2)第13次方形周溝墓ＳＴ602(南東から)



(1)第13次土壙ＳＫ571(南から)



(2)第13次埋葬主体部ＳＫ426
(南東から)

(3)第13次土壙ＳＫ170(北から)

図版第45　池上遺跡第13・18次

(1)第13次埋葬主体部ＳＫ252
（南から）

(2)第13次埋葬主体部ＳＫ252
遺物出土状況（南から）

(3)第13次埋葬主体部ＳＫ252
土層断面（西から）

(1)第13次周溝ＳＤ466土層断面（西から）

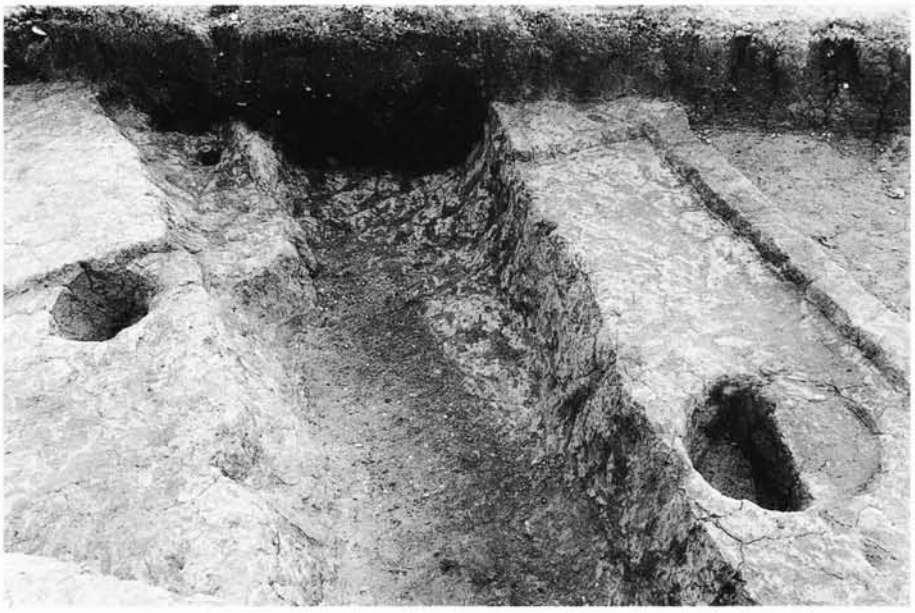
(2)第13次周溝ＳＤ466遺物出土状況(西から)

(3)第13次周溝ＳＤ434土層断面（東から）

図版第47　池上遺跡第13・18次

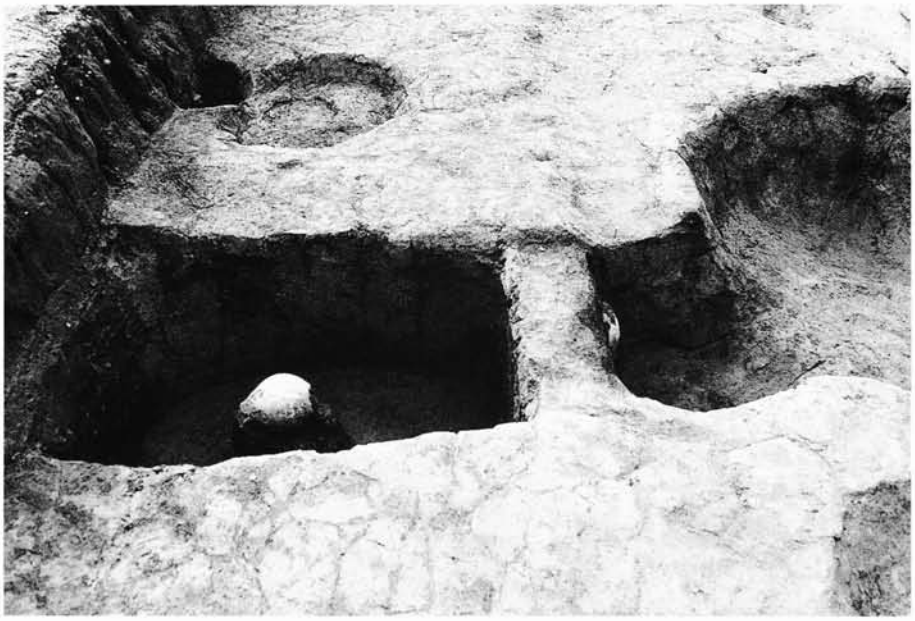
(1)第13次周溝ＳＤ434遺物出土状況(西から)

(2)第13次周溝ＳＤ467、風倒木痕ＳＸ470(南西から)



(3)第13次周溝ＳＤ12－640(北から)

(1)第13次周溝ＳＤ249(北から)



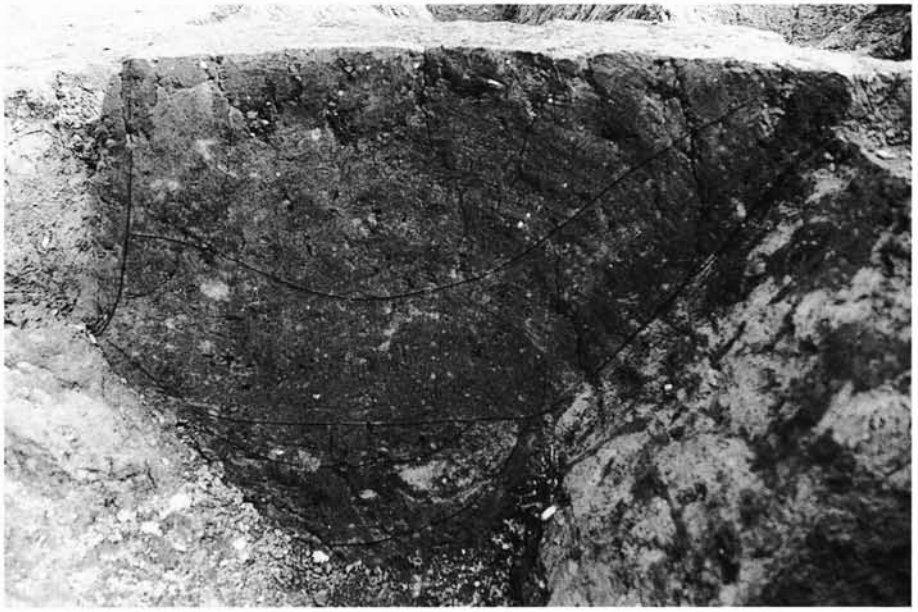
(2)第13次周溝ＳＤ249(東から)

(3)第13次周溝ＳＤ249土層断面
(北から)

図版第49　池上遺跡第13・18次

(1)第13次溝ＳＤ12－01(北東から)

(2)第13次溝ＳＤ12－01土層断面
（南西から）



(3)第13次溝ＳＤ12－01土層断面
（南西から）

(1)第13次周溝ＳＤ391土層断面
（西から）

(2)第13次周溝ＳＤ392土層断面
（北から）

(3)第13次周溝ＳＤ395土層断面
（西から）

図版第51　池上遺跡第13・18次

(1)第13次周溝ＳＤ396土層断面
（北から）

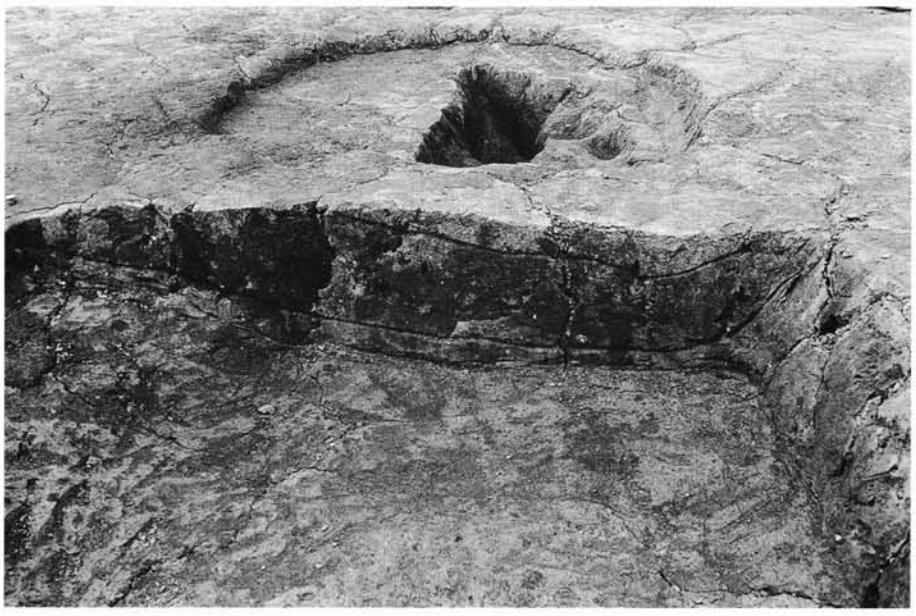
(2)第13次周溝ＳＤ397土層断面
（南から）

(3)第13次周溝ＳＤ448土層断面
（南から）

図版第52　池上遺跡第13・18次

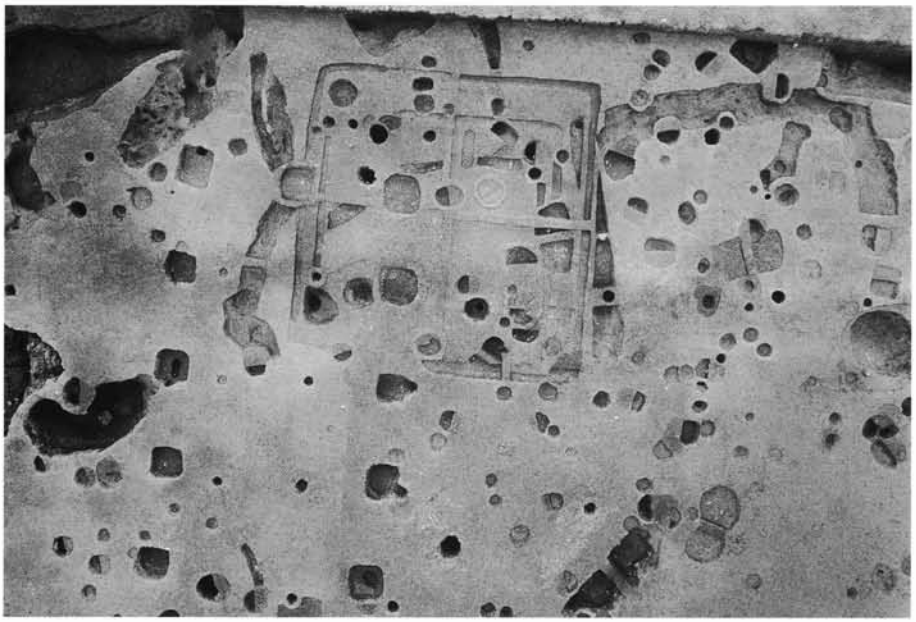
(1)第13次周溝ＳＤ456土層断面
（北から）

(2)第13次周溝ＳＤ456土層断面
（北西から）



(3)第13次周溝ＳＤ447土層断面
（南から）

図版第53　池上遺跡第13・18次



(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ291、
掘立柱建物跡ＳＢ630(上が北)

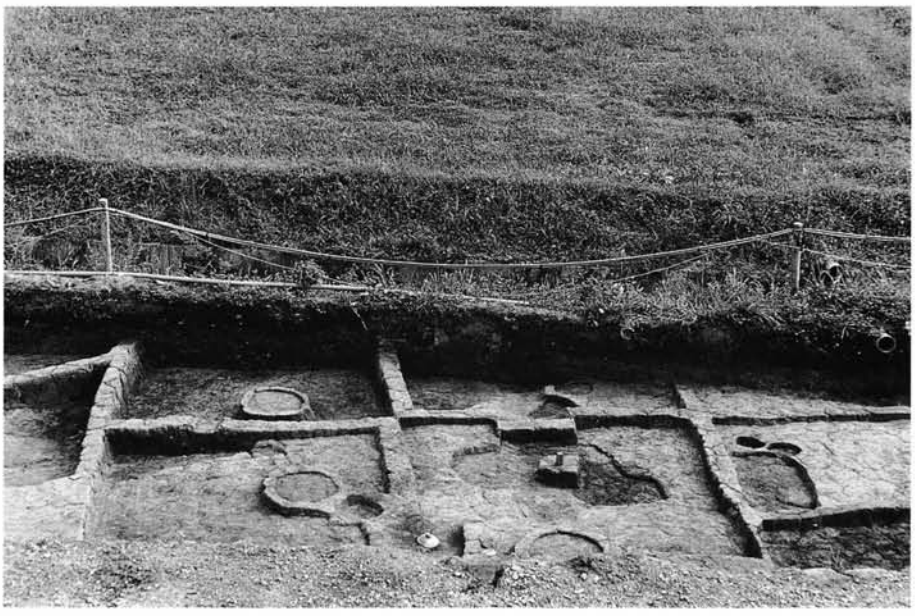
(2)第13次掘立柱建物跡ＳＢ625
(北から)

(3)第13次掘立柱建物跡ＳＢ325
(南東から)

図版第54　池上遺跡第13・18次

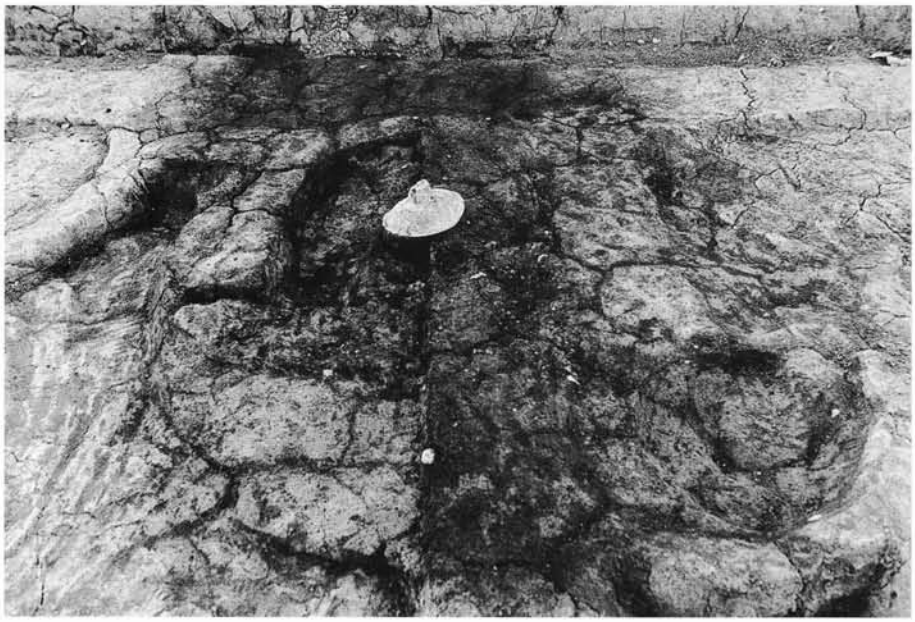
(1)第13次竪穴式住居跡
ＳＨ12－540(西から)

(2)第13次竪穴式住居跡ＳＨ150
(北から)



(3)第13次竪穴式住居跡ＳＨ153
(北から)

図版第55　池上遺跡第13・18次



(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ153竈
（南から）

(2)第13次竪穴式住居跡ＳＨ154、
掘立柱建物跡ＳＢ12－509
（北から）

(3)第13次竪穴式住居跡ＳＨ164
（北西から）

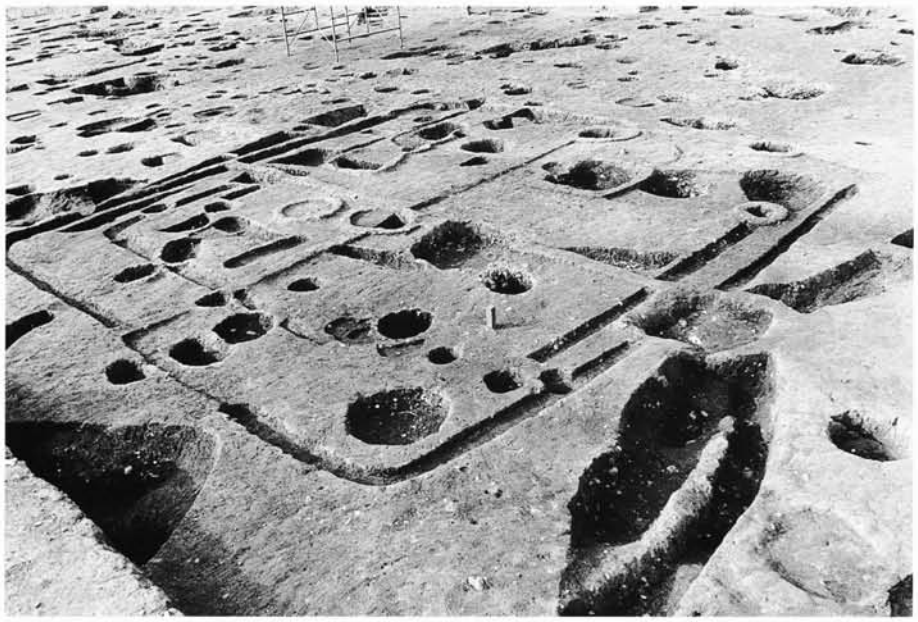
図版第56　池上遺跡第13・18次

(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ164
（南東から）

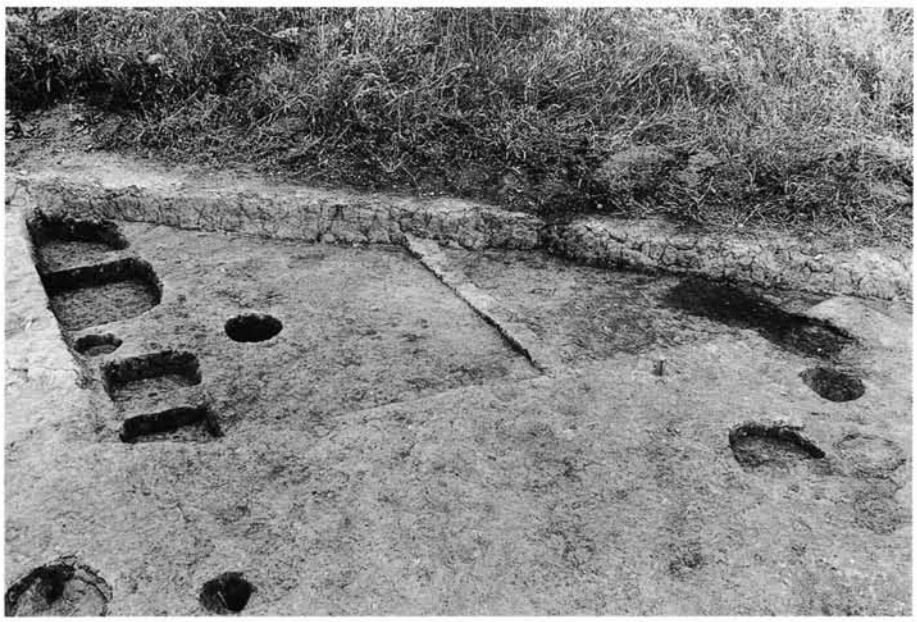
(2)第13次竪穴式住居跡ＳＨ183、
土壙ＳＫ170(北から)

(3)第13次土坑ＳＫ433(北から)

図版第57　池上遺跡第13・18次



(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ291
（南東から）



(2)第13次竪穴式住居跡ＳＨ359
（南から）

(3)第13次竪穴式住居跡ＳＨ350
（南から）

(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ351（東から）

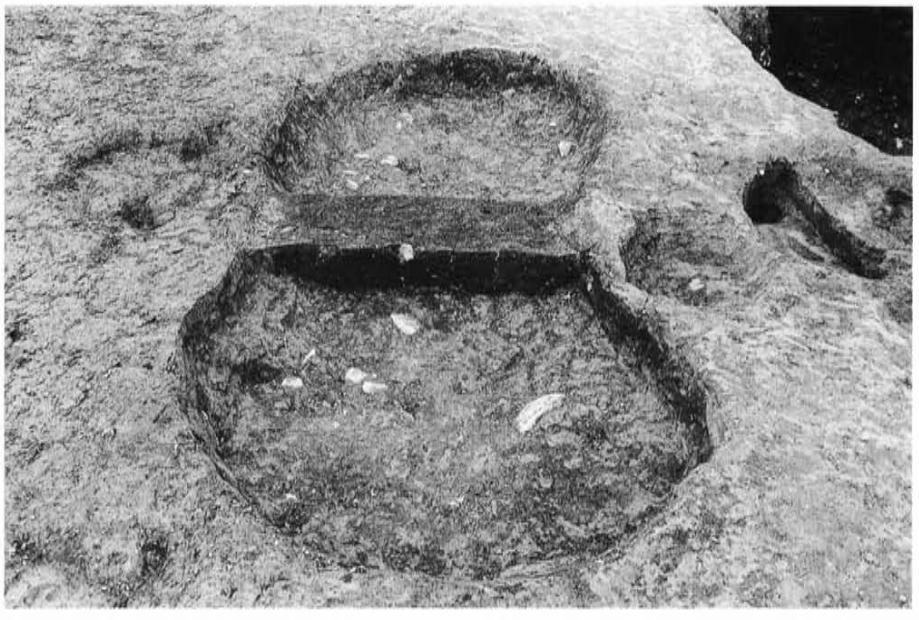
(2)第13次土坑ＳＫ491(東から)

(3)第13次土坑ＳＫ364(北から)

図版第59　池上遺跡第13・18次

(1)第13次土坑ＳＫ413(東から)

(2)第13次土坑ＳＫ450土層断面
(東から)

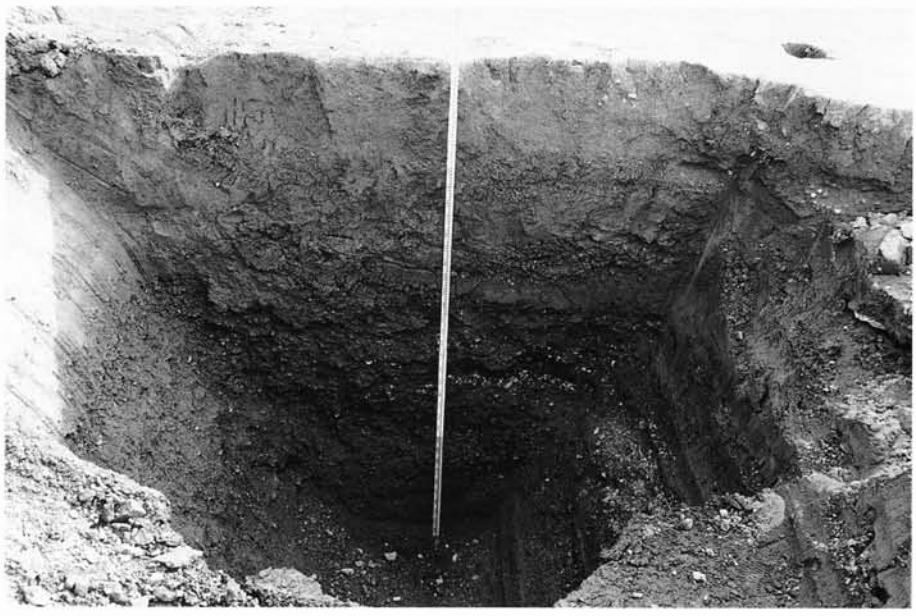


(3)第13次土坑ＳＫ142(南から)

図版第60　池上遺跡第13・18次

(1)第13次掘立柱建物跡ＳＢ322
（上が東）

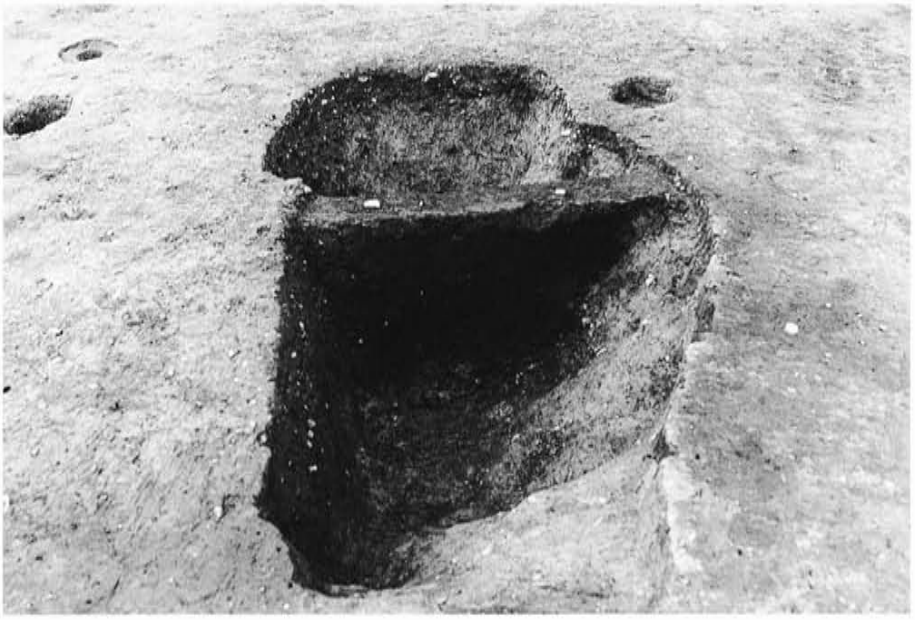
(2)第13次掘立柱建物跡ＳＢ322
（南から）



(3)第13次井戸ＳＥ133完掘状況
（南から）

図版第61　池上遺跡第13・18次

(1)第13次土坑ＳＫ365(南から)



(2)第13次風倒木痕ＳＸ431
(東から)

(3)第13次発掘調査風景(東から)

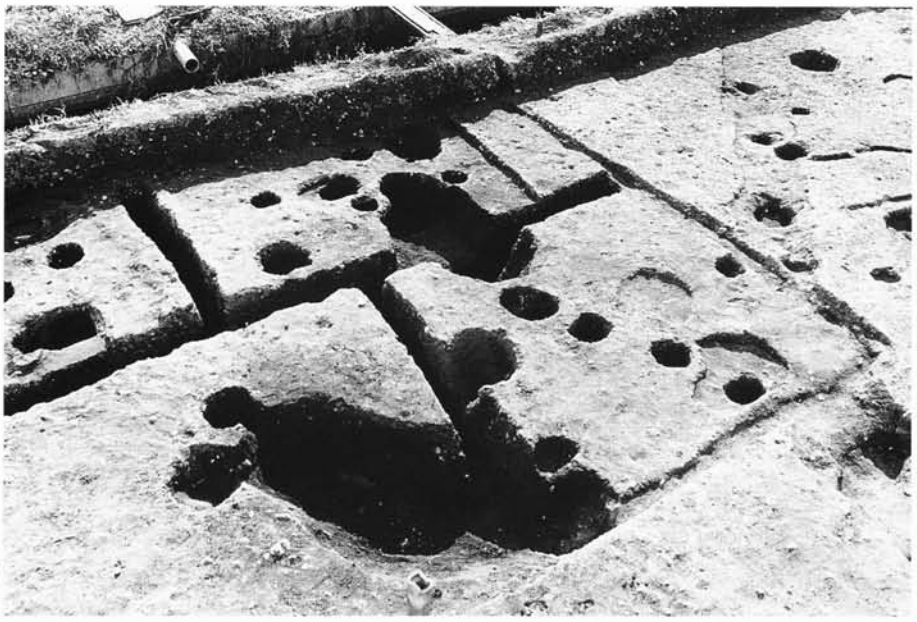
図版第62　池上遺跡第13・18次

(1)第18次調査(上が南)

(2)第18次方形周溝墓ＳＴ24(東から)

図版第63　池上遺跡第13・18次

(1)第18次竪穴式住居跡ＳＨ02・03（西から）



(2)第18次竪穴式住居跡ＳＨ02下層風倒木痕(北東から)

(3)第18次調査区西部(東から)

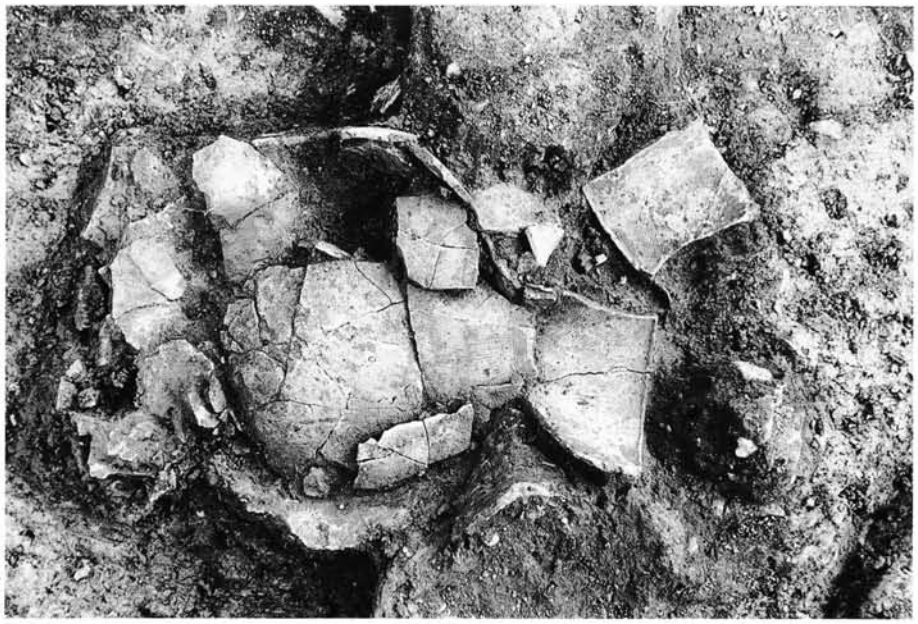
図版第64　池上遺跡第13・18次

(1)第18次土坑ＳＫ19、竪穴式
住居跡ＳＨ01・31(北から)

(2)第18次土坑ＳＫ19(東から)

(3)第18次土坑ＳＫ20(東から)

図版第65　池上遺跡第13・18次



(1)第18次土坑ＳＫ20弥生土器出土状況(上が南)

(2)第18次土坑ＳＫ16(東から)

(3)第18次土坑ＳＫ30(南から)

64

55

62

50

18–1

60

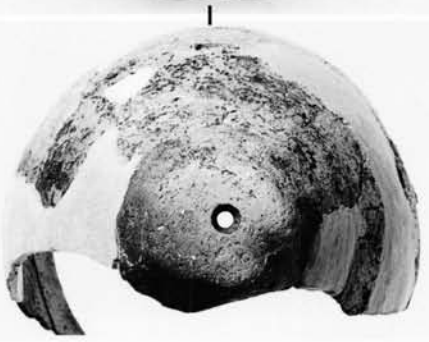
出土遺物(1)

81

11

49

44


13

45

出土遺物(2)

79

46

188

59

122

111

124

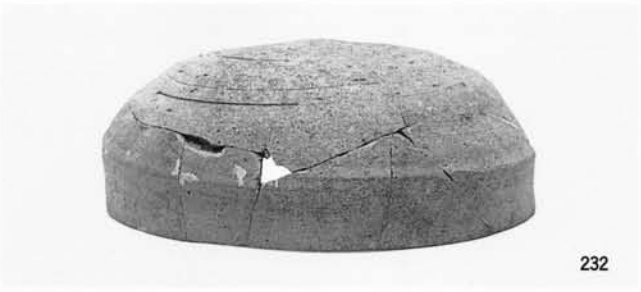
114

出土遺物(3)

143

145

132


232

174

18–7

144

125

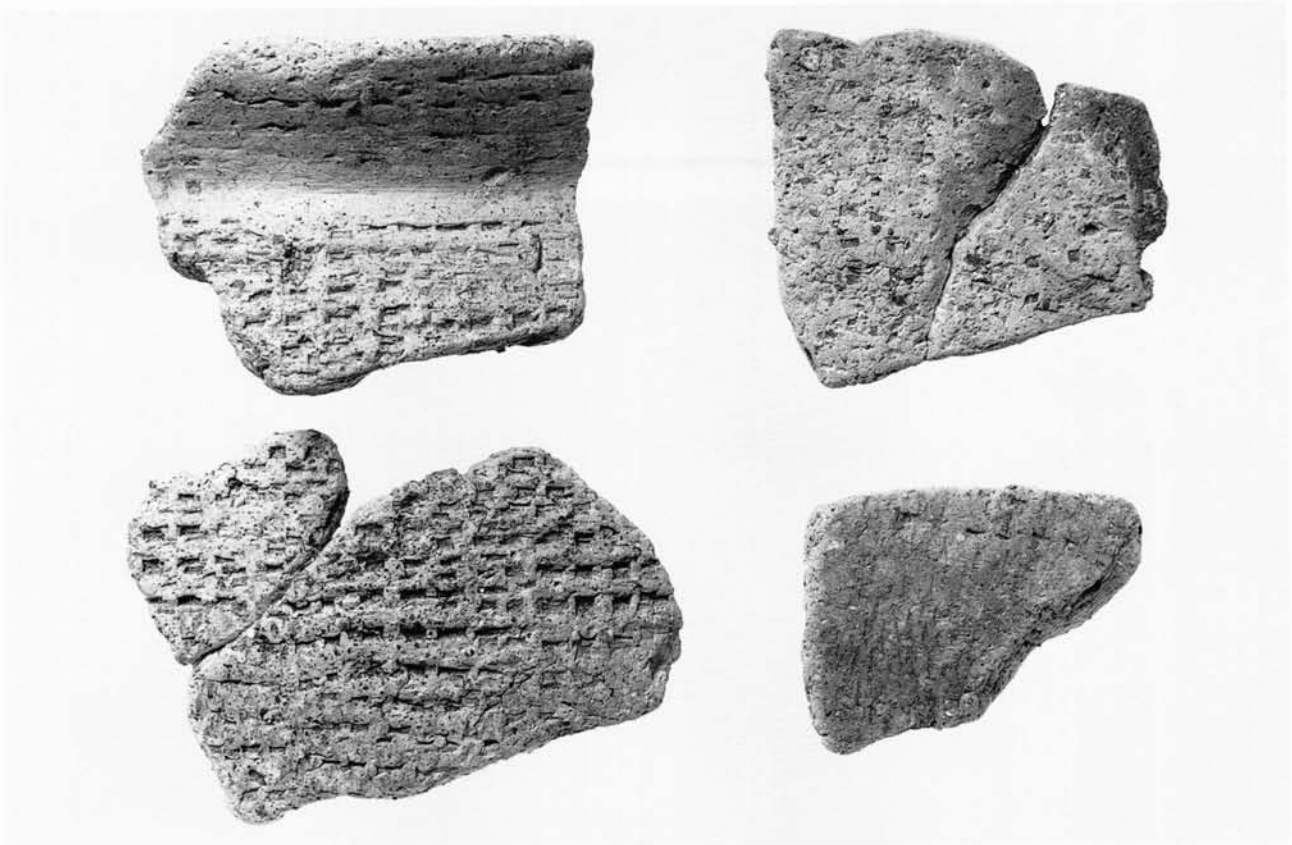
18–6

134

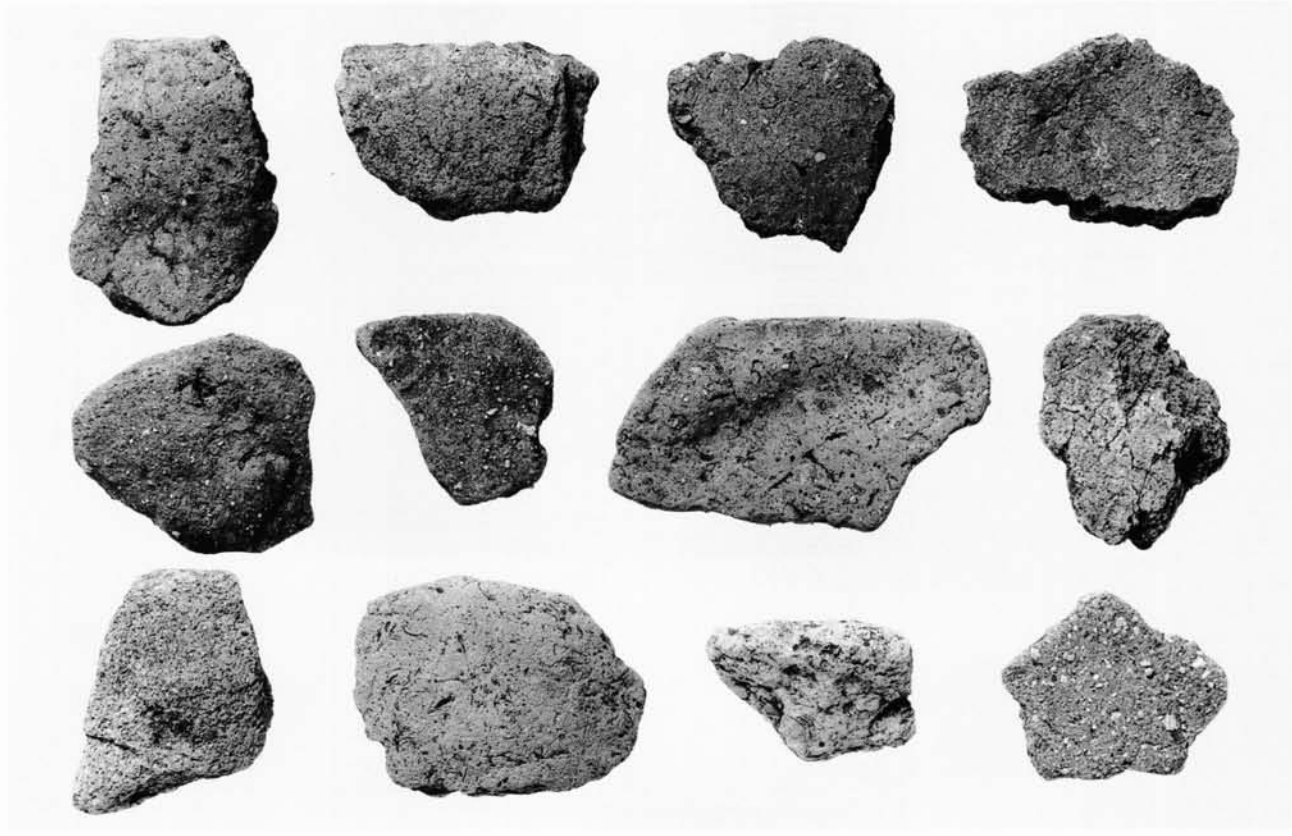
274

262

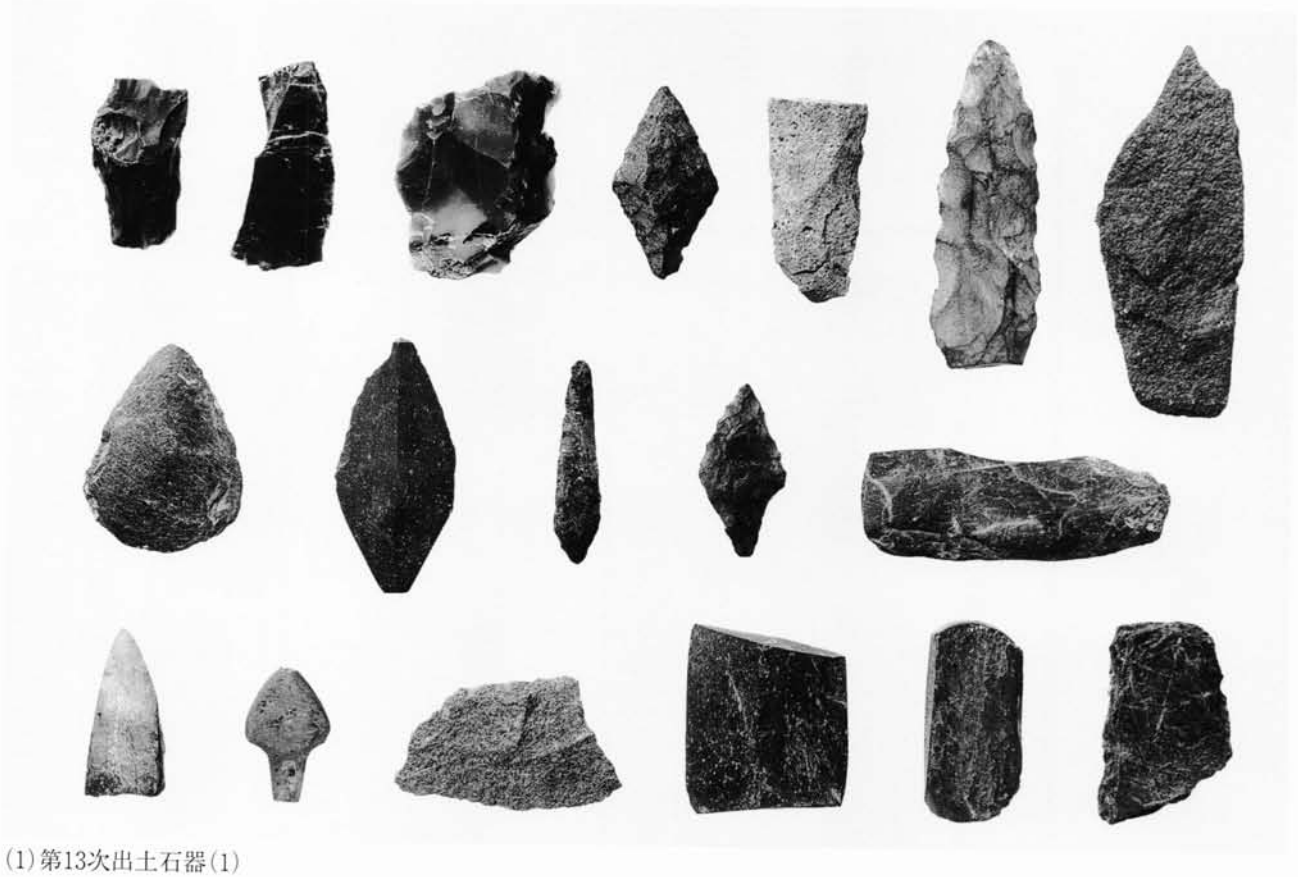
出土遺物(4)



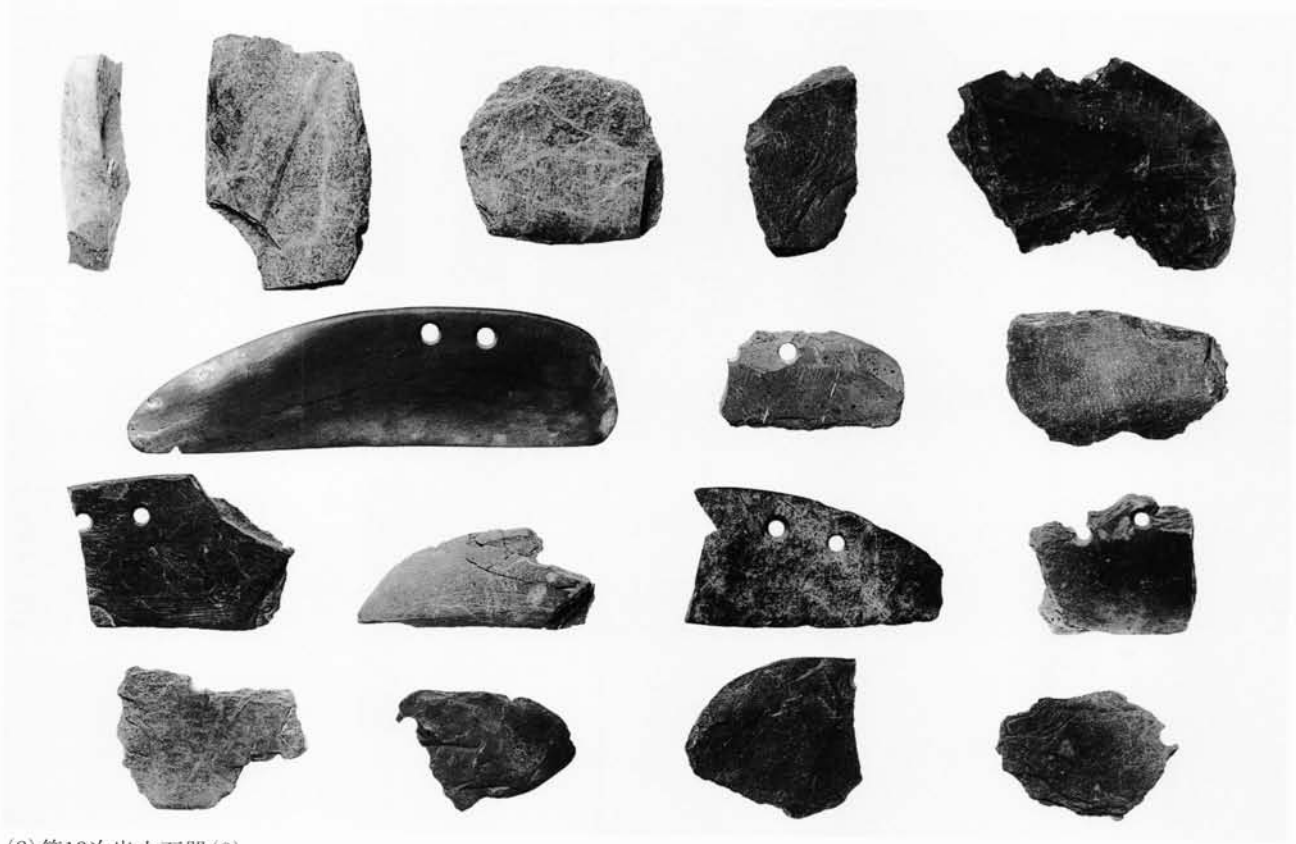
(1)第13次竪穴式住居跡ＳＨ351出土韓式土器



(2)第13次井戸ＳＥ133出土製塩土器

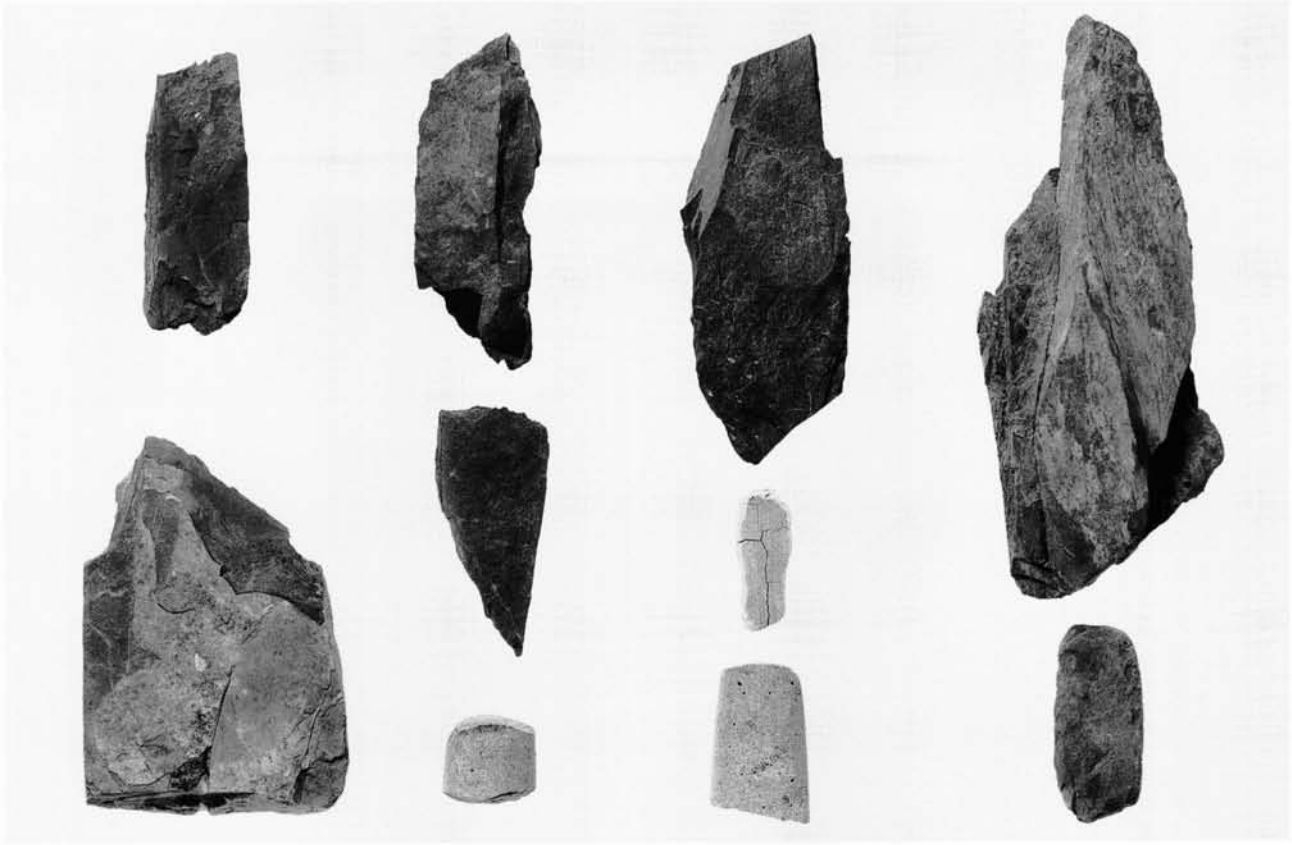


(1)第13次出土石器(1)

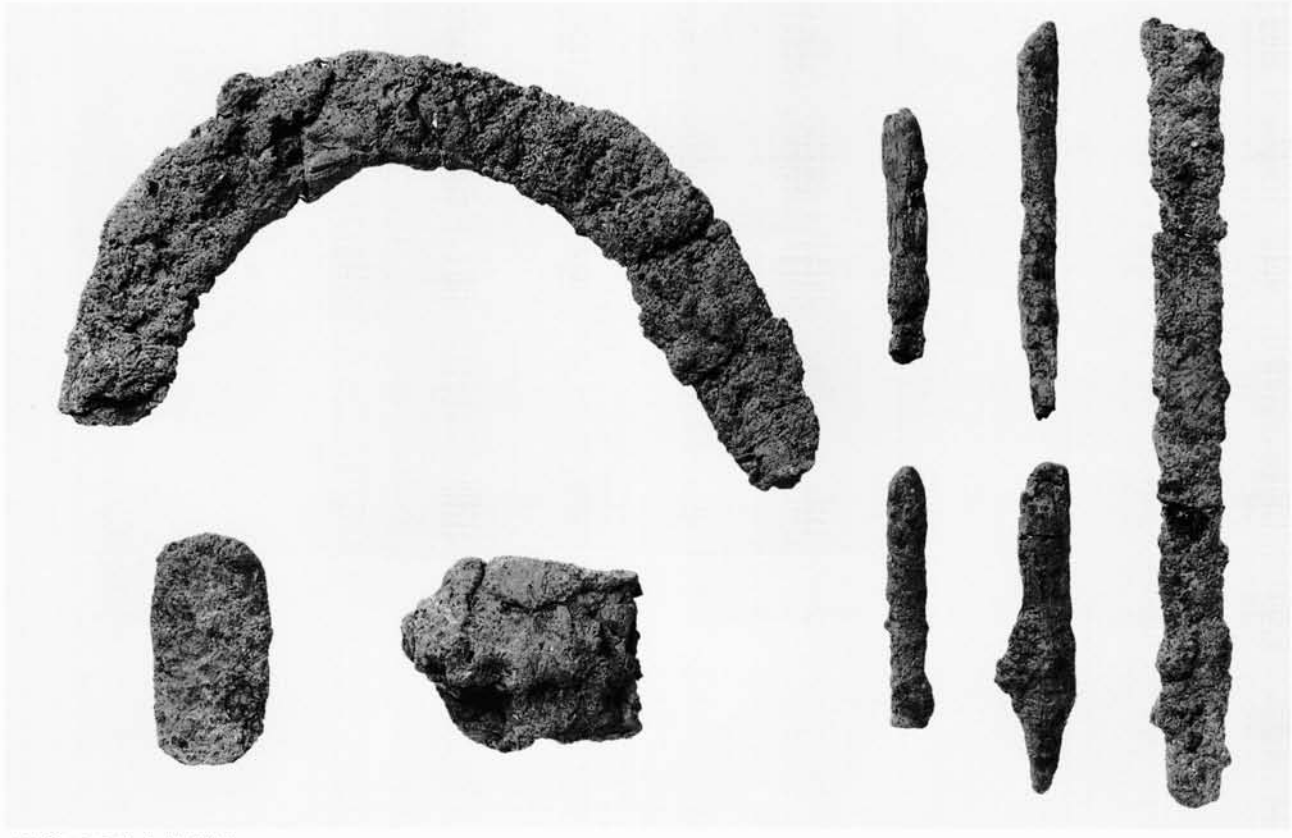


(2)第13次出土石器(2)

図版第72　池上遺跡第13・18次



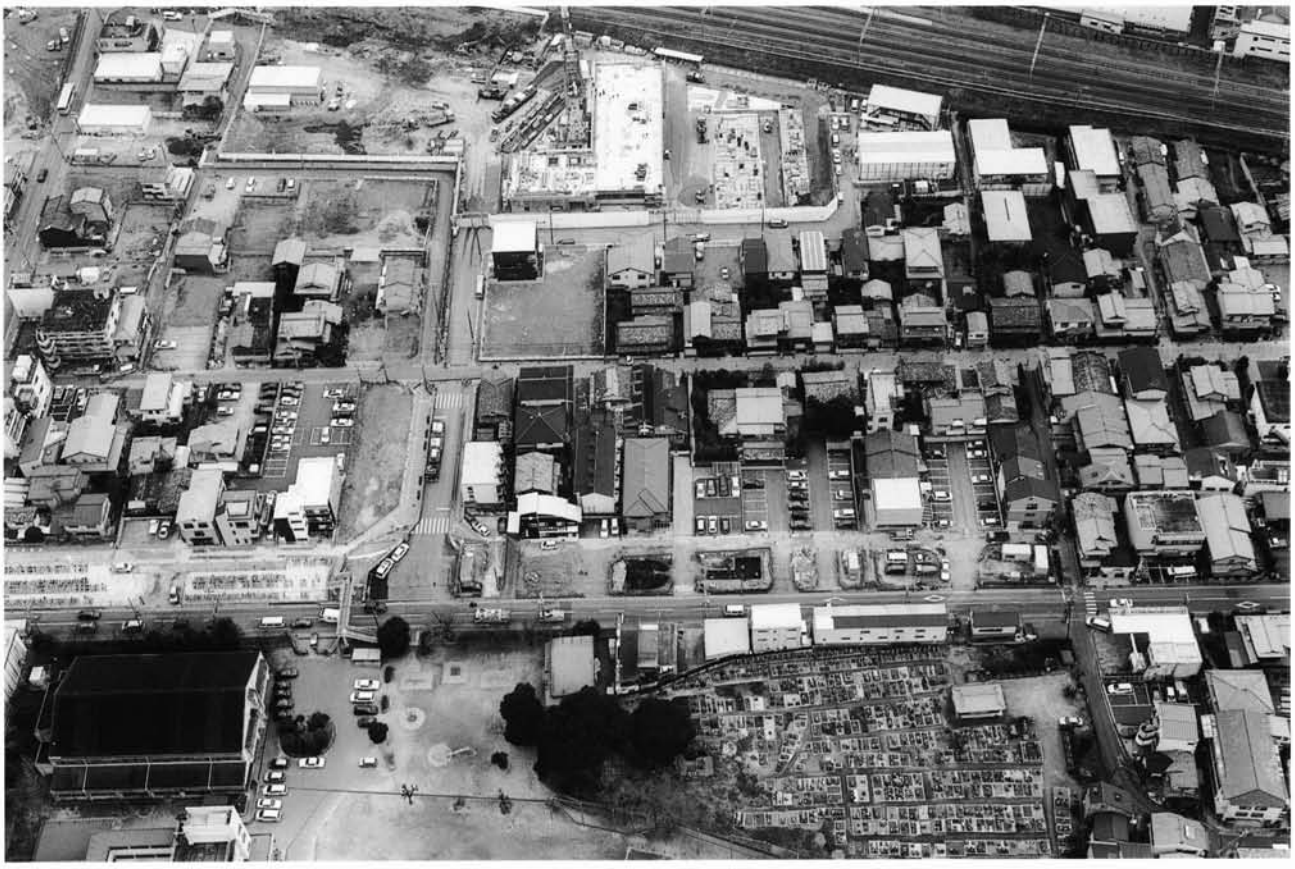
(1)出土石器



(2)第13次出土鉄製品

図版第73　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

(1)調査地周辺(北半部)の航空写真(西から)

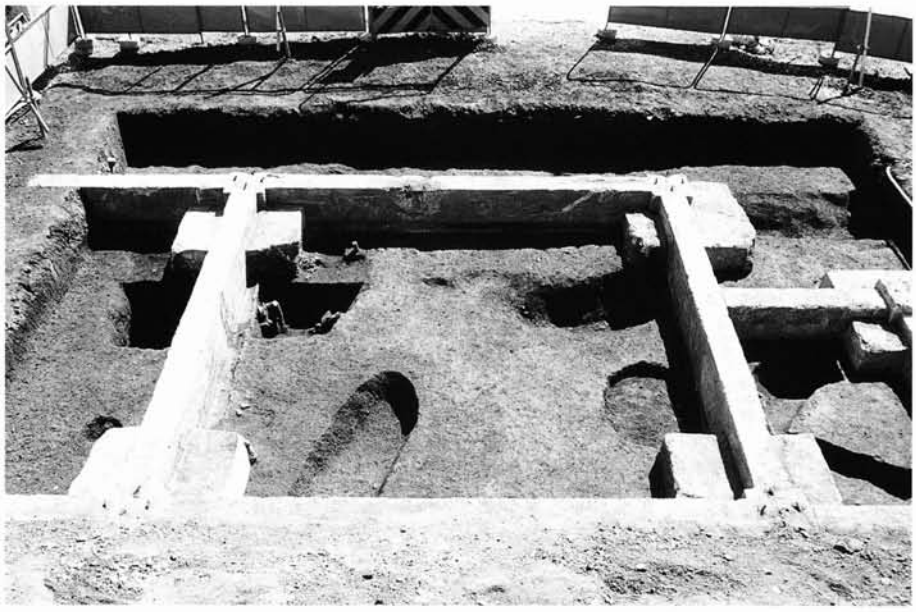


(2)調査地周辺(南半部)の航空写真(西から)

図版第74　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

(1)北１トレンチ発掘前全景
(南から)

(2)北１トレンチ北半部完掘状況
(南から)



(3)北１トレンチ南半部完掘状況
(北から)

図版第75　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

(1)北１トレンチ井戸ＳＥ02全景
（北から）

(2)北１トレンチ溝ＳＤ01全景
（西から）

(3)北２トレンチ発掘前全景
（南から）

図版第76　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

(1)北２トレンチ北半部完掘状況
（南から）

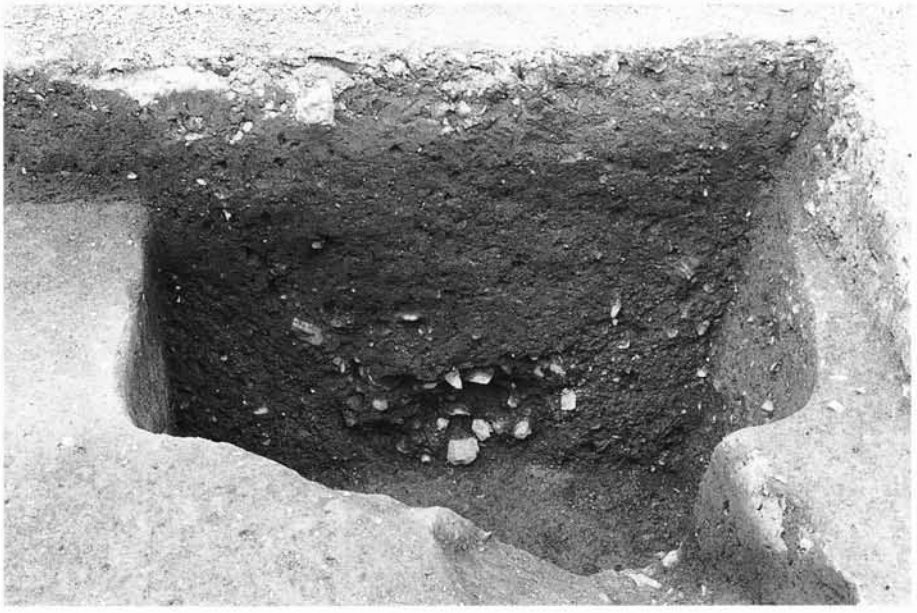
(2)北２トレンチ南半部完掘状況
（北から）

(3)北２トレンチ南半部完掘状況
（南から）

図版第77　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

(1)北２トレンチ掘立柱建物跡
ＳＢ01全景(南から)

(2)北２トレンチ掘立柱建物跡
ＳＢ02全景(東から)



(3)北２トレンチ井戸ＳＥ13全景
(東から)

図版第78　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

(1)北２トレンチ溝ＳＤ15全景
（東から）

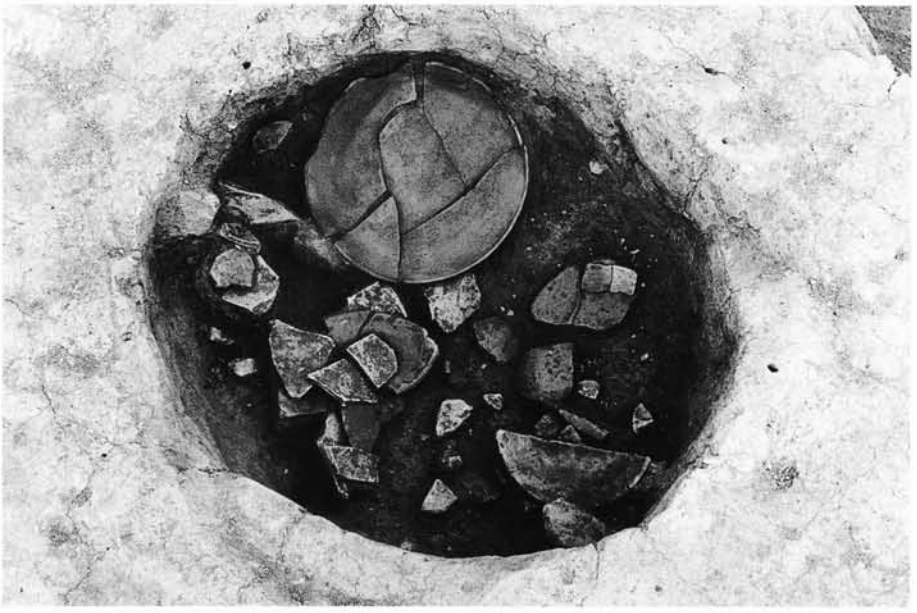
(2)南１トレンチ発掘前全景
（北から）

(3)南１トレンチ遺構検出状況全景
（南から）

図版第79　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

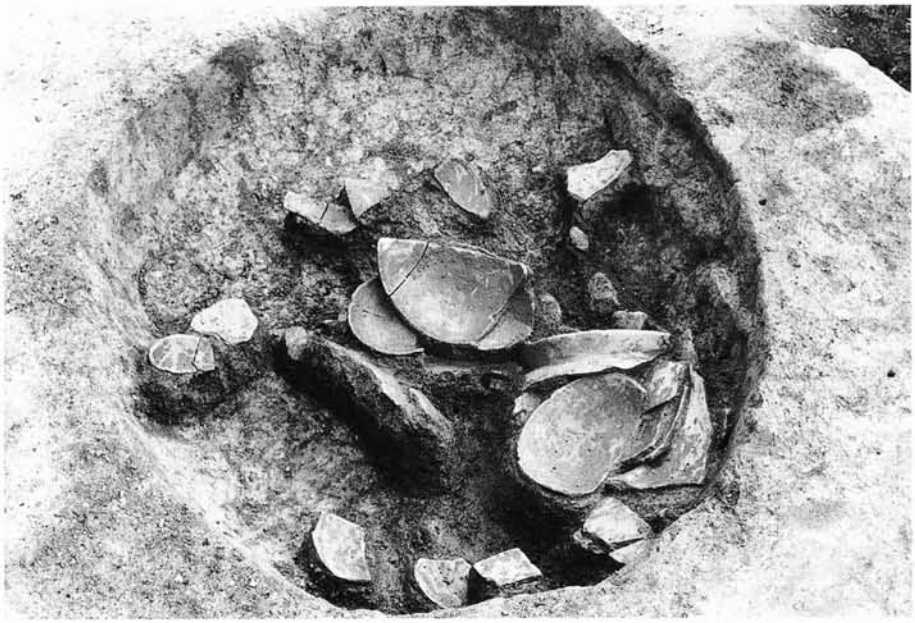
(1)南1トレンチ北側柱穴群
(北から)

(2)南1トレンチ土坑SK002
遺物出土状況(東から)

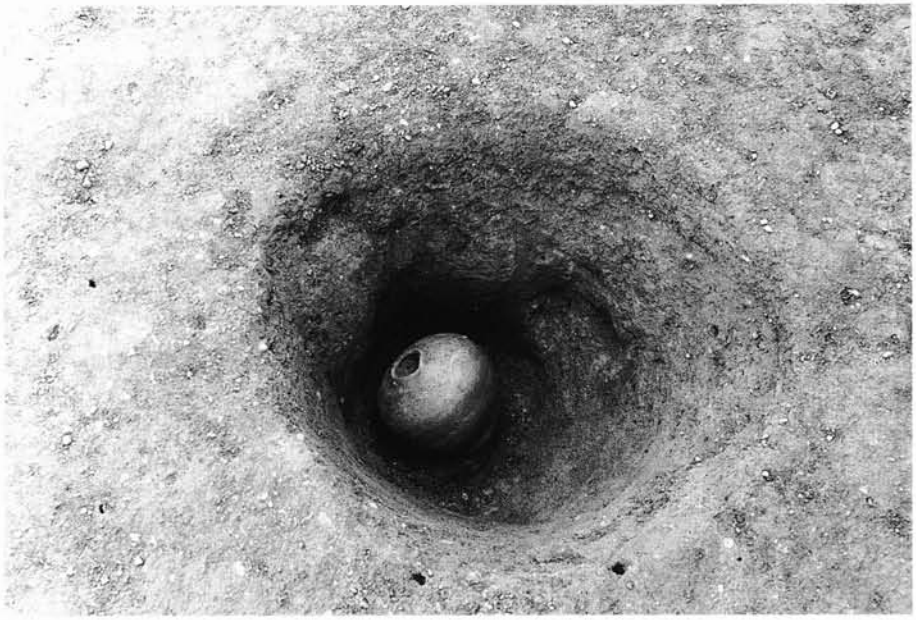


(3)南1トレンチ土坑SK026
遺物出土状況(南から)

図版第80　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区



(1)南1トレンチ土坑SK025
遺物出土状況(北から)



(2)南1トレンチピットP042
遺物出土状況(北から)

(3)南1トレンチ柱穴P045根石
検出状況(北から)

図版第81　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

(1)南２トレンチ発掘前全景
（南から）

(2)南２トレンチ北半部完掘状況
（西から）

(3)南３トレンチ遺構検出状況
（北から）

図版第82　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

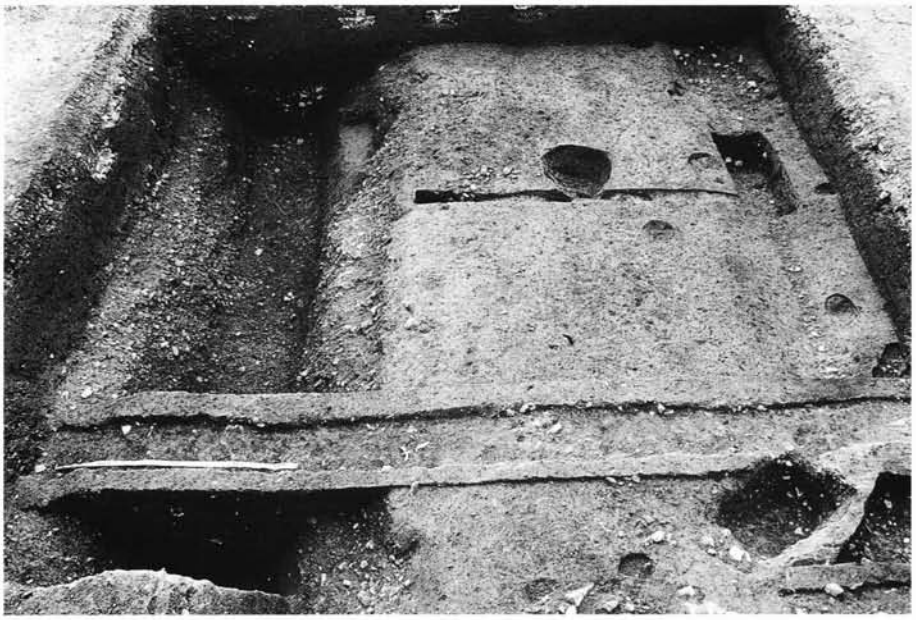
(1)南４・５トレンチ発掘前全景
(南から)

(2)南４トレンチ完掘状況(北から)

(3)南４トレンチ溝ＳＤ01全景
(北から)

図版第83　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

(1)南４トレンチ溝ＳＤ02全景
(北から)



(2)南５トレンチ完掘状況(北から)

(3)南５トレンチ溝ＳＤ05全景
(南から)

図版第84　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

(1)南５トレンチ溝ＳＤ05堆積状況
（北から）

(2)南５トレンチ溝ＳＤ04全景
（南から）

(3)南６トレンチ発掘前全景
（南から）

図版第85　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

(1)南６トレンチ完掘状況(南から)

(2)南６トレンチ掘立柱建物跡
ＳＢ02全景(北から)

(3)南６トレンチ溝ＳＤ01全景
(北から)

図版第86　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

(1)南７～10トレンチ発掘前全景
(北から)

(2)南７トレンチ溝ＳＤ02全景
(東から)

(3)南７トレンチ溝ＳＤ02全景
(北から)

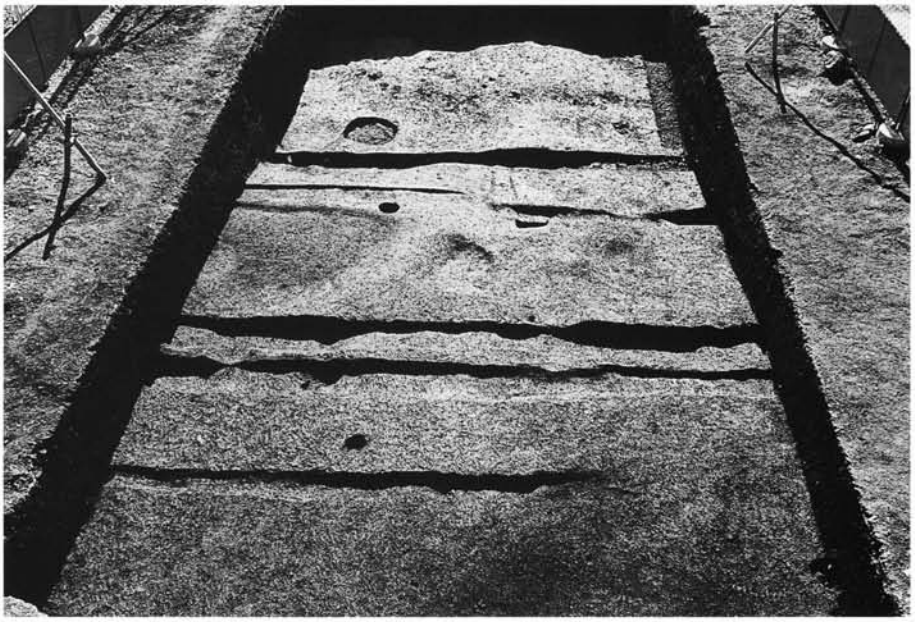
図版第87　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

(1)南８トレンチ完掘状況(東から)

(2)南８トレンチ溝ＳＤ01全景
(北から)

(3)南８トレンチ溝ＳＤ02全景
(西から)

図版第88　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区



(1)南９トレンチ完掘状況(南から)

(2)南９トレンチ溝ＳＤ12全景
(東から)

(3)南９トレンチ溝ＳＤ10・15全景
(西から)

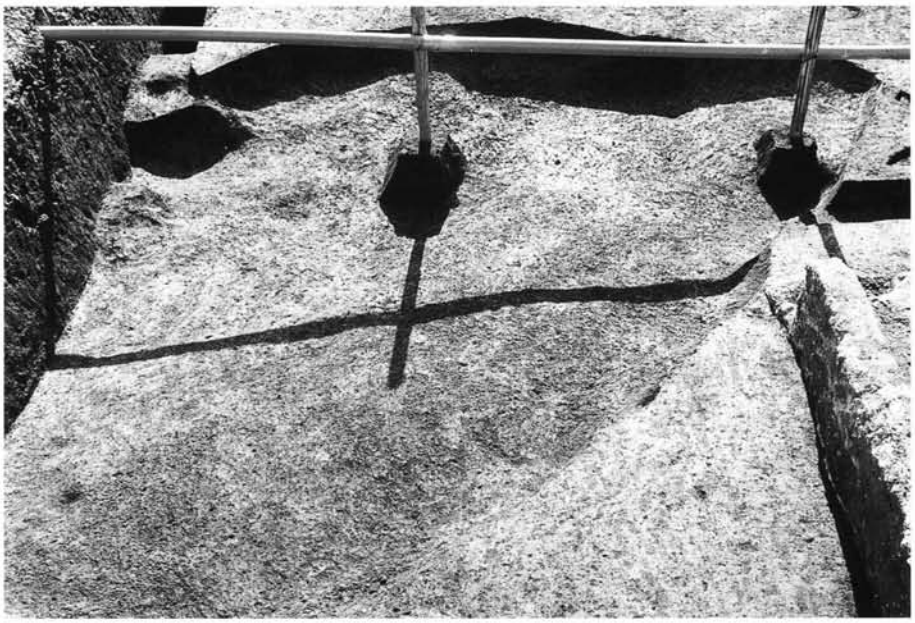
図版第89　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

(1)南９トレンチ土坑ＳＫ11
遺物出土状況(南から)

(2)南９トレンチ土器集積状況
(南から)

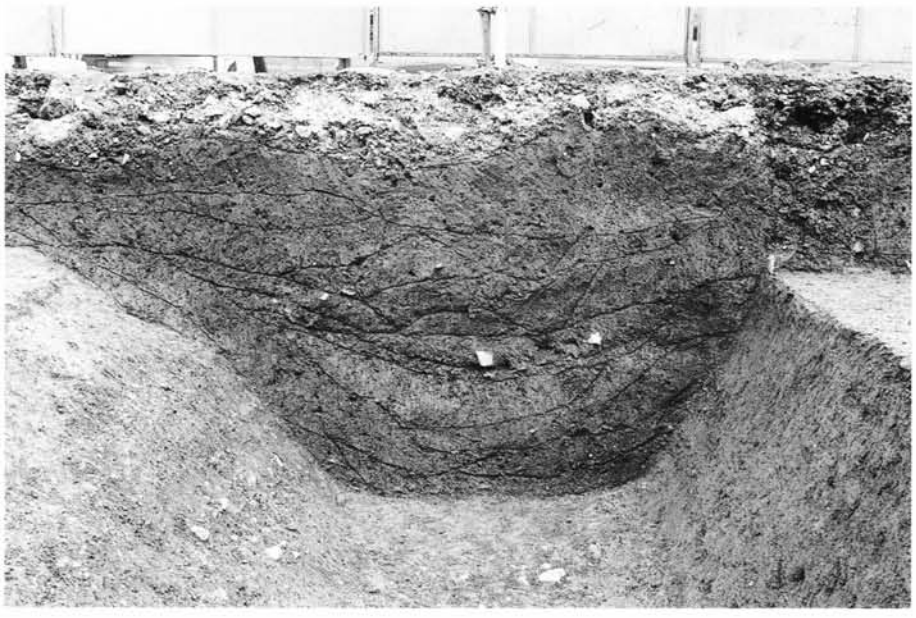
(3)南10トレンチ南半部全景
(東から)

図版第90　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区



(1)南10トレンチ北半部および
不明土坑ＳＸ03全景(北から)

(2)南10トレンチ溝ＳＤ02全景
(西から)



(3)南10トレンチ溝ＳＤ02堆積状況
(東から)

図版第91　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区

28

20

12

5

3

4

33

9-1

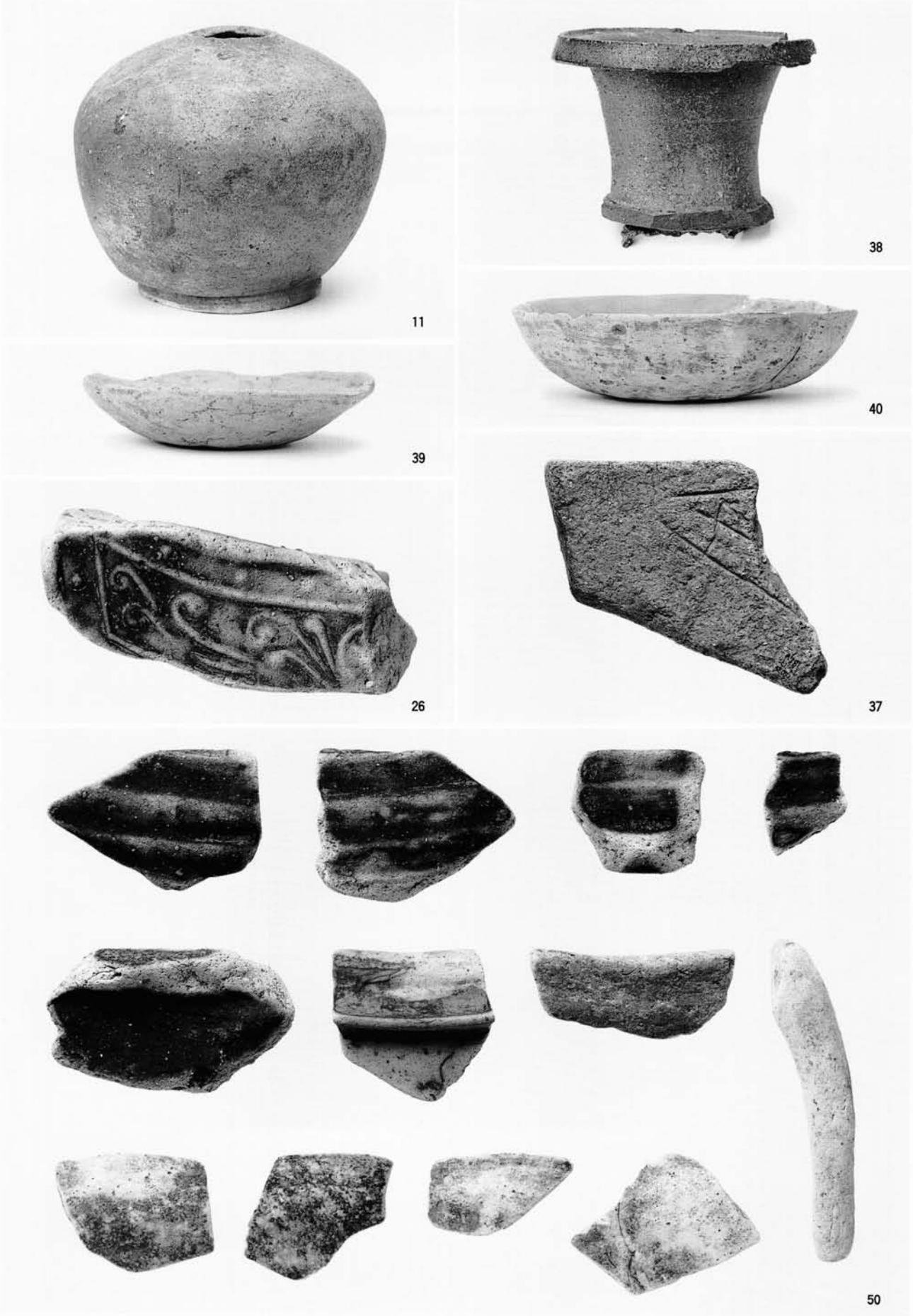
9-2

10

7

出土遺物(1)

図版第92　長岡京跡右京第781次(7ANKSM-11地区)・神足地区



出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	
書　　名	
副書名	
巻　　次	
シリーズ名	京都府遺跡調査概報
シリーズ番号	第112冊
編著者名	
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002　京都府向日市寺戸町南垣内40-3　　Phone　075(933)3877
発行年月日	西暦　2004　年　3　月　26　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
さといせきだいさん・ご・ろくじ 里遺跡第3・5・6次	かめおかしあさひちょうさと 亀岡市旭町里	26206	172	35° 04' 40"	135° 33' 58"	20011122～20011220 20021108～20030310 20030501～20030806	3,900	ほ場整備
いけがみいせきだいじゅうさん・じゅうはちじ 池上遺跡第13・18次	ふないぐんやぎちょういけがみ 船井郡八木町池上	26402	58	35° 04' 38"	135° 33' 55"	20020712～20021128 20030917～20031030	1,500	ほ場整備
ながおかきょうあとうきょうだいななひゃくはちじゅういちじ・こうたりいせき 長岡京跡右京第781次・神足遺跡	ながおかきょうしかいでんにちょうめ・こうたりにちょうめ 長岡京市開田二丁目・神足二丁目	26209	91・35	34° 55' 23"	135° 41' 53"	20030709～20040129	1,450	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
里遺跡第3・5・6次	集落	弥生中期 古墳	竪穴式住居跡・土坑・溝 竪穴式住居跡・土坑・溝	弥生土器・石器 古式土師器・土師器・須恵器・製塩土器	第3次は弥生時代中期・古墳時代前期、第5・6次は古墳時代中～後期を中心とする
池上遺跡第13・18次	墓 集落	弥生中期 弥生中期 古墳 飛鳥 奈良 平安	方形周溝墓・土壙 竪穴式住居跡・溝・土坑 掘立柱建物跡・竪穴式住居跡・溝・土坑 土坑 掘立柱建物跡・井戸・溝 掘立柱建物跡・溝	弥生土器・石器 弥生土器・石器 土師器・須恵器・ミニチュア土器・製塩土器・土錘・鉄器・石製品・滑石製臼玉 土師器・須恵器 土師器・須恵器 土師器・須恵器・緑釉陶器	
長岡京跡右京第781次・神足遺跡	 都城 集落・居館	縄文～古墳 平安 中近世	 掘立柱建物跡・井戸・土坑・溝 掘立柱建物跡・溝	縄文土器・弥生土器・埴輪 土師器・須恵器・墨書土器・軒平瓦 瓦器・土師器・陶磁器・中国製陶磁器	

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査概報 第112冊

平成16年3月26日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷　河北印刷株式会社
〒601-8461　京都市南区唐橋門脇町28
Phone (075)691-5121